IS　託された思い

∞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　託された思い

【Ｎコード】
Ｎ２３０７Ｍ

【作者名】
∞

【あらすじ】
女性にしか反応しない、世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス』。
パワーバランスが崩れ、女尊男卑が当たり前の世界。
「世界の邪魔者・・・だからなんだって

いうんだ。生きてやる。この剣が朽ちるまで」

運命に選ばれた少年と、世界に全てを奪われた少年。

これは偶然か、それとも必然か。二人の運命が今、交叉する。

1話　ＩＳ

インフィニット・ストラトス・・・通称ＩＳ。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。
開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」を経て、軍事転用が始まり、現在第１~４世代機が存在している。
また、ＩＳの心臓部に当たるコアについての情報は、一切開示されていない。
そのため、コアを製造できるのは開発者である篠ノ之束のみである。
また、コアの深層には独自の意識があるとされているが、詳細は解明されていない。

女性にしか運用できない事により、パワーバランスが崩れ、女尊男卑が当たり前となってしまった。

そんな中、ある夫婦が事故死したところから、物語は始まる。

2話　謎の出会い

ここは、とある葬式会場。

一番前に棺と、たくさんの花束が置いてある。そこには夫婦の遺影があった。

お坊さんのお経と、葬式に参加している人達のすすり泣きが、場を支配していた。

そんな中、夫婦の遺影を、悲しみの表情で見つめる少年がいた。

その少年は髪が長く、女の子とも見えるその容姿だった。

彼は、夫婦の唯一の遺族であった。

xxxxxxxxxxxxxxx

葬式が終わり、少年にいろんな人が励ましの言葉をかけてきた。

しかし少年は、社交辞令のように笑いながら、お礼をいっていた。

そんなことも終わった後、少年は誰もいない家にひとり帰り、ベットにうずくまった。

悲しみと、絶望が混ざったような泣き声は、誰にも聞かれずに消えていった。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

次の日、少年は夫婦の知人達と共に、夫婦の遺品を整理していた。

そんなときに、彼は父親の書斎からある小型の端末を見つけた。

そこには、『１０歳のわが子へ』と書いてあった。

彼は今年、正確には葬式の日が１０歳の誕生日だった。

彼は試しに起動してみたら、パスワードが必要になっていた。

４桁の数字を入力するタイプのものだった。

彼は適当に、自分の生年月日を入れてみたら、一発でロックを解除した。

その中には、ある武装兵器の情報が所狭しと並んでいた。

物語は、５年後までへと進む。

3話　初対面

「全員そろってますねー。それじゃあSHR（ショートホームルーム）はじめますよー」

俺の名は、織斑一夏。

どんな理由かは知らないが、ISを動かすことの出来る男だ。

さっきの声は、副担任の山田真耶先生。（さっき自己紹介した）

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

『・・・・・・・・・・・・』。

・・・反応しなければならないのは分かるが、そうもいってられない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

『・・・・・・・・・・・・』。

俺以外、クラスメイトが全員女子だからだ。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

まあ、分かってはいたんだけどね。そもそ（この辺のくだりは、一

巻買って読んでくれ）

「・・・むら君、織斑一夏君っ」

「はっはい！？」

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ごめんね？自己紹介してくれるかな、だ、ダメかね？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

「は、はい・・・え～～～と」。

皆からスゴイ視線を感じる。『何か喋れ』的な視線だな。

そんな時、パコーンっと頭を叩かれた。

「痛っ！！、千冬姉！！」。

パコーン！！

「痛っ！」。

「ここでは織斑先生と呼べ」。

へいへい・・・。

そんなときに、ガラッとドアが開いた。

「ハア、ハア、遅れてすみません!!教室の位置が、ハァハァ、分からなくて・・・校舎を五周して、ハァハァ・・・なんとか、地図を見つけて・・・今ここにつ痛!!」。

パコーンと、千冬姉が入ってきた人を容赦なく叩いた。

「馬鹿者。遅刻だ」。

入ってきた人は、頭をさすりながら、ショボ〜〜ンとしながら席に着いた。

「えと、それじゃあ自己紹介をお願いしますね」。

「あ、はい・・・」。

その人物は、腰まで届く黒髪に少し銀が混ざっている独特の髪色に、珍しい赤と青のオッドアイ。
クールっぽい端麗な容姿に、スラッとしたスレンダーな体躯。
一見、完璧な女性に見えるが、着ている制服で男と言うことが分かる。

「えっと、僕は桐谷楓(きりやかえで)といいます。こんななりですが、一応”男”なので間違えないで下さい。それではみなさんお願いします」。

これが彼、桐谷楓との出会いだった。

4話　代表候補生

多少のいざこざがあったが、俺は気持ちを入れ替え、授業に取り組んだ。

そして今は、二時間目が終わったあとの休み時間。

・・・授業に取り組みはしたんだが、ダメだこりゃ、ギブギブ、分かるはずねぇ。

『世界で唯一ＩＳを使える男子』て言われて、俺の事を知らない生徒はいない。

だが、もう一人男子がいるのに、そいつはなぜニュースにもならないのか？

俺はそれを聞きたい。

というわけで、コミュニケーションも大事だし、早速話しかけよう。

「お～～～い」。

ん？真面目にノートと教科書を読んでるな、感心感心。

・・・人を褒めてる場合か！！と声が聞こえた。・・・気のせい気のせい。

「お～～～い」。

「ひゃい！！」。

「うおっ」。

変な奇声を出して、机から飛びのいた。

・・・う～～ん、やっぱりこいつ男に見えんな。

「・・・・今凄く失礼なこと考えてたでしょ」。

・・・う～～～ん、何故ばれるんだろう？

「とんでもない」。

「・・・ま、いいや。それで？僕に何か？」。

「おっそうだ。ＩＳ学園たった二人の男子だからさ、仲良くしておこうと思ってさ」。

「そういえば・・・そうだった。すっかり忘れてた」。

「おいおい、忘れるもんなのか？」。

「いや～～～校舎５周したあと、すぐ授業だったからさぁ、そんな事考えてなくて」。

「あ～～わかるぞ。それでは改めて織斑一夏だ、よろしく」。

「僕も改めて、桐谷楓です。よろしく」。

俺達は固い握手をした。いや～～～男がいてよかった～～～。

「そういえばさ、織斑君をさっきからずっと睨んでる人がいるんだけど・・・」。

「え？」。

そういわれて楓の見た方向を向くと、ファースト幼なじみの篠ノ之箒が、コチラを睨んでいた。

・・・うん、スゴイ怖い。何考えてるかは知らんが、すごい怖い眼力をコチラに飛ばしてくる。

「あ～～気にしなくていいぞ。そして名前でも構わん」。

「そう？じゃ僕の方も名前で」。

「もとよりそのつもりだ、楓」。

「ハハハ、ありがと一夏」。

やっぱり男同士はいい！！・・・ちなみに同姓は恋愛対象じゃないぞ。友情的な意味だ。

ん？気付くと周りは妙に静かだ。大体の女子がこちらを向いている。

女子からは、『話しかけて！！』という雰囲気が感じられる。

しかも、片方黒銀髪美少年、片方世界最強の織斑千冬の弟。

これは、注目を浴びないわけが無いな。

楓は、注目を浴びてオロオロとしてる。どうすっか～～～。

「ちょっとよろしくて？」。

「「へ？」」。

ちょうど楓と声がダブった。しかも突然声をかけられたから、変な声を出しちまった。

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

わずかにロールをかけて、高貴そうなオーラを出している、『いかにも』今を感じさせる女子だった。

なぜこれが今どきかは、一巻を見てくれ。

「ちょっと訊いてます？お返事は？」。

「あ、ああ。訊いてるけど・・・どういう用件だ？」。

「まあ！なんですのそのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度と言うものがあるんではないのかしら？」。

「・・・・・」。

正直、こういった手合いは苦手だ。

今の世の中じゃ、女のほうが偉いだろうが、その力が粗暴ならただの暴力だ。

そんなもんに従う気は無い。

「悪いな。俺、君の事知らないし」。

実際知らない。自己紹介で言ってたかもしれないが、男が二人いるのと、千冬姉が担任だった方が、百倍ショッキングだった。

しかし、目の前の女子は、その答えが気に食わないらしく、男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」。

名前はセシリアね。

「一つ質問があるがいいか？」。

「ふん。下々の者の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」。

「代表候補生って、何？」。

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。

楓は笑いを堪えてる。失礼なヤツだな。

「あ、あ、あ・・・・」。

「『あ』？」。

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!?」。

すごい剣幕だった。漫画だったら血管マークが３つぐらいはいってるな。

「おう、自慢じゃないが知らん」。

知らないことは素直に言うに限る。見栄は身を滅ぼす。

「・・・・・・・・・・」。

セシリアは怒りが一周して逆に冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながら、ぶつぶつ言い出した。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。
常識ですわよ常識。テレビが無いのかしら・・・・・」。

失礼だな。テレビくらいあるぞ。見てないけど。

そんな時、一通り笑った楓が話しかけた。・・・軽く殺意がわいたぞ?こら。

「一夏、代表候補生って言うのは、各国の代表のＩＳ操縦者の候補生・・・つまりエリートたちの事を言うんだ」。

おお～～単語見れば気付けた説明ありがとう。簡単なことほど見逃すってやつだな。

「そう！エリートなのですわ！！」。

セシリア復活！！・・・って文字が出てきそうだな。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスが同じというだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解して頂ける？」。

「そうか。それはラッキーだな」。

「・・・馬鹿にしてますの？」。

お前が幸福って言ったんじゃないか。っていうかなんで俺ばっかに話しかけるんだ。

楓をみろ。笑い堪えるのに必死だぞ。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくここに入れましたわね。もう一人のほうがまだましですわ」。

あの笑いを必死に堪えてるヤツが？そいつぁまいった。

「しらねぇよ。期待されても困るんだが」。

「ふん、まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」。

おお、この態度が優しさなのか。１５年生きてきてはじめて知ったぜ。

「ＩＳの事で分からないことがあれば・・・そうですわね、泣いて頼まれたら教えて差し上げても良くてよ。なにせわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」。

唯一、スゴイ強調された。・・・って、ん?。

「入試ってアレか?ＩＳ動かして戦うやつか?」。

「それ以外にありませんわ」。

「あれ?俺も倒したぞ教官」。

「は?・・・・・・」。

「それなら僕も倒したよ」。

楓もいきなり入ってきた。

俺達が言った事は相当ショックだったらしいセシリアが、目を見開いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」。

「女子だけってオチじゃないか?」。

ピシッ。

あ、なんかいやな音だ。氷のヒビが入ったような、そんな音が聞こえた。

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・？」。

「まあ、そうじゃね？」。

そしたら、楓の方を指差して興奮したみたいに言った。やれやれ、やっと解放された。

「あ、あなた！！貴方も教官を倒したって言うの！？」。

そしたら楓は不思議そうに首をかしげながら言った。

「そんな驚くこと？ＩＳに頼ってばっかの教官だったから余裕だったよ？」。

「よ、余裕！？余裕ってどういう意味かしら！？」。

「え？そのままの意味だけど？っていうか落ち着いたほうが・・・」。

「こ、これが落ち着いていられ――――――――――」。

キーンコーンカンコーン。

話に割って入ったのは、３時間目開始のチャイムだった。

「っ・・・・・！あたあとできますわ！逃げないことね！よくって！？」。

よくないと思った。

ここは楓と以心伝心できたが、それを言えばまたうるさくなるだろうから、とりあえず俺等はうなづいた。

「じゃあ僕らも準備しておこうか」。

楓が席に着きながらいってきたから、俺も席に着いた。

（あ・・・そういえば、なんでアイツはＩＳ使えるのに、ニュースにならないか訊いてなかった・・・。

まあ、いいか）

5話　部屋割り

うわ～～～。最悪だ～～～。

「しかし一夏も苦労が耐えないね。・・・・くくっ」。

「笑うな、そしてかわってくれ」。

「無～～理。がんばってセシリアさんに勝つんだね」。

「くっ・・・！！じゃ、じゃあ！！せめてＩＳの事を教えてくれ～～」。

ここは食堂。昼休みなので楓と俺は学食を食べている。
しかし女子達は、よくもまあ飽きず俺達の後をついてくるんだな。
大名行列もビックリじゃね？って数が俺等の後をついてくるんだぜ。

おっと話がそれたな。

なんの話をしてたかと言うと、クラス代表を決める時にちょっとした事があって、セシリアと戦うことになってしまったんだが、相手は専用機持ち、しかも俺はＩＳを全然動かしたことがないという状況なのだ。

だから楓に何かと教えて貰おうと思ったんだが、これじゃあ・・・。

「まあ、教えるぐらいなら楽だからいいけどね」。

「おっ!!マジか!?」。

「う、うん。だけど一夏も専用機来るんでしょ?」。

「ああ。男のデータが取りたいんだろう。そういえばお前ＩＳは?」。

「僕は・・・まあ一応持ってるよ」。

「そっか。それじゃあ基本的なことだけでも!!」。

「いいけど・・・・専門用語の羅列だよ?それでもいいなら・・・・」。

「いやわかった。実戦的なことを」。

「ああ、織斑君。ここにいたんですね」。

「はい?」。

呼ばれたので顔を上げれば、山田先生が書類を片手に立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました。桐谷君も同室なので」。

そう言って、俺と楓に部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

ＩＳ学園は全寮制なのだ。

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったんですか?前に聞いた話

だと、一週間は自宅から通学してもらうって聞きましたけど」。

「そうなんですけど、事情が事情ですし、元々桐谷君の部屋に織斑君を入れただけですし、そうして欲しいと無理矢理変更したらしいですよ。・・・織斑君、そのあたりの事情政府から聞いてませんか？」。

最後は俺にだけ聞こえるように耳打ちした。

ちなみに政府って言うのはもちろん日本政府。大方前例のない『ＩＳを使える男』だから、国としても保護と監視の両方を付けたいようだ。

「そういうわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先にしたみたいです。しばらくは桐谷君と相部屋ですのでよろしくお願いします」。

「はい・・・ってなんで楓は俺と立場が大違いなんですか？」。

「それは・・・「それはちょっとした根回しさ」っ！！　聞いてたんですか！？」。

楓が山田先生の言葉を遮ってきた。

「それより・・・いつまで耳打ちしてるんですか？周りの生徒が見てますよ」。

周りを見れば、興味津々でこちらを見ている。・・・これは変な誤解を生むかもしれない。

「あ、いやっ、これはそのっ、別にワザとではなくてですねっ・・・・！」。

「いや、わかってますけど・・・。それで部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備が出来ないですし、今日はもう帰っていいですか？」。

「あ、いえ、荷物なら――――」。

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」。

ああこの声、絶対千冬姉だよ。すでに俺の中では無条件でダースベイダーの曲が流れている。

「ど、どうもありがとうございます・・・」。

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」。

すげぇ大雑把。まあ確かにその通りなんだけどね。

ん？千冬姉が楓を見てる？楓は気にしてないっていうか、無視してる？

なんでだ？って俺が分かるはずもないか。

「それじゃあ時間を見て部屋へ行ってくださいね。ちなみに夕食は６時から7時、寮の一年生用食堂でっとって下さい。
シャワーなどは各部屋にありますけど、大浴場も使えます。
学年ごとに使える時間は違いますけど・・・・・えっと、その、

桐谷君と織斑君は使えないです」。

「え、何でですか？」。

俺、大浴場好きなのに。

「おおっと、一夏がそういう趣味だったとは・・・」。

「馬鹿者。まさか同年代の女子と一緒に入りたいのか？そして桐谷、冗談は対外にしとけ」。

「あー・・・」。

忘れてた。俺等以外は全員女子だった・・・。

「それでは、私達は会議があるのでな、失礼しよう」。

「あ、はい・・・」。

そして、二人は食堂から出て行った。

「じゃあ僕らもそろそろ、午後の授業が待ってるよ」。

うっ！！それを言わないでくれ・・・。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「えーと、ここか。１０２４号室だな」。

夜、俺は自分の部屋番号を確認して、ドアに鍵を差し込む・・・っ

てあれ？　開いてんじゃん。

ガチャっと部屋に入ると、まず目に入ったのはでかいベット。それが二つ並んでる。
そこいらのビジネスホテルよりいい代物だと分かる。

俺は荷物をそこいらに放り投げ、ベットにダイブした。

・・・むふふ、いいなぁこれ、今日は疲れたからこのモフモフ感はたまらんよ～～～。

「一夏？先にシャワー使ってるけど、もうすぐ上がるから」。

奥から楓の声がくぐっもって聞こえる。なるほどなるほど。

そして、二分ほどでシャワー室からタオルを頭にかぶせた楓が出てきた。

シャツを着ているが、すこしデカイらしく短パンがすこししか見えていない。
という特に不自然はない風呂上り姿なのだが・・・。

「ふぅ～～～気持ちよかった～～～。一夏、空いたよ～～」。

「・・・・・・・・・」。

「そういえば飲み物が・・・・っとあったあった。・・・ゴクッゴクッ、ん～～～～、風呂上りの飲み物はサイッコ～～～。・・・ん？どうかした？一夏」。

「いや・・・・なんつーか・・・お前・・・・」。

「ん？何？」。

「・・・・いや、シャワー浴びるよ」。

「そう。ごゆっくり～～～」。

そういって、俺はシャワールームに入っていった・・・・なんか駆け足で。

それから15分くらいシャワーを浴びてすぐに出た。

「お、もう出たんだ～。もっとゆっくりしてればいいのに」。

楓は髪をポニーテールにしていて、ベットで本を読んでいた。

・・・・う～～ん、俺はこいつを真面目なやつだと思っていたが、どうやらそれは外面でこっちが内面らしいな。

それよりも・・・今まで突っ込んでこなかったが・・・こいつ・・・。

（なんでこんなに女っぽいんだ！！）

いや！！俺はわかっているんだぞ！！アイツが男だということを！！だけどさ！！アイツの仕草がいちいち女っぽいんだよ！！

喋り方もなんか女っぽいし、あの容姿だからかな・・・・。

千冬姉で慣れたつもりだったが、相手が男なのにこんなこと考えてる俺は相当やばいのか・・・。

そんな事も気付かないで、アイツはコチラに話しかけた。

「それじゃあそろそろ寝る？」。

「え！！あ、ああ」。

「じゃあ電気消すね」。

電気を消し俺ははやく雑念を取り払うように眠ろうとしたが、また話しかけてきた。

「ねぇ一夏。ＩＳの事は明日でいいよね？」。

「あ、ああ。よろしく頼む」。

「ん、それじゃあ～おやすみ～～」。

「おやすみ・・・・・」

そして俺達は眠った。明日も忙しくなるなと思ったが・・・。

6話　俺のＩＳ

「はぁ～～眠い・・・・」。

俺はなんか早起きの楓に無理矢理起された。後で聞いたんだが、あいつは夜と昼ではテンションが全く違うらしい。
あいつは何でテンションが変わるかわからないそうだ。

で、今楓は先に出て行ったので、俺はすこし準備しながら部屋を出ると、

「あ・・・い、一夏」。

「お、おう箒は隣の部屋だったのか」。

ちょうど、食堂に行くであろうファースト幼なじみの、篠ノ之　箒と会った。

「一夏はこれから朝食か？」。

「ああ、楓が先に行って場所を取ってるはずだしな」。

「そ、そうか・・・」。

「ん？どうした箒？そうだ箒も一緒に食べようぜ。楓も紹介したいし」。

「あ、ああ・・・そうだな」。

なんか落ち込みながらもＯＫらしい。

「じゃあ行こうぜ」。

そして俺等は食堂へ向った。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「はぁ～～遅いな～～ご飯冷めるよ」。

ども、桐谷楓です。

今、食堂で他の女子の視線に耐えながらルームメイトを待っています。

ちなみに、場所取りどころか僕の周りには全く女子がいません。なのでテーブル一つが丸々あいてます。なんか引かれてるらしくショックです。

「おぉ～い楓～～ってなんだこの状況？」。

「あ、ああ一夏・・・どうやら僕は女子に引かれてるらしい・・・」。

「んなわけねぇだろ。多分珍しいからだろうよ」。

「だといいんだけどね・・・あれ？そちらはクラスメイトの・・・篠ノ之　箒さん？」。

「え？私を知っているのか？」。

「そりゃあクラスメイトだからね。1年間お世話になるし・・・まあそれだけじゃあないんだけどね・・・」。

「あ、そうだな（最後の方は聞こえなかったが・・・いいか）」。

「それじゃあ改めて、桐谷楓です。よろしくお願いします」。

そういって僕は右手を出した。

「ああ、篠ノ之　箒だ。よろしく頼む」。

そして僕らは握手をした。・・・ん?

「一夏って篠ノ之さんと知り合いだったの?」。

「ああ、小学校4年生まで一緒だったな。そのときに箒は引っ越したんだ」。

その言葉にすこし頬を赤くして篠ノ之さんが続いた。

「あ、ああ、そうだったな。それと私の事は名前でいいぞ。その代わり私も楓と呼ばせてもらうが」。

ふぅ～～～ん・・・・・。

「わかったよ（二重の意味で）箒さん」。

「ああ・・・それで楓?なぜそんな全て分かったような目で見る?」。

すこし慌てた様子で僕に聞いてくるので、僕は全力で答えた。

「え?だって箒さんは一夏のことがすk「うわーーーーー!!」」。

最後のほうはかき消されて一夏はポカンとしている。

そして箒さんが僕に顔を近づけて焦った表情でせまった。

「な!!何を言ってるんだお前は!?」。

「え?箒さんは僕が何を言おうとしたのか分かってるはずだけど?」。

「そ、それは///その・・・あれだ///あれ!!」。

「あれって?」。

「その・・・一夏の事は別に何とも思ってないからな!!」。

それって自爆してるのと同じじゃあ・・・仕方ない。

「大丈夫。僕は別に言いふらしたりしないし、相談もあったら乗るよ」。

「本当か!?ありがとう!改めてよろしく頼む!!」。

こうして、僕らはより強固な握手を交わした。

そしてすっかり空気となっていた一夏に話しかけられた。

「あ、あのさぁ。盛り上がっていると子悪いんだけど・・・飯食おうぜ」。

「誰のせいで遅れてると思ってるのさ」。

「俺が悪いのか!?」。

「そうだな。一夏が悪い」。

「・・・んだよ。もういいだろ!!さっさと食べようぜ」。

「ふふっそうだね。幸い場所はいっぱいあるし」。

「そうだな」。

そして僕らは朝食を取った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「そういえばさ、箒が人とすぐ打ち解けるって中々ないよな」。

一夏が鮭の切り身を食べ終わったときに箒さんに聞いた。箒さんはすこし不機嫌そうに言った。

「そんなに愛想がないか?私は。まあ楓はなにかすぐ打ち解けられるオーラでも出ているのだろう」。

「失礼だね、普通にやっているつもりなのに・・・まあ箒さんとは別の理由もあるけどね」。

「かっ楓!!／／／」。

顔を真っ赤にして迫ってくる。・・・キレイだし自信持てばいけると思うんだけどね。

「アハハごめんごめん。それで一夏、ＩＳの練習はいつやるの？」。

「そうだな・・・対決は来週だし早目がいいな。今日早速教えて貰うわ」。

「わかった。・・・箒さんも来る？」。

「え!？」。

僕は箒さんに話の真意をぼかしながらはなした。

「いやさ、僕一人でも限界があるなと思ってさ。箒さんもいてもらったほうがいいと」。

「そ、そうだな!!二人のほうが効率がいいな!!」。

「ま、確かにな。じゃあ放課後にでも」。

「了～～解～～」。

じゃ、二人っきりにさせるかな。

「悪いけど先に行ってるよ」。

「おう」。

「ああ・・・・ありがとう」。

「ふふっ、それほどでもないよ」。

そうして僕は食堂を後にした。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

時は放課後、楓は用事があるというので箏と二人っきりで練習場にいる。

そんな時箏から話しかけられた。

「か、楓はどうしたのだ？」。

「ああ、なんか急な用事が入ったっていってたぞ。ああそういえば箏に『頑張って』って伝えておいてくれって言ってたな。・・ったく、頑張るのは俺のほうなんだがな」。

「そ、そうか・・・（ありがたい・・・楓いい奴だな）」。

ん？なんか顔が紅くなってる？気のせいだな。

「じゃあ始めようぜ」。

「ああ」。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

そして翌週、月曜日、セシリアとの対決の日。

「なあ箒、楓」。

「なんだ一夏」。

「ん～～何？」。

「いやさ、お前等のおかげで案外上手く行ってたから、お礼でも言っておこうと思って」。

すると楓はあくどい顔になった。・・・うん、いい結果が予想できないな。

「貸し一だよ」。

「げ！！マジかよ・・・」。

俺は沈んでく・・・アイツに貸しは作りたくなかったんだが。

「私達が教えたのだからいい結果を残せよ」。

そんな箒からのありがた～～いご教授を思い出してみよう。

『ぐっと来る感じだ』

『くいってなる感じだ』

・・・楓の方が役に立ったな。まあそんな事は言わんけど。

「心配すんな。がんばっていい結果を出すさ」。

「そういえば一夏の専用機は？」。

「いや、ごたついてるらしくまだきてない」。

そう、俺のＩＳはまだ来ていない。ちなみに専用機とは・・・。

『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳは、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていない。
現在世界中にあるＩＳ４６７機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しているので、未だ博士以外はコアを作れない状況である。
しかし博士コアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っている。
またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されている』

そして専用機は国家あるいは企業に所属していないと与えられない。
だが俺は状況が状況なので与えられるらしい。

つまり、ＩＳは世界に４６７個しかなく、コアは篠ノ之博士しか作れず、だが博士は作るのを拒んでいる。
しかし俺は特別待遇、しかしデータ収集の実験体、と言うことだ。

ちなみに篠ノ之博士は箒の実の姉だ。あまり知られてないが。

「お、織斑君、織斑君、織斑君っ！！」。

三回呼ばなくていいです。第三アリーナ・Ａピットに駆け足でやってきたのはおなじみ、副担任の山田先生だ。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」。

「は、はいっ。す～～は～～、す～～は～～」。

「はい、そこで止めて」。

「うっ」。

なんとなくノリでそういったら、本気で止めた・・・冗談が通じないなぁこの人。

「・・・・・・・・・・・・」。

「・・・ぶはあっ！！ま、まだですかあ？」。

すんません、止めるタイミングを見失っただけです。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」。

パァンッ！いつもと同じ、弾けるような打撃音。痛みも炭酸飲料並みに軽いと嬉しいんだが、残念なことに威力だけはヘビー級だ。さすが元日本代表。

「千冬姉・・・」。

パァンッ！！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」。

うわぁ、聞きました？教育者とは思えないお言葉。美人の割りに彼氏がいないのはこの性格だと思う。

みなよ、箒も軽く引いてるぜ。

楓は・・・ちょっと厳しい表情？なんかあいつ千冬姉にはいつもあんな顔だな。

「ふん、馬鹿な弟にかける手間がなくなれば、見合いでも結婚でもすぐできるさ。桐谷は・・・気にするな」。

おおう、読心術。千冬姉にはあらゆる意味でかなわない。しかし気にするな・・・か。

そういわれると気になるけどそれは後だな。

「そ、そ、それでですねっ！来ました！織斑くんの専用ＩＳ！」。

「・・・え？」。

「織斑、すぐ準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。

ぶっつけ本番でものにしろ」。

「・・・はい？」。

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ、一夏」。

「え？・・・あの、なん・・・・」。

「「早く！」」。

山田先生、千冬姉、箒の言葉が重なった。
楓は親指を立てて『グットラック』ってな感じだ。

ごごんっ、と鈍い音を立ててピット搬入口が開く。防御壁はゆっくりとその向こう側を晒して行く。

そこに・・・『白』が、いた。

「これが・・・」。

「はい！織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」。

真っ白のＩＳ。無機質なそれは、ずっと俺を待っているように見えた。そう・・・この時を。

そして全身にＩＳを装着して俺は準備万端だった。

そんな時箒に目をやる。・・・何かいいたそうな顔だな。

「箒」。

「な、なんだ？」。

「行ってくる」。

「あ・・・ああ。勝って来い」。

その言葉に首肯でこたえ、俺はピット・ゲートへ向う。

「一夏」。

「お、おう楓、いたのか」。

「これ」。

「なんだ？」。

楓から白い宝石をつけたペンダントを渡された。

「これは？」。

「ん～～お守り・・・かな」。

「そっか。ありがとな」。

「そう、じゃあ頑張ってよ。かっこつけて負けたら、はずかしいしね」。

そういって楓は手を出した。

「おう、任せとけ」。

パァンと俺等はハイタッチをした。

さぁて『敵』もお待ちかねだろうな。

そうして俺はアリーナの方へ向かった。

7話　戦い・・・

「あら、逃げずに来ましたのね」。

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。しかし俺の関心はそんなところにはない。

あいつが使うＩＳ鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアームズ』。四枚のフィン・アーマーを背に従え、どっかの王国騎士のような気高さを感じる。

そして印象的なのが、二ｍを越す長大な銃器・・・検索、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトＭＫ?》と一致、それを握っていた。

「最後のチャンスをあげますわ」。

「チャンスって?」。

「わたくしが一方的に勝利を得るのは自明の理。ですから、惨めな姿を晒したくないならここで謝れば、許してあげないこともなっくてよ」。

・・・射撃モードに移行してるヤツが言うセリフじゃねぇよ。

「それはチャンスとは言わないな」。

「そう?残念ですわ。それなら・・・・」。

「お別れですわね！！」。

キュインッ！！と言う音が鳴ったと同時に閃光が俺を打ち抜く。

「うおっ！？」。

白式のオートガードが俺を守ってくれた。直撃は避けたが左肩の装甲をやられた。

損害自体は大した事は無い。

（楓との特訓の成果だな。なんとか白式の反応速度についていけてる）

ＩＳの情報処理に頭を持っていかれるらしいが、アイツの特訓のおかげで何とか踏ん張れてる状態だ。

それとＩＳバトルは先にシールド・エネルギーが尽きた方が負けだ。

さっきの一撃ですこしエネルギーをもっていかれたが、まだまだ戦える。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアームズの奏でる円舞曲で！」。

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨のごとき攻撃が降り注いでくる。

それも的確に俺のほうへ狙っているのだが、楓とのシュミレーションでなんとか凌いでいる感じだ。

「白式！装備は！？」。

そうすると武器の一覧が出てきた・・・だが・・・。

「1つしかないんだが・・・・・」。

『近接ブレード』と書かれた装備しかなかった。なんで？

「ええい、ままよ！！」。

無いよりはましだ！！俺はブレードを呼び出し、展開する。

それは片刃、渡り一・六メートルはある長大な『刀』だった。

「中距離射撃型のわたくしに、近接格闘で挑もうだなんて・・・笑止ですわ！」。

確かにな。セシリアとの距離は27メートルという圧倒的に不利な距離だ。

けどな？

「やってやるさ」。

引くわけにはいかなんだよ。そうじゃなきゃ、あいつらに何て言われるか。

そして激戦が始まった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・３０分。持ったほうですわ。褒めて差し上げます」。

「そりゃどうも・・・・・」。

シールド・エネルギーは残量６７。機体の破損レベルは中。武器もボロボロときたもんだ。

「このブルー・ティアームズを前にして、所見でこうまで堪えたのはアナタが初めてですわね」。

そういってセシリアはまわりに浮いている４つの自立機動兵器を撫でていた。

フィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が開いている。この武器も『ブルー・ティアームズ』というらしい。ややこしいな。

それにこいつ、戦いの最中に聞いても無い演説をしてきやがった。

「そろそろ、閉幕（フィナーレ）と参りましょう」。

そしてあの自立兵器・・・長いからビット、がいろんなところからレーザーを放つ。

「くっ・・・！！」。

これを防御あるいは回避しているうちにセシリアがライフルで俺を狙う。

「左足、いただきますわ」。

!!ッ、ちくしょ!!装甲の無い場所の攻撃を食らえば、『絶対防御』が発動してエネルギーが一気に0になり俺の負けだ。

それなら、一か八か!!

「ぜあああああっ!!」。

ガキンッと派手な音と火花が出る。

無理矢理加速して俺の体はセシリアのライフルの銃身に表面からぶつかった。

その衝撃で砲口が逸れ、なんとかトドメの一撃を食らわずにすんだ。

「なっ・・・・・!?無茶苦茶ですわね。けれど、無駄な足掻き!!」。

セシリアは距離をとり、空いている手を横に振るう。

そうしたら空中に待機していたビットが俺に向って飛んできた。

・・・なるほど、そういうことか。

打たれるレーザーを掻い潜り抜け、一閃。金属を切り裂く感触が手のひらに伝わる。

ビットは稲妻を走らせ爆発した。一機撃破。

「なんですって!?」。

驚愕するセシリアへ俺は切りかかる。

「くっ・・・！」。

後ろに回避するセシリア、そしてまた腕を振るう。ビットが二機向ってくる・・・が・・・。

「この兵器は毎回お前の命令がないと動かない！しかも！！」。

軌道を読み、ビットのスラスターを切って破壊する。

「そのときお前は他の攻撃を出来ない。制御に意識を集中しなきゃならないからな。ちがうか？」。

「くっ・・・・・・！！」。

後方に回避するセシリア、そしてまたその右腕を振るう。

するとビット2と3が飛んでくる。

「この兵器はお前が命令を送らないと動かない！しかも！！」

軌道を読み、ビット2の後部推進器を破壊して落とす。

「そのとき、お前はそれ以外の攻撃を出来ない。制御に意識を集中させているからだ。ちがうか？」

「・・・・・・・・・・！」

セシリアの右目尻が引きつった。やっぱりな。

残りのビットは二機。

しかも軌道は読めた、アレは『必ず俺の反応が一番遠い角度を狙ってくる』。

ＩＳの全方位視界接続は完璧だ。

それでも使うのは生身の人間。

真後ろや真下、真上なんかはどうしても直感的に見ることは出来ない。

送られてくる情報を一度頭の中で整理する分、そこにわずかな隙が生まれる。

そしてセシリアは常にそれを突いてきている。

だが、逆に言えば『どこに来るか自分で誘導できる』ということだ。

つまりはわざと隙を見せればそこに来るということだからな。

後は待ち伏せして打てばいい。俺がミスならければいいだけだ。

そしてセシリアの接近戦の武器は無い。

しまっている可能性はあるが、出さないと言うことはあまり得意ではないか、別の理由があるのだろう。

それに距離をつめればあんなデカいライフルは役に立たない。

つまりビットを落とせばあいつは接近戦をやれない。

（やっと勝ちが見えてきた）

箒との剣道特訓が思わぬ場所で生きてきた。集中は剣道の初歩の初歩だからな

俺はやっと見えてきた勝ちにすこし胸を躍らせた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「すごいですねぇ、織斑君」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がつぶやく。

たしかに一夏のＩＳは起動が２回目とは思えない程の健闘ぶりだった。

しかいｓ、千冬は対照的に忌々しげな顔をする。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、アイツの昔からのクセだ。アレが出る時はたいてい簡単なミスをする」

「なるほど、さすがはご姉弟ですねー。そんな細かいことまで分かるなんて」

なんとなくそう言った真耶に、千冬はハッとする。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな・・・・」

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

「・・・・・・・・・・・・」

無言でヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたっ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「は、はいっ！！わかりましたから！！離して――――あううううっ！！」

「に、にぎやかですね」

そこに苦笑いを浮かべる楓がやってきた。

「山田先生。他の先生が用があるらしいんですけど・・・」

「あ、はい！わかりました！！」

ピューっと脱兎の如く去って行く山田真耶。残ったのは千冬と楓。

「それで？わざわざ人払いを済ませて私に何のようだ？」

「ハハハ、ばれてましたか」

「当たり前だ、『煉翼の騎士』」

その言葉を発した瞬間、楓の顔から笑いが消えた。

「何度も言いますが、それは僕ではありませんのでそう呼ばないで下さい、『白銀の騎士』」

「そうか。で?今度は何が目的だ?」

「失礼ですね。昔も今も僕は目的を変えているつもりは無いですが・・・」

「ふん。わざわざ私が初対面を装っているというのに・・・」

「僕が頼んだわけではありませんよ」

「確かにな。これは私の都合で装っているが」

「その都合を一夏が知ったら・・・どう思うんでしょうか?」

「それ以上言うならそれ相応の対応をとらせてもらう」

そういって楓に殺気を当てる千冬。本来生徒に殺気を当てることなど無いのだが・・・。

しかし楓は気にしない様子で喋った。

「そうですか。しかしアナタは・・・いえ、今はいいですね」

「ああ、そうだな」

そして二人ともモニターを見たとき、試合が動いた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

これで！！

セシリアの間合いに入った俺は振り下ろした刀で、ビット３を撃墜しそのままＩＳ独自の無重力でビット４を蹴り飛ばす。

ライフルの攻撃は間に合わない。確実に胃に劇が入るタイミングだった。

「かかりましたわね」

ニヤリとセシリアが笑った。

まずい！！本能がなにか危険を察知して距離を置こうとするが、それこそ間に合わなかった。

ヴンッ――――――。

セシリアの腰部から広がるスカート状ののアーマー。その突起が外れて動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアームズは六機あってよ！！」

回避が間に合わない。しかもさっきまでのレーザー射撃では無く『弾道型』ミサイルだ。

ドカァァン！！

赤を越えて白い爆発の光に俺は包まれた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「一夏っ・・・・・・・・！」

モニターを見ていた箒は思わず声を上げた。

一緒にいた千冬と楓も爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な表情で見ているが・・・・。

「・・・・・・ふん」

黒煙が晴れてきたとき、千冬は鼻を鳴らした。けれど、どこかその顔には安堵の表情がある。

「大丈夫さ、箒さん」

楓もまた何か確信めいた表情をしていた。

「一夏は機体に救われたよ」

「ああ、まったく・・・馬鹿者め」

楓と千冬が喋る。
しかし箒はすぐには状況が読めなかったが、わずかに漂っていた煙が弾けるように吹き飛ばされる。

そこにはあの純白の機体がいた。

そう、真の姿で・・・・・。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

（な、なんだ・・・・？）

頭の中に情報が入ってきて、目の前に「確認」というウィンドウが現れる。

訳も分からずそれを押すとさらなる膨大なデータが流れ込んできた。

・・・・いや、ちがう。正確には整理されているんだ。

それが感覚で分かる。そして変化は劇的に訪れた。

キィィィィィン・・・・。

高周波な金属音。けれどそこにはどこか優しいものが感じられた。

利那、俺のＩＳが光の粒子に弾けて消え、また形を成す。

「これは・・・・・」

新しく形成されたＩＳ装甲はまだうっすらと光を放っている。

それはさっきまでの実体ダメージがすべて消え、それどころかより洗練された形へと変化していた。

「まさか・・・・一次移行（ファースト・シフト）!?あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?」

さっきのウィンドウに書かれていた『初期化（フォーマット）』と『最適化（フィッティング）』が終わったというのはつまりこういうことらしい。

これでやっと、この機体は俺専用になった。

改めて機体を見ると、最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的のどこか、中世の鎧を思わせるようなデザインへと変わっていった。

そして何より変わったのが俺の武器だった。

近接特化ブレード・《雪片弐型（ゆきひらにがた）》。

その形はそりのある太刀に近い刀だった。

それより気になるのがその名前だ。

雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用ＩＳ装備の名称。

刀に型成した形名（かたな）。それが雪片。

・・・ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

いままでもあの人は何時でも俺の姉だ。でも、そろそろ守られるだけの関係は終わりにしよう。

これからは・・・。

「俺も、俺の家族を守る」

「・・・は？あなた何をいって・・」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では格好が付かない。

あのかっこいい千冬姉が格好付かないなんて笑えない冗談だ。

「というか、逆に笑われるな」

「だからさっきから何の話を・・・ああもう、面倒ですわ！」

弾を再装填したビットが二機こちらに飛んでくるが、

（見える・・・・！）

右手を握り締める。答えるように低い機械音を鳴らす《雪片》。

使い方なら、隠れて見ていた千冬姉の試合で分かっている。

ギンッ！！

横一閃。両断されたビットは俺の横を通り過ぎて爆発した。

そして俺は再度セシリアへ突撃を掛ける。

「おおおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を上げていくのを感じる。

そして刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

（いける・・・・・！）

セシリアの懐に飛び込んだ俺は下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

キィィィン・・・。

なにか機械音が聞こえたが構わず、そして・・・・。

「きゃあぁぁぁぁぁぁっ！！」

見事に当たり、セシリアは墜落していく。そして試合終了のブザーが鳴る。

『試合終了。勝者・・・織斑一夏』

「ハアハア・・・やった・・・か」

そして俺は地面に降り立つ。
第三アリーナへ詰め掛けるギャラリーたちを見ながら俺は勝ったのだと分かる。
セシリアは気絶していたところを運ばれていた。

だが千冬は見えていた。一夏が攻撃する瞬間、彼のペンダントが光っていたところを・・・。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「おめでとうって言っておくよ、一夏」

「ありがとな、楓」

試合が終わり俺等は部屋へと戻っていた。ちなみに千冬姉に、
『武器の特性を理解しろ。今回は運良く勝てたが、次はこうはいかない。明日から訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。いいな』
と、いわれて頷くしかなかった。・・・たまにゃ褒めてくれてもいいんじゃないかと俺は思う。

「一夏はＩＳ起動におけるルールブックを覚えなきゃいけないから大変だよね」

そう、ＩＳは俺の手首にある、それには色々と規制があるので色々と覚えなきゃいけない。

それはわかるんだが・・・。

「多すぎだろ・・・タウンペ○ジじゃねぇんだから・・・」

そう、そのルールブックが異様に分厚い。
置くとドサッて言う。ドサッだぜ？これを覚えろって言うんだから・・・正直まだまだやることはたくさんある。

「あ、そうだ。ちょっと出かけるよ」

「おう」

そして楓は部屋を出て行った。

「さて、頑張りますかな」

そして俺もタウン○ージ並みの本を読み始めた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「多分ここに・・・やっぱり」

楓が向かったのは、学園の屋上。

そこにはベンチの上で、体育座りしで顔をうずめているセシリアがいた。

「こんばんは。セシリアさん」

「・・・なんですの、お節介にでも来たんですの・・・」

体育座りしながらいうセシリア。その声には普段の威厳が全く無かった。

（そりゃあ、多分初めての敗北だろうから当然かもね）

専用機持ちのエリートはこういった敗北の経験が極端に少ない。

専用機があれば大体の人には勝てるからだ。

だが、セシリアのようにプライドの高いエリートは、一度負けると立ち直るのが遅い。下手するとそのまま挫折してまう。

だから楓はセシリアを励ましに来た。

「その通りさ」

「・・・帰ってください」

「そんな格好してる人を放って置けるほど、僕は出来ていないんだ」

「・・・・・・・・・・・・」

返事なし・・・好きにしろということかな。

そして僕は彼女の隣に座った。

「・・・つらい？負けることが・・・・・」

「・・・・・・・」

「今まで、勝っていたらそりゃあ負けたときのショックは大きいと思う」

「・・・・・・・・」

「でも・・・・ここでこんな事しているのが、君の望んでいることなの？」

「！！ッ・・・・・」

「ショックを受けているのは分かる。けどそれじゃあ、また負けてここに来る事になるよ？」

「・・・・・・」

「それでもいいなら止めはしないけど・・・それじゃあ一夏には勝てない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「セシリアさんは、悔しくないの？」

「！！ッ・・・・・・・・・」

「負けて落ち込んでるんだったら、一夏に勝てる方法でも探せばいいと思う」

「・・・・・・・・・」

「悔しくないならやらなくてもいいけどさ」

「・・・・悔しいに決まってるじゃない・・・・！」

セシリアが顔を上げる、その目には涙が溜まっていた。

「けどここで落ち込んでる。あれ？矛盾があるよ？」

「・・・・・・・・・」

「悔しいなら、ここで体育座りしてる場合じゃない。ほかにすべき事があるはずです」

「！！ッ・・・そうですわね・・・ってアナタに言われなくても分かってますわよ！！」

泣いてる顔を紛らわすように、怒鳴りながら屋上を出て行くセシリア。

「やれやれ。やっぱクラスメイトには元気でいてもらわないとね」

独り言のように楓は呟いた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

あのあとセシリアは一人シャワーを浴びていた。

そして今日の試合の事を思い出していた。

（織斑一夏・・・）

私に勝った強い眼差しを持つ人。

そして・・・・・。

（桐谷　楓・・・）

強い眼差しだったけど、優しい・・・そんな目をしていた。

すこし前まで自分とあまりいいムードではなかった私を・・・励ましてくれた。

そんな楓の行動にセシリアは自分の父を逆連想した。

（父は母の顔色ばかり気にしている人だった）

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだろう。

そんな父親を幼少から見て、セシリアは『将来、情けない男と結婚しない』と言う思いがあった。

そしてＩＳが発表され父は益々弱弱しい態度になった。

私や母とは全く会話しなかったし、しなくてもいいと思っていた。

ただ、時々相談に乗って欲しいときもあったが、怯えるような態度の父に聞こうとは思わなくなった。

「・・・・・・」

それと対照的に、母は強い人だった。

今の社会になる前から、数々の成功を収めていて、自分にも厳しく他人にも厳しい。

そんな母は私にとって憧れの人だった。

そう、両親はもういない。3年前事故で他界した。

二人はあっという間に私の前からいなくなってしまった。

そして手元には莫大な遺産が残った。

それを金の亡者達から守るために必死に勉強し、それの一環で受けたＩＳ適性テストがＡ＋だった。

政府から国籍保持のための様々な好条件が出された。

両親の遺産を守るために即断した。

そしてブルー・ティアームズの試験運用者に選ばれ、稼動データと戦闘経験値を得るために日本にやってきた。

そして・・・。

出会ってしまった・・・桐谷　楓と。理想の強い瞳をしていて、私に励ましをくれた・・・唯一の男と。

「桐谷・・・楓・・・」

その名前を口にする。不思議と胸が熱くなる。

どうしようもなくドキドキとして、そっと自分の唇を撫でてみる。

水滴に濡れた形のいい唇は、触れられることを望んでいるかのように不思議な興奮を生み出した。

「・・・・・・・」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

・・・なんだろう、この気持ちは。

意識すると途端に胸を一杯にする、この感情は。

知りたい・・・・。

その正体を。その向こう側にあるモノを・・・。

知りたい・・・・、楓の、ことを・・・。

「・・・・・・・・・・」

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いた。

7話　戦い・・・（後書き）

フラグを何とか立てました。

8話　転校生

「はぁ～～。疲れた～～」

ども、桐谷楓です。

さっきまでＩＳの基本操縦の練習をしていました。

ホントは僕にも専用機っぽいのがあるんですが、諸事情で使えないので『打鉄』で頑張ったのですけど・・・。

「動きが遅すぎる・・・・」

そう、スペックがダメダメなのです。まあそれだけじゃないのですが・・・。

そう思うと、一夏とかセシリアさんとか専用機を使っている人が羨ましいかぎりです。

そうそう、セシリアさんといえば・・・。

「あら、『楓さん』。どうかしましたの？」

そう、僕を名前で呼びようになったり、大体僕と一緒に行動するようになった。

「いや、なんでもないよ」

どういう心境の変化かな？まあクラスメイトと仲良くなるのはいいことだし、気にしても仕方ない。

そして僕達は食堂へ向った。なにかイベントがあるらしいので。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！！」

「おめでと～～～！」

ぱん、ぱんぱーん。とクラッカーが乱射される。

そして一夏の頭に物凄い質量の紙テープが落ちた。

ここは夕食後の食堂。

イベントと言うのはこれだったらしい。

「そして！！桐谷くんクラス副代表決定おめでとう！」

「おめでと～～！」

そう、僕はこの前のセシリアさんと一夏の試合の後、クラス副代表に選ばれた。

なぜかは負けたセシリアさんが、副代表を辞退したので他のクラスメイトにのせにのせられ、いつのまにか副代表になった。

『・・・・・・・・・』

めでたくない。なにもめでたくない。何のためのパーティなんだか。

一夏と僕は半ば諦めの表情をしていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね～～」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよね～～。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

気のせいか二組の女子が相づちをうっている。

よく見ると３０人以上の生徒がいる。

あれ？おかしいな、クラスの集まりなのにクラスメイトの倍の数はいるな～～？

一夏は箒さんと話している。なにかいい雰囲気とはいえない・・・・。

「はいはーい！新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と桐谷楓君に特別インタビューをしにきました～～。」

オーっと盛り上がる一同。そんなテンション上がること？。

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。よろしくね。新聞部副部長をやってまーす。ハイコレ名刺」

「あ、どうも」

受け取ってその名刺を見る・・・・。難しい名前だ・・・・書く人は大変だな～～。

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を一言！！」

ボイスレコーダーをずずいっと一夏に向けて、子供のような無邪気な瞳を輝かせている。

「えーと・・・・」

言葉に詰まっている一夏。そりゃそうだろうね。こんなこといわれたら普通返答に困るよね。

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もうちょっといいコメントちょうだいよ～～。俺に触れるとヤケドするぜ！！みたいな」

うわ～～、何時の時代の人に分かる台詞ですかそれ。

「自分、不器用ですから」

「うわ、全時代的！まあ、これは後で捏造しとくとして・・・」

いやしちゃだめでしょ。新聞部が歪んだ情報を発信しちゃダメです

よ。

「ではでは！次は桐谷楓君！副代表として一言！！」

うわ、きちゃったよ。そこは専用機持ちのセシリアさんに行くとこでしょ。

「えっと・・・期待を裏切らないように頑張ります」

「う～～ん。まあいいか。ここも後で捏造しとくし」

こら、それじゃあインタビューの意味がないでしょうが。

「そんじゃあ、そこに二人並んで。写真取るから」

『えっ？』

変な声を出す僕ら。

「注目の男子ＩＳ操縦者だからね～～ツーショットもらうよ。あ。握手してるとかもいいね」

「はあ・・・・」

言われるがままに一夏と握手した僕。

「それじゃあ撮るよ～～。３５×５１÷２４は～～？」

「え？えっと・・・・２？」

「７４・３７５」

「桐谷君正解～～」

それはそうとなぜ問題を出したのだろう？

パシャっとシャッターが切られる・・・て、あれれ？

「どうして皆入ってるんだ？」

一夏も僕と同じことを思ったらしい。驚異的な団結力でクラスの人が全員入ってきた。

セシリアさんも箒さんも入ってきた。何したいんだか・・・。

そんな事をしているうちにこのパーティは１０時過ぎまで続いた。

す、すごい・・・女子のエネルギーは底なしなのか！？

一夏も疲れた表情していたので僕らは部屋へ戻った。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「疲れた～～～」

「そうだな～～～」

楓と俺は部屋の戻ってすぐベットにダイブした。

そういえば気になってなっていたことがあったので聞いてみた。

「そういえばさ、お前専用機は？」

「・・・・・・クラス対抗戦のときには使えると思うから・・・」

「そうか」

「じゃ、着替えて寝ようかな」

そして着替えを始める楓・・・・うん。

「あれ？一夏。そっちに僕の上着ない？」

そういって俺の方に来る・・・・上半身裸で・・・。

「うわっ！！そんな格好でくんな！！」

「でも上着がないと・・・羽織るものないし・・・」

それは分かる！！けれどもう少し行動を自粛して貰いたい！！

それじゃあお前、露出狂の卵だぞ！？もうすこし自分の容姿を気にしてもらいたい！！

念のためいっておくが、俺は同姓は恋愛対象じゃない！！！！！

だが！！それでも自粛して貰いたい！！

「あったあった」

そして羽織ってくれた。

「そんじゃ、おやすみ」

「あ、ああ」

こうして無駄に疲れた一日が終わった。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「そういえば、転校生が来るらしいよ」

朝、席に着くなり隣の楓が話しかけてきた。

「転校生？この時期に？」

まだ４月だ。それなら入学のほうがいいと思うんだが・・・。

しかもこのＩＳ学園は転入制度がかなり厳しかったはずだ。

国の推薦がないと出来ないようになっている・・・ということはつまり－－－－。

「そう、何でも中国の代表候補生らしいよ」

「ふーん」

代表候補生と言えば。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。

今朝もまた、腰に手を当てたポーズが似合う。あの試合からセシリアの態度がすこし緩和された。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどの事でもない」

何時の間にか、箒が窓側の自分の席を立って俺たちの周りに集まっていた。

最近はこのメンバーで行動することが多い。

「どんなやつなんだろうな」

代表候補生と言うくらいだからやっぱ強いんだろうな。

しかしまたセシリアみたいなヤツだと困るな・・・正直疲れる。

「む・・・気になるのか？」

「ん？　ああ、少しは」

「ふん・・・・・」

聞かれたことに素直に答えたら箒の機嫌が悪くなった。

情緒不安定なんだろうか。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があると言うのに」

「ああ、大丈夫だろ。また楓に鍛えて貰うさ」

そう、楓の教え方は分かりやすいし、すぐに効果が出る。

セシリアとの一戦でもあいつの訓練に助けられた部分が多い。

「でも実戦的なことは時間がかかるから、セシリアさんにやってもらって」

確かに、楓や他のクラスメイトは訓練機を使わなきゃいけないし・・・それには申請と許可、整備に１日はかかるから、手っ取り早く模擬戦したいならセシリアが一番早い。

そういえばクラス対抗戦の説明をしてないので説明。

クラス対抗戦は呼んだ通り、クラス代表者と副代表同士によるリーグマッチだ。

基本的には代表同士、副代表同士で戦う。

だが同じ場所でやるので、作戦も使えるし、相手を倒したら他の方に加勢に行ける。

本格的なＩＳ学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。

また、クラス単位での交流及びクラスの団結のためのイベントだそうだ。

やる気を出させるために、１位のクラスには優勝賞品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。

これのおかげで女子が燃えているのか。

「ま、まあ楓さんの頼みならば・・・してあげないこともないですが・・・」

言葉が詰まるセシリア。なんか最近、セシリアの楓への態度がたどたどしい感じがするが、まあいいか。

「まあ、やれるだけやってみますか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝ってもらいませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「僕もなるべくサポートするつもりだし、本番は僕も戦うから」

「織斑君と桐谷君が勝つとクラスの皆が幸せだよー」

セシリア、箒、楓、クラスメイトと色々と言ってくる。

しかし、最近のＩＳの基本操縦は楓のサポートでなんとかできている状況なんだ。

とてもじゃないが自信に満ちた返事は出来ない。

（でも、初めて動かしたときはスゴイ馴染んだんだがなぁ・・・）

あの時感じた一体感、まるで世界が生まれ変わったような感覚は今のところない。

それでも動かしただけで操縦に慣れていくのは、白式が俺の個性に対して最適化してくれているから・・・らしい。

俺達の周りはひとりふたりと集まってきて、あっという間に女子に埋め尽くされた。

これもそろそろいつものパターンになりつつあるから、慣れた。

しかし女子と言うのは本当に噂好きだな。俺や楓はついて行けない。

「織斑君、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「あ、いや、多分二組も・・・」

「その情報古いよ」

楓の言葉を遮って教室の入口から声が聞こえた。

気のせいかすげぇ聞いた事のある声だったが・・・。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている女子は・・・。

「・・・鈴さんが代表候補生だったんですね・・・・専用機を持ってるのは当然ってことですか？」

「そういうことよ、楓」

「鈴・・・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く揺れた。

「何格好つけてんだ？すげぇ似合わないぞ」

「あ、それ僕も思った」

「んなっ・・・・・！？なんてこと言うのよ、あんたらは！」

おおやっと普通に喋った。なんださっきの喋り方は。軽く引いたぞ。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！聞き返した鈴に強烈な出席名簿打撃が入った。・・・・・鬼教官降臨である。

「もうＳＨＲの時間だ。教室にもどれ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口をふさぐな。邪魔だ」

「す、すいません・・・・」

すごすごとドアからどく鈴。その態度は１００％千冬姉にビビッてる。

こいつ昔から千冬姉が苦手だよな。なぜかは知らんが。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！楓！」

なんで俺が逃げるんだ。

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

ニ組へ向かって猛ダッシュ。

うん、昔のままの鈴だな。しかしなんでアイツは格好つけてやってきたんだ？

高校デビューか？そんなタマでもないだろ。

「っていうかアイツＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」

「一夏も鈴さんのこと知ってたんだ」

そう思って、なんとなく口に出した。・・・・・それがまずかった。

「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「か、楓さん！？あの子とはどういう関係で・・・」

その他、クラスメイトからの質問集中砲火。ああ、馬鹿・・・。

バシンバシンバシンバシン！！

「席に着け、馬鹿ども」

千冬姉の出席名簿が火を噴いた。・・・俺のせいか？・・・俺のせいだな。

(しかし、こうも知り合いと再会するとは・・・人生って言うのは不思議なもんだ)

そして今日もＩＳの訓練と学習が始まる。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

（ハハハッ、まさか鈴さんが一夏のハーレム要員か～～～。世間は狭いと思うよ）

超、人事と言いたいところだが、箒との約束がある楓はどうするか迷った。

（う～～ん、このまま見るのも面白いし、しばらくは様子見でいいかな。別に相談もないし）

「桐谷、答えは？」

「え？はい。１４・７６２です」

「チッ、正解だ」

（舌打ちした！？）

クラスの心がシンクロしたと思う。

だが考え事をしてもすぐに答えを出せる基本天才な楓。殴られずに済んでいた。

考え事をしていた箒とセシリアは出席名簿の餌食となった。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「お前のせいだ！！」

「あなたのせいですわ！！」

開口一番に箒から文句が来た。セシリアは楓へ文句をいってた。

「なんでだよ・・・」

「なんでですか・・・・」

今日の授業、注意されまくっていたからな。学習能力がないのか？

箒とセシリアは。

「まあ話ならメシ食いながら聞いてやるから。とりあえず学食行こうぜ」

「む・・・ま、まあお前がそう言うなら、いいだろう」

はいはい、ありがとうございますね。

「じゃあ僕は先に行ってるよ」

「あ！待ってください！！楓さん！！」

なんか先に行った楓と、それを追うセシリアとほか数名の女子。

俺も後を追う形で移動した。

俺は券売機で今日も日替わりランチ。

リーズナブルで毎日違うものが食べられる。ありがたいことこの上ない。

ちなみに箒はきつねうどんを買ってた。たまには違うものを頼もう

ぜ。

俺も人の事言えないけど。

「待ってたわよ、一夏!!」

「遅かったね」

鈴と楓が俺等の場所を空けててくれた。ちなみにセシリアが楓の隣でランチを食ってた。

「そういや、鈴。楓と知り合いだったのか？」

「まあ、中国の学校にいたの頃、留学生ってことで会ったことがあるのよ」

「そう、日本語通じる人が鈴さんぐらいしかいなくて・・・色々と助けて貰ったんだ」

「そうなのか。おっと、そろそろメシが冷めちまうな」

そして俺は鈴の前に座る。

「久しぶりだな。ちょうど丸1年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそたまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりぁ・・・」

ため息をつくが、この口調間違いなく鈴だな。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「楓と同じ質問しないでよ。あんたらこそ、なにＩＳ使ってるのよ」

「使えるものは仕方ないよ」

「そうそう」

楓の言葉に同意しておく。俺も何故自分がＩＳを使えるか分かってないからな。

「しかしアンタがあの楓ねぇ・・・。見た目が超変わってるからビックリしたわ。それ染めたの？」

鈴はそう言いながら楓の髪を指差す。

「・・・いや、なんか変色したんですよ」

「へぇ。それじゃあその目は？　まさかそれも変色したとか言わないでしょうね」

「え？　楓って生まれつきそうじゃないのか？」

ちょっと驚きだ。

「ええ。前は日本人離れしたキレイな碧眼だったの。ねぇ？」

「え・・・まあ。キレイかどうかは知らないですけど・・・」

「そして女顔のせいで、女子より男子にモテモテだったｒ――――

「鈴さん！　それはやめてください！　もうアレは思い出したくない！」・・・そ、そう」

セリフの途中に、楓がらしくない大声で割って入る。その大声に鈴が怯んだ。

ここは、話を元に戻すか。

「へぇ。じゃ、その赤い目はどうしたんだ？」

俺がそう気軽に聞いたとき、楓の顔に一瞬影が入る。

しかしほんの一瞬だったので、光の影響かもしれない。

「・・・・・まあ僕の事はいいじゃん。それより・・・ほら」

「ん？」

楓が指差すのは後ろの二人。

「そろそろ紹介したほうがいいんじゃない？」

「あ、ああ」

「その通りだ。一夏、楓、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

「そうですわ！楓さん、まさかこちらの方と付き合っていらっしゃ

るの！？」

疎外感を感じてか、セシリアと箒が俺と楓に尋ねてきた。他の女子も興味津々だな。

「べ、別に付き合ってる訳じゃ・・・・」

「そうですよ。彼女には意中の相手がいるんですから」

「か、楓！！何言ってるのよ／／／！！」

あ～～あ、今のは楓流のジョークだろう。よしフォローしておくか。

「怒るなよ、俺と鈴の関係はただの幼なじみだよ」

「・・・・・・・・」

「？　何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！！」

いきなり鈴が怒った。変なヤツ。

「僕との関係はさっき言ったとおり」

「そ、そうですの」

セシリアは安堵の表情？なぜ？

「幼なじみ・・・・・・・？」

怪訝そうな声で聞き返したのは箒だった。

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小４の終わりだっただろ？
鈴が転校してきたのは小５の頭だよ。
で、中２の終わりに国に帰ったから、会うのはちょうど１年ぶりだな」

「僕はその前だね。小１から小４の終わりまで一緒の付き合いだったよ。だから会うのは随分久しぶりだったんだけど、覚えてたんだ」

「そりゃあアンタみたいな女男、忘れたくても忘れられないわよ」

グサッ。

あ、今何か刺さる音が聞こえた。周りを見ると楓が震えてた。若干涙目だ。

「・・・そ、そんな・・・そんな覚え方だったなんて・・・・」

「あ～～、そういえば楓の禁句だったわね、女男」

「ヒドイィィィィィィイ！！」

とうとう泣き出した。何かめんどくさいな、ほっとくか。

「それでこっちが箒。前に話しただろ？小学生からの幼なじみで、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そういって二人は握手するが、そこには火花が見えた。

気のせいだな、気のせいと信じたい。幻覚が見えるなんてシャレにならん。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れて貰っては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「・・・・・誰？」

「なっ！？　わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？　まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ・・・・・・！」

言葉に詰まりながらも怒りで顔を赤くしていくセシリア。ゆでだこみたい。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

こいつ、相変わらず妙に確信じみてるし、嫌味でもない言い方をする。

そう、素なのだ。本気でそう思ってる。

「・・・・・・・・・・・・」

「い、言ってくれますわね・・・」

箒は無言ではしを止める。

セシリアはわなわなと震えながら拳を握り締めた。

それに対して、鈴は何食わぬ顔でラーメンをすする。

「あ～～～。そういえば先生に夜来るようにって言われてたんだった」

泣き止んだらしい楓が急に席を立った。

「そうか。専用機の事か？」

「うん・・・そうだと思う。多分すぐには戻れないから」

「わかった」

「それじゃあ」

楓は食器を片付けて食堂を出て行った。

「そういえば、アイツの戦いって見てないな」

「そうなの？」

「ああ、教え方は上手いんだけど・・・」

「ま、まあ、私の方が上手いけどね」

「そうなのかぁ？」

「どういう意味よ！！」

鈴が怒ってくる。俺は笑ってごまかす。

だけど・・・本当に気になるな・・・あいつの強さ・・・。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ここは職員室に通じる廊下。

電灯は少なく、楓は一人薄暗い道を通っている。

しかしイキナリ・・・。

「うわっと！」

後ろからパンチを繰り出された。

しかし右にステップして避け、そのまま左足で回し蹴りを放つ。

バシンッ！！

しかしその蹴りは相手の右腕によって阻まれた。

「・・・・どういう用件ですか？生徒会長」

「なるべく気配は消してたんだけどな～～」

「殺気をアレだけ放ってたら嫌でも気付きますよ」

「アハッ♪やっぱバレバレか～～」

「最初の質問です。なんの用件ですか？」

「その前に足をどけてくれると助かるなぁ」

そして楓は言われたとおり足をどけた。

生徒会長は腕を払って扇子を広げた。

そこには『見事！！』と書かれていた。・・・・仕組みましたね？

「実は噂の新入生の実力を試してみたかったんだ～～なんて♪」

「・・・・・言い方を変えますね。対暗部用暗部である更識家の当主が僕に何のようですか？」

その言葉に生徒会長は一瞬驚き、またすぐに元に戻った。

「ありゃりゃ・・・・・そこまで知ってたなんてね」

「結構博識なので」

「そういうレベルなんだ・・・まあいいわ」

「僕にとっては全然良くないんですけど」

「しつこい男は嫌われるぞ♪」

「背後からいきなりパンチを繰り出す女性はもっと嫌われますよ」

「・・・用って言っても伝言係みたいなものだし」

「誰からですか？」

「こういえば分かるって言われたわ。『仮面の騎士』」

「！！ッ・・・・そうですか。・・・その人は何と？」

「『敵は迫ってきている。私の方もなるべく急ぐ気ではいるが、大した成果は期待しないでくれ』だそうよ」

「分かりました。こちらからも伝言を頼めますか？」

「ええ、構わないわ」

「”それぐらい構わない。だけどアレだけは成果を出してくれ”と」

「分かったわ、伝えておく」

「ありがとうございます」

「いいのよ？　それよりこれから私の部屋へ行かない？」

「いえ、遠慮します」

そして楓は急ぎ足で去っていった。

一人取り残された生徒会長はすこし憂鬱そうな顔をしていた。

「まったく・・・これでも本気なんだけどね・・・」

そして生徒会長もその場から離れた。

クラス対抗戦まであと・・・・・・・・３週間・・・・

9話　クラス対抗戦

五月。

諸事情で怒らせてしまった鈴とは未だ言葉すら交わしてない。

なぜ怒っているかは一巻を読めば分かるだろう。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用に調整されるから、
実践訓練は今日で最後だな」

放課後、かすかに空が橙色に染まりはじめるのを眺めながら、今日もまた特訓のため第三アリーナへ向っている。

メンツはいつもの通り、俺、箒、セシリア、楓。

クラスの女子も大分テンションのほうも下がってきて、最近では質問攻撃や視線包囲網に出食わすことも少なくなってきた。

とはいえ、未だに学園内では話題の対象であることには変わりないので、アリーナの客席は満員御礼なんだろう。

「ＩＳ操縦もようやく様になってきたから今度こそ――――」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。これくらいは出来て当然ですわ」

「ふん、中距離射撃型の戦闘方が役に立つものか。第一、一夏のＩＳには射撃武器がない」

確かにそうだ。

俺のＩＳ・白式には射撃武器が一切ない。雪片弐型だけだ。

普通、ＩＳというのは機体ごとに専用装備を持っていているものらしい。

しかし、その『初期装備』では不十分なので『後付装備』というものがある。

セシリアのＩＳでは、初期装備がブルー・ティアーズ。

後付装備はライフルと近接ナイフと言う感じだ。

そしてＩＳというのはこの後付装備のために『拡張領域』がある。

装備できる量は各機のスペックによるが、最低でも二つは後付けができるようになっている・・・らしい。

らしいというのは、俺のＩＳはそうではないからだ。

拡張領域ゼロ。

しかも初期装備は書きかえれないので、結局近接ブレード一本というのが今のところの俺のＩＳのスペックだ。

「それを言うなら篠ノ之さんの剣術だって同じでしょう。ＩＳを使

用しない訓練なんて時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！剣の道とはすなわち――――――」

「一夏さん、今日は昨日の無反動旋回のおさらいからはじめましょう」

「ええい、このっ！聞け、一夏！」

「俺は聞いてるっつうの！！」

「まあまあ」

何で俺が怒られるんだ！！

と思いつつ、俺等はアリーナの方へ入って行く。

そこには・・・・。

「待ってたわよ、一夏！」

鈴がいた。腕組をしてふふんと不敵な笑みを浮かべる。

「貴様、どうやってここに――――――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！！」

箒、二度目の台詞中断、諦めろ、今日はそういう日らしい。

「はん、私は一夏関係者よ。だから問題なしね」

いやいや、それは今は関係ないんじゃないか？

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな・・・」

「正々堂々、スパイ行為をしてくるなんて・・・」

うわ、二人とも切れかかってる・・・ここに人間凶器が要るので注意、注意。

「・・・おかしなことを考えているな？一夏」

「いえ、なにも。人斬り包丁に対する警報を発しただけです」

「お、お前と言うやつはっ――――」

俺に掴みかかってくる箒を、鈴が間に入って邪魔する。

「今はあたしの出番。脇役はすっこんでてよ」

「わ、脇やっ！？」

「はいはい、話が進まないから後でね・・・・・・で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！私を怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「そう言われても・・・鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねぇ・・・じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ!?」

「おう」

そりゃそうだろ。放って欲しいなら、放っといてやるほかいいだろ。

「なんか変か?」

「変かって・・・・・・・ああ、もう!」

焦れたように頭をかく鈴。

「謝りなさいよ!!」

理っ不尽〜〜。

っていやいや!

「なんでだよ!約束覚えてただろうが!!」

「あっきれた。まだそんな寝言言ってんの?意味が違うのよ、意味が!!」

「知らねぇよ!約束自体は覚えてるじゃねえかよ!」

「あったまきた。どう言われても謝らないわけね!?」

「説明してくれりゃあ謝るっつーの！！」

「せ、説明したくないからこうして来てんでしょうが！！」

全く意味が分からん。何したいんだ、こいつは。

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けたほうに何でも１つ言う事を聞かせられるってことでいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明して貰うからな！」

売り言葉に買い言葉。それは返却制度がない物々交換。

それに一度買った以上、男がそう簡単に前言撤回できるか。情けないにも程がある。

「せ、説明は、その・・・」

俺を指差したまま顔を赤くする鈴。なんなんだ？

「なんだ？やめるならやめてもいいぞ？」

これは一応親切で言ったんだが・・・どうやらいけなかった。

「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

カチンッ。

「うるさい、貧乳」

――――あ、やばい。

ドカァァンッ！！！

イキナリの爆発音、そして衝撃で部屋全体がかすかに揺れた。

見ると、鈴の右腕はその指先から方までがＩＳ装甲化していた。

そしてその衝撃波が俺も襲う！！

しかし・・・・。

バキィィン！！

「長らく空気となってた僕だけど、まあ、いいか」

腕の盾っぽいのだけ装甲を展開させた楓が衝撃波を相殺した。

「鈴さん。それは一応僕にも宣戦布告していると言うことでいいですよね？」

「ええ！！あたしが余裕勝ちしてやるわよ！！」

「そうですか」

「大体アンタ喋り方おかしいわよ!?小学生の頃は自分の事『俺』とか言ってたじゃん!」

「まあ、人は変わるものですからね。それと一夏、謝っときなよ」

俺に視線が集まる。そうだな確かに俺が悪かった。

「ま、まあ確かに今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』!?今『も』よ!?いつだってアンタが悪いのよ!!」

そんな無茶苦茶な・・・といいたいところだが、生憎俺には反論の余地がなかった。

「ちょっと手加減してやろうかと思ったけど、いいわよ。ご希望どうり、全力で叩き潰してあげる」

最後に鋭い視線を俺らに送ってから、ピットに出て行った。

ちらりと後ろを見ると、直径三十センチほどのクレーターが出来ていた。

特殊超合金の壁を凹ませるくらいの威力は、どう考えてもあるだろう。

「パワータイプですわね・・・それに一夏さんと同じ、近接格闘型・・・」

真剣な眼差しで壁の破壊痕を見つめるセシリアだったが、俺にはそんな事よりもここ数年で一番の後悔をしていた。

（よりにもよって胸の事をいってしまうとは・・・・）

鈴が一番気にしている、真剣に起こるポイントだ。

さっきのは圧倒的に俺が悪い。

（参ったな・・・）

勝敗がどうであれ、鈴に謝らなければならなくなった。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

あっというまに試合当日。

第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴、そして楓と・・・・二組の副代表（すまん、名前忘れた）

噂の新入生同士の戦いとあって、客席は満員。

それどころか通路まで立って見ている生徒までいるらしい。

（・・・・なんて、気にしている余裕はないか）

俺の視線の先には、鈴とそのＩＳ『甲龍（シェンロン）』が試合開始のときを静かに待っている。

非固定浮遊部位が特徴的だ。肩の横に浮いてる棘付き装甲が、やた

ら攻撃的な自己主張している。

『両者、指定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され俺と鈴は空中で向かい合う。距離は五メートル。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルに下げてもいいわよ」

「雀の涙ぐらいだろ。そんなのいらねえよ。全力でこい」

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

「わかりやすい説明ありがとうございますねぇ」

『両者、試合を開始してください』

その瞬間俺と鈴はぶつかった。

xxxxxxxxxxxxxx

「がんばってるね～～」

僕は少し離れたところで戦闘の準備をしていた。

「あなた、ISを展開しないんですか？」

相手の副代表の人が聞いてくる。

「もう展開してるよ。それともう始まってるらしいけ、ど！！」

そして僕は空から攻撃を仕掛けた。上に《ヒート・ロッド》を投げておいたので。

「え！？きゃあ！！」

相手は打鉄。接近戦主体の侍のような格好のＩＳだ。

「ちゃんと見ておかないと！！」

相手が怯んだ瞬間、僕は近接ブレード『ビームソード』を展開、切りかかる。

「くっ！！この！！」

相手も巨大な刀で反撃するが、

「狙いが曖昧、それじゃあ当たらないよ」

飛んで巨大な刀の乗る。そして・・・・、

「はぁ！！」

腕にソードを突き刺した。

「きゃあああああ！！」

ダメージが貫通したらしく、痛みに耐えてる相手。それでも戦意は

失ってない。

しかし・・・。

「もう終わりだよ」

「な、なにをいって！！」

「君の武器は使い物にならない」

そう、最初の僕の空からの攻撃は刀に小さな切込みを入れていた。

そして僕が刀に乗ったとき、刺すと同時に刀に蹴りを入れた。それで刀が折れてしまったのだ。

相手もそれがわかったが・・・。

「それでも！！まだ武器はあります！！」

そう、まだ打鉄にはまだ武器があるが・・・。

「じゃあこれで最後だね」

そういって一瞬で背後に回り、きりつける。

「ぐっ！！」

予想以上のダメージを食らい、相手は気絶してしまった。

「あちゃ～～、ここまでする気はなかったんだけど・・・」

そこで僕は相手をお姫様抱っこしてそこらに下ろす。

「さて、と。じゃあ一夏たちの戦ってる場所に行きますか」

そして僕は向った。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「な!?楓、武器しか展開してないのに勝ったぞ!?」

リアルタイムで見ていた箒が驚く。

それにセシリアが続く。

「ええ、、鈴さんの『衝撃砲』もすごいですが・・・楓さんもすごいです・・・」

そういっているセシリアの言葉は、どこか怯えているようだった。

「そうだ!一夏は!!」

そういってモニターに目を向けると鈴に苦戦している一夏が映し出される。

（一夏――――――）

箒はただ無事を願ってた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目には見えないのが特長なのに」

たしかにかなりきつい。砲身が見えないのがかなりキツイ。

しかも、特に発射の制限はないらしく、真上や真後ろからも撃ってくる。

だが、俺には相手のバリアを問答無用で破る刀がある。

（あとは・・・気持ちで負けないって程度かな）

よくよく考えれば実力差は歴然している。しかも鈴はセシリアとは逆に戦闘になると冷静になるタイプだ。

こういう相手は基本強い。

そんな相手に負けないことといったら、『意思』ぐらいしかないからな。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

真剣に見つめる。

「な、なによ・・・そんな事当たり前じゃない・・・とっ、とにか

くっ、核の違いを見せてあげるわよ！」

鈴はそのバトンのような両刃青竜刀を1回転させて構えなおす。

俺は衝撃砲が来る前に加速体制に入った。

この一週間で身につけた技能『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』は出し所さえ間違えなければ、代償候補生クラスと渡り合えるほどだ。

「うおおおおおっ！！」

この奇襲は一回しか使えない。だから《雪片弐型》のバリアー無効化を同時に放つ。これで半分以上削られなければ俺の負けだ。

しかし・・・。

ズドオオオオオンッ！！

刃が届きそうだったとき、突然大きな衝撃がアリーナを襲った。

ステージの中央にもくもくと煙が上がる。

どうやらさっきのは『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通した衝撃波らしい。

「なんなんだ？」

状況に混乱するとき、鈴から通信が入った。

『一夏！試合は中止よ！！すぐにピットに戻って！！』

何をいきなり言い出すのか。そう思った瞬間、ＩＳのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

――――――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと確認。ロックされています。

「なっ！！」

アリーナのシールドは、ＩＳと同じ物で出来ている。

つまり、それを貫通できるだけの攻撃力を持った機体が乱入、こちらをロックしている。

つまりピンチだ。

『一夏、早く！』

「おまえはどうすんだよ！！」

俺は普通にオープンチャンネルで聞いた。

「私が時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！！」

「逃げるって・・・そんなの女を置いてできるか！！」

「馬鹿！！あんたのほうが弱いんだからしょうがないでしょ！！」

「じゃあ、僕がやるよ」

後ろから声が聞こえて、振り返ったら楓がいた。

「男なら問題ないと思うよ？」

「んなこと――――あぶねぇ！！」

いきなりアチラからビームが飛んできた。

「ビーム兵器かよ・・・。しかもセシリアのＩＳよりも出力が上だ」

「だから、僕がやるって――――――――！！ッあ、あいつは！！」

「おい、知ってんのか？」

「・・・・・今すぐここから離れて。そして僕の邪魔をしないでよ。アイツは僕の獲物だ」

楓の目つきが変わった。

すごい・・・殺気だ・・・足に力が入らない。

そして楓が見ているのは『全身装甲』に翼のような物を後につけていて、手には巨大なビームの鎌が握られていた。

『織斑君たち！！今すぐアリーナから脱出してください！！いますぐ先生達がＩＳで制圧しますから！』

割り込んできたのは山田先生だった。

「だってよ、楓。ここは脱出したほうがいいらしいぜ」

「・・・・必要ないよ。僕一人で充分だ」

「おい!!お前いい加減にしろよ!!」

俺は楓に詰め寄る。楓は翼以外はＩＳの装甲を展開していない。

「じゃあ道作るからそこから脱出して」

「おい!!お前どうしたんだよ!!」

「そう、言っても分からないんだ・・・それじゃあ、邪魔だ」

「!!ッ」

殺気が放たれて俺は掴んだ手をはなす。

その隙に楓は乱入してきたＩＳに向っていった。

いや、それよりも・・・・。

「あいつの言葉が乱暴になった・・・あれはキレてる証拠・・・」

「そ、そうなのか?鈴」

「うん。前に一度だけキレたとこを見たことがあるの。そのときのアイツは・・・・正直思い出したくないわ」。

鈴が身震いしていた。

・・・・・俺でもわかる・・・あいつは何か得体の知れないものを隠してる。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「行くか『エピオン』　俺が使うからって嫌がるなよ？」

そう言った瞬間、俺の装甲が『全身装甲』になった。

「おい、ポンコツ」

そう俺が言うと、『アイツ』はこちらを向いた。

「誰の差し金だ？『デスサイズヘル』」

しかし答えずに俺の方に突っ込んできた。

「無人機か・・・なら、遠慮はいらねぇな」

アイツが俺に鎌で切りかかるが、

「それ以上それを使うんじゃねえ！！」

一度急降下してかわし、すぐに急上昇してヤツの鎌をぶった切る。

「それは、俺の友に対する侮辱だと思え！！」

しかしシールド内蔵のビームサーベルらしきもので俺に切りかかる。

「チッ、完成度だけは高けぇな。だが・・・」

俺はシールド内蔵の『ヒートロッド』でヤツをなぎ払う。

「所詮はニセモンだ!!」

そして壁に突っ込んだアイツを俺はビームソードを伸ばし突き刺す。

「ガガガ・・・・」

最後に変な機械音を上げて沈んで行く。

「ふん、手こずらせやがって」

しかし・・・・。

「ガガガガガガッガガッガ!!」

「!?なんだ!?」

へんな機械音を上げながら立つ。そして光を放ち、その姿が変わる。

「『一次以降』・・・・か。次は何が出るんだ?」

そして俺が見たのは・・・・あの・・・前の愛機だった。

「そうか・・・お前も来るのか・・・『トールギス』!!」

俺達はアリーナをぶち破りながらぶつかった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「織斑君！聞こえますか！？」

『はい、しかし・・・楓が突っ込んでいったんです』

「え！？な、なんで！？」

『いえ、なんでもアイツはアレの事を『デスサイズヘル』だとかなんとか・・・』

ガタッ！！

突然椅子が引かれた。

見ると千冬が驚きの表情でいた。

「チッ！！今すぐ私はＩＳの使用許可をもらう！！」

「あ！！ちょっと！？」

千冬は血相を変えて飛び出していった。

『あ！？いまアイツが倒した！？い、いえ！？姿が変わった！？あ！！あいつらが外に！！』

「えええええ！！」

その瞬間外で爆音が聞こえた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「くっ！相変わらず早いなオイ！！」

トールギスと俺ははるか上空で高速戦闘を行っていた。

俺はシールドで防ぎながら切るが、トールギスのバーニアによる高速移動のおかげで当たらない。

そしてトールギスのビームサーベルで攻撃される。

「時間掛けるのも面倒だ『ゼロ・システム』起動」

ウィィィン・・・・・これでもう・・・。

「終わりだ！！」

ガギィィン！！

俺はトールギスと正面から激突し、剣による一瞬の勝負はついた。

「ガ・・・・・ガガ・・・」

胴体がまっぷたつになったトールギスは、爆発音を上げて落ちていった。

「ハアハア・・・・・」

そして俺・・・いや・・・・僕はここまでの出来事を思い出し・・・

・。

「僕は・・・・何をやっているんだろう・・・・・」

そして・・・・・・戦闘態勢を解いたのがいけなかった。

バキュン！！

「！！ッ」

爆発しながらも撃った、トールギスの最後の足掻きのビームが僕を襲う。

「ぐあああああっ！！」

僕は防ぐことも出来ずただ食らった。

腕や腹には血の感触。

（・・・・・く、そ・・・・・僕は・・・・・・僕は・・・・・・・）

それを最後に感じて、そのまま落ちていった。

そしてそのまま意識を失った。

9話　クラス対抗戦（後書き）

なんか不自然な感じがします。

10話　それから・・・・

「・・・・・・うぅん・・・・・」

気がつくと、知らない天井があった。

どうやら僕は保健室のベットにいるらしい。

腹や腕には包帯が巻かれている。ちょっと痛い・・・・。

頭はなんか回らない・・・なんか痺れてるみたいだ。

どうしてこんな事になったか思い出してみよう。

（えっと確か・・・あれれ?思い出せないや・・・・どうしよう?）

と僕が悩んでいるとバシュッっとドアが開かれた。

そこには・・・・。

「織斑先生・・・・」

「おお、よく生きていたな。上空２００メートルから落ちてきたって言うのに」

「え!?ちょ、ちょっと!!僕そんな事したんですか!?」

「何?覚えてないのか?」

「えっと・・・はい、クラス対抗戦の時、乱入した『ヤツ』を倒したところまでは覚えているんですが・・・」

「そうか。ではその後、何があったか一応話すとしよう」

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

楓が敵を倒した後すぐに一夏は楓を追ってた。鈴は下で先生達と話している。

「ったく。あいつドコまで飛んでったんだ・・・」

しかしハイパーセンサーから警告がくる。

――――――――上空より熱源接近！

「なに！？」

そして身構える一夏だったが落ちてきたのは真っ二つになった敵だった。

「なんだ・・・あいつ倒したのか・・・」

と、思ったが・・・。

「あれ？またなんか落ちてくるな・・・・」

そしてそれが何か分かり、慌てて受け止めにいった。

「ふっざけんな！何で丸腰で上空２００メートルをスカイダイビングしてんだ！！」

そして何とか楓を受け止めれた。

しかしその姿は酷いものだった。

腹や腕にはビームで打たれたようなでかい傷があり、髪の銀髪の部分が紅い血で染まってる。

そして今にも死にそうな顔をしながら気絶していた。

「チッ、色々と言おうと思ってたが・・・・それどころじゃねえな」

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「その後、ＩＳを展開した先生方が来てお前をここに運んだ。以上が私が一夏や他の先生方から聞いたことだ」

「そう・・・・ですか・・・」

それきり二人は無言だったが、しばらくして楓が口を開いた。

「・・・・・いいんですか？」

「なにがだ」

「『アレ』の事や・・・・僕の事・・・」

「そうだな・・・・牢屋に閉じ込められたいのなら聞いてやろう」

「それはつまり・・・・僕が犯罪者・・・・ってことですか？」

「いいやちがう。だが、お前は乱入してきた相手の事を知っている。それは非常に危険な立場だ」

「・・・・・・・・」

「だが、あの戦闘を見たのは私と一部の生徒と先生だけだ。いくらでも誤魔化しはきく」

「・・・・・・つまり、僕は犯罪者との関係があると思われているが、先生方の力でその証拠をもみ消す・・・と言うことですか？」

「その通りだ。本来、アレはお前が手を出していいものじゃないしな」

「その言葉・・・・前にも言いましたよ」

「そうだったな・・・。まあ、こちらとしてもお前のような有望な若者をみすみす渡すつもりはない」

「・・・・・・・・・・・」

「それに、アレはまだ世間に出すわけにはいかない」

「そうですか・・・・これから僕はどうなるんです？」

「基本的にはいつもと同じだ。・・・だが、あいつらは何と言うか

な」

あいつらと言うのは当然一夏たちの事だ。

「・・・・・・聞かれたら、当たり障りのないところだけ答えます。巻き込むわけにはいきませんし」

「以前のような関係には戻れんかも知れんぞ？」

「・・・・・たとえそうでも、もう覚悟は決めてましたから」

「そうか・・・・だが、いつまで一人で追い続ける気だ？場合によっては実力行使しなければ行けなくなる」

その言葉に楓は一度、窓の外を見て言った。

「僕がこの世界の邪魔者というのは知っています。けれど僕は、追い続けます」

「そうか・・・だが桐谷・・・いや『楓』」

初めて千冬が自分の事を名前で呼んだことにビックリした楓。

しかし、それに構わず千冬は続ける。

「復讐の後は・・・何も残らないぞ？」

「ええ、知ってます。だからこそやるんです」

楓は、間髪いれずに千冬の言葉に答えた。

しかし、千冬はまるでその答えが分かっていたような様子だった。

「そうか・・・・。だが、簡単には死ぬなよ」

「ええ。ただでやられるつもりはありません。長生きはできないでしょうけど」

ニッコリ笑顔で言う楓に、千冬はフンッと鼻を鳴らしながら出て行った。

そして独りになった部屋で、時計を見ながら楓は考え事をしていた。

(丸1日寝てたんだ・・・・)

「これから・・・・・どうしようかな・・・・」

いい案も浮かばない楓はため息をついた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

次の日の夜。

僕の怪我は、無理をしなければ大丈夫だと判断されたので部屋に戻れといわれた。

ちなみに、見舞いにはセシリアさんと箒さん、それに生徒会長が来てくれた。あとクラスの人も。

しかし、見舞いに来た生徒のほとんどが、ハアハアと怪しい息遣い

をしていた。

小声で『桐谷君が動けない・・・・これは絶好のチャンス!!ハアハア・・・』と言うのが聞こえた。

・・・身震いしました。

けれど・・・鈴さんと一夏は来なかった。

僕は松葉杖をつきながら部屋に戻った後の事を考えていた。

(どうしようかな・・・)

しかし結局いい案も浮かばず、自分の部屋についてしまった。

(覚悟を決めるしか・・・ないかな)

そしてドアをノックした。

「はい?どちらさまで?」

「・・・僕だよ」

そしたら返事は返ってこなく、代わりにドアが開いた。

そこには、ラフな部屋着を着た一夏がいた。

「入れよ」

「う、うん」

言われたとおり部屋へ入った。
僕は自分のベットに座り、一夏も自分のベットに座った。
『・・・・・・・・・・・・・・・』
そこから長い沈黙が続いた。
しかしやがて一夏が口を開いた。
「なんだ?シャワー浴びないのか?」
「・・・・・・・へ?」
予想外の質問に僕は驚いて、変な声を出してしまった。
「”へ?”じゃなくて、ずっと寝たきりだったんだろ?」
「あ、うん・・・でも一応、怪我人だから・・・それに軽くなら保健室のシャワーで浴びたし・・・」
「そうか。あ、そういえば鈴とは仲直りしたから」
「そ、そうなんだ・・・・」
そこからまた沈黙・・・・。
しかし、また一夏が口を開いた。

「やることないんなら、寝てもいいか？」

「え！？う、うん・・・・・」

そして一夏は電気を消し、ベットに入っていった。

僕は今、一番気になっていることを聞いた。

「一夏」

「なんだ？」

「・・・・・・聞かないの？」

「・・・・・・聞いてもいいなら聞くぞ」

「・・・・・・・ごめん」

「だろうな。俺は聞かれたくないことを無理矢理聞いたりしないさ」

「・・・・・ごめん。いつか、話すから・・・・」

「そうか」

「・・・・鈴さんは・・・・何かいってた？」

「『話してくれるまで待つわ！！』って言ってた」

「そっか・・・・。でも、見舞いぐらいきても良かったと思うんだけど？」

「そりゃあ、黙ってた罰だ」

「フフッ、そっか。それじゃあ仕方ないか」

ありがとうね・・・・二人とも・・・・。

「それじゃあ、おやすみ」

「ああ」

その日は何故かぐっすり眠れた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

六月の頭、日曜日。

怪我はまだちょっと残ってるけど、日常生活や訓練する分には大丈夫になった。

それと鈴さんとも話し合って一応、いつか話してといわれた。

まあ・・・・一発蹴られたけど・・・・。

そして今は・・・・。

「へぇ～～こいつが楓か～～。俺は五反田弾。気軽に弾でいいぜ」

「は、はぁ。桐谷楓です」

一夏の友達と言う五反田弾と言う方の家にお邪魔している。
なぜかは、特にやることもなく部屋にいたら一夏に”お前も来るか？”といわれたので付いて来た。
今は弾（さん付けはいらないと言われた）の部屋でゲームをしてる。
「で？」
「で？って、何がだよ？」
一夏と弾がゲームしながら話してる。
ちなみに僕は、頂いたお茶を飲みながらポケーっとしている。
うん、おいしいお茶だな～～心が和む。
「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」
「してねぇっつうの。何度同じ説明すれば納得するんだ」
あ、あと弾は鈴さんの幼なじみでもあるそうな。
世間は狭いなと改めて感じました。
「嘘をつくな嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか。なにそのヘブン。招待券ねぇの？」
「ねぇよバカ」

「それに疲れるしね～～～～」

手で髪を整えながら僕は付け足す。

実はここまで来るときに、周りの人がヒソヒソと話し声が聞こえたので、何かおかしいところがあるらしいと思っていたことをすっかり忘れていたので、髪を整えている。

他におかしいところはないし。

（ちなみに周りの人は楓と一夏に見て、カッコイイだとかキレイだとか言ってただけです。ｂｙ作者）

「というか、なんでお前髪伸ばしてんの？似合ってるけどさ」

弾が聞いてくる。僕は何気なく返す。

「まあ、切るのが面倒くさいのが本音かな」

「手入れのほうがメンドくね？」

「そうでもないよ。慣れちゃったし」

そういうと弾はブツブツ何か呟いた。

「はぁ～～お前が女ならいいのに・・・」

ん？小声で聞こえなかったけど・・・失礼なこと言われた気がする。

いや、確証も無いのに疑うのはよくないね。

疑う前に信じる、人間関係の基本。ましてや、初対面の人に失礼なことしちゃいけない。

「つうか、アレだ。鈴が転校して来てくれて助かったよ。話し相手が少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねぇ・・・・」

うん？なんか弾がニコニコとニヤニヤの中間のような顔をしている。器用な顔をしてるよね。

「よっしゃ、また俺の勝ち！」

「おわ！きたねぇ！最後にハイパーモードで削り殺すのはなしだろ～・・・・」

今やっているのは『ＩＳ／Ｖ　Ｓ』（インフィニット・ストラトス・スカイ）らしい。

こういうゲームなどのことには疎い僕なのであまり詳しいことは知らない。

「やっぱイタリアのテンペスタは強いわ。つうかエグいわ」

「たまには別のキャラ使えよ。イギリスのメイルシュトロームとかよ」

「いや、あれすげえ使いづらいし、技弱いし、コンボ微妙だし」

「それ、面白いの？」

なんか空気になってる僕は一応話しに加わった。

「おう、なんならやってみっか？」

弾が誘ってくれるのでさっそくやってみた。

結果は・・・・。

「うぉぉぉぉおん・・・・初心者にボコボコにされるなんて・・・・」

僕の勝ちだった。

弾は男泣きしていた。

単純な操作だったからすぐ覚えて、使いにくいっていうメイルシュトロームを使ってみたら見事、無傷で勝ってしまい、負けじと弾が”もう1回！”というから全戦無傷で倒してしまった。

「忘れてた・・・楓は基本なにやらせても天才だった・・・・」

僕はそんな気はないんだけど・・・・・。

「ま、まあ元気出してよ」

「で、話は戻るが、鈴の事は――――――」

復活早っ！っと、弾の言葉を遮り突然、訪問者が来た。

「お兄！さっきからお昼できたって言っんじゃん！さっさと食べに――――――」

ドアを蹴破り、俺、参上！！的な感じに登場したのは・・・・。

「初めまして。僕は桐谷楓です。五反田・・・蘭さんですよね。よろしくお願いします」

「はい！？えと、ど、どうも・・・五反田蘭です・・・・」

「あ、久しぶり。邪魔してるよ」

「いっ、一夏・・・・さん！？」

キラーン！僕の観察眼が光った。

これは・・・一夏のハーレム要員だ！！

いや～～人気者だね～～～一夏は。

ちょっと羨ましいな・・・・って僕が人と付き合えるわけないけど。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか・・・・・？全寮制の学園に通っているって聞いてましたけど・・・・・」

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子見と楓の町案内のつ

いでに寄ってみた」

「そ、そうですか・・・・」

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ――――――」

ギンッ!!蘭さんの視線一閃。

あ、弾がダメージ食らったマリ●みたいに縮んでく。

「・・・・・なんで言わないのよ・・・・」

「い、いや、言ってなかったか?そうか、そりゃ悪かった。アハハ・・・・」

「・・・・・・」

ギロリ、蛇が蛙をにらめつける様な睨みを利かせて蘭さんは部屋を出る。

「あ、あの、良かったら一夏さんたちもお昼どうぞ。まだ、ですよね」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「ご迷惑でなければ頂きます」

「い、いえ・・・・」

バタン。ドアが閉じられて部屋に静寂が訪れる。

「しかし、アレだな。蘭ともかれこれ3年の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれないのかねぇ」

「は？」

ちなみに蘭さんは中学3年生で、優秀な女子高の生徒会長をしているらしい。

エリートですよね～～、なんで弾さんの妹なんでしょう？

「いや、ほら、だってよそよそしいだろ。今もさっさと部屋出てったし」

「はぁ・・・・・」

ため息つく弾。わかるよ～～。これじゃあ蘭さんがかわいそうだね。

「・・・・なんだよ？」

「いやー、なんというか、お前はわざとやっているのかと思うときがあるぜ」

「？」

「罪な男だよね、一夏は」

「？？？」

「まあ、わからなければいいんだ。俺もこんな歳の近い弟はいらん」

「蘭さんの意見も聞いてあげなよ」

「？？？？？」

「まあ、いいや。とりあえず飯食ってから街に出るか。それでいいだろ？」

「おう、そうだな。昼飯ゴチになる。サンキュ」

「そうだね。ありがとう」

「なあに、気にするな。どうせ売れ残った定食だろう」

定食か・・・。学園以外の定食は食べたことがないから楽しみだな～。

「じゃ。ま、行こうぜ」

そして部屋を出て一階まで行って、裏口から正面の食堂入口まで行く。

変わってるけどこれなら私生活に商売が入らないらしい。

よくは知らないけど。

「うげ」

「ん？」

「え?」

「・・・・・・・・・・」

変な声を出す弾。後ろからのぞく一夏と僕。

そこには僕達の昼飯が用意してあるけど、先客がいた。

「なに?何か問題でもあるの?あるならお兄ひとり外で食べてもいいよ」

「聞いたか?二人とも。今の優しさに溢れた言葉。泣けてきちまうぜ」

先客は蘭さんだった。

涙を手でぬぐう弾に僕はハンカチを渡した。

「別に4人で食べればいいだろ。それより他のお客さんもいるし、さっさと座ろうぜ」

「だね。迷惑になるよ」

「そうよバカ兄。さっさと座れ」

「へいへい・・・・・」

そしてテーブルに一夏、弾、蘭さん、僕と言う順番に並んだ。

「蘭さあ」

「は、はひっ？」

「着替えたの？どっか出かける予定？」

「あっ、いえ、これは、その、ですねっ」

まったく・・・好きな人の前ではオシャレしたいんだろうな。

しかし・・・鈍感だよね一夏は・・・蘭さんがかわいそうだよ。

「ああ！」

なんかいきなり一夏が大声を上げた。ちょっとビックリして喉を詰まらせちゃった。

「デート？」

ダンッ！！

「違います！！」

あ～～あ、やっちゃった・・・・。

「ご、ごめん」

「あ、いえ・・・。と、とにかく、違います」

「違うつーか、むしろ兄としては違って欲しくもないんだがな。何

せお前がそんな気合の入れたオシャレするのは数ヶ月に1回――――」

バシッ!!

・・・・・・・・見てはいけないものを見えしまった気がする・・・・。

簡潔に言うと、口封じのアイアンクロー。

「おい、食べねぇなら下げるぞガキども」

「く、食います食います」

現れたのは、この五反田食堂の大将の五反田厳さん。
歳は８０を過ぎているらしいが、いまだ現役で五反田家で頂点に君臨しているらしい。

僕以外は話をしていて昼飯を食べてなかったのだが、なぜか厳さんに言われたら大人しく食べてる。

「でよ一夏。鈴と、えーと、誰だっけ?ファースト幼なじみと?と再会したって?」

「ああ、箒な」

「ホウキ・・・?誰ですか?」

「ん?俺のファースト幼なじみ」

「ちなみにセカンドは鈴な」

「僕の場合、ファーストは鈴さんだけどね」

「ああ、あの・・・・」

ああ、一夏のライバルが増えたの!?って思ってるだろうな。

「・・・・・・お兄。後で話し合いましょう・・・・」

「お、俺、この後一夏たちと出かけるから・・・・。ハハハ・・・」

「では夜に」

なんか汗ダラダラの弾と、威圧感を出す蘭さん。

これはさすがに僕では分からない。兄弟の以心伝心的な?

「・・・・・・・・。決めました」

え?何を?

「私、来年ＩＳ学園を受験します」

ガタタッ!

「お、お前、何言って――――――――」

ビュッ――――――――ガン!

見事、おたまは壇の顔面に激突する。

来た方向を見ると、厳さんが鋭い眼光を見せてる。

・・・・・な、なんなんだ・・・・・。

「え?受験するって・・・なんで?蘭の学校ってエスカレーター式で大学まで出れて、しかも超ネームバリューのあるところだろ?」

そんなこと気にも留めずに話す一夏。どうやらこれは日常茶飯事らしい。

「私の成績なら余裕です」

「え?でもＩＳ学園は推薦ないよ?」

「どっかのバカなお兄と違って、私は筆記で余裕です」

「あ、なるほど・・・・」

と言って僕は弾に哀れみの視線を送る。

すると弾が復活した。

「・・・・・でも、確か実技が・・・・あったような・・・」

しかし元気がない。復活は早いが、体力は少ないらしい。

「確かに・・・ＩＳ起動試験って言うのがあって、適性のない人は速攻で落とすらしいよ」

逆に適正があれば速攻で入学できると言うことだけど。

「・・・・・・・・・・」

そしたら無言でポケットから紙を取り出す。

「げえっ！？」

何？ゲゲッ！！とエエッ！！の間のような声を出して。

「ＩＳ簡易適正試験・・・・判定Ａ・・・」

「問題はすでに解決済みです」

「それって確か、政府がＩＳ操縦者募集の一環でやってる、希望すればタダでやれるってやつだよね？」

「はい。タダです」

タダはいい・・・タダであればあるほどいい。そう言って頷く厳さん。

どうやら厳さんは親バカ（蘭さん限定）らしい。

「で、ですので」

コホン、と咳払いし戻したばかりの椅子に座る。

「い、一夏さんにぜひ先輩としてご指導を・・・」

「あ、俺より楓のほうが教え方が上手いぞ。そっちのほうがいいだろ」

「え!?で、でも・・・・・」

なにか懇願するように僕を見る蘭さん。・・・・大丈夫ですよ蘭さん。期待は裏切りません。

「一夏。頼まれたんだから逃げちゃダメだよ」

「うっ・・・ま、まあ確かに頼まれたのは俺だからな。いいぜ、受かったらな」

一夏が僕の思惑どうり引き受けてくれたら蘭さんが食いついた。

「や、約束しましたよ!?絶対、絶対ですからね!」

「お、おう」

その後、僕のほうに来て、

「あのっ!!ありがとうございました!!」

いきなりお礼を言われたので、ビックリして椅子を勢いよく転がしてしまった。

「えっ!!あ、うん。どういーーーーーーーッ!!」

ビュッーーーーーーーーーー!!

と、さっきの弾みたいに厳さんがおたまを投げてきた。

ガキィン！

僕はお箸でおたまを上に弾いて、上から落ちてくるおたまをキャッチした。

「ビ、ビックリした～～」

『・・・・・・・・・』

しばらく沈黙・・・・・。

「あらあら、厳さんのおたまを弾くのは千冬さん以来ですね」

そういってるのは五反田食堂（自称）看板娘、五反田蓮さん。

笑顔が眩しい人だ。笑顔は人をキレイに見せると言うのはホントだな～～。

「えっと・・・しちゃいけませんでした？」

「そんなことないわ。それより一夏君、楓ちゃん。蘭の事よろしくお願いしますね」

「あ、はい」

「はい・・・・・あれ？楓ちゃん？」

「ええ。楓君というのはしっくりこないから楓ちゃんで♪」

「・・・・・・・・・はい・・・・・・」

顔で笑って心で泣く。この言葉僕にぴったりだね。

「ちょっとまて！！お前、何勝手に学校変える事決めてんだよ！！」

なぜか興奮している弾。見えない敵とでも戦ってるのかな？

「ああもう、親父はいねえし！！いいのか、じーちゃん！」

「蘭が自分で決めたんだ。それにおれのおたまを弾けるヤツに悪い奴はいねぇ」

なんか変な理屈・・・まあいいけどね。

「いやだって――――――――」

「なんだ弾、お前文句あんのか？」

「・・・・・ないです」

弱いな弾は・・・。自分の主張を曲げちゃいかんぞ。僕は何も言わないけど。

「では、そういうことで。ごちそうさまでした」

「僕も。ごちそうさま」

食べ終わった蘭さんと僕は、箸をそろえておき合掌して席を立つ。

もちろん自分の使った食器は自分で片付ける。

と、そこへ。

君だけ～～に、伝えた～～い、愛のう～～た♪

僕の携帯がなった。何の曲か分からない人は、ＰＶがあるから富士見●房ホームページへＧＯ！！

「あれ？なんだろう・・・」

メールだったが、そこには織斑先生から、

『いまから１５分以内に職員室へ来い。遅れれば・・・・どうなるだろうな？』

・・・・・・・・・・。

「ハァ！？」

「お、おいどうした？」

「ゴメン一夏！！今急用が出来たからさきに学園に帰るよ！」

「あ、ああ。じゃあな」

そして僕は急いで帰った。

ちなみに学園についた時間は１５分１０秒。間に合わず叩かれた。

そして用と言うのは・・・・仕事が多いから手伝え・・・・だった。

今日はホントに顔で笑って心で泣く休みの日だった。

１０話　それから・・・・（後書き）

設定が難しいです。でも頑張ります。

11話　またまた転校生（前書き）

大体はオリキャラ目線です。

11話　またまた転校生

（学年別個人トーナメント・・・・・・か・・・）

どうも、桐谷楓です。

今は夕方、無理矢理手伝わされた残業が終わったころには日は沈んでた。

絶望した！！

自分の仕事をほとんど僕に押し付ける担任教師に絶望した！！

そしてそれが許される学園に絶望した！！

そんな事を思いながら、部屋の壁に立てかけられたカレンダーを見ていた。

ちなみに学年別個人トーナメントは、文字通り学年別のＩＳトーナメント戦。

これを一週間もかけてやるらしい。

一週間もやる理由は、全員強制参加だから・・・。

「はぁ・・・・。ヤダなぁ・・・」

さっきまでの、織斑先生の残業手伝いの疲れがたまってだるい今日

この頃。

僕はあまり『アレ』を使いたくないんだけど、強制だし・・・・クラス対抗戦と同じで・・・・。

「考えても仕方ないかな・・・」

ポジティブな思考でいようと思うので、一旦忘れることにした。

「夕飯食べよ・・・」

そして僕は食堂に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「お、桐谷君だ。やっほー」

「ええっ!?き、桐谷君!?」

一人のほほんしている人が僕に手を振る。

名前は布仏　本音さん。

クラスメイトで、生徒会に所属している。(姉妹で)

寮にいる時はダボダボのパジャマを着ているのが印象的な人。

「やーやー、かえっち」

「それはやめてくださいよ。本音さん」

「それは無理な相談なのだよー。
それよりさっきおりむーに断られたけど、私とかなりんと一緒に夕食しようよ～」

「は、はあ・・・あれ？もう一人の人がいなくなっちゃってますよ？」

「おわー。ほんとだー。デジャヴー」

意味不明な言葉を発してかなりんって人を追いかける。

何故消えたかは多分、自分のラフな格好が恥ずかしいからだと思われる。

「別に僕は気にしてないんですけどね・・・」

仕方ないと開き直ってるから。

そんなこんなで食堂に着いた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「ねぇ。聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、織斑君と桐谷君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子しか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。
実はね、今月の学年別トーナメントで――――――――――――」

いつも思うけどこの食堂は騒がしい。

まあ、無言よりはいいことだけど。

しかし目立つのは十数人がテーブルを囲むグループ。

「よっ、元気ないな」

「いつもの事じゃない？」

話しかけたのはランチを盛った一夏と鈴さん。

「あ、一夏に鈴さん。・・・・まあ、元気がないのは気にしないでおいて・・・」

「そうか」

そして隣に座る。

「ん？なんだあのテーブル。えらい人気だな」

「トランプとかしてんじゃないの？占いとか」

「にしては盛り上がってますけどね」

「そういうもんなんじゃない？」

そしてさらに火に油を注ぐが如し、大きい声が聞こえる。

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」

「マジで！」

「うそー！キャー、どうしよう！」

何をどうしたらあんなきゃあきゃあと黄色い声が出るのだろう。

しかしどうでもいいとばかりに鈴さんは話す。

「一夏」

「おう」

「なんか年寄り臭い事考えてんでしょ」

「失礼な」

「いや、絶対そうだって。なんか一夏ってそういうこと考えてるとき目細めてんじゃん。
なにあれ？思い馳せちゃってんの？」

「う、うるさいな・・・・」

なんか照れてる一夏。これが幼なじみの実力なんだろうか。僕にはそんな力ないけど。

「それはそうと鈴さん。箸で人を指しちゃダメですよ」

「そうそう。楓の言う通り。育ちが悪いって思われるぞ」

「まあ、実際大して良くないけどね」

「そういう問題じゃねぇって。おかしな癖は直しておかないとダメだ。大体お前それで千冬姉に怒られただろうが」

「う、うるさいわね・・・」

立場逆転。照れる鈴さん。

やっぱり幼なじみには、ある特定の人物だけ照れさせる特殊能力でも備わっているのだろうか。

「――――――――、一夏ってさあ」

「ん？」

「・・・。やっぱりなんでもない」

？何故か言葉を切った鈴さん。

そのあとガツガツとご飯を食う。

何かあったんだろうか・・・・・？

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

話すこともないので会話が途切れ、僕らは黙々と食事を続ける。

会話がないので、案外早く夕食は片付いてしまった。

「お茶取って来る。番茶でいいよね？」

「お、おう。サンキュ」

「あ～～、僕はまだ残ってるからいいよ」

些細な気遣いを断る僕はダメだな～と思う。

しかし鈴さんはすこし元気がない・・・・。

（ん～～。どうせ一夏絡みだと思うけど・・・・鈴さんが元気ないって何か違和感あるな～）

「あ――――――っ！織斑君だ！桐谷君も一緒！」

「えっ、うそ！？どこ！？」

「ねえねえ、あの噂ってほんと――――――――――もがっ！」

例の一団から僕達の存在を確認した女子が雪崩れ込んできた。

って噂って何だろう？

「い、いや、何でもないの。何でもないのよ。あははは・・・」

「――――――バカ！秘密って言ったでしょ！」

「いや、でも本人達だし・・・」

一人が大の字になって通せんぼ、その陰でなにやら二人がコソコソと喋っている。

「噂ってなんですか？」

「う、うん！？なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も三六五日って言うよね！」

いやそれは長すぎだと思うけど・・・。

「な、何言ってるのよヨミは！四十九日だってば！」

意味がわからない言葉を使うのは止めましょう。
じゃなくて・・・。
「何か隠してませんか？」
「そんなことっ」
「あるわけっ」
「ないよ！？」
連携技を決められて否定された。こうなったら何も喋ってはくれそうにない。
「なに？またなんかやらかしたの？」
お茶を両手に持った鈴さんが戻って来た。
「何で俺らが問題児扱いなんだよ」
「そうですよ。なぜそんな事を言われなければ――――――――」
「問題児じゃないつもりなの？」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
『ああ、お茶がうまい』
「逃げたわね」

「ノーコメントでお願いします」

僕が頭を下げてお願いした。まわりが変な目で見るけど知ったことではない。

「ふー・・・・やっぱ食後のお茶は落ち着く落ち着く」

一夏は完全に逃げてる。うわっ！僕もそっちのプランで行けばよかった！！

「・・・・・。ま、いいけどね」

そこから食後の余韻を楽しんだ後、僕は眠くなったから部屋に戻った。

明日も気を引き締めないと・・・・。

そうして僕は眠った。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「やっぱりハズキ社製のがいいなぁ」

「え？そう？ハズキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。物はいいけど高いじゃん」

月曜日の朝。

クラスの女子が思春期真っ盛りな会話・・・・とはいえない談笑で盛り上がってた。

「そういえば織斑君のＩＳスーツってドコのヤツなの？」

「あー。特注品だって。男のスーツがないからどッかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリット社のストレートアームモデルって聞いてる」

やっと覚えてくれたか・・・。

前に散々教えたからな～～。もうアレは勘弁して欲しい。

「桐谷君のは？」

「僕のも特注品ですよ。もとはアナハイナム社のムーバーフレームモデルです」

ＩＳスーツの説明は省きます。知らない人は2巻買ってください。

「あ、山ぴーだ」

「おはようございます。・・・・って、や、山ぴー？」

「おはよう、山ちゃん！」

「はい、おはようございます。・・・・って、や、山ちゃん？」

入学式から約２ヶ月。

なんだかんだで我がクラスの副担任である山田先生には、およそ八つほどの愛称がついていた。

慕われている証拠ですね。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと・・・・・」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなぁ」

「ま、まーやんって・・・・」

「あれ？マヤマヤのほうが良かった？マヤマヤ」

「そ、それもちょっと・・・」

「もー、それじゃあ前のマヤマに戻す？」

「あ、あれは止めてください！！」

珍しく語尾を強くして否定する山田先生。

・・・・・触れないで置いたほうがいいのかな？ヤマヤってあだ名。

「諸君おはよう」

「お、おはようございます！」

いきなりの来訪者・・・っていうか担任教師の登場に教室が静まり返り、ピシッと礼儀正しい空気になる。

織斑千冬先生。

元日本代表のＩＳ操縦者で、ＩＳ操縦で世界一に輝いた人でもある。

しかし今はここ、ＩＳ学園の教師をしている。

年齢は・・・・考えるのはよそう。出席名簿が頭に当たる。

「ふわぁ～～・・・・」

・・・・眠い・・・・。

昨日の理不尽な残業手伝いのおかげで、すっかり疲れがたまってしまった。

そして先ほどから織斑先生が何か喋っている。

内容は本格的な実践訓練をするらしい。

どうでもいいけど・・・・実践訓練なら『アッチ』でいやと言うほ

どしたし・・・・。

あ、ネタバレ・・・・・ま、いっか。

「それでは山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

いきなり呼ばれたかどうかは知らないけど、山田先生が驚きながらもホームルームを始める。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

『えええええええっ！』

へ～～ってなぜ二人？普通バラすんじゃあ・・・。

そんなことを考えてたら教室のドアが開いた。

「失礼します」

「・・・・・・・・・」

クラスに入ってきた二人を見てざわめきが止まる。

なぜならその二人のうち一人が・・・・・・・・。

男子だったから・・・・。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルル君はにこやかな笑顔で語る。

っていうか・・・・・。

「お、男・・・・？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の人達がいるときいて本国から転入を――――」

転入・・・・ね。

「きゃ・・・・」

「はい？」

「きゃああああ――――――――――っ！！」

すごい音量と共にクラスが騒がしくなる。

「男子！3人目の男子！」

「美形！守ってあげたくなる系の！！」

「地球に生まれてよかった～～～！」

大袈裟＋元気だよねこのクラスの女子は・・・。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

それをたった一声で鎮められるのが織斑先生なのだ。教師の鑑だね。

「皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんから～」

そう言われればそうだ。

しかし銀髪で眼帯が印象的な人は一言も喋らない。

「・・・挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

・・・・なるほど。

「ここではそう呼ぶな。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ピシッと素直に返事するラウラさん。軍人だね・・・間違いなく。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・・・・・」

あれ?それで終わり?・・・・ま、いいけど・・・。

「あ、あの、以上・・・・ですか?」

「以上だ」

あれは友達が少ないタイプだな~~。ま、関係ないけど・・・。

そしてラウラさんはなぜか一夏に近づいて。

バシッ!!

「・・・・貴様、何の真似だ・・・・」

「それはこっちの台詞だと思いますけどね」

一夏に平手打ちする前に僕が腕を掴んだ。

「!貴様は――――――!」

そして強引に僕の手を振り払った。

「そうか・・・赤と青のオッドアイに・・・銀と黒の髪・・・貴様が・・・」

「???」

何か独り言を呟くラウラさん。なぜかは知らないけど僕を知っているらしい。

そうンなことを考えていたら・・・・。

バシッ!!

「痛っ!!」

「あー・・・ゴホンゴホン、ではＨＲは終わる。各人すぐ着替えて第二グラウンドへ集合しろ。解散!!」

僕の頭を叩きながら指示を出す織斑先生・・・・。

その後僕にこういってきた。

「おい桐谷。お前がデュノアの面倒を見ろ」

「え!?何でですか!?」

「同じ男子だろう」

「それなら一夏が!!」

「アイツは人の面倒は見れん。どちらかと言うと見られるほうだ」

「あー・・・・」

不覚にも納得してしまった。一夏・・・・ゴメン。

仕方ない・・・引き受けるしかないか。

「君が桐谷君？初めまして、僕は――――――」

「ちょっとそれは後。先に着替えるほうを」

説明と同時に手を引っ張る。

ちなみに一夏は先に行ってしまった。

薄情者め・・・・・・。

「とりあえずは男子は開いてるアリーナで着替え。実習のたびにこれだから、早く慣れてください」

「う、うん・・・・・」

「ん？トイレですか？」

「トイ・・・っ違うよ！」

「あ、そうですか」

ちなみに今は全力疾走。

なぜなら・・・・・・。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも桐谷君と一緒！」

ＨＲが終わって早速各学年から情報先取のために尖兵が来ている。

追いつかれたら授業遅刻で鬼先生から出席簿アタックが来る。

僕はいいがシャルル君まで巻き込むわけにはいかない。

「いたっ！こっちよ！」

「者ども出会え出会え！」

ヤバイ。何時の間にかＩＳ学園は武家屋敷になっていたらしい。

「桐谷君の黒銀髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「オッドアイもいいけど、こっちもイケる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！今年は川原の花以外のものをあげるね！」

いやいや、今年以外にもちゃんとしたプレゼントをしようよ。

「な、なに？何で皆騒いでいるの？」

超高速で走っている僕に状況が読めないシャルル君が聞いてくる。

「多分、珍しいからじゃないですか？」

「何が？」

「いや、ここにいる男子が」

「・・・・・・・・・？」

そんな意味不明って感じの顔をされても・・・。

「いや普通に珍しくないですか？Ｉｓ学園に男子がいるのは」

「あっ！――――――ああ、うん。そうだね」

ようやく伝わった。人に意思を伝えるのがこんなに大変だとは・・・

・仕方ないけど。

そんなことよりこの包囲網だ。

一夏はすでに着いているらしく、そちらを諦めた女子もこちらへ来る。

こちらはシャルル君と一緒に走っている。これは大きなハンデだ。

「そうだ。改めて自己紹介。桐谷楓です。楓でいいですよ」

「うん。よろしく楓。僕の事もシャルルでいいよ」

「はい」

「・・・・・・・敬語もいらないよ？」

「はい・・・って、あれ？」

おかしいな・・・敬語は普通女子に使うんだけど・・・。

「どうしたの？」

「いや、僕は普通、敬語は女子にしか使わないんですけど・・・って、また使ってる！！」

「！！っ」

「あれれ？どうしてだろ・・」

「まっ！いいんじゃないかな！？それは！！」

な、なんか焦った表情でシャルルが僕に詰め寄る。

「そうですね。初対面ですし最初は仕方ありませんね。これから慣れていきますよ」

そしてどうにか包囲網を突破して校舎を出ることに成功した。

「よし！やっと到着！」

ドアがバシュっと開き、第二アリーナ更衣室に何とか到着。

「遅かったな」

「あっ、一夏！！よくも見捨てたな～～～！」

「急がないと叩かれるぞ」

そういって一夏はアリーナへ向った。

「くっ!!急がないと!!」

そう言って僕は制服のボタンを一気にはずしてTシャツと一緒に脱ぐ。

「わあっ!!」

「へ?」

な、なんなんだ・・・。

「何か忘れ物ですか?って何で着替えないんですか?早くしないと遅れますよ」

「う、うんっ。着替えるよ?でもあっち向いてて・・・・ね?」

「構いませんけど・・・着替えをジロジロ見る気はありませんし」

で、僕は着替えを再開する。・・・・しかし背後からスゴイ視線を感じる。

「あの・・・シャルルはなんでジロジロ見てるんですか?」

「み、見てない!別にみてないよ!?」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル。変わった人なのかな・・・。

「まあ、急いでください。うちの担任は遅刻者には容赦ないですから」

これホント、マジ。本気と書いてマジ。

「・・・・・・・・・・・」

しかしまた視線を感じる・・・・。

「シャルル？」

「な、何かな！？」

気になって視線を向けるとシャルルは、最初から”見てませんでしたよ”とばかりに顔を壁のほうへ向け、ＩＳスーツのジッパーを上げた。

「早いですね着替えるの・・・コツとかありません？」

「い、いや、別に・・・・って楓はまだ着てないの」

ちなみに僕の格好はスーツに腕を通し、後はジッパーを上げるだけだ。

「あ、ゴメン。今終わりますから」

そして僕は着替えが完了した。

「それじゃあ行きましょうか」

「う、うん」

更衣室を出てグラウンドに向う僕ら。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「遅い！！」

アリーナへ着いての開口一番がこれ。

人の皮を被った鬼神が仁王立ちしていた。

それが苦労して武家屋敷と化した学園から転校生を守った人への態度ですか？

っていうか、自分の仕事を生徒に押し付けたんですからこれぐらい見逃してくれても・・・。

バシーン！！

「目障りだ、さっさと並べ！！」

口で言う前に攻撃ですか。そうですか。

順序が逆な気がするのは僕だけですかね？

僕とシャルルは一組の列の一番端に並ぶ。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

なぜかは知らないけど隣の人はセシリアさんだった。

「ＩＳスーツを着るだけで、どうしてそんな時間がかかるのかしら」

「そちらと構造が違うんですよ」

そう、ＩＳスーツは基本女子しか着ないため見た目はワンピースや水着に近い。

しかし男子がそんなモン着ていたら変態以外の何者でもない。

だから僕や一夏やシャルルのＩＳスーツは首のところまでスッポリと入っている。

「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに」

な、なんかセシリアさんの言葉に棘がある。

キレイなバラには棘があるとはよく言うよね。

「ええ、ええ。楓さんはさぞかし女性との縁が多いようですから？そうでなければ、いきなり女性にはたかれそうになったりしませんわ」

「別に僕は・・・・」

あれは、一夏をはたこうとしたのを止めただけなんだけど・・・。

それよりあの反応・・・確かに初対面だと思ったんだけど・・・・
僕を知っているような口ぶりだった。

「なに?あんたまたなんかやったの?」

後から聞き覚えのある声。あえて無視。

「こっちみなさいよ、バカ!」

え〜〜っと言いながらも見る。

そういえば今日は二組との合同だったっけ。

だから鈴さんがここにいるのか。

「こちらの楓さんが転校生にはたかれそうになりましたの」

「はあ!?何でアンタってそんなバカなの!?」

しかし二人は気付いてなかった・・・・・忍び寄る影に・・・・・・・。

「安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

ギギギッ・・・・。

壊れた人形のような感じに首を動かすセシリアさんと鈴さん。

そこには言わずと知れた鬼が構えていた。

”さあ答えろ！！天国へ行きたいか、地獄へ行きたいか！！”

・・・・・幻聴が聞こえた・・・・・。

ご冥福を祈ります・・・・。

バシーン！！

今日も晴れ晴れとした空に聞きなれた音が響くのであった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組がいるので返事の声も倍近い。

初めての実践訓練となるので気合の入った返事が来る。

「くうっ・・・・。何かあるとすぐに人の頭をポンポンと・・・」

「・・・・・・楓のせい楓のせい楓のせい・・・」

ズキズキと叩かれた場所が痛むのか、涙目のセシリアさんと鈴さんは頭を抑えていた。

それはそうと、何故か鈴さんが僕に対し不当で歪んだ主張を繰り返す。

ヒドイです！！冤罪です！！それでも僕はやってない！！

ドカッ！

「なんとなく何考えてるのかわかるわよ・・・」

蹴られた・・・。何となくって理由で蹴られた。

そして何故か考えてる事がばれた。

さらに今、自分が考えていたことが蹴られる理由に値するのでイマイチ反論できない。

「今日は戦闘を実演して貰おう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。

――――――――――鳳！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！！」

完全にとばっちりであったセシリアさんでしたとさ。チャンチャン♪

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」

「だからといってどうしてわたくしが・・・」

「楓のせいなのになんでアタシが・・・」

セシリアさん諦めよう。われらが担任教師は理屈をねじ伏せる。

そして鈴さん、自業自得を人に押し付けることは良くないと思いま～～す。

「お前らすこしはやる気を出せ。――――――――――アイツらにいいところを見せれるぞ？」

ん？最後のほうはよく聞こえなかった。だか先生が二人になにやら吹き込んだらしい。

「ここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力差を見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

おおー、いきなり二人のやる気がＭＡＸ。なにかエサで釣られたと僕は見るね。

「それで相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は――――――」

キィィイン・・・・・。

あれ？変な音がした。そして何故か嫌な予感がする・・・・。

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

誰が？僕？僕がどけばいいの？

ドカーン！

などと無駄な思考をしていたために何かの体当たりが直撃した。

僕は数十メートル吹き飛ばされたが・・・。

「ふぅ～～。『エピオン』の起動のほうが早かったらしいね」

僕の機体『エピオン』の盾によって耐えれた。

「っていうか何が起こっ――――――――」

むにゅ。

はりゃ？変な感触。マシュマロ？地面にマシュマロ？地面に生えたマシュマロ？それともプリン？

「あ、あのう、桐谷君・・・・・・ひゃんっ！」

マシュマロ＋プリンが喋った！！――――――――――なわけな

い。

嫌な予感しかしないけど、おそるおそる目線を手にやると・・・・。

「そ、その、ですね。困ります・・・・こんな場所で・・・・。いえ！場所だけじゃなくてですね！私と桐谷君は仮にも教師と生徒でですね！」

山田先生だった。そして僕の手は山田先生の胸を鷲づかみにしていた。

山田先生はマシュマロだった。山田先生はプリンだった。特上のマシュマロまたはプリンだった。

・・・・・・・・はっ！！　ぼ、僕は一体・・・・・・・！！

それはそうと非常にまずい状況だ・・・・。

これは不純異性交遊と言われても反論できそうにない！！

どうしよッ――――――――――――殺気！！

そして僕がその場からすばやく離れると、すぐ横をビームが通り過ぎた。

「ホホホホホ・・・・・・。残念です。外してしまいましたわ・・・・」

怖っ！！声は笑ってるけど顔は全然笑ってない！！

そしてスゴイ殺気を放ち、僕に狙いを定めるセシリアさん。

「・・・・・・・・・・」

あれ?鈴さん?なぜ《双天牙月》を連結させたのでしょう?

しかも顔が無表情ですよ?人間、いかなる時もスマイルは大事ですよ・・・多分。

あれ?なぜ振りかぶって・・・・。

「えええええ!!」

普通に首を狙ってきた!!

何とかかわしたが、変な体勢からだったのでかわした後倒れてしまった。

あ、そういえば・・・《双天牙月》ってブーメランみたいに戻ってくるんだよね。

「あああああ!!」

よりにもよってちゃんと戻って来た!!これはかわせない!!

仕方ない。ここは僕が切り落とすしか・・・・!!

そして僕が《ビーム・ソード》で斬ろうとした瞬間、

「はっ!」

バンバン！っと発砲音。空薬莢が落ちる音もした。

打たれた二つの銃弾は正確に《双天牙月》の両端を叩いた。

それによってコースから外れたところに、僕の《ビーム・ソード》が当たる。

《双天牙月》は無残に落ちていった。

（でも・・・・あのままなら別に僕が斬らなくても外れてた）

そして驚いたのは何より山田先生の姿で、倒れたままの体勢から上体だけ僅かに起しての命中精度。

雰囲気もいつもとは違って落ち着いた雰囲気が漂う。

やっぱり山田先生もＩＳ学園の教師なんだなと再確認させられた。

「・・・あ、ありがとうございました・・・」

とりあえずお礼を言っておく。

しかし他の人達の驚いているので、みんな無言だった。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今の射撃は造作もない」

「む、昔の話ですよ。候補生止まりでしたし。それに桐谷君、お礼はいりませんよ？私が打たなくても大丈夫そうでしたから」

「ま、まあ、助けられたのならお礼は言っておかないといませんし」

そして銃をＩＳのコンテナに預ける山田先生。

ちなみに今、先生が使ってるＩＳは第二世代開発最後期の『ラファール・リヴァイブ』。

詳しい説明は面倒なので省略します。

「さて小娘どもいつまで惚けてるつもりだ。さっさとはじめるぞ」

「え？あの、二対一で・・・・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける」

負けると言う単語が気に障ったのか、二人の目にはやる気の炎が映っている。

そして何時の間にか三人の試合が始まっていた。

だけど織斑先生の言うことは事実。

戦闘経験の豊富な先生方に彼女達が挑むのは無謀に等しい。

それは専用機があっても変わらない。二対一もハンデにならない。

それほどまでに重要なんだよね・・・・戦闘経験って。

決してそれがすべてではないけど、それが大半を占めているといっても過言ではない。

いかなる戦局も最後は勘だ。そしてその勘は豊富な実戦経験で培われる・・・・大体の人は。

時々天才と呼ばれる人達は、そんな経験なくとも適切な行動が出来る。

でもそれは大体がその場しのぎ。そう何度も出来るわけじゃない。

だからこういった実戦経験はあればあるほど困りはしないと思う。

しかしこれは学生が気にしても仕方がない。

一朝一夕でそれらが身につけば誰も苦労はしない。

授業、遊び、それらの時間を削ってやっと身についたかどうかの瀬戸際。

学生生活はそれほど短いのだ。だから学生が自分達よりはるかに戦闘経験がある先生方に挑むのは無謀。

なんて無駄な思考をしていたら三人の決着がついたらしい。

結果は山田先生の圧勝。当然と言っちゃあ当然だけど。

二人はなんかいがみ合ってる。大方”アンタが足引っ張ったから負けたのよ！”と言い合っているに違いない。

チームワークが乱れる。それじゃあ勝てるものも勝てない。

確かに戦闘経験はあればあるほどいい。

しかし所詮は一人。多勢に無勢は無勢のほうが不利と言うのも事実。

さっき二対一でもハンデにならないと言ったのはただ単にチームの問題。

まとまっていれば、自分の足りない戦闘経験をもう一人が補い、そのもう一人の実戦経験を自分が補う。

そう言ったことができれば戦闘経験はいくらでも覆せる。

一と十では、十のほうが有利になるのは当たり前・・・・・基本的には。

そう行かないのが実戦。

いざと言う時に、お互いの長所を生かせないと一気にやられてしまう。

お互いの長所を潰してしまうなんてことも珍しくはない、むしろそっちのほうが多い。

今回の戦闘はいい例だと思う。

おおっと、また無駄な思考をしていたらしい。気をつけよう。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教師の実力は理解できただろう。以後は経緯を持って接するように」

織斑先生が手を叩いてみんなに言う。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、桐谷だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？それではわかれろ」

指示が出終わったと思ったら、ここにいるほとんどの女子が僕ら男子に詰め寄る。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「桐谷君、わかんないところおしえて～」

「デュノア君の操縦技術見てみたいな～」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

・・・入れてって言われても・・・・。

僕らは、予想の斜め上を行く反応についていけなかった。

この状況は、ＩＳの情報処理より難しいらしい。

そんな中、こんな時だけ頼りになる鬼教師が動いた。

「この馬鹿どもが・・・・。出席番号順に二人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。
次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

その鬼の大号令に女子達は移動してそれぞれの場所に移動した。

「最初からそうしろ。馬鹿どもが・・・・」

そんな教師にばれないように小声で話す女子達。描写はいらないと思うので省略。

まあ、ラウラさんの班はおしゃべりがないようだけど・・・。

訓練機も割り振られて本格的に始まったＩＳ訓練。

「それじゃあ最初は・・・出席番号でいいですね」

一応班長なのでまとめなきゃいけない。

「はいはーい！私が最初でーす！」

元気よく手を上げる二組の女子さん。ゴメン・・・名前は知らない。

「よろしくお願いします！！」

そういって右手を突き出し深くお辞儀をした。

？何この行動。ＩＳ訓練には必須なのだろうか。

「あ、ズルイ！！」

「私も！！」

「はじめて見たときから決めてました！！」

それに習うように他の女子も横に整列して同じ動作をした。

「え～っと。これは一体どういう状況――――――――――」

「「「「お願いします！！」」」」

・・・どうやら一夏やシャルルの班でも同じことがおきているらしい。

二人とも何がなんだか分からない様子。

よかった。僕がおかしいわけじゃなかった。

スパーン！

「「「「いったああ！！」」」」

ハモった悲鳴が聞こえた。シャルル班の一列に並んでた女子をもぐら叩きのように叩く。

頭をさすりながら顔を上げた、ところにいるのは出席名簿を持った修羅。

・・・・・うん、ミスマッチだよね。出席名簿を持ってる修羅って。

「やる気があって何よりだ。それならば私が直接見てやろう。最初は誰だ？」

「あ、いえ、その・・・・・・・」

「わ、私達はデュノア君でいいかな～・・・・なんて」

「せ、先生のお手を煩わせるわけには・・・・」

「なに、遠慮するな。将来有望なやつらには相応のレベルの訓練が必要だろう。・・・ああ、出席番号順ではじめるか」

旅立つ勇者達に敬礼！！生きてまた会おう！！

そんなシャルル班のやり取りをみた他の女子は、最初の反応がウソのように黙ってしまった。

さっきの二組の女子も訓練機のステータスを見ている。

ちなみに訓練機は『リヴァイブ』です。

「それじゃあ始めますか。え～～～っと・・・」

「あ、私は八木飛鳥。趣味は寝ることで～～す！」

「なぜ趣味まで・・・・それじゃあ八木さん、ＩＳの操縦は？」

「あ、うん。授業でなら」

「じゃあ大丈夫ですね。装着と起動をやりましょうか。遅れたら放課後居残りらしいですし」

「そ、それはマズイわね・・・。よし真面目にやろう！」

ちょっと問題発言だけど気にしたら負けと思おう。

そんなわけで特につまずくことなく起動、装着、解除まで来たんだけど・・・・。

二人目の装着で思わぬ事故が起きた。

「いや、その、コックピットに届かないんだけど・・・」

「え？、あ！ああ～～・・・」

これは完全に僕のミスだ。自分がそんな事しないからすっかり忘れてた。

訓練機の装着解除時には絶対しゃがまなければいけなかった。

そうしないとＩＳが立ったまま解除されてしまう。

「これは・・・よし、柳さん。運びますからこっちに来て下さい」

「え！？」

「きゃあああ！！」

「羨ましい！！」

一番目柳さん。二番目三番目はこの班のほかの女子。

「そのほうが早いですし遅れるわけには行きませんから」

そういって『エピオン』を装着する僕。ちなみに『全身装甲』じゃなくて手足と背中だけ。

「それじゃあ行きますよ」

「ひゃあ！？」

こちらに来た柳さんをお姫様抱っこしたら変な声を出された。

変なところを触ってしまったなら急いで弁明しないと。

「あ、すいません。変なところを触ってしまいましたか？」

「え！？いや別に・・・・桐谷君って大胆ね・・・」

ん？最後のほうは聞こえなかったけど、どうやら大丈夫らしい。

「ちゃんと捕まっててくださいね」

「う、うん・・・・」

遠慮がちに僕に捕まる柳さん。そりゃあ好きでもない男に捕まると

言うのは抵抗があるかな。

そんな事を思いながらゆっくりと上昇する。

高さは一メートルちょっとなのでたいしたことはない。

でも、ＩＳと言うのはすでに展開状態のものを装着するときには、背中から乗るようにしなければならいから、やっぱりこの高さでは危ない。

できるだけ落ちないように気遣いながら、抱きかかえたままＩＳのコックピットへ柳さんを運ぶ。

「それじゃあ、背中からゆっくり入って。焦らなくていいから」

「う、うん。ありがと・・・・」

まだお姫様抱っこ中の酷く密着した状態の会話なので、柳さんの言葉には落ち着かないって感じがする。

「じゃあ、離すけどいい？」

「え！？え、ええと・・・」

「？　あれ？何かまずいことが？」

「マズイっていうか・・・・これは、おいしいっていうか・・・・」

「？？？」

イマイチ言葉の意味が分からない。

そんなやり取りをしていたら、他の班から声が聞こえた

「あああっ！な、何してるのよ！」

「ズルイ！私もされたい！」

「織斑君の班もやってる！ズルイ！」

「どうして！？何で私の出席番号は十二番なの！？私、この苗字にしたご先祖様を末代まで恨むわ！！」

『そうだ！そうだ！』

ご先祖様は敬おう。そしてそれに周りは賛同しちゃだめでしょ。

「と、取りあえずは平気だから桐谷君は戻って。このままだと私、何されるかわからないから・・・」

「は、はあ。わかりました」

イマイチよく分からないけど、何かされるらしい。

「それじゃあ、起動してください」

そしたら問題なく起動した。背中の開いたままの装甲も閉じられて起動音を響かせる。

「それじゃあ、次は――――――」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！！」

起動訓練は、時間に余裕を持って終われたので普通に整備したあとグラウンドへこれた。

一夏は全力疾走していた。僕を見捨てた罰だね。

連絡事項を伝えた織斑先生は山田先生とさっさと何処かへ行ってしまった。

「それじゃあシャルル。さっさと着替えましょう。僕たちはアリーナの更衣室に行かなければならないし」

「え、ええと・・・僕はちょっと機体の微調整をしていくから、先に行って着替えててよ。時間かかるかもしれないから待ってなくていいからね」

「え？別に大丈夫ですよ。僕は気が長いタイプ――――――――」

「い、いいからいいから！僕が平気じゃないから！ね？先に戻っててね？」

「は、はい。分かりました」

何か鬼気迫る感じに言われてしまったので、僕は一夏と一緒にアリーナの更衣室へ向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・どういうことだ」

「ん？」

昼休み、僕らは屋上にいた。ＩＳ学園の屋上は季節ごとのきれいな花が咲き乱れる美しい場所なのだ。

テーブルや椅子の数も充実していて擬似的なヘブンになってる。

ほんとは女子でいつも賑わうのだけれど、シャルル目当てで学食に行ったらしくまったく人がいない。

たまには静かな昼食もいいと思う。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな・・・！」

鈍感な一夏と箒さんが話している。どうやら箒さんは二人きりが良かったと思う。

だけど事情を知らなかった僕は一夏に誘われて来てしまった。ゴメ

ン。

さらに僕のほかにセシリアさん、鈴さん、シャルルもいる。

この状況はあまり好ましくないらしい。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばっかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが・・・・・・」

さすが唐変木。

理屈のある説明で自分への好意をねじ込んだ。なにか箒さんに恨みでもあるのだろうか。

その箒さんの手には手作り弁当が握られていた。一夏の分の。

実は前に箒さんに”料理を教えてくれ！”と言われてしまったのでいろんな料理を教えた。

ちなみに僕は基本的に一人暮らしが多かったので家事全般はマスターしてる。

でもまさか今日のためだったとは・・・。この桐谷楓一生の不覚！！

さらに！！

「はい、一夏。アンタの分」

鈴さんまでもが一夏のために手作り弁当もとい、酢豚オンリーの弁当を持ってきていた。

さらにさらに！！

「楓さん。私も弁当を作って来たのですわ」

セシリアさんが僕に対して弁当を作ってきてくれた。中身はサンドイッチ。

その心意気はありがたいんだけど・・・。

「あ、うん。後でもらうよ」

・・・はっきり言っておくと、セシリアさんの料理は見た目はキレイなんだけど中身がスゴイ。悪い意味で。

やっぱりお嬢様は、こういうことはメイドと呼ばれる人達がやるからなのか料理経験は全くないのらしい。

「はっきり言わないから引きずるのよ、バーカ」

そうはいわれても・・・せっかく作ってくれた人に”マズイ”なんて言えないですよ。

「ええと、僕が同席しても良かったのかな？」

転校生であるシャルルは物凄く遠慮深く逆にこちらが困るぐらいのレベルに達している。

「いいですよ。同じ男子同士仲良くしましょう」

「そうだぜ。困ったことがあったら相談に乗るぜ――――――――――ＩＳ以外で」

「一夏。僕の教え方は間違ってる？全く覚える気配はないから」

「なっ！？し、失礼だな！！前もって勉強したお前らと違って俺はそんな時間なかったんだよ！！」

関係ないけど今のところのＩＳの模擬戦勝率は、一位が鈴さん、二位がセシリアさん、三位が箒さん、四位が一夏。

ちなみに僕は模擬戦を理由をつけて断ってる。だって『エピオン』はそんなに見せたくないし。

「ありがとう。二人とも優しいね」

・・・・はっ！！つい見惚れてしまった。男だと分かっているんだけどシャルルの笑みは同姓をも魅了する。

「い、いや、まあルームメイトになるし・・・ついでだよ」

そうそう・・・・・・あれ？ちょっと待って。

「一夏？なんでシャルルのルームメイトは自分、みたいなことを言っているのかな？」

「なんでって・・・・普通は俺だろ」

「ちょっと待った!!それじゃあ不公平だ!!それじゃあ僕が一人女子の部屋へ行かなければならない!」

そう!僕らの部屋は基本二人部屋。そこにシャルルが入るとどちらかが別の部屋に行かなければならない。

そう、女子のいる部屋に・・・・。

「逆におまえが残ると、俺が女子の部屋に行かなきゃならないだろうが!」

「よし!それじゃあ古来より伝わる伝統的かつ、手っ取り早いあの方法で決着をつけよう!」

「おう、いいぜ!アレだな!」

そして僕らは立ち上がり向き合う。そして周りが無言になる。

『・・・・・・・・・・・・』

互いに無言。周りの人が息を呑むのが分かる。

「いざっ!!」

「勝負!!」

「「さいしょはグー!!　じゃんけんポン!!」」

ガクッ!と周りの人がずっこけたが、そんな事は気にしてられない。

結果はあいこ。

「「あいこでしょ！！」」

もう一度やったらここで決着がついた。果たして勝者は！！

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「じゃあ改めてよろしく」

「うん。よろしく、楓」

僕の勝ちだった！！イェ━━━━、(＊ﾟДﾟ)人(ﾟДﾟ＊)ノ━━━━ィ！！

一夏は絶望的な表情をしていた。

ハッハッハッハッ！！運命は我に味方した！！

さて、と。ふざけるのはここまでにしといて、なんとか女子の部屋に行かなくてすんだ。

「さて、シャワーとかの順番はどうします？僕はどちらでも構いま

せんが」

「えっと・・・じゃあ楓が先に使って。僕あとでいいよ」

「わかりました。でも遠慮はしなくていいですからね。相談などがあったらいつでも乗りますよ」

「うん。ありがとう」

やっぱり男と分かっていてもあの笑顔には見惚れる。

「あ、それとシャルルも放課後の一夏特訓に参加しません？」

「え？いいの？じゃあお言葉に甘えようかな」

「わかりました。一夏は意外と素人なので苦労してるんです。心強いですよ」

「うん。ありがと。任せておいて」

こうして心強い男子が来てくれたので心身ともにゆっくりと眠ることが出来た。

11話　またまた転校生（後書き）

長いけど読んでくれた人に感謝です。

感想待ってます。

12話　僕は・・・・（前書き）

生徒会長のキャラが崩壊してしまいました。

すいません。それとちょっとシリアス気味です。

12話　僕は・・・・

ここは職員室の奥の奥、一般生徒は入れない秘密の部屋。

とかではなくちょっとぼろい感じがするが普通の仕事部屋。

「面倒くさいです」

「知らん。お前の意見など聞いていない。やれと言ったらやれ」

「理不尽です。生徒に言う言葉じゃないです」

「それこそ知ったことではない。とにかくやれ」

「この後予定が入ってます」

「ほう。どんな予定だ？」

「アナタの弟さんの特訓です」

「それなら他の専用機持ちがなんとかするだろう。さっさとやれ」

「いやです」

「ならば、お前の成績はどうなっても――――――――」

「是非やらせてください」

「分かればよし。ではな」

そして出て行く担任教師。

取り残された僕は一人ため息をついた。

「はぁ～。この頃の学園は、生徒に脅迫して仕事させるのが流行りつつあるのか？」

これが権力の差か！！理不尽だ！！何で僕が！！

いずれ生徒をパシリに使う光景が当たり前のようになるのか？

そんな国絶対すみたくない。現状でパシられてる僕だけど・・・・・。

「じゃ～～あ。私が手伝ってあげましょうか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「さてと。チャチャっと終わらせますか」

「ひど～～い。無視するなんて～～」

「・・・・・・・何のようですか？生徒会長」

「名前で呼んで～～」

「・・・・楯無先輩」

「ん～～。ま、いっか」

「それで本当に何のようですか？」

「だから♪仕事を手伝いに来たのよ？」

「ありがとうございます。じゃあそっちの書類の山から片付けてください」

「ちょっと～～。すこしは喜んでくれてもいいじゃない～～」

「だからありがとうございますって言ったじゃないですか」

「そうじゃなくて、もっとこう感激してくれてもいいと思うんだけどな～～」

「してますよ」

「真顔で言われても説得力ないわよ？」

「僕が感情の変化に昔から乏しいことは知ってるじゃないですか」

「それでも織斑君たちといる時は笑ってたりしていたわよ？」

「そうでしたか？」

「そうでした♪」

「・・・・・自覚なかったですね」

「ポーカフェイスはかえちゃんの長所でも有るけど、短所でもあるのよ？」

「昔のあだ名で呼ばないで下さい」

「もうっ♪照・れ・屋・さん♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

もう無視して黙々と仕事をこなす僕。しかし・・・・。

「ああ～～！私が悪かったから無視しないで～～！」

「・・・・・・相変わらず無視されるのには弱いですね」

「・・・・・・イジワル」

「貴方に言われたくはないですよ」

間髪いれずに返事を返す僕。

そうすると生徒会長は顔を赤くして頬を膨らませた。

「イジワル！イジワル！イジワル～～～！」

ポコポコと僕を殴る生徒会長。

完全に駄々っ子に退化してしまった。

にしては威力は半端ないけど。

こうなると僕が慰めなければ止まってくれない。

「はいはい。僕が悪かったですから元気出してください」

そういって頭を撫でる。そういえば僕ってこの人より一つ年下だっけ。時々信じられなくなる。

それはそうと頭を撫でてくうちに生徒会長は大人しくなった。

「気は済みましたか？」

「・・・・・もう少し・・・・・」

「あの～～片手で書類整理はつらいのでそろそろ気が済んで貰わないと・・・」

「・・・・・わかったわ・・・・・」

何とか離れてくれた。

「それでは最初の質問に戻ります」

「？」

え？何ですかその”何の話？”みたいな顔は。

「いやだから、僕に会いに来た理由ですよ」

「え？好きだから♪」

笑顔でいってくる生徒会長。頭が痛くなりそうだ・・・・。

「そうじゃなくてですね。大事な用があるんじゃないんですか？」

「？ないわよ」

え？なんで当然のようにいってくるんですか？

「アハハ♪冗談冗談♪」

「はぁ～～～」

全くこの人は・・・・生徒会長としてもう少し模範的な行動をしたほうがいいんじゃないかと思う。

「それで用って言うのは『仮面の騎士』さんからの伝言」

「またですか・・・。直接僕に連絡してくれればいいのに・・・」

「クレームは本人に言って。で、伝言は『お前の騎士は完成したが、ＩＳは政府に回収された。私と『自由の騎士』と『月光の騎士』が調査に当たっている。分かり次第連絡する』だそうよ」

そうか・・・・アレは完成したんだ・・・・・。それなら戦力は問題ないかな。

「じゃあ、また伝言頼んでいいですか？」

「ええ、もちろん♪かえちゃんの頼みなら何でも聞いちゃう♪」

「・・・もう触れませんよ。で、伝言は『『運命の騎士』と『始まりの騎士』も使って構わない。だけど『怒りの騎士』と『友情の騎士』は『革命の騎士』の完成を急いでくれ』と」

「わかったわ。伝えておくわよ♪」

「ありがとうございます。それじゃあ仕事も終わったので失礼します」

「え!?ちょ、ちょっと!!この後のお楽しみイベントは!?」

「知りませんよ。失礼しました」

ガラッっと音を立てて扉を閉める。中で生徒会長が駄々をこねる。

あの人昔からああだよね。

僕に好意もないのにあんなことしちゃいけないと思う。

どうでもいいけど、何でこの部屋、扉が自動じゃないんだろう。

ホントどうでもいいけど。

xxxxxxxxxxxxxxxxxx

僕は遅れた分を取り戻さなければならないので急いでアリーナへ向ってる。

「ハアハアハア・・・・・」

やっと着いた。いそいで僕は一夏たちのほうへ向った。

向ったんだけどそこには険しい顔をした一夏とラウラさんがいた。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねぇよ」

「貴様にはなくても私にはある」

なにあれ？なんかすぐ喧嘩しちゃいそうな雰囲気なのだけれど・・・。

「私はお前の存在を認めない」

え～～っと、ここは・・・・。

「いや～～。遅れてごめんね一夏。さっき織斑先生から仕事をやらされてて」

軽いノリでに話しに加わる。こうすれば大体の険悪な雰囲気はブレイクされる。

「お、おう。楓。たいへんだったな」

案の定一夏は返事をくれた。これですこしは空気が緩和されたと思う・・・けど。

「そうだ。貴様も専用機持ちだな」

「そうですけど・・・それがなにか？」

「私と戦え」

「なぜですか？」

「なに。訓練さ」

「・・・・・・・・わかりました」

「え！？お、おい！！いいのかよ！！」

一夏が僕になんか怒鳴ってくる。

「いいと思うよ？・・・模擬戦だろうし」

「では、行くぞ！！」

「じゃ、僕も『エピオン』起動」

突如ラウラさんのＩＳの右肩のカノン砲が火を噴いた。

「当たらないですよ」

上に跳ぶが、いきなり体が止まる。

「これは・・・ＡＩＣ・・・厄介な能力ですね」

「ふっ、終わりだ」

もう一度カノン砲を打ってくる。しかし・・・。

「舐めて貰っては困ります」

ＡＩＣを無効化してまたかわす。

「なっ！！」

「・・・・やっぱり今度にしましょう。ここでは周りに人にも迷惑がかかる」

僕はラウラさんの正面に立ち、両手を挙げる。

「チッ。今日は引こう」

僕に戦闘継続の意思がないことを感じ取ったラウラさんは、アリーナゲートへ去っていった。

「ふぅ。ＡＩＣはビックリした」

「ぜ、全然そうは見えなかったけど・・・」

「気にしてはいけませんよ、シャルル。これでもさっきの変なムードを壊そうと考えた結果なのですから」

「まあ、確かにな。楓サンキュ」

「ハハハ。貸しニ～～」

「はぁ!?マジかよ!!」

「マジだよ」

「お前～～!!」

「まあ、いいじゃん。一夏は箒さんと一緒の部屋で喜んでるんだから」

「おまっ!!そういう事言うなよ!!」

そういってアリーナの更衣室に向う一夏。

一夏の新しい部屋は箒さんと一緒だった。運命を感じるね。ちなみに僕らの部屋の隣。

「それでは僕らも着替えますか」

「え!?えっと・・・・じゃあ、先に着替えて戻ってて」

それはそうとシャルルはなんかまだ遠慮している感じがする。

まあ、着替えをジロジロ見る変態ではないので、言われた通り先に着替えてるけど。

そして更衣室。一夏は先に出てしまっているので僕一人だ。

「あ～～あ。近頃風呂に入ってないな～～」

そう、僕ら男子は自室のシャワーしか使ってないので風呂が恋しくなる。

一夏も風呂に入りたいとこの頃愚痴ってる。気持ちは痛いほど分かる。

日本人の宝だよ、お風呂は。

などの考え事をしていたら着替えは終わってた。無意識ってスゴイ。

「あの～～織斑君か桐谷君かデュノア君はいますか～～？」

「はい？え～～っと桐谷だけいます」

「入っても大丈夫ですか～～？まだ着替え中ですか～～？」

「いえ、大丈夫です」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

入ってきたのは言わずと知れた山田先生でした。

「他の人はいないんですか？今日はここにいると聞いたんですが・・・」

「シャルルはアリーナに残ってます。一夏は先に着替えて行きまし

た」

「そうですか。じゃあ桐谷君から二人に伝えておいて下さい。今月下旬から大浴場が使えるようになります。男子は週二回、使用日を設けることになりました」

「本当ですか!!」

な・・・なんてことだ・・・・。これでやっとお風呂には入れるじゃないか!!

無意識のうちに山田先生の手を握ってしまうが、そんな事は気にも留めない僕。

「実はドッキリ・・・じゃないですよね!?　感激です!!、ありがとうございます!!」

「い、いえ・・・仕事ですから・・・」

「いえいえ!感謝の気持ちで一杯です!!」

「そ、そういわれるとなんだか照れちゃいますね。ハハハ・・・」

あれ?よく考えると僕二人きりの更衣室で何やってるんだ?しかも女教師の手を握って熱くなって・・・。

「・・・・・・楓?何してるの?」

・・・・あれ?ここの気温が2℃ほど下がった気がする・・・・。

と、思ったが・・・。

「しゃ、シャルル」

「まだ着替えてなかったんだ。それより先生の手を握って何してるの？」

「な、何でもないですよ。何でも」

瞬間的に手をはなす。じゃないと色々とマズイ気がするから。

「楓。先に戻ってって言ったよね？」

「は、はい。た、た、確かに言いました」

なんだか怖い・・・。有無を言わさぬ気迫がシャルルから発せられる。

これは織斑先生に命令されるときの気迫と同じだ。

反論させることを許さない。

「そ、それよりもシャルル。今月から大浴場が使えるようになったんですよ！」

「あっそ」

・・・・・・・・。

な、なんなんだ・・・。何でご機嫌が悪いのかな？僕何かしたのかな？

それともただ単に僕のテンションが高いだけなのか？

「それと桐谷君。織斑先生が呼んでましたよ」

「え！？ま、また・・・・・・」

先ほどと打って変わって地獄へ落とされたような気分。

いや味わったことないけどね？地獄へ落ちた気分。

けど多分こんな感じだと思う。

「そ、そういう訳で、シャルル。先に部屋に戻っててください。シャワーも使っていいですよ。あ、それと一夏に会ったら大浴場の件、伝えておいて下さい」

「うん。わかった」

「それじゃあ」

そうして僕はあの仕事部屋に行った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・・・・・・・・・・・はぁっ・・・・・・・・・」

自室に戻るなりため息をつくシャルル。

しかし出たため息は深いもので出したシャルル自身が驚いた。

(何イライラしてるんだろう・・・)

ちゃんとお風呂の件は一夏に伝えた。

テンションが高くて若干引いたけど。

それよりもあの更衣室での態度に、今更だけど何してるんだろうという疑問が出てきた。

あのときの態度がなんだか恥ずかしくなってくる。

楓も驚いた様子でシャルルを見ていた。

なんか喧嘩っぽくなってしまったことにシャルルはすごい落ち込んだ。

(・・・・。シャワーを浴びた後考えよう)

そして着替えを持ち、シャワールームへ向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「はぁ～～～～～～～」

呼ばれた内容はあのクラス対抗戦のときの件についてだった。

（何を今更・・・・）

わざわざ呼ぶ事じゃない・・・・。『アレ』のことはあちらのほうが詳しいと言うのに・・・。

一応、何も知らないと言うことで話はつけた。

そう思っていたら自分の部屋についた。やっぱり無意識ってスゴイ。

「ただいま。ってあれ？シャルルがいない・・・」

と思ったらシャワールームから音が聞こえた。

どうやらシャワーを浴びているらしい。

そして僕はベットに横になろうとしたら、

コンッ・・・・。

「あれ？これって・・・・」

ベットのすぐそばにボディーソープの容器があった。

が、中身はからだった。

（あ、そういえば昨日切れたって事シャルルに言ってないし、シャルルは予備の置き場所を知らないっけ）

それならシャルルは困ってるはず。

と思い、予備のボディーソープを取り出してシャワールームへ向った。

脱衣所に行ってから声を掛ければいいだろうと思ったので、普通に入っていた。

ガチャ――――。ガチャ――――。

あれ?扉の開く音が同時に2回聞こえた。

ああ、シャルルがボディーソープを探しに脱衣所まで来たのだろう。

「ゴメン、シャルル。昨日言い忘れたけどボディーソープは切れてるから――――」

「かっか、かえ・・・・・・で・・・?」

「はい?・・・・・・」

そこには見慣れない『女子』がいた。

何故女子かって?それは胸があったから・・・。あ、聞いてないですか。

それよりここはシャルルと僕の部屋のはず。女子がいるのはおかしい。

・・・・まあ、スゴイ美少女だけど・・・・。

「あれ?あの、その、えっと・・・・」

なにかいい言い訳を考えているのだが、僕が変態になるか、無残な死体になるかのビジョンしか見えない。

っていうかこの人どっかで・・・・・。

「きゃあ!!」

我に返ったらしい女子が慌てて大事なところを隠す。

こちらも正気を取り戻したので慌てて脱衣所から出た。

「・・・・・・・・。な、何もみてませんから・・・・」

「・・・・・・・」

超苦し紛れの言い訳。説得力皆無。

それよりも疑問に思った事があった。

「ま、まさかとは思いますが・・・・・シャルル・・・ですか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

返事はなし。

よかった違うらしい。

しかし・・・それは余計にマズイ。知らない女子がこの部屋にいるなんて。

「い、一応、ボディーソープは置いておきますから・・・」

「・・・・・・う、うん・・・」

これの返事はあった。

そして僕はすばやく扉にボディーソープをおき、ベットのほうへ逃げ込んだ。

（これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・）

「これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・」

考えてることと、口に出していることが同じと言う意味のないことをした。

どんなシチュエーションだ!!突然部屋に美少女がいたら平常心を保てるか!

もう心ここにあらずで同じことを繰り返していた。

ガチャっと扉が開く音にも気付かずに・・・。

「あ、上がったよ・・・」

「これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・・・・」

「え！？ちょっと楓！？ど、どうしたの！？」

「これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・これは夢だ・・・・・・」

「し、しっかりして！！」

それから目の前の女子は三十分ほど僕を揺らし続けたと言う。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

再起動した僕は目の前の女子・・・・シャルルらしい女子と向き合っていた。

・・・・三十分くらい気まずい空気が流れたところで、僕は空気を一変しようと席を立った。

「あー、えっと。飲み物いります？」

「う、うん・・・もらおうかな・・・・」

取りあえずシャルルはフランスから来たらしいので紅茶を入れた。

「ど、どうぞ」

「あ、ありがとう・・・」

そしてまた無言・・・埒が明かない。

「よし！！もう寝ましょう！！それがいい！！そうしよう！！」

「ええ！？ちょ、まだ夕飯食べてないよ！？」

「知りません！！おやすみ！！」

そして僕は布団を被りすやすやと眠ろうとしたら起された。これは一応親切だったんですけど・・・。

「・・・なにか訳があるんでしょう？」

「えっと・・・・・・・・」

「僕は別に無理に聞いたりはしませんよ？喋りたくないなら喋らなくていい」

「で！でも！！」

「喋りたいのなら聞きますよ？」

「・・・・・・・・・・・・・」

黙ってしまいました・・・・。ちょっと冷たかったでしょうか・・・・？

「こっちもある程度は分かってますので」

「え！？」

実はシャルルが女子と分かったところで僕はある一つの可能性、それも充分説得力のある仮説が浮かんだ。

シャルルの事は前からすこし気になってた。まあ女子と言うのは分からなかったけど・・・。

いつ考えたかは最初の無言のとき。

「シャルルはデュノア社・・・つまり自分のお父さんの会社から何か言われているんですね」

「！！ッ」

これはあたりですね・・・。

「これは最近知ったのですが・・・デュノア社は量産ＩＳシェア世界第三位・・・でもそのほとんどが第二世代型。新しい第三世代型が作られ始めているので経営危機に陥った・・・とね」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「そして今はほとんどの国の支援のおかげで何とか成り立っている状況・・・。それにフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・ドライブ』から除名されていた。
だから第三世代型の開発は急がなきゃいけない。
資本力で負けている国は最初のアドバンテージが取れないと悲惨なことになる。
ラウラさんの転入もその辺りが絡んでいると思いますけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でもデュノア社は遅れているから第二世代型最後発。第三世代型開発にはデータも時間も圧倒的に少ない。それで国営であるデュノア社は政府からの資金提供も大幅に削られた。
これは予想ですけど、次のトライアルに選ばれなければ資金提供を全面的にカットするっていわれているんじゃなんですか？そしてＩＳ開発許可とかも剥奪するって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そんな状態の中あなたがここＩＳ学園、しかも僕や一夏のクラスに転入してきた」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「実は前から気になっていたんですよ。転入と言うことは間違いなく国際関係、しかも相当の力がなければ出来ない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ましてやデュノア社関係・・・これは僕や一夏を狙って転入して来たんじゃないか・・・とね」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「大方、僕や一夏のＩＳの情報を盗んで来いとでも言われているんでしょう。だから接触しやすいように男子の格好をした。まあこれはさっき分かったことですけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「友達を疑うのは性に合わないですけど・・・。しかし分からない点も幾つかある」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「まず一つ目は・・・・言いたくないんですが・・・・シャルルは正式な子供じゃありませんね？」

「！！ッ」

「やっぱりそうですか・・・。おかしいと思ったんですよ。普通後取りとなる子供をＩＳには乗せない。けれどあなたは乗っている。つまり後取りではない・・・」

「・・・・・・・・・そう、だよ・・・・僕は愛人との間に生まれた子供なんだ」

「！！ッ・・・それは予想外でした・・・つまり血はつながってい

ると・・・」

「うん。大体は楓の言った通り・・・僕は君達のＩＳのデータを盗んで来いってあの人に言われてる」

笑顔で僕に言ってくるシャルル。けどどうしてもそれは作り笑顔にしか見えなかった。

悲しみを見せないための・・・。

「・・・・・二つ目の質問です。シャルルは僕らの情報を渡したんですか？」

「ううん。そんな隙なかったし、経営が回復しようが破綻しようが僕にはどうでもいいからね」

アハハと笑うシャルル。その笑顔をみると・・・なんか無性に苛立ってきた。

「これが最後の質問で一番重要なんですが・・・シャルルはこれからどうするんですか？」

「どうって・・・ばれちゃったし、多分本国から呼び戻されるだろうね。
まあ牢屋に入れられるんじゃない？」

「・・・・・・・・・・・」

「ああ喋ったらなんか気が楽になったよ。今までウソついててゴメン」

頭を下げて謝るシャルルに僕は非常に納得がいかなかった。

「質問の答えになってませんよ」

「え？」

「僕はシャルルがどうしたいのか聞いたんです。そんな自分の意思じゃない答えは求めてません」

「そ、それは・・・・・・・・」

「シャルルはそれでいいんですか？」

「か、楓・・・・・？」

「いいんですか？ただ親にこき使われて用済みになったら捨てられる。それでいいんですか？
抗おうとは思わないんですか？」

「で、でも・・・・」

「親とか世界とかは関係ない。僕は今シャルルに聞いているんです。親が絶対的な決定権を持っているわけじゃない。世界が人の運命を決めてはいいわけがない。最後は自分で決めるんです。
決めなきゃいけないんです！！」

なんか怒鳴っていた僕にシャルルは戸惑いの表情を見せた。

「ど、どうしたの？楓、変だよ？」

「そ、そうですね・・・すみません」

「いいけど・・・・本当にどうしたの？」

「僕は・・・・天涯孤独なんです。ある事故で全員死んだんです」

「あ・・・・・」

資料で『両親不在』のことの知っていたらしいシャルルは、意味を理解して顔を伏せた。

「ご、ごめん・・・・」

「いいですよ。僕もあなたの家庭について好き勝手なことをいってしまいましたし。
それで僕は元は中国にいたんですけど日本に帰って来てから、母さんと父さんの関係者と名乗る人に、ある施設に連れていかれました」

「それ・・・って？」

僕は話すかどうか迷ったけど・・・・話そうと思った。

「・・・これから言う事は他言無用でお願いします」

「う、うん・・・・」

「ＩＳ起動実験場。なぜ女性にしか反応しないのか、その謎を解明しようとしている人達の・・・
モルモットにされたんです」

「！！ッ」

「そこには僕より歳の低い子供・・・男の子女の子構わず百人ちかくいました。その子達は皆、僕と同じように天涯孤独の身でした。多分いくらでもごまかせるからだと思いますけどね」

「・・・・・・・・・・・・」

「それからは今思い出しても地獄ですよ。ＩＳの訓練といって人の殺す技術を身につけられたり、生態カプセルに入れられていろんな実験をされたり・・・そのほかにも色々・・・」

「ヒ、ヒドイ・・・・・・・・・・」

「死ぬ子供なんて一日に5人なんてざらでしたよ。けど一人また一人とどんどん増やしていました」

「・・・・・・・・・・・・」

「ＩＳ同調率の高い女の子は解剖されて、その体の一部を男の子に埋め込んだりしました。僕の目が左右違ったり、髪の色が違ったり、女の子のような容姿をしているのはそのためです」

「・・・・・・・・・・・・」

「僕の身体の殆どは人間の手が加えられています。脳も内蔵も・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

「そしてそんな研究に子供の数がついていけなくて、僕を含めて十人程度まで減ってしまったときに・・・僕らはそれぞれあるものを渡されました」

「・・・・・・・・・・・・・」

「まあそれはシャルルさんの今後の立場のために秘密として、それを使って僕らは殺しあった」

「！！ッ・・・・う、うそ・・・」

「ホントです。僕はすでに何人も殺しています。僕が一番強かったらしく僕は全員殺しました。
どうやら一番出来のいいモルモットに全研究を注ぎ込みたかったらしいです」

「そ、そんな・・・・」

「その研究所では僕はひとつの事しか考えていませんでした」

「え・・・・？」

「どうやってここの人を全員殺して自分も死ぬか・・・。そればかり考えてました」

「！！ッ」

「そして実験が最終段階へ向ったとき、僕はその研究所を暴走させ

て僕と研究員全員を道ずれに爆破しようとしました」

「で、でも・・・・・・・・・」

「そこで運良く生き残ってしまったんです。そこからある人に会って保護されました。それで今に至ります」

「・・・・・・・・・・・・」

ちょっとシャルルが泣きそうなんだけど・・・ヘビーな話だったかな?けど・・・・・。

「と、まあこんなバカな道を歩んだ僕が言ってるんです。自分の道は自分で決めて貰いたい・・・とね」

「そうだけど・・・・」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されない」

「あっ!・・・・・・」

「これがあれば三年はとりあえず大丈夫ですよ。そこからまた考えればいい。意外と時間はあると思いますよ?ここはアナタの居場所ですから、好きなだけ悩めばいいと思います」

「・・・・・楓」

「はい?どうかしました?」

「・・・・ありがとう」

「お礼を言われる事はありませんよ。単純な事しか言ってませんから」

「そうだね。ふふっ」

・・・やっと純粋な笑顔を見せてくれた。親なんて関係ない。シャルル本人の笑顔が。

もしかしたら僕はこれが見たかっただけなのかもしれない。

・・・・・しかし何か照れる。これがシャルルの魅力なんだろうか・・・。

「ええと、僕に出来ることがあれば何でもしますよ」

「うん。ありがと」

こう純粋にお礼を言われると急に恥ずかしくなる。

顔を上げてシャルルのカップを片付けようとしたとき、僕は慌てて目線をそらした。

「ん?どうしたの?」

「え!?え～～っと・・・」

仕組んでるのか僕に近づいてくるシャルル。

シャルルが無防備＋胸元を露出しているのでどうしても直視できない。

「と、とりあえずシャルル。一度離れてください」

「？」

「えっと、その、胸が・・・その・・・・」

その言葉で、やっと分かってくれたのかシャルルは顔を赤くして離れてくれた。

僕は落ち着くために紅茶を一気に飲んだ。

「か、楓。胸を気にしてるけど・・・みたいの？」

「ブハァ！！ゴ、ゴホッゴホッ！！、な、何言ってるんですか！！」

まるで図ったかのようにシャルルが変なことを言ってきたので、僕は紅茶を噴出してしまった。

「・・・・・・・・・・・・・」

な、なんか顔を赤くしてそっぽ向くシャルル・・・。これは話を変えないと！

「そ、それよりお腹すきましたね！！」

「う、うん！そ、そうだね！」

立ち上がるシャルルを僕は手で制した。

「その格好じゃ外に出れませんよ。大丈夫です、僕が取ってきますから」

「う、うん。ありがと・・・」

そうして僕は食堂に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

楓が部屋を後、僕の耳には楓の言葉がまだ残ってる。

(自分の道は自分で決めろ・・・・・か・・・)

僕はそんなこと考えたこともなかった。

2年前、僕は母が死んだと同時に父に引き取られた。

父とは二回しか会ってない。会話も片手で数えれる程度。

最初は別荘で生活しているが、初めて父に会えると知ったときはすこし嬉しかった。

だけど僕が入ってすぐ、本妻の人にはたかれた。

『この泥棒猫の娘が！！』そんな言葉を吐かれながら。

あの時はよく状況はわかってなかった。

そのあとお母さんの遺書らしきものが見つかって僕の知ってしまった。

僕は愛人の娘だったんだ。

それを知ったとき怒りとかよりも笑いが込み上げてきた。

祖国での暮らしがどうでも良くなったのは思えばその時からだったと思う。

別荘での暮らしの中”ああ、僕は何のためにここにいるんだろう”ってそんなことをよく考えるようになった。

二年ほど経って、僕のＩＳ適性が高いことを知っていた父は、今のデュノア社の状況を打開するために僕をＩＳ学園転入させた。

僕は言われるがままに従った。

でも、正直どうでもいいって言うのが本音だった。

だけど僕は今日、初めてあの人に感謝した。

あの人のおかげで出会えた。僕が無意識のうちに欲していた願い。

けれど一生叶う事のないと諦めていた願い。

それを分かってくれた人。

桐谷楓・・・。

辛い過去・・・僕も幸せではない人生を歩んできたつもりだったけど、彼はレベルが違う。

けど彼は辛さを惜しんで僕に話してくれた。僕を励ますために・・・。

だったら今度は僕が彼の支えになれればいいと思う。

そんな事を思って話してくれたとは思ってない。同情を求めて話したとも思ってない。

だけどこの話を聞いて何もしないのは違うと思う。

だから僕はすこしでも彼の支えになれたらいいと思う。

その・・・できれば・・・一生／／／／その・・・彼の支えとして／／／／

「ただいま」

「え!?あ、か、楓おかえり」

何時の間にか楓が帰って来てた。

僕はさっきまで考えてたことが恥ずかしくなって変な声を出してしまった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxx

「ただいま」

「え!?あ、か、楓おかえり」

?なんかシャルルがちょっと慌てていたけど・・・ま、いいよね。

「お腹すいたでしょう?シャルルの好みが分からなかったので、一応焼き魚定食を持ってきました」

「う、うん、ありがとう。いただくよ」

しかし僕からトレーを受け取り机に置いたところで表情が強張った。

「あ、焼き魚定食は苦手でしたか?すいません。急いで変えてくるので」

「あ、ち、違うよ!?でも・・・その、えーっと・・・」

?なんかシャルルの様子がおかしい。

「食べるなら温かい内のほうがいいですよ。そのほうが美味しいですし」

「そ、そうだね。うん、いただきます」

そのあとの出来事でシャルルの様子がおかしい理由はすぐに分かった。

「あっ・・・」

ぽろっ。

「あっ、あっ・・・」

ぽろっ、ぽろっ。

魚の身をほぐすまではいいが、お箸ではどうしても口まで運べないらしい。

「す、すいません。シャルルは箸が苦手だったんですか」

「う、うん。練習はしているんだけどね。あっ・・・」

また魚の切り身を落とす。

一応皿の上だから捨てなくてもいいが、これではシャルルは食事が出来ない。

「待っててください。今スプーンを持ってきます」

「ええっ？い、いいよ。行ってなかった僕が悪いんだからこれぐらい・・・・」

「いえ、聞かなかった僕が悪いですし。遠慮はしなくていいですよ」

「で、でも・・・・・」

「シャルル。もう少し人に甘えても罰は当たらないと思いますよ？」

「うう・・・・・」

「まあ、慣れない事かも知れませんが、僕を頼ることから始めてはみませんか？ああ、迷惑とかなら考えなくてもいいですよ。僕はシャルルの味方ですから好きなだけ頼ってください」

「楓・・・・・」

そこからちょっと悩んで、何かを決心したかのような顔で言ってきた。

「そ、それじゃあ、その・・・・」

「はい。スプーンでいいですよね？」

「え、えっと、ね。その・・・・楓が食べさせて」

・・・・・・・・・・・・。

「あ、甘えてもいいって言ったから・・・・・」

「そ、そうですね。確かに言いました・・・」

予想外の言葉が飛んできたので、すこしの間思考がストップしていた。

でも、上目遣いでこんなこと言われたら断れない・・・・・。

ちょっと悩みながらもシャルルの箸を持ち、さっきから落としていた魚の切り身を掴んだ。

「えっと、その・・・・・あーん」

「あ、あーん」

うわっ何これ！凄く恥ずかしい！！誰かに見られてるわけじゃないけど凄く恥ずかしい！！

（見てる人居ます・・・・・ｂｙ作者）

あれ？幻聴が聞こえた気が・・・・・。

「こんどはそっちのご飯がいいな・・・・」

「は、はい。わかりました」

そこから僕が全部シャルルに食べさせたんですけど・・・・僕らは妙な気分になって会話するのがちょっと・・・照れちゃったって言うのかな？まあとにかく、ロクに会話もせずに僕らは布団に入った。

（今日は疲れた・・・・色々と・・・・・）

けれどまだ仕事が残ってる。

僕は寝てるシャルルのそばまでいき、シャルルの頭に触れる。

「すいません。・・・忘れて貰います」

『エピオン』が光り、シャルルの頭に１０秒ぐらい触れる。

「システムの応用・・・。脳に直接作用するコレなら、脳細胞を弄るぐらい簡単」

少し良心が痛むが、彼女を巻き込む訳にはいかない。

そして僕は痛む頭を押さえて、ベットに入った。

12話　僕は・・・・・（後書き）

戦闘が少ない・・・・戦闘が好きな人はすみません。

感想待ってます。

13話　めんどうだね・・・（前書き）

オリキャラすこし出しました。

１３話　めんどうだね・・・

「お久しぶりです」

「おお、よく来てくれた」

諸事情で今は学園の外のある豪華なビルの前に来ていた。

有名な戸山財閥が経営しているホテル。え？知らない？ですよね～～でも有名なんです。

そしてその中の社長室のソファに僕は座ってる。

窓からの景色は最高で夜景がスゴイキレイ。ちなみに１９０メートルあるらしい。

まあ僕は２００メートルから落ちたけどね。

今話しかけてきた人は、このビルのオーナーで戸山財閥現当主の戸山頼さん。

正確な年齢は教えてくれないけど３０代前半って言ってた。

髪は金髪だけど、ところどころに地毛の黒髪が見える。

背は僕よりすこし高い。

顔はちょっとワイルド。不良っぽいって言えばいいと思う。でもイ

ケメン。

性格は・・・不良・・・合法的な不良と思ってくれればいいです。

一応言っておきますが前科はありません。

まあこの人も危ない橋を渡ってるんだけど・・・。

「用っていうのはやっぱアレか？」

「ええ。彼から渡されていると思うんですけど・・・」

「ちょっと待ってな。お～～い、愛しの由美～～～」

「まってください！！いつも”愛しの”はつけないで呼んで――――――――」

どたどたと音を立てて部屋の扉を開けてきたのは・・・・・・。

「あ、久しぶり。元気にしてた？由美」

「えええぇ！！か、か、か、楓様！？どうしてここに！？」

「ちょっと荷物を取りにね。それより様付けは止めてっていつも言ってるんだけど・・・」

「も、申し訳ありません。しかし・・・」

入ってきたのは頼さんの娘さんの戸山　由美（ゆみ）さん。

歳は僕と同じ。

でも英才教育で、飛びに飛び級して１２歳のときに大学生を卒業している。

僕もやろうと思えば出来るけど・・・。

ちなみに日本人とアメリカ人のハーフ。母親のほうがアメリカ人。

そのひともスゴイ美女。

髪は濡れてるんじゃないか？って思わせるほどのキレイなピンクで、

それをポニーテールにしてる。

身長は僕よりすこし低いが、女子では高いほうだと思う。

服装はメイド服。フリルが付いてる可愛いやつ。どういうのかはご想像にお任せします。

全体的なスタイルがいい。すべてのバランスが取れている。

そんじゃそこらのモデルさんとは比べ物にならないぐらいのスタイルのよさ。

運動も出来る才色兼備なお嬢様。ＩＳにも乗れる（エース級の腕前）。

しかしそんな容姿だから、仕事をするときにセクハラされると前に泣いてしまったので、父親である頼さんのメイドとして働いている。

別に働かなくてもいいんじゃない？って思った方、そうですその通

りです。

僕も疑問に思い前に聞いたら、”これも修行です。その・・・・お嫁さんとしての／／／／”と顔を赤くしながら言っていた。

そういうものらしい。何も出来ないお嬢様として見られるのはいやだって事だと思う。

「いや、同い年だしさ」

「い、いえ・・・・しかし・・・・」

顔を赤くしながらもじもじとする由美。

ってそういえば僕も人の事言えないな。女子には基本的に敬語だし。でも由美から”敬語はやめてください”って言われたから止めたんだけど・・・。

「ん～～。じゃあまあいつかは敬語をなくしてよ？」

「はい、わかりました」

「あ～～由美。たしかアイツからアレが届いてたと思ってたんだが・・・」

「はい。確かに届いています」

「よし、取ってきてくれ」

「かしこまりました」

キレイな足並みで歩いて退室して行く由美。

退室してから僕は一つため息。

「はぁ・・・・。由美も中々僕に心を開いてくれないな～～」

「は？」

「だって敬語だし」

「ありゃあクセみたいなもんだ。お前と一緒でな」

「でも・・・なんとか・・・敬語をなくしたいな・・・」

「諦めろモテモテ鈍感やろう。お前は男の敵だ」

「ちょ！！何言ってるのさ！？」

「それが鈍感なんだよ。いい加減学習しろ」

「失礼な！！これでも観察眼には自信がありますよ！？」

そう！一夏のハーレム要員もちゃんと見分けてるし、百発百中で。

「ハハハ、寝言は寝て言えバカやろう」

なんか笑われた。さ、さすがにカチンと来たよ今のは。

「な、何言ってるんですか！十歳以上年上の僕より頭悪いくせに！」

「バカの意味が違うわ！！それとお前と比べんじゃねぇ！」

僕らは椅子から立ち、正面から言い合った。そりゃあもう色々と。

「大体未成年者に酒飲ませようとするなんてアナタ大人ですか！？」

「黙っとけ！！うちの娘はやらん！！」

「話が飛躍しすぎです！！そんな伏線どこにありましたか！？」

「あったわ！！いっぱいあったわ！！」

「勝手に最初の話を捏造しないで下さい！！」

「お前が気付かんだけだ！！」

「大体僕の考えてることなんで分かるんですか！？」

「ふっ、俺に不可能はない（キリッ）」

「無駄なポーズ。キモイですキモイです」

「うっせぇ！！お前みたいな男の娘に言われたくはないわ！」

「なっ！痛い中二病オヤジよりマシです！！いつまで夢見てるんですか！？」

「なんだとぉ！！男なら夢を見て当然だろう！！」

「男性全てを巻き込まないで下さい！！そんなんだから由美が迷惑してるんです！！」

「ちょっと待て！！いつ由美がそんな事言った！！」

「普段は心の中に隠してるんですよ！！きっと！」

「ただのお前の想像じゃねぇか！！」

「何を言うのやら。こんな人を父親に持って思わない方がおかしいです」

「なんだとぉ！！おかしいのはお前の頭だぁ！！」

「そのおかしい頭を持ってる人よりも、頭の悪いあなたは一体なんですか！？」

「黙れ！お前は死ぬべきだぁ！！」

バキィ！！

うわっ！！自分の部屋の机を自分で壊した！冗談抜きで死んじゃう！！

「うわっ！！殺人反対！」

「これは殺人じゃねぇ！！天誅だ！！」

「それで殺人が正当化されるわけないでしょう！？」

「うるさい！！お前は男の敵だぁぁぁぁぁ！！」

「スケベオヤジが何言ってるんです！！」

「人を見た目で判断するなぁ！！」

「自覚はあるんですね、自分がそういう顔だって言う」

「死んで償えぇぇぇぇぇ！！」

なんてバカな状況になってきたらドアのノック音が聞こえた。

「あの・・・・・。失礼しても宜しいのでしょうか・・・・？」

「ハアハアハア・・・・あ、ああ・・・入れ」

「失礼します」

由美が入ってきた。手にはなにやら小包が。

「お持ちしました」

「ありがとう」

お礼を言って小包を受け取る。

「い、いえ・・・・メイドのたしなみです／／／」

「？」

何故か顔を赤くする由美。その瞬間、頼さんから殺気が飛んできた。
まだ引きずってるのかなさっきの口論。心の狭いオヤジな事。
「さてと。それじゃあ・・・・」
「おう、さっさと帰れ」
「わかってますよ。それじゃあ由美。またね」
「はい、楓様」
そう言って僕はビルを出て、学園のほうに戻っていった。
途中、通行人から変な目で見られたけど・・・・。
(ただ単に美少女と間違えられただけです。by作者)

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「やれやれ・・・久しぶりだったけど二人とも変わってなかったな〜〜」
IS学園に帰ってきた僕。生徒達が授業に励んでる。
ちなみに僕は何故か知らないけど、今日は授業に出るなと先生に言われたので出かけていた。

多分クラス対抗戦のときの事情だとは思うけど・・・・。

「でも身体を動かさないのはな～～」

身体を動かさないと動きが鈍るかもしれない・・・。

と、いうわけで僕はアリーナのほうへと向った。

試したいこともあるし。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ありゃりゃ・・・どうしてこんなことに・・・」

僕の目の前にはラウラさんのＩＳ『シュヴァルツア・レーゲン』に、フルボッコされてる鈴さんとセシリアさんがいた。

「おおおおおっ！！」

あれ？いつのまにか一夏がいて、さらにラウラさんに突っ込んで行く。

一夏が行ったところで結果は変わらないだろうけど・・・。

「出来れば使いたくないけど・・・そんな事も言ってられないかな」

僕は『エピオン』を起動して彼らのほうに向った。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘ

僕が向ったときにはＡＩＣで体が止まって身動きできない一夏がいた。

「ヒーローの登場盛り上げすぎでしょ」

そう言ってラウラさんの方へ向って『ヒートロッド』を伸ばす。

しかしラウラさんは手のワイヤーブレードで弾く。

しかし一夏のＡＩＣは解除された。

「模擬戦だと思ったから手を出さなかったけど・・・ちょっとやり過ぎだよね」

「ふん、貴様が来たところで大して結果は変わらない」

「・・・・・あの、できればこれ以上僕を怒らせないでくれませんか？」

実は僕はキレる寸前まできている。殺気もだだ漏れ。

しかしラウラさんは気にせずに続ける。

「わざわざやられに来た貴様が何を――――――――――ッ！！」

言い切る前に僕は『ヒートロッド』を伸ばした。

けれどこれもワイヤーブレードに阻まれる。

「一夏。エネルギー残ってるなら二人を連れてここから離れて」

「あ、ああ」

言われた通り一夏は二人を連れて離れていった。

「さて、前回の続きと言うことでいいですよね」

「構わない」

「それじゃあ――――――っと、何の用ですか？織斑先生」

「なに！？」

ラウラさんが驚き僕と同じ方向を向く。

僕が見た方向にはＩＳ用近接ブレードを持っている織斑先生がいた。

っていうか何故に生身で１７０メートルはあるブレードを持てるんです？

「面倒だがガキの世話をな」

「そうですか。では勝負に水を刺さないで下さい」

「黙れ。模擬戦は勝手だがアリーナのバリアーまで破壊するな。この決着は学年別トーナメントでつけろ」

「教官がそう仰るのなら」

ラウラさんにはもう戦闘の意思はない。ＩＳも解除してしまった。

「チッ」

仕方ない、僕もやめておくか・・・。

僕も『エピオン』を解除した。

「織斑とデュノアもそれでいいな」

「あ、ああ・・・」

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません」

返事を返すシャルルと一夏。しょうがないな・・・・・・。

「では、学年別トーナメントまで死闘を一切禁止する。解散！」

この場にいるすべての生徒へ怒号が響いた。

（アレのお披露目はトーナメントかな）

そんな事を思いながら一夏たちと合流して解散した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

無言でいじけてる二人。

場所は保健室。アリーナでの一件から一時間ぐらいたったと思う。

ベットの上では、打撲の治療を受けて包帯の巻かれたセシリアさんと鈴さんがむすっとした表情でいた。

「べつに助けてくれなくてもよかったのに」

「あのまま続けてれば勝ってましたわ」

負けず嫌いはいいけど・・・・・反省はしようね。

「お前らなぁ・・・・・。はぁ、でもまあ、怪我が大したことなくて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな――――――――――いたたたたっ！」

「そもそも横になってること自体無意味――――――――――つうぅ！」

一夏とセシリアさんたちが話して、二人が苦痛で悶える。

「しかし・・・二対一で圧倒するって・・・・」

ラウラさんについつい感心して言ってしまったが・・・・それがいけなかった。

「圧倒なんかされてない――――――――――いたたたたっ！」

「わたくしならば余裕で――――――――――つうぅ！」

またまた・・・・学習しようよ・・・・。

「きっと好きな人に恥ずかしいところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「「？」」

シャルルが飲み物を持ちながら入ってきて、何か言ったが僕には聞こえてこなかった。

しかしそれは僕と一夏だけだったらしく、ちゃんと聞こえたらしいベットで寝てる二人は顔を真っ赤にした。

「なななな何言ってるのか、全っ然っわかんないわね！ここここれだから欧州人って困るのよねっ！」

「べべっ別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですが頂きましょうっ！」

二人は飲み物をひったくり、ゴクゴクと一気に飲む。

そういえば冷たいものを一気に飲むのは身体に悪いような・・・・・？。

「先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――――――」

ドドドドドドドッ・・・・・！

一夏の言葉を遮るように変な音が聞こえてくる。

「な、なんだ？何の音だ？」

「さあ？」

生憎こんな地鳴りの音に心当たりなんてないし・・・嫌な予感はするけどね。

しかしどんどん音が大きくなってる気がするんだけど・・・・こ

れは予感的中してしまうか・・・？。

ドカーン！

いきなり保健室のドアが吹き飛んだ・・・・。目の錯覚でなければ本気でぶっ飛んだ。

ドアが吹っ飛ぶ光景、現実では許されちゃいけないと思うけど・・・・あとここ保健室ね。

「織斑君！」

「桐谷君！」

「デュノア君！」

入ってきたと言うより、雪崩れ込んだが似合うように女子達が保健室に来て、僕らを見つけるなりその周りを囲んだ。・・・・・３６０。見渡す限り人、人、人・・・怖い・・・・。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ホラー映画並みの怖さだね」

「ど、どうしたの、みんな・・・・？ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「「これ！」」」」

状況が読めない一夏たちに女子一同は学内の緊急告知分が書かれた申込書だった。

しかし僕は”ああそのことか”とわかってしまった。

「なになに・・・『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人一組での参加を必須とする。締め切りは――――――――』」

「ああ、そこまででいいから！とにかくっ！」

わっさわっさと伸びてくる手。ホラーだホラーだ。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と組みましょう、桐谷君！」

やっぱりこういうことだったか・・・しかし・・・。

「すいません。僕はシャルルと組むことになってるので・・・」

そう、さっきここに来る前に掲示板でトーナメントに関する連絡事項が書いてあった。

シャルルは女子だから、正体を知っている人以外と組むのはヤバイ。

と、いうわけで僕はシャルルと組むことになっているのだ。

「まあ、そういうことなら・・・」

「他の女子に組まれるよりはいいし・・・」

女子達が残念なんだか嬉しいだか分からない呟きをもらす。

そこで僕はフォローを入れておいた。

「一夏はまだフリーだよね？そちらと組めば・・・」

次の瞬間一夏は数十人の女子に囲まれた。みてるこっちもなんか怖い。

「だあ！楓！謀ったなぁ！！」

「ふっ、坊やだからさ」

しかし一夏は予想外な一言を発した。

「俺は箒と組むからフリーじゃねえよ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。すこしの静寂。僕は疑問に思ったので聞いてみた。

「あれ？一夏知らなかったんじゃなかったの？ペアの事」

「あ、ああ。だけど他の女子よりは幼なじみの方が気楽に組めるからな。後で頼んでみるよ」

「それで断られたら・・・？」

「うっ！・・・・・まあ、くじ引きに運を託すさ」

そんな会話の中、女子達は愚痴りながら退室していた。

「幼なじみってズルイ・・・」

「卑怯だ・・・」

「でもくじで当たる可能性も・・・・？」

って感じの愚痴だった。まあ解決したからいいか。

これでやっと静かになったと思ったら・・・・。

「一夏っ！」

「楓さんっ！」

ガバッとベットから飛び出て僕と一夏に詰め寄る鈴さんとセシリアさん。

「あ、あたしと組みなさいよ！幼なじみはあたしもでしょ！？」

「楓さん！ここはクラスメイトとしてわたくしと！」

こーらこら、怪我人が無理しちゃいけないよ。

それとセシリアさんの理屈ならシャルルと組んでも問題はない気がするんだけど・・・。

「ダメですよ」

いきなり声がしたので後ろを向くとわれらが副担任、山田先生がおられた。

我の背後に立つとは！！こやつ出来る！！・・・・・・・・・・・・・・・・・なんかスイマセン。

「お二人のＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを越えています。

当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ませる意味でもトーナメント参加は許可できません」

・・・・・・・・・ドンマイ。次に何かいいことあるさ。

それから一夏はセシリアさんたちを虐めてしまったりと色々あった。一夏は全開になった二人にボコボコにされるだろう。

飛び火を恐れた僕はゆっくりと保健室のドアを開き、出てそっと扉を閉めた。

触らぬ神に祟りなし・・・・。この言葉考えた人天才だよね。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「最近忙しい・・・」

夕食を食べ終わり部屋に戻る途中、毎度の事ながら織斑先生に呼び

だされた。

もはやあの人の中では僕はパシリというランクなのか・・・・。

何か言いたいけど、何も言わせない気迫を出し相手に命令を聞かせる。

もう一種の精神操作だよ・・・あれは。

あのモードの僕ならまだしも・・・通常モードだとどうしても・・・・・・・。

そんな事を思いながら職員室へ向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxx

はい、つきました職員室。

しかし僕は織斑先生の横に非常に気になるものを発見したりしました。

「で？ついに妹ですか？」

「ほう、後で訓練してやろう。で、この子はスファナ・フィオーネ。訳あってこの学園に入ることとなった」

「僕が悪かったですから訓練はやめてください。で、だからって何故僕が呼ばれるんです？」

「・・・・・・・・・・彼女はＩＳＧの所持者、最後の生き残りだ」

「・・・・そうなんですか。それで僕に何をしろと？」

「なに、簡単なことさ。こいつに外の世界を教えてやってくれ。あの胸糞悪い場所と人を殺す手段しか知らないんだこいつは」

「わかりました。ようするに世話をすればいいんですね？」

「そういうことだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

終始無言な彼女。スファナ・フィオーネ。

見た目は顔も隠れるほどのキレイで長い灰色？銀？な髪が印象的だった。

顔はちょっと見れないから今はご想像にお任せします。

身長は僕と頭一個分くらい違う。女子では平均的な高さだと思う。

服装は制服。しかし腕にはブレスレットをつけている。

ちょっとホラーを思わせるような子だった。

とりあえず挨拶をしておこうと思った。

「初めまして。僕は桐谷かえ――――――――って、うわ!!」

いきなり僕に飛び掛るスファナさん。すかさずかわして彼女の両手首を掴み上に上げる。

しかしジタバタと蹴ってくるのでちょっと痛い。

早速僕はクレームをつけた。

「どういうことですか?今僕殺されそうになりましたけど!?」

しかし織斑先生は笑うだけ。

「ハハッ。この程度でやられるようならこいつの世話は出来んさ。それとコイツに言って置いたのさ”腕試しは好きにしていいからな”って」

「お、鬼だ・・・・・・」

「・・・・・はなして」

初めて聞いた声に僕は過剰に反応してしまった。

発信源をみるとスファナさんが目は見えないけど訴えてきている。

しかし僕は離せずにいた。なぜかって?それはまた襲われるかもしれないからさ。

「も、もう襲わない?」

恐怖ですこし声がおかしかったが僕は聞いた。

彼女はコクンと頷いたので渋々僕は手を放した。

彼女は織斑先生のほうへ向う。

「言ったとおりだろう？お前ではまだ勝てんさ」

「・・・・・・・・・・確かにあの方は強いです・・・・・・」

「というわけで、お前はあいつにいろいろ学べ」

「・・・・・わかりました・・・・」

「それじゃあな」

と言って部屋を出て行く織斑先生。

部屋に取り残された僕とスファナさん。ちょっと無言の空間が続く。

しかし僕は耐えれなくなったので話を切り出した。

「えっと・・・。改めて桐谷楓です。まあ知ってると思いますが」

「・・・・・・・・スファナ・フィオーネ・・・・」

「それじゃあスファナさんでいいですか？」

「・・・・さんは無しでいい・・・・」

「え？いいんですか？」

「・・・・・・いい。・・・・・私はアナタより立場は下だから・・・・」

「えっと・・・・立場とかは考えなくてもいいですよ？友達として僕はスファナと呼びますね」

「・・・・・・・・・わかった・・・・・・・」

「僕の事も楓と呼び捨てでいいですから」

「・・・・・・・・・わかった・・・楓・・・・・」

無口っぽいけど悪い子ではなさそうだ。

「けど世話って言ってもどうすれば・・・・」

「・・・・・私はあなたに従う・・・・・・・」

「ああ、僕は別に命令とかはしませんから。あえて言うなら基本的には自由にしてください」

「・・・・・・わかった・・・・」

こんな少女もあんな運命背負ってるなんて・・・無力な自分に腹が立つな。

「とりあえず、スファナは住む所はどうなっているんですか？」

「・・・・・・まだ転入していないから・・・・・・ここから近いマンションの部屋に住んでる・・・・」

「転入するのはいつですか?」

「・・・・・・・トーナメントが終わったら・・・・・」

「そうですか・・・・・。では今度の休みにでも町を案内しますよ。言うなればデートです」

「・・・・・・・デー・・・・ト?・・・・・・・」

「まあようは二人で何処か出かけましょうって話ですよ」

「・・・・・・・・・わかった・・・・・」

「日取りが決まったらこちらから連絡します」

「・・・・・・・わかった・・・・・」

「楽しみにしててください。それじゃあさようなら」

そろそろ就寝時間なので僕は部屋を後にしようとドアまで歩いていった。

すると、袖が何かにつかまれた。みるとスファナが袖を掴んでる。

「・・・・・・・・いかないで・・・・・・・楓・・・・・」

これは驚いたね。こんな事されたの初めてだからどうすればいいかわかんないや。

「・・・もう・・・・一人は・・・いや・・・・」

そっか・・・そういうことか・・・。僕は異端でも彼女は普通なんだもんね。この反応は仕方ないかな・・・・。

僕は彼女に軽くハグをしてあげた。スファナがちょっと驚くが僕は彼女の耳元で話す。

「大丈夫大丈夫。僕は君をひとりにはしないよ。それどころかもっと大勢の人が君を支えてくれる」

「・・・・・・楓・・・・・」

「安心してください。さようならは別れの言葉ではなく、次に会うと言う約束なんですから」

「・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・」

「それじゃあまた会いましょう。絶対楽しませます。約束します」

「・・・・・・・うん・・・・・・・・」

「それじゃあそろそろ・・・・」

「あっ・・・・・・・・・」

僕が離れたらスファナが声を上げた。なんか残念そうだ・・・な

ぜ?

「どうせなら出口まで僕が案内しますよ」

「・・・・・・・・いいの?・・・・・・・」

「はい。案内しますよ」

そうして僕は無事に彼女を出口まで送り届けた。・・・・・人目を気にしながら・・・・。

理由は簡単。こんなところをみられたら明日の朝女子から追われると思うから。

「それじゃあね、スファナ」

「・・・・・・・楓・・・・・じゃあね・・・・・」

「!!ッ」

振り向きざまに見せたスファナの顔は笑顔だった。はじめてみたけどスファナの顔。

けれど社交辞令じゃない・・・・本当の笑顔がそこにあった・・・多分だけど。

だがちょっと顔が赤いのは気のせいだろうか?泣いちゃったのかな?

そしてスファナは走り、その人影はどんどん小さくなってく。

そして今までの事を思い返して僕は自己嫌悪した。

（初対面の子に何やってるんだ僕は・・・・・）

いきなりハグするなんて確実に変態の領域だ。スファナがあの性格だからどうにかなったけど・・・・。

そんな事を思いながら僕は自分の部屋に戻っていった。

幸い誰にもさっきまでの事は見られてなかったらしい。

よかったよかった。

と、思っていた時期が僕にもありまし――――――――ってセシリアさんシャルル！！ま、待って！！銃を乱射しないで！お願いだから！！打っちゃ――――――――ギャアアアアアアアア！！

13話　めんどうだね・・・（後書き）

感想待ってます。

１４話　主人公設定（仮）（前書き）

（仮）と言うのはもしかしたら変えてしまうかもしれないからです。

これはネタバレがあるので、見たくない人はスルーしてください。

と言うか、おそらく見ないほうがいいと思います。

１４話　主人公設定（仮）

名前：桐谷楓（きりやかえで）

性別：男（一応）

身長：１７５ｃｍ

体重：５８ｋｇ

容姿：腰まで届く黒髪だが、一部に銀色が入っている（両方地毛）
普段は下ろしているが、たまにポニーテールになったりする。
目は赤と青のオッドアイ。顔は女顔だが何故か異性にモテる。

体格：体つきも女性に似ている。筋肉はあるがムキムキではない。

出身：日本（余談だが楓はいろいろな国に留学している。鈴や生徒会長と知り合いなのはその事情）

性格：基本的には真面目。しかし友達と話すときはジョークを言ったりと性格を使い分ける。

夜になると性格が一変する時がある（何がトリガーで変わるか本人にも不明）

基本的に女子は敬語。男子には砕けた口調（例外はあるが）しかし止めてくれといえば敬語は使わない。

怒りの沸点はスゴイ高い。つまりちょっとしたことではキレない。だが友達がやられてたり、過去の出来事に関することには本気でキレる。

そしてキレると一人称が『俺』になったり言葉遣いが乱暴になる。（これは鈴がいうには小学校のころの口調らしい。キレる時の言葉遣いは今も変わってない）

家族構成：父、母、祖母、祖父（しかし両親はある事故で死亡。祖父達は病気と寿命で死亡）

一応義妹が二人いるが、ある事故に巻き込まれて行方不明（世間的には死亡と言うことになっている）

楓は自分の過去など色々と不明な部分が多い。

楓の事を『煉翼の騎士』と織斑千冬は呼ぶときがある（楓はそれを否定する）

そして楓は織斑千冬を『白銀の騎士』と呼ぶが、何故そう呼ばれるのかは分かっていない。

なぜ楓が千冬と知り合いなのか？なぜ初対面を装うのか？など判明していないことも多い。

今後明かされていくだろう。

１４話　主人公設定（仮）（後書き）

誤字・脱字があったらお願いします。

15話　強さとは・・・どういうものか（前書き）

すこし遅かったですけど更新です。

それと今回は凄く長いです。

誤字・脱字あったらお願いします。

15話　強さとは・・・どういうものか

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。

その慌ただしさは予想どうりというか何と言うか、一回戦が始まる直前まで色々と仕事があった。

仕事から開放された生徒はアリーナの更衣室へとダッシュする。

男子の更衣室は三人しかいないからさびしい。

「しかし、すごいなこりゃ・・・・・・」

一夏がモニターから観客席を見て呟く。そこには各国の政府関係者や研究員、その他諸々・・・・まあ、いろんな人が観客席を埋めてた。

「まあ、三年生はスカウト、二年生は一年間の成果をそれぞれ確認しに来てる人も居る。一年生は今のところ関係ないけど、トーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

「人事じゃないよ。一夏は有名なんだから」

「そういえばそうだなって楓もそうだろ？」

「僕は・・・・・・どうでもいいから」

「？？？」

「そ、それよりも、一夏はラウラさんの対戦だけが気懸かりらしいね」

「まあ、な」

ちなみに一夏はちゃんと箒さんとペアを組んだ。箒さんはおそらく喜んで引き受けたと思うね。

「セシリアさんたちの分も頑張らないとね」

「そうだな。自分の力を試せないのは辛いだろうからな」

一夏は無意識なのか左手を握り締める。

やる気があるのはいいけど感情的になっては勝てないだろうケド。

「シャルル。頑張ろう」

「うん」

「いいよな、そっちは男子同士で」

羨ましそうにこちらを見る一夏。実際男女なんだけどね。

「あれ？一夏はＢ・・・・？」

「Ｌじゃねえからな！？」

「ハハハッ、冗談冗談」

「・・・・たくよぉ・・・・・」

「でも、落ち着いたんじゃないの？」

「あっ・・・・・・・」

「感情的になったら、勝てるものも勝てないからね」

「・・・・ありがとよ」

「お礼はいらないよ。倒す相手は全力でないとね」

「そうだな。お前と戦うのは初めてだが、負けねえぞ？」

「こっちのセリフだよ」

バチバチバチと僕と一夏の間で火花が散る。

「盛り上がってるとこ悪いけど、そろそろ対戦表が決まると思うよ」

「そうだな。準備も出来たし行こうか」

「はいはい・・・」

どういう理由かは知らないけど、突然のペア対戦への変更が成されてから従来まで使っていたシステムが、うまく機能しなかったらしいから今朝手作りの抽選クジを作ったらしい。

「一年の部、Ａブロック一回戦一組目なんて運がいいな」

「一夏らしい考え方だね。手の内を晒すも何も、一夏は隠すことも特にないし」

「悪かったな」

「あ、対戦相手が決まったみたい」

シャルルの言葉で僕らはモニターへ視線を向けた。

「「――――――――え？」」

「ほほ〜〜」

出てきた文字を見てシャルルと一夏はポカンと口を開け、僕はある意味予想どうりだった。

一回戦目の対戦相手は一夏、箒ペアだった。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

時はアリーナ。第一試合開始はもうすぐ。

僕は一夏と向き合った。シャルルは箒さんと向き合っている。

「まさかのまさかだな」

「確かにね。でも負ける気はないよ」

「お、奇遇だな。俺もだ」

3，2，1――――――――――スタート。

「「たたっ斬る」」

ハモりながら、試合開始と同時に僕と一夏は『瞬時加速』でぶつかった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「はぁああ！！」

俺は低空飛行でジグザグに動きながら楓の《ヒート・ロッド》をかわす。

っつうかあのムチ卑怯だろ！！リーチ長すぎだ！！

「かわしてばっかだね、一夏！」

「悪かったな！お前のその武器が卑怯なだけだ！」

「お褒めに預かり光栄ってね！」

「チッ！褒めてねえよ！」

最初からこれの繰り返しだ。

なかなか懐に入れず俺は攻撃することが出来ない。

シールド・エネルギーは両方とも大しては減っていない。

しかしこのままではジリ貧だよな・・・。どうすっか。

「一夏。箒さんとシャルルの決着もつくかもしれないのに、そんなのんびりしてていいのかな？」

「その手にはのらねえよ」

「ありゃりゃ、ばれてたか」

余裕の表情で笑う楓。

急かして冷静さを欠く作戦とか・・・性格悪いな。今後もこんなことやられるかもしれないな。

「あ、ヤバ」

「？」

楓がいきなり《ヒート・ロッド》をしまった。何か知らないがこれは・・・チャンス！！

俺は『瞬時加速』で一気に接近した・・・が。

「何ちゃって～～」

「！？」

アイツはすばやく自分の剣をだして投げてきた！！

俺は《雪片弐型》でギリギリ弾く。その後すぐに離れた。

「今のは決めたと思ったんだけど・・・・」

「悪いな。それとお前性格悪すぎだぞ？」

「不用意に敵に接近する一夏もどうかと思うけど？」

「言い返せないな」

そして俺等は向き合う。しかし楓はシールドをしまった。

「一対一の接近戦勝負でもする？」

「？何のまねだ？」

「別に。一夏と同じ土俵で勝負しようかと思っただけだよ」

「そりゃどうも。だが手加減ならいらないぞ？」

「大丈夫。手加減のつもりはないから」

「じゃあ・・・えんりょなく！！」

俺は再び『瞬時加速』で突撃した。『零落白夜』を放ちながら。

それに対し楓は《ビーム・ソード》を展開したが、『零落白夜』はビームを切り裂く。

BT兵器には相性が悪いはず!!・・・・・だったのだが・・・・。

「ビームじゃなければいいんだよね」

といって実体剣に変えてきやがった。そして俺の剣とぶつかった。

「チッ・・・もうそれ《ビーム・ソード》じゃねえだろ」

「ちゃんとビーム刃が展開されるから」

「そうかよ!」

そして俺は離れて、再び突撃した。

そこからは一進一退の攻防だった。

俺は出来るだけ上下左右といろいろなところから攻めたが、楓はすべて受け流して隙が出来たところを切りかかる、俺はそれをかわす。そしてまた攻めるの繰り返しだった。

そのさまは三つの剣がぶつかり合うような感じだった・・・。

ふと、箒たちの対戦が気になりそちらを向く。

戦況は箒が不利だった。

シャルルのＩＳがいろんな武器を出して箒に打つ。箒もかわしてはいるが接近できてはいなかった。

と、状況はさっきの俺と同じような感じだった。

「余所見とは余裕だね」

楓が笑顔でこちらにいってくる。

「その余所見の隙を突かないなんてお前も余裕だな」

俺も笑顔で言い返してやった。

「それじゃあそろそろ終わらせる？」

「んだよ。ほんとに余裕だな」

「すぐに分かるよ。《ゼロ・システム》起動」

ウィィィィン・・・・・。と機械音が聞こえる。

「今度はなんだ・・・？」

と警戒していると楓が突っ込んできた。

「それぐらい！！」

俺は楓に切りかかる・・・これでは今までと同じじゃあと思った

が・・・・。

「未来は見えている」

その言葉と同時に《ヒート・ロッド》が俺の刀を防き、そのまま俺に当たった。

「クッ！！」

そして俺は体勢を立て直そうと後ろに離れたら、そこには・・・・。

「言ったはず。未来は見えていると」

楓が俺の行動を先読みしたかのように立っていた。

そのまま楓は実体剣の《ビーム・ソード》を伸ばして、回転しながら俺に突っ込んできた。

そのさまはデカイ車輪のようだった。

「くぅううう！！」

ガガガガガガッ！！

俺は刀で防ぐが、どんどん大きさを変えながら回る攻撃に耐え切れず、俺はその回転に巻き込まれた。

「あああああ！！」

激しい痛みを感じながら俺のシールド・エネルギーは尽きた。

そして俺は意識が遠のく感じがした。

最後に見たのは刀を地面に刺し、悔しそうに膝をつきながらこちらを向いてる箒だった。

『――――――――――勝者、桐谷・デュノアペア』

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

試合が終わりシャルルが僕に話しかけてきた。

「か、楓？ちょっとやりすぎじゃあ・・・・？」

「手加減なんて必要ないって言いわれたから本気で倒しただけです」

「そりゃあ、そうかもしれないけど・・・」

「けれど・・・まあ確かにやりすぎました。箒さん」

「・・・・・・なんだ」

仏頂面で僕の言葉に返事する箒さん。ちょっと怒ってるな・・・・。

「一夏に伝言お願いします」

「・・・・・・・なぜだ」

「僕が今の一夏に声を掛けても逆効果だと思うからです」

「しかし・・・・・・・」

「伝言は『ちゃんと一夏達の分まで頑張る。それとやりすぎた』これだけです」

「それなら自分で！！」

「箒さん。アナタは自分を倒した相手に励ましの言葉をもらいたいですか？」

「・・・・・・・・・わかった」

それだけ言うと箒さんはアリーナから出て行った。

「僕らも戻りましょう。シャルル」

「そ、そうだね」

そうして僕が戻ろうとしたときにアナウンスが聞こえた。

『一年生桐谷楓さん。至急職員室の方まで来て下さい』

「お呼び出しを食らっちゃった。てなわけで先に戻っててください」

「わかった」

そうして僕は職員室に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

バシッ！！

入って早々織斑先生に殴られた僕。グーパンチで。

あらかじめ人払いは済ませたのか職員室には織斑先生以外の人はいなかった。

口の中は鉄の味がする。どうやら口の中を切ったらしい。

「さて。弁解があるなら聞こう」

「殴ってから言うセリフじゃないですよ」

「そうか。言いたいことはそれだけか」

「まさか。では一番の疑問を。僕が殴られたのはなぜですか？」

「なんとなくだ」

ええ〜〜〜・・・・・。

「と言うのは冗談で。なぜアレを使った?返答次第ではもう一度殴らなければいけない」

「僕の力です。どうしようが僕の勝手でしょう」

「ふむ。どうやらもう一度殴られたいらしいな」

「どうせもう一度殴る気なんでしょう」

「よくわかったな」

「そんなことはどうでもいいです。それより質問に答えてください」

「お前がアレを使ったからだ」

「そうですか。てっきり僕は一夏をボコしたせいで殴られたのかと」

「アイツは未熟者だ。あれぐらいは許容範囲・・・だがお前がアレを使ったのは納得できん。どうしてだ?」

「手加減するなと言われたので」

「そうか・・・。相手との力量差もわからんか・・・。アイツは」

「用が済んだのなら失礼していいですか?」

「ああ。だがもう使うなよ。来賓の奴らに目をつけられるぞ」

「・・・まあ善処はします」

そして僕は職員室を出た。まだ血の味が口に残ってる・・・どうしよ。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxx

そのあと順調にと言うか一回戦はすべて終了した。

僕らの二回戦目の相手はなんとラウラさんだった。

そして今はアリーナの更衣室。二回戦目最初の試合。

一夏はいないので僕とシャルルの二人だけ。

言っとくけどシャルルが女だからって変な事してないからね!?

「今度はラウラさんか。強敵ですね」

「そうだね。でも勝たないと」

「そうですね。勝たないといけませんね」

そして僕らはアリーナへと向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「まさかこんな早くに貴様とやれるとは思ってなかったぞ」

「へ～そうなんですか」

試合開始まで5、4、3、2、1、――――――――GO！！

「叩きのめす」

「やれるものならですけど」

僕は瞬時加速ですばやく突撃。しかしラウラさんは手をかざす。

とラウラさんのＡＩＣが発動。僕の腕を止める。

「やっぱ厄介だよね」

「当たり前だ」

と言いながらラウラさんはカノン砲が動く。

「ですけど、そう簡単にはやられませんよ」

ＡＩＣを自力で解き、上空に舞い上がる。

「チッ・・・・・」

「今度はこちらの番ですね！」

そう言って僕は『全身装甲』となり腰を折りたたみ変形した。

「何っ！！」

驚くラウラさん。そりゃそうだよね。原則ＩＳは変形しないのだから。（例外はあるけど）

けどゴメンね。僕は普通じゃないんだ。

僕の『エピオン』のバードモードは常に『瞬時加速』をしているような速さが出る。

コントロールは難しいが。

この速度ならＡＩＣにも引っかからないだろう。

「これで！」

「チッ！！」

その状態で、さらに『瞬時加速』をしたらどうなるでしょうか？

答えは物凄い速度が出る。ついでにそれで突撃すればスゴイダメージにもなる。

そう思い、バードモードの僕が一気に突っ込みラウラさんのＩＳに衝突した。

今のですこしはダメージを通したつもりなんだけど・・・・。

「・・・・・驚いた。まさかここまでやるとは」

多少ダメージを受けているが平然と立つラウラさんがいた。

「・・・・・分が悪いかもね」

あんな突撃奇襲にしか役に立たない。もう見切られるだろう。

どうしようかな・・・。もうアレ使おうかな・・・と思うが、それは最終手段に取っておく。

シャルルの方は問題なくもうすぐ終わるだろう。

そこからは二対一での戦闘になる。出来ればそこで決めたいと思う。

いくらラウラさんが一対多が得意なＩＳでも有利に事を進められると思う。

バードモードの僕はそんな事を考えながら飛んでいた。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「え、ええ！？桐谷君のＩＳなんで変形してるんですか！？」

モニターから試合を見て、なにやら騒がしい真耶。

それに千冬はいつもの感じに答えた。

「アレは『形態移行』をしているだけだ。ＩＳは『形態移行』なら変形ができるからな」

「で、でも！！それなら最初からあの状態では！？」

「アイツは自由に『形態移行』できる。第二形態が人型。第一形態があの・・・バードモードと言っていたがな」

「な、なるほどぉ・・・。好きなタイミングで『形態移行』出来るから変形したみたいに見えるんですね」

「実際変形しているがな。理屈は通ってる」

「す、すごいですねぇ・・・・」

「そうでもないさ。いまもボーデヴィッヒに苦戦している」

「ま、まあ彼女は一年生の中ではトップでしょうし・・・・」

「そうだな」

それきり千冬は口を開かなかった。

空気が急に変な感じになったので真耶が話を逸らす。

「そ、それにしても学年別トーナメントのいきなりの形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか？」

先月の事件――――――――黒い全身装甲ＩＳ（といっても途中から白くなったが）の襲撃は、一般的には反政府組織の仕業と言うことになっている。
ＩＳ学園を襲撃したと言うだけでも重大なことなのに、それが無人機だと分かればますます事態は危うい方向へと向ってしまう。
今でも各国が敵対国の仕業ではないかとお互いを疑っている状況なのだ。

「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろ。より実践的な戦闘経験をつませる目的で、ツーマンセルになったのだろうな」

「でも一年生は入学してまだ三ヶ月ですよ？戦争が起きるわけでもないのに、今の状況で実戦的な戦闘訓練は必要ない気がしますが・・・」

千冬はその疑問が来る事は分かっていたらしく、表情を変えずに答えた。

「そこで先月の事件が出てくるのさ。特に今年の新入生には第三世代型兵器のテストモデルが多い。そこへ謎の敵対者が現れたら、何を心配すべきだ？」

「――――――――あ！つまり、自衛のため、ですね」

「そうだ。操縦者はもちろん、第三世代兵器を積んだＩＳも守らなくてはいけない。しかし教師の数が有限である以上、それらは原則自分で守らなくてはいけない。そのための実線的な戦闘訓練なのさ」

「ははぁ、なるほどなるほど」

真耶は疑問が解けたので何度も頷く。

しかし新たな疑問が浮上したらしく千冬に尋ねる。

「話は変わりますけど、桐谷君のＩＳは第二形態になれるんですよね？」

「ああ」

「それじゃあもう、ワンオフ・アビリティーもあるんですか？」

「ああ、確かにあるぞ。とても厄介で・・・危険なワンオフ・アビリティーがな」

最後の方は小声で言ったので真耶には届かなかった。

「へぇ～～。すごいですね桐谷君」

「今は逃げ回っているがな。大方デュノアの方が終わるまでの時間稼ぎだろ」

「デュノア君も強いですしね」

「専用機があればあれぐらいは普通だ。もっともデュノアが強いのは認めるがな」

そう言って違うモニターに視線をやる。

そのときにちょうどシャルルが相手のシールド・エネルギーを０にした。

「あ、勝ちましたね」

「当然の結果だ。本番はここからだな」

そういって、さっきの楓とラウラの戦っている方のモニターを見る。

そこには圧倒的な力で楓を寄せ付けないラウラがいた。

「強いですねぇ、ボーデヴィッヒさん」

「ふん・・・・・・・・・・」

しみじみという真耶に対し、千冬は心底つまらなさそうな声を漏らす。

「変わらないな。強さを攻撃力と同一だと思っている。だがそれでは――――――」

楓どころか一夏にも勝てないだろう。

しかし、その言葉はけして口に出さない。もし言ったら真耶に何を言われるか分かったものではない。

ワアアアッ！

会場が一気に沸いた。その歓声は観察室まで直に響いてくる。

「あ！デュノア君が参戦しました。これで膠着状態も崩れるでしょう」

「さて、そう上手くいくかな」

「またまた、そんな気にしてないような態度をとらなくても――――――」

「山田先生、今度久しぶりに武術組み手をしようか。せっかくだ、十本ほどやろう」

「いっ、いえいえっ！私はそのっ、ええっと、生徒達の訓練機を見ないといけませんからっ！」

慌てて首を左右に振る真耶に対し、千冬は低い声でたたみかける。

「私はからかわれるのが嫌いだ。そろそろ覚えるように」

「は、はい・・・・・・。すみません・・・・・・」

真耶は見てて可哀想になるくらいしょぼ～～んとしてしまう。

さすがの千冬もあまりに可哀想だったので、ぽんと軽く頭を撫でた。

「さて、試合の続きだ。どう転ぶか見物だぞ」

「は、はいっ」

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘ

「ええい・・・ちょこまかと・・・・・」

「鬼さんこちら～ってね」

僕はラウラさんの攻撃を逃げ回っている。これくらいなら余裕でかわせる。

「おまたせっ！」

ドドドッ！

シャルルがショットガンでラウラさんを牽制しながらこちらに来た。

「やっとですか・・・かわすのにも飽きてきたところでしたよ」

「余裕だね・・・」

「余裕でしたから」

「無駄話は済んだか？」

ラウラさんがワイヤーブレードを辺りに展開しながらこちらに聞いてくる。

「待ってくれるなんてありがたいですね」

「なに、仕切りなおしと言うことだ」

「そうですね」

僕は変形を解除してラウラさんと向き合う。

「では、行きますよ！」

『瞬時加速』で一気にラウラさんの懐に入る。

しかし・・・。

「無駄だ。その程度で私にダメージは与えられない」

ピシッと体が凍りつくように動かなくなる。ＡＩＣだ。

「どうした？この程度か？」

「あれ？なんで勝った気でいるんですか？僕らは二人組なんですよ？」

「！？」

慌てて視線を戻すがもう遅い。

シャルルがすでに懐に侵入していた。そのままシャルルはショットガンの六連射を叩き込み、ラウラさんの大口径レールカノンは爆散した。

「くっ・・・・・・！」

ＡＩＣの弱点は”停止させる対象物に意識を集中させないと効果を

維持出来ない”ことだ。

これで僕の拘束は解除された。

だが・・・。

「それぐらい・・・・！」

ラウラさんがシャルルを無視して僕の方に全攻撃を仕掛けてきた。

これはかわせないな・・・。

仕方ない・・・。

ドカァァァン！

すべての攻撃が直撃だったので轟音を立てながら僕の視界は光に包まれた。

ｘｘｘ

「楓！」

シャルルは驚き楓の方を見る。

「ハハハッ！これで終わりだな」

ラウラは高笑いしている。さながら勝利の喜びでも味わうかのような。

「さあ、あとは貴様だけだ」

「!?」

シャルルは身構える。しかしシャルルとラウラの一騎打ちではシャルルの方が分が悪い。

（これは・・・負けるかもね・・・）

そんな事を考えたが、すぐに頭を切り替えるようにラウラと向き合うシャルル。

「いやいや・・・困るよ、勝手に話を進めてもらうのは」

しかしそんな事はある声によってかき消される。

「まさか・・・あの攻撃を耐えたと言うのか!?」

ラウラも驚く。確かにあれほどの攻撃は普通耐えれるものではない。

だが楓は・・・。

「確かに攻撃には耐えれなかったけど・・・もし機体が一つあったら?」

「なに!?」

ラウラとシャルルがまだ爆煙に包まれる楓の方を見る。

「さあて、初のお披露目だ。『ゼロ』」

そこにいたのは、背中の天使のような羽が印象的な二つの大型の銃を持った男だった。

「それは・・・いったい何だ」

ラウラが尋ねる。それに対し楓は不敵に笑いこう告げた。

「これは『未来の騎士』通称”ゼロ”正式名称ウィングゼロカスタム。それでは・・・排除開始」

「!?」

楓はゼロの銃『ツインバスターライフル』の片割れでエネルギー弾を撃つ。

「チィ!!」

ラウラは何とかかわす・・・しかし。

「無駄。僕からは逃げれないよ」

楓の放ったビームは曲がって再びラウラを襲う。

「グッ・・・!!」

今度は見事に当たり、ラウラは怯む。

「ターゲット・・・ロックオン」

楓は『ツインバスターライフル』をあわせてラウラに狙いを定める。

「シャルル。ラウラさんをそこから動かさないで」

「え!?あ、うん」

惚けてたシャルルを楓は命令して動かした。

そのままシャルルは、ショットガンなどで牽制してラウラはそこから逃げれなかった。

「エネルギー充填。ターゲットを破壊する」

そこに無情にも楓の『ツインバスターライフル』が放たれる。

「グアア・・・!!」

ラウラのＩＳのシールド・エネルギーは根こそぎ奪われていき、貫通したダメージはラウラ自身に襲う。

楓もシャルルも自分達の勝利を、おそらく観客も楓たちの勝利を確信した。

だが・・・次の瞬間、異変が起きた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

（こんな・・・こんなところで負けるのか、私は・・・）

想定外の出来事にうまく対処できなかったのは自分のミスだ。しかし・・・。

（私は負けられない！負けるわけにはいけない・・・・・・・！）

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は――――――――遺伝子強化試験体C－〇〇三七.

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

――――――暗い。暗い闇の中にいた。

ただ戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

知ってるのは人体に攻撃すり知識。わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかと言う戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法も体得した。

私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

しかしそれは世界最強の兵器――――――――ＩＳの出現により一

変した。

その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が起きたのだ。

この『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』は肉眼にナノマシン移植処理された目の事を示す。

危険性は全くない。理論上ではなんの不適合も起きない。

しかしそれはあくまで”理論上”だった。

私の左目はその処置によって金色に変質し、常に稼動状態のままカットできなくなった。

その『事故』によって私はＩＳ訓練において後れを取ることになる。

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑からの侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

しかし・・・さらに私を深い闇に落とす出来事があった。

それはある研究員達が会話しているのを偶然耳にした話。

『しかしまさかあれが完成するとはな』

『だが研究所が暴走して行方不明らしいぞ』

『そうだったな。通称プロトゼロ。識別名称『インフィニット・ゼロ』今までの科学の集大成となった試験体。しかしその暴走に巻き込まれて死んだんじゃないのか？』

『いや、死体は見つからなかったらしいぞ。どこかに逃げてるんじゃないか？政府も躍起になって探してるらしいしな』

『まあ生きてれば凄いがな。史上最強のＩＳ操縦者になるんじゃないか？ここにいるのようなポンコツＩＳ操縦者なんか目も当てられないような』

『ああ。見習ってほしいよな、試験体の奴らも。何のためにお前らを生み出したんだって話だぜ』

『本当だな。戦うしか脳のない『出来損ない』の奴らにはそれがお似合いだ』

『ハハッ！確かにな』

これが私が偶然耳にした会話だった。

それを聞いて私は――――――――悔しかった。

顔も知らないやつが、生きてるかどうかも分からないやつが私より優れているだと！？

ふざけるな！！私は『出来損ない』なんかではない！！

まるで存在自体を全否定されたような気分だった。

そこから私は必死に『インフィニット・ゼロ』の事を調べた。

『インフィニット・ゼロ』――――――無限の始まりと呼ばれるコー

ドネーム。

それぐらいしか探しても見つからなかった。

そしていつしか、政府の人体実験など裏に関わる者達でこの名を知らない者はいなくなった。

『出来損ない』の私は深い闇へと・・・・・・・・・・まるで後押しされるように落ちていった。

だがそこで初めて光を目にした。それが教官・・・織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。あの人の教えを忠実にこなす事で私は再び最強の地位を手に入れた。

しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にならなかった。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に――――――憧れた。

その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。

――――――――ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。

そう思い、私は時間を見つけては教官の下へと通い、話をした。

そんなある日私は『勇気』を出して聞いてみた。

「教官は『インフィニット・ゼロ』を知っていますか?」

「ああ。知っているぞ。実際にあったこともあるからな」

「本当ですか!?そ、そいつはど、どのような・・・・」

うろたえた私に教官は私の内心を知ってか知らずか・・・・いや知ったのだから懐かしむように、そしてわずかだが優しさを見せるような笑みをした。

私にとってそれが納得いかない表情だったというのは今でも覚えてる。

「アイツは確かに強かった。だがお前はアイツを気にしなくてもいい。気にしても仕方ないからな」

「き、気にするな・・・ですか?」

「ああ。だがもし日本に行くときがあるなら私の弟ともども会ってみるといい。目印は赤と青のオッドアイと黒と銀の髪だ」

「・・・弟?」

「知らなかったか?私には弟がいる」

「そう・・・なのですか」

「私が強いのもあいつを見ているからかもしれない。あいつを見ていると、分かるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「・・・・・・・・よく分かりません」

「今はそれでいいさ。だがもし弟か『インフィニット・ゼロ』に会うなら一つ忠告だ」

優しい笑み。それにどこか気恥ずかしそうな表情。それは――――

（それは違う。私が憧れる貴方はそんな表情をした貴方じゃない。貴方は強く、凛々しく、堂々としているのが貴方なのに）

だから――――――許せない。教官をそんな表情にしてしまう存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟。それに私の存在を否定する『インフィニット・ゼロ』

そいつらを認められない。認める訳にはいかない。

だから――――――――――

（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると！）

ならば――――――こんなところで負けるわけにはいかない。

あれは、あの男はまだ動いている。動かなくなるまで、徹底的に破壊しなくてはならない。

そうだ。そのためには――――――

（力が、欲しい）

ドクンッ・・・・・と、私の中で何かがうごめく。

そして、そいつは言った。

『――――願うか・・・・・？汝、自らの変革を望むか・・・？より強い力を欲するか・・・・・・？』

言うまでもない。

力があるなら、それを得られるなら、私など――――――空っぽの私など何から何までくれてやる！

だから、力を・・・比類無き最強を、唯一無二の絶対を――――――私によこせ！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ・・・Ｄ.

Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ・・・Ｕｐｌｉｆｔ.

Ｃｅｒｔｆｃａｔｉｏｎ・・・Ｃｌｅａｒ.

《Ｖａｉｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》・・・ｂｏｏ

t.

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「ああああああっ！！！！」

突然ラウラさんが絶叫しながら苦しみだした。

と同時にシュバルツェア・レーゲンから激しい電流が放たれ、シャルルの体が吹き飛ばされた。

「ぐっ！一体何が・・・・。―――――！」

「あ！？」

僕もシャルルも・・・おそらく観客の皆さんも目を疑うような光景を目にした。

ラウラさん自身のＩＳが変形して、いや変形じゃない。装甲はぐにゃりと溶けて、どろどろのものになって、ラウラさんの全身を飲み込んでいった。

「ま、まさか・・・」

僕にはあの現象には見覚えがあった。

そうしているうちにラウラさんのＩＳ”だった”ものはラウラさん

を包み込み、倍速再生をしているかのように形を成していく。

そこにいたのはこの前のように黒い全身装甲（フル・スキン）であるあいつに似た『何か』。

しかし全く違うところがある。

ボディラインはラウラさんのそれを現していて、最小限のアーマーと腕と足に付けられている。

そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われているが、背中の翼から僕には予想は付いていた。

さらに手にはある刀が握られている。それは世界最強の刀――――――

「『エピオン』に《雪片》・・・・・！」

見た目は色は違うが『エピオン』に酷似していた。《雪片》に関してもだ。

そしてさらに驚くことがあった。

『エピオン』の目が赤く光り、文字が浮かび上がった。

そこには書かれていたのは――――――

「《ゼロ・システム》・・・・！」

次の瞬間ヤツは僕の方まで瞬時加速してきながら攻撃を仕掛けきた。

その様は居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。

それは織斑先生のそれだった。

「くそっ！」

僕は羽でガードしたが、受けきれずそのまま吹き飛ばされた。

多分前の僕ならキレていたが、生憎頭が何故か冷静になっていた。

「だ、だめだ・・・ラウラさん。”それ”を貴方が使ったら・・・脳が持たない」

僕の訴えは聞こえなかったらしく再び襲ってきた。

「仕方ない！《ゼロ・システム》起動！」

僕も発動してかわす。

互いに未来は見えている。その結果は・・・・。

「未来は・・・見えているはず・・・それともエピオンはちがう未来を見ている・・・・？」

これは危険だ。下手をするとラウラさんが死んでしまう。

「シャルル！今すぐ非難してください！こいつは僕が片付けます！」

「え！？ちょっと楓！？どうなってるの！？」

「説明している時間はありません！巻き込まれる前に早く！」

「・・・・わかった。だけどちゃんと説明してよね！」

「・・・できればですけど」

そういってシャルルはラウラさんのペアを運んで退場した。

先生達から放送で避難勧告がでている。

「さて。貴方も未来は見えているはず。それでもやるのか？」

話しかけても無言。その代わり刀を構える。

「・・・どうしてもやるというのか・・・。なら、俺はお前を・・・倒す」

俺はライフルをラウラさんに向けた。

力を、強さを、見誤ったものに対しての言葉は薄っぺらいかもしれない。

覚悟を決めたものに対して言葉で止めることは出来ない。

だったら・・・・・・・・！

「力でねじ伏せるしかないよな・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・」

相手は無言。喋ることは無意味とでも言いたいのだろう。

「戦闘レベル・・・ターゲット確認。いくぞ猿真似野郎」

「・・・・・・・・・」

俺はツインバスターライフルを撃った。しかしそれは分かっていたかのようにかわされる。

そのまま近づいてきて、速く鋭い袈裟斬り。

それも織斑先生の酷似していたが・・・所詮は・・・・。

「ただの猿真似だ！」

足で刀を蹴り飛ばし、その足でかかと落としをして地面に叩き落してた。

そこに俺はツインバスターライフルを構えた。

「あなたが何のためにその力を使ったかは知らない。だが・・・・それは貴方の望むものではない」

ライフルのエネルギーが溜まっていく。勝負へのカウントダウンが近づいて行く。

「貴方にとって、強さとはどういうものなんでしょうかね」

そして僕の銃からビームが放たれた。

ドカァァァン！

その一撃を食らい、ラウラさんのＩＳは真っ二つに割れた。

僕はシステムを解除して地面に降りた。

そこで気を失うまでに僕とラウラさんの目が合った。

眼帯ははずれて、あらわになった金色の瞳。その眼差しは助けを求めるように見えた。

「・・・いくらでも救いますよ」

力尽きて倒れるラウラさんを僕は抱きかかえて呟いた。

聞こえたかどうかはラウラさんしか知らないだろうケド。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「一つ忠告しておく。二人に会うときは心を強く持て。あいつらは未熟でありながら、どうしてか妙に女を刺激するのだ。油断すると惚れてしまうぞ？」

そんな風に言う教官は酷く嬉しそうで、それでどこか照れくさそうで、なんだか見てるこっちがモヤモヤとした。

だから――――――今だから分かる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだったのだ。

それでついあんな質問をしてしまった。

「教官も惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿め。・・・だがもう一人は・・・惚れてたかも知れないな」

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなった。

教官をこんな顔をさせる、その男達が――――――羨ましい。

そして、出会ってわかった。戦って、理解した。

強さとは――――――――――何なんなのか

その答えは一つでは無いだろう。

けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった。

『強さって言うのは自分の存在を示すもの。自分のあり方を示すものだと僕は思う』

・・・そうなのか？

『だって貴方も強くなりたいから織斑先生になろうとしたんでしょう？』

それは・・・・

『人は誰しも、憧れるものを抱いてそれを目指している。それが間違いとはいいません。だが・・・」

だが・・・・・？

『自分は自分以外にはなれない。それをわかってほしい』

・・・・自分以外にはなれない。

『他の人を目指しても絶対に強くなれない。結局は自分が強くならなきゃいけない』

そういって、男は微笑を浮かべた。

『少なくともそれが僕の在り方。他人に左右される人生なんてゴメンだからね』

――――――――では、お前は・・・・・・？お前は何故強くあろうとする？どうして強い？

『強くないよ。僕は全く強くない』

断言。その言葉に私はポカンとしてしまう。

あれほどの力を持っていてなお、強くないという。それが理解できない。

『けど、もし僕が強いっていうのなら、それは――――――』

――――――――それは・・・？

『弱さを知ってるから、守りたいものがあるから強いんだと思う』

――――――――――。

『それが僕の強さかな？僕は両手で抱えるくらいの人は守ってみたい。けれど僕はまだまだ弱い。それを分かってるから』

――――――それはまるで・・・あの人のようだ。

『けれど僕は僕さ。だから僕が守りたいのさ。もちろん貴方もね、ラウラ・ボーデヴィッヒ』

そういわれて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守って見せるよ』

そういわれて、私は――――――――ああ、そうか。これが・・・そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。

こいつの前では、私はただの十五歳なのだと、そしてただの『女』なのだと。

――――――『インフィニット・ゼロ』・・・・・・・・いや、桐谷、楓。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

15話　強さとは・・・どういうものか（後書き）

ラウラフラグ何とか立てました。

１４４５０文字はほんとに疲れた。

それと感想待ってます。

１６話　戦いの後・・・・（前書き）

さっさと書いて更新しました。

これでＩＳは２巻まで終わりました。

※すいませんが、すこし修正しました。

16話　戦いの後・・・・

「う、ぁ・・・・・・」

ぼやっとした光が天井から降り注ぐのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「ここは・・・どこだ・・・？」

ラウラはまだ上手く働かない頭を総動員して、状況を把握しようと、とりあえず手を動かす。

すると・・・・・・。

コンッ・・・。

「ん・・・？なんだ・・・？」

手に何かが当たる感触がしたのでそこに目線を向けると・・・・。

「スゥ・・・・・スゥ・・・・・・・・」

「！？」

ベットの傍で幸福そうに寝ている楓がいらっしゃった。

ラウラは驚いて危うくベットから落ちてしまいそうだったが、何とか持ちこたえた。

しかしラウラは混乱した。それはもう派手に大胆に。

（ど、どういうことだ!?な、な、なぜこいつが私の側で寝ているのだ!?）

「気がついたのか」

その声は聞き覚えがある――――――どころではない。自分が敬愛してやまない教官こと織斑千冬だ。

しかし今の状況が、状況なのでラウラはうまく立ち回ることが出来ず、

「あ・・・・え・・・・・う・・・・」

こんな返事しか出来なかった。

しかしそれを気にも留めずに千冬は喋る。

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。それと脳にも負担がかかっている。しばらくは頭が上手く働かないし、身体は動けないだろうから無理はするな」

そこでやっと現実に戻って来たラウラは、自分に何があったか聞いた。

「何が・・・・・起きたのですか・・・・・・・・？」

上半身を起こしながら聞くが、しかし無理やり身体を動かしたので、ラウラの身体に痛みが走る。

けれど瞳はまっすぐ千冬を見ていた。
治療のために眼帯が外されている左目は、右目の赤色とは違い、金色だった。
そのオッドアイが真っ直ぐ問いかける。
「ふう・・・。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」
しかしそれで諦める相手でも無いと分かっているので、他言無用と言うことを沈黙で伝えると、ゆっくりと言葉を紡いだ。
「ＶＴシステムは知っているな？」
「はい・・・正式名称はヴァルキリー・トレース・システム・・・。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは・・・・・」
「そう。ＩＳ条約でどこの国家、組織、企業においてその研究、開発、使用を禁止している。だがそれがお前のＩＳに積まれていた。ちなみに桐谷が騒ぎを収めた」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「ＶＴシステムは巧妙に隠されていた。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思・・・いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。
現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会から強制審査が入るだろう」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅぅっとシーツを握り締めた。
その視線は何時の間にか俯いていた。
「私が・・・・・・望んだからですね」
あなたになることを。
その言葉は口にはしなかったが、千冬には伝わった。
「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」
「は、はいっ！」
「お前は誰だ？」
「わ、私・・・・・・。私・・・・・・・・は・・・・・・・・・・」
その言葉の続きが出ない。今の状態で自分がラウラであるとは言えなかった。
「誰でも無いなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。
何、時間は山のようにあるぞ。何せ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。
その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」
「あ・・・・・・・・・・」

千冬の言葉は意外だった。まさか自分を励ましてくれるとは思ってもみなかったラウラは、ポカンと口を開けて手の力が抜けた。

そのときにうっかり手が傍で寝ている楓の頭に当たった。

「うぅうん・・・・・・・」

さいわい楓は呻くだけで起きなかった。それをみて千冬は言い忘れたかのように話す。

「桐谷は騒ぎを治めた後、気絶しているお前を保健室まで運び、ずっと付き添っていたぞ。
大方、自分がお前を気絶させたからだろうが、十分程度たったら眠ってしまった。わかったか？」

「は、はい・・・」

そして千冬は席を立ちベットから離れる。仕事に戻るようだ。

「ああ、これも伝えておこう」

ドアに手を掛けたところで振り向かず言葉を投げかける。

「お前のＩＳに積まれていたＶＴシステムは、何らかの改造を受けていたらしい。そこにあるはずの無い機体の能力もトレースしていた」

「え・・・・・・？」

疑問の声を上げるラウラに千冬は微笑を浮かべながら話す。

「まあ、気にしても仕方ないだろう。最後に忠告だ」

今度はちゃんとラウラの方を向き話す。

「お前は私にはなれないぞ。こうみえても私は心労が絶えないからな」

ニヤリと笑い、千冬は部屋を去っていた。

部屋には寝てる楓とラウラ。

ラウラはすぐ傍で寝ている楓に目線を動かした。

「スゥ・・・・・・スゥ・・・・・・」

相変わらず幸福そうに寝ている楓を見て、ラウラは急におかしくなった。

「ふ、ふふ・・・ははっ」

これが裏の世界では知らない者がいないという『インフィニット・ゼロ』と言えば、何人の人が信じるか。

無意識にラウラは楓の髪を撫でる。

その髪は触っているのかどうかすら分からないほどにサラリとしていて、すぐに手の間からすり抜ける。

その髪に隠れていた楓の寝顔を見て思った事。

（結構可愛い寝顔だな・・・）

ついつい考えてしまったが、顔を真っ赤にして振り払う。

そんな事をしてながら楓を見ていると、私に言ってくれた言葉を思い出す。

（自分は自分以外にはなれない・・・・・・・）

なぜそんな簡単な事が、今まで分からなかったのかラウラ自身も驚いている。

「これは・・・・私の完敗だな・・・・・」

しかし・・・負けたと言うのに妙に清々しい・・・それにどこか心地よい。

この気持ちは今まで体験したことは無い。だから例えることはできない。

だが――――――――

「こういうのも・・・悪くは無いな・・・・」

そう、これがはじまりなのだから・・・私、ラウラ・ボーデヴィッヒの物語は――――――。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxx

「あ～～あ、頭と・・・首が痛い・・・・」

ども、久しぶりに平穏な桐谷楓です。

さきほどまでラウラさんの病室で寝ていたのだけれど、アレの使いすぎで頭が痛いし、ラウラさんの病室での寝方が悪かったらしく首も痛い。

ちなみに、トーナメント時の色々とやってしまったことについては、ラウラさんにちゃんと謝った。

しかし”自分も悪かったからいい”と気にして無い様子だったのでよかった。

そして今はご飯を食べるために食堂へ向っている。

「やっほ～～かえっち～～。トーナメント、カッコよかったよ～～」

この声は間違いない。っていうか間違えるはず無い。

「ありがとうございます。本音さん。それとあだ名そろそろ止めてくれませんか？」

「無理なご相談なのだよ～～。じゃあね、かえっち～～」

それだけ言って僕とは逆方向に向って走って行く。

「さて、そろそろお腹すいたな」

そうこうしている内に食堂に着いた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxx

一夏とシャルルは仲良く飯を食べていた。

僕もそこらの定食を取って二人の食べてる場所に行った。

「おっ楓。聞いたぜ、おまえラウラに勝ったんだってな」

「でもあれは・・・・」

二対一だったから勝てたと言おうとしたら、シャルルが割り込む。

「ラウラさん大丈夫だった？」

「え？結構平気そうでしたよ」

「そう」

自分で聞いておいて返事は冷めたい感じで返すシャルル。

なんだろう?何か知らないけどちょっと怒っている。
話を変えるために僕は違う話題をチョイスした。
「そういえばトーナメントは中止らしいね」
「そりゃそうだろ。俺はそん時寝てたが、すげぇ騒ぎになったらしいじゃねぇか」
そう、トーナメントは学園側が不慮の事故と言うことにして中止となった。
実際の事を知っているのは僕とシャルル、それに一部の生徒及び先生だけ。
僕やシャルルには口止めとしての書類がドサッと渡された。
それは置いといて。
「さっき女子達が、泣きながら走り去ったことについて何か知ってる?」
「いや、俺は知らない。そのあとなんか知らんが箒に殴られたし」
「僕も知らない。そしてあれは一夏が悪いよ」
「そうなのか?女子って言うのはよく分からん」
「奇遇だね。僕もだよ一夏」

本当に意味が分からない。トーナメントが中止になっただけで何故泣くのか？

一人ならまだしも何十人も泣くのはおかしい。

これはＩＳ学園七不思議の一つとして登録した方がいいね。

「あ、桐谷君たちはここにいたんですね。それと桐谷君とデュノア君はお疲れ様でした」

話しかけてきたのは山田先生。

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへん、と言う感じに胸を張る山田先生。あの大きな膨らみが重たげにゆさっと揺れた。

山田先生とは前にあんなことがあったので妙に意識してしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「楓のスケベ」

ぼそっとした呟きだったが、僕には聞こえた。

「ま、待ってください、シャルル！誤解ですから！！」

「ふん。どうだか」

さっきからシャルルの機嫌が妙に悪い。

なんなんだ・・・一夏が何かして僕はそのとばっちりを食らってるんじゃないのか？

だって僕は何かした覚えは無いし・・・・多分。

「？　どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません」

「そうですか。それよりも朗報です！」

グッと山田先生が両手拳を握り締めてのガッツポーズ。

それでまた、胸の膨らみが・・・いや考えるのはよそう。まだ死にたくないし。

「なんとですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「「おお！そうなんですか！？」」

僕と一夏の声がハモった。この頃僕はハモることが多い。

「実はですねー。今日は大浴場のボイラー点検なので、元々生徒は使えない日なんです。ですけど点検事態はもう終わったので、それ

なら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよ！」

すばらしい！！今まで不幸続きだったのは、このための試練だったのか！

実は僕はお風呂が大好きなのである。

前にちょっと一夏と、お風呂について話したら話がすごいヒートアップした。

一夏も僕と同じくらいお風呂が大好きらしい。

さらに、ここのお風呂は大浴場！！こんなに嬉しいことは無い！！

僕は今日始めてＩＳ学園で感動の涙を流した。

思えばＩＳ学園で流す涙は殆どが不幸の涙だったからなぁ・・・。

一夏は無意識のうちに山田先生の手を握っている。

シャルルはそんなに変化はなかった。うーん、フランス人はあまりお風呂は好きじゃないのかな？

「と、とにかくですね三人は早速お風呂に入ってください。今日の疲れも、肩まで浸かれば疲労もスッキリですよ！」

若干照れた山田先生が僕らを促す。

「はい！それじゃあ早速風呂に行きましょう！」

「そうそう！早くお風呂に――――――――あ」

勢いよく返事する一夏に賛同するように返事したが、あることに気付いた。

『三人は』・・・三人、それは僕と一夏・・・それにシャルルだ。

ヤバイ、心のアラートは限界まで鳴り響いている。

シャルルはまだ男子と言うことで通しているのだ。

しかも一夏はシャルルが女だということは知らない。

小声でシャルルに意見を求める。

（シャ、シャルル・・・どうします？）

（どうしますって・・・どうしよう？）

（・・・・・着替えを取りにいきながら、何かしらの案を考えておきましょう・・・）

（そ、そうだね・・・）

そして上機嫌で部屋の着替えを取りに行く一夏を尻目に、僕とシャルルは何とかいい案を考えるが全く浮かばない。

そして何時の間にか――――――――

「あ、来ましたね。それじゃあどうぞ！一番風呂ですよ！」

「はい！」

「「ど、どうも・・・」」

上機嫌で返事する一夏と暗い感じで返事する僕とシャルル。

時は脱衣所、一人は女子、二人は男子。

「どうしたんだ？二人とも。元気が無いぞ？それに楓、さっきの元気はどうした？」

「さ、さあ・・・？何処かへ飛び立ったんじゃない？」

一夏の言葉をテキトーに返事する僕。はっきり言って今は風呂どころではない。

僕が社会的に死ぬかどうかの出戸際なのだ。

とにかく一夏を何とかしないと・・・。

「ん？お前ら着替えないのか？」

すでにタオル一枚だけの一夏。シャルルは両手で顔を覆っている。

「先に行ってるぞ」

「あ、うん・・・ごゆっくり」

一夏はさきに大浴場に入る。

なんだか、一夏についての問題は普通に片付いた。問題は・・・・・・。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

これからどうするか・・・・・。

いつまでもこのままではいけないだろうし・・・。はっきり言って僕も早く風呂に入りたい。

だけどシャルルも入りたいだろうしなぁ・・・。

でもシャルルと一緒に風呂に入ろうなんてもってのほか。

そんなことすれば僕は夜空の星になるだろう。

「か、楓・・・？」

「え！？な、何ですか！？」

ついつい変な声で返事をしてしまった。

「僕はここで時間を潰してるから、楓はお風呂に入っちゃいなよ」

「え？でも・・・」

「僕の事はいいから。部屋のシャワーで我慢するよ」

「うーん・・・・」

確かに多分それがこの場の一番の解決策だと思うけど・・・なんかシャルルに申し訳ない。

「・・・・・いいんですか？」

「う、うん。大丈夫」

「ありがとうございます！いつか必ずお礼しますから！」

やった！！やった！！ついにお風呂だ！お風呂！

シャルルの視界に入らないように場所を移動して着替える。

男子は着替えが楽だから三十秒も経たずに終わる。

「それじゃあ入ってきます」

「う、うんっ。ご、ごゆっくり」

？シャルルが顔を真っ赤にしている。なぜ？そりゃあ僕の格好はタオル一枚ですが・・・。

まあ、気にしても仕方ないのでそのまま入った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「おお！これはスゴイ！」

広い！！僕の家の浴場にギリギリだけど勝ってる広さだ！！

あ、僕の家についてはまたの機会に語ろう。

「しかし楽しみは後にとっておく。と言うわけで先に身体を洗っておこう」

そして僕は、それはもう隅々までよく身体を洗ったからついに！！

「アハハハハッ！！」

大声を出しても大丈夫！！普通の人が見たら迷わず救急車を呼ぶような光景だが、生憎僕にはそんな事を気にしている余裕はなかった。

ちなみに一夏は僕とは違う場所にいるらしい。姿は確認できない。

しかしそんなことはどうでもいい。

そんなことより、湯船へのダイブである。（飛び込まないが）

「はぁぁ～～・・・・・・」

いいなぁ～～。この疲労や体の凝りを溶かしていく虚脱感。無駄な思考などを忘れさせる極楽感。

まるで自分の体が浮いてるような無重力感。それでいててちゃんと気持ちよくしてくれる適度な温度。

ただ浮いてるだけで、これらをすべて味わえるのはお風呂だけだと僕は思う。

「これは～～極楽～～なんだな～～」

変な喋り方になってしまったのだが、それも気にしていられない。

そんな事でこの極楽タイムを無駄にしたくない。それからしばらく僕は浸かっていると、

「ふぁ～～ヤバイ～～眠くなってきた～～」

これ以上ここにいると眠ってしまって溺れ死ぬかも。

仕方ないから僕は大浴場を出た。

一夏はまだ入っているらしい。溺れなきゃいいけど・・・・・。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxx

「出ました～～」

「あ、楓？待ってたよ」

声がするが、脱衣所を見渡したがシャルルらしき人影はいない。

どうやら隠れてるらしい。そりゃそうだけど。

「それじゃあ、さっさと着替えちゃいましょう」

テキパキと僕は身支度を整えて行く。

着替えは、自分のサイズよりちょっと大きい白のワイシャツと紺色の短パン。

これが僕の夜の格好。

髪は軽く拭き、髪留めでポニーテールにする。

しかしこれはシャルルが僕の部屋に来る前の格好。

シャルルが来てから僕は涼し目の寝間着だったのだけれど、間違えてこっちを持ってきてしまったので、仕方なしにこれを着ている。

「あ、楓。終わったの？待って――――――――！？」

ん？シャルルがこちらを向くなり顔を赤くしてそっぽ向く。

はて？普通の格好だと思うのかけれど・・・。

「し、下を履いてないならそう言ってよ・・・」

あ〜〜〜。なるほどなるほど。

実は僕のワイシャツは中途半端な気候である春に合わせたものであり、薄いワイシャツだけど、すこし大きいから、寒すぎず、暑過ぎないという感じなのだが、大きいので短パンがすっぽり隠れてしまうのだ。

だから人が見ればズボンを履いて無いように見えるだろう。

「大丈夫ですよ。ワイシャツで隠れてるだけですから」

早めに誤解は解いておいたほうがいいだろう。と思い僕はちゃんと言った。

「ホント？」

「本当です。それと一夏はまだかかりそうだから先に僕らで戻ってましょう」

「う、うん・・・」

歯切れの悪いシャルルを気にしながら僕らは部屋に戻っていった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxx

「ふぅ～。今日は久しぶりに充実した一日でした～」

「そ、そう。よ、よかったね」

「はい。とっても」

シャルルもシャワーを浴びて寝る準備に取り掛かる。

「それじゃあ寝ましょうか」

「う、うん・・・」

まだ歯切れの悪いシャルルを気にしながらも、僕は部屋の電気を消した。

（さて・・・お風呂のおかげで程よい感じに眠気が来てる）

もうすぐにも眠ってしまいそうだ。

しかし・・・。

「大丈夫、大丈夫・・・勇気を持て、僕・・・」

なんて独り言を言ってるシャルルだが僕は無視して眠ろうとした。

すると・・・・・・・・。

ムニュ。

変な感触が僕の背中から伝わってくる。気になり振り向くと・・・。

「ど、どうも・・・」

顔を赤くしたシャルルの顔がすぐ隣にあった。どうやらシャルルが僕のベットに潜り込んで来たらしい。

って!!なんなんだ!?なぜシャルルが僕のベットにもぐりこんでくるの!?

フランスではこれが普通なのか!?それともシャルルの趣味!?と頭の中ではこれだけ考えているのだが、身体は硬直して何の反応も示さない。

「あ、あれ?か、楓~~・・・」

シャルルの呼びかけで身体は動く。

しかし身体は密着した状態で、顔なんてニ、三センチの距離しか開いていない。

お互いの吐息がかかる。それに・・・胸も当たってる。こちらの心臓が持たないかもしれない。

しかしシャルルっていい匂いがする。これがフェロモンと言うやつだというのか。

しかしこんな状態では動くに動けない。とにかくシャルルに聞いてみた。

「シャ、シャルル？これは一体・・・？」

「その・・・大事な話だから・・・楓に聞いてほしいんだ」

「で、でしたら・・・別にこんな格好じゃなくても・・・」

「と、とにかく！聞いてほしいんだ」

「は、はあ・・・」

大事な話なら聞かないわけにはいかないだろう。とりあえず返事する。

「その・・・前にいった事なんだけど・・・」

「前のって言うと・・・学園に残るかどうかという？」

「うん。僕は学園に残ろうと思う。だって僕のここだって居場所はまだ見つかって無いし・・・」

「シャルルがそういうなら僕は全力でサポートしますよ。前にも言ったとおり決めるのはシャルルですからね。僕が口出しするのは野暮と言うものです」

「ありがと・・・それに・・・もう一つ・・・」

「もう一つ・・・・・？」

「楓が僕のあり方を示してくれたから、僕はこんな決断を出来たんだと思う。ちょっと前の僕ならこんなことは考え付かなかっただろ

うから」

「僕は・・・他人に人生を左右されたくないだけです。そんな大それたものじゃありません」

「それでも、楓と言う存在があったから僕は前に進めたんだ」

「それならよかったですけどね」

僕のあり方が誰かの助けになればそれは嬉しいことだけどね。

「最後に、目標が出来たんだ。楓のおかげでね」

「え？そうなんですか？」

「ふふっ。楓って自分の事に関するとスゴイ鈍感だよね。嫌味なくらいに」

「そ、それは・・・・・ごめん」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕の事はこれからシャルロットって呼んで。二人きりのときだけでいいから」

「それが本当の・・・・？」

「そう。僕の名前。母さんがくれた、本当の名前」

名前・・・・・か・・・・・・。

「わかりました。シャルロットさん」

「さん付け？」

「いや、だって女性ですし・・・」

「・・・ま、いっか」

嬉しそうだがどこか名残惜しそうな表情のシャルル――――じゃなくてシャルロットさん。

初めてかも知れない。こんな歳相応の表情を君が見せてくれるのは・・・・・。

「と、ところで・・・この体勢はどうにかなりませんか・・・・？」

改めてスゴイことしていると自分でも思う。すこし動けばキスできる距離だし・・・。

「そ、そうだねっ！ぼ、僕はなにやってるんだろうねっ！？」

パッと離れて自分のベットに戻るシャルロットさん。

いくら僕が女みたいな容姿だからって・・・・あれは男に対してやることじゃないと・・・。

「お、おやすみっ」

「はい、おやすみ」

シャルルが布団を被ったのを確認して、僕も布団を被った。

（いつか話す日が来てしまうのかな・・・・・。僕らや・・・・・・・・アイツらの事・・・・）

天井を見ながら思う。出来れば話したくないけど・・・話さなければならないかもしれない。

（名前・・・か・・・・。僕は・・・・・）

しかしその言葉の続きは振り払う。

（復讐と・・・過ちと・・・仲間・・・それに・・・ＩＳ・・・）

いつのまにか顔が険しくなっていたので、自分で苦笑した。

（考えても無駄かな・・・・・もう寝よ・・・・）

そして僕は眠った。

今はこの幸せを噛み締めないと・・・・・・・。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘ

翌日。朝のホームルームにはシャルロットさんの姿は無い。

”先に行ってて”といわれたので先に来たのだが何かあったのだろか？

ちなみにラウラさんの姿もなかった。まあ、昨日の今日だから無理は無いけど。

「み、みなさん、おはようございます・・・・・」

教室に入ってきた山田先生はフラフラで今のも倒れそうだった。

大丈夫なのだろうか？

「今日は転校生を紹介します・・・と言ってもすでに皆さんは知っているといいますが・・・」

？山田先生の説明はよく意味がわからなかった。疲労で変なことを口走ってしまったのかな？

「それじゃあ、入ってください」

「失礼します」

あれぇ？聞いた事のある声だったけど・・・・・。

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしくお願いします」

スカート姿のシャルロットさんがこちらに一礼。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした・・・。はぁ・・・また寮の部屋割りを組み立てなおさないと・・・」

なるほど。山田先生の疲労の源はそれか～。

――――――ん？ちょっと待ってください。

「え・・・？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね！」

「って、桐谷君、同室だから知らないって事は――――――――」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

・・・・・・・・・ナ、ナニモ、キコエナイヨー。

「フフ・・・・ウフフフ・・・・・・・」

背筋が凍る～～不気味な笑い声～～それは～～死刑宣告～～♪

バギュン！

「うわっ！」

セシリアさんがビーム撃ってきた！！

でもこんな場所で死にたくない！

「ウフフフ・・・・楓さん？覚悟は出来まして？」

「・・・・・・・・・」

怖っ！笑い声でここまで怖い人は中々いない。

バキュン！

な～～んて無駄な思考をしていたせいで、もう一度撃たれるビームに反応できなかった。

・・・・僕、死ぬのかな・・・・。最後にお風呂に入らしてくれない？無理か、ハハハ。

覚悟して目を閉じるが、いつまでたっても衝撃は来ない。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

目を開けるとセシリアさんと僕の間にＩＳを展開したラウラさんがいた。

ＡＩＣの応用でビームを外にずらしたらしい。

「ありがとうございます、ラウラさん。でもＩＳは大丈夫なんですか？」

「・・・・・かろうじてだがコアが無事だったからな。予備パーツで組み直したから問題ない」

「なるほど。なっと――――――――むぐぅ!?」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・僕はイキナリラウラさんに胸ぐらを掴まれ、そのまま引き寄せられて・・・・キスをしてしまった。

「#$%#&!#’%$!#&!?」

どういうことなんだ!?誰か!!誰か説明をプリ――――――――ズ!!

「お、お前を私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

「・・・・・Ｗｈｙ?これでも僕は男なので・・・婿なのでは?」

バカァ!!なに僕は冷静に突っ込んでいるんだ!!

「日本では気に入った相手を『嫁にする』と言うのが一般的慣わしだと聞いた。
故にお前を私の嫁にする」

何故その結論にたどり着くのか聞きたいな・・・。

ついでと言っちゃあ何ですが、クラスの人が全員硬直してます。

・・・・・うん、さっさとこの教室から退場しよう。

「先生。たった今死の予感がしたので、ちょっと保健室に行ってき

――――――わっ！」

またまたセシリアさんのライフルが火を噴く。

こりゃあ逃げ場は・・・・・窓だけだ！！

と思い窓までダッシュしたら、シャルルが僕の前に立つ。

「にこっ」

ああ・・・・エンジェルスマイル・・・・地獄に仏とはこれの事だ・・・・これで助かった・・・・。

「楓って他の女の子の前でキスしちゃんだね。僕、ビックリしちゃったぁ」

「あの・・・・シャルルさん？誤解があるようなので言っときますと、僕はしたのではなく、されたのでして・・・とにかくそのＩＳをしまってくれませんか？」

「無理だね」

無駄に左腕の盾がパージする。

そこには六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレート・スケール）》通称『盾殺し（シールド・ピアース）』。

トーナメントで使わなかったが、第二世代型最強の攻撃力を持つ武器。

「・・・・・不幸だ・・・・・」

どこかの主人公とシンクロした。貴方の気持ちがよく分かる今日この頃。

ドカァァァァァァァアアン！！

今日のホームルームは、轟音と共に生徒一人が星になったらしいです。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxx

「めんどくせぇ～～」

「そんな事言わないの。ほら、手を動かす」

「そうだぞ。そんな事ではいつまでたっても終わらない」

とある部屋の中。広さは結構ある。置いてあるモノは機械関係。

そこに、めんどくさそうにパソコンを動かす茶髪の少年と、その少年を注意する黒髪の少女、それに賛同する長い銀髪の男がいる。

「んなこと言われてもよぉ～～」

「一応命令だからな。さっさとやるぞ」

「そうそう。彼に恩を返すのが私達の決めたことなんだから」

「ふん。アイツにベタ惚れだからな、お前は」

「な、なな、何言ってるのよ！そ、そんなわけ無いじゃない！」

「顔を真っ赤にしても説得力無いぞ」

「うぅ～～～」

銀髪の男の突っ込みに、黒髪の少女はさらに顔を真っ赤にする。

「あ、こんにちは」

部屋に入ってくるのはピンク髪をポニーテールにしている少女。

「おう、お前か。ちょうどいいお前も手伝え」

「ええ！？今任務が終わって帰ってきたところなのに・・・」

「まあ、そういうな。アイツにいい印象を持たれるぜ」

「やります！！」

いきなりやる気を出したピンク髪の少女。それを黒髪の少女は睨みつけ、銀髪の男は苦笑する。

『みんな。いる？』

部屋の大型モニターに通信が入る。

「おう。何人かいないが問題ないだろ」

『そう。じゃあ『革命の騎士』の状況は？』

「今のところは７０％ぐらいだ」

『そう。いつもありがとね』

「ハッ。だったら給料上げてくれや」

『検討しておくよ。他に何か連絡はある？』

「はい。私から」

手を上げたのはピンク髪の少女。

『よろしく』

「はい。あのＩＳは輸送中に行方不明になったそうです。申し訳ありませんがそれ以上の足取りはつかめませんでした」

『いや。気にしなくていいよ。ありがとね』

「い、いえ・・・当然の事です・・・・」

顔を真っ赤にするピンク髪の少女。それをまた黒髪の少女が睨む。

『それじゃあそろそろ通信切るね』

「ああ。学園での生活、頑張れよ楓」

『分かってるって。あと夏休みには帰るから。じゃあね』

モニターの画面が消える。

「あ〜〜あ。給料が上がるならさっさと終わらせるか」

「もう。現金なんだから」

「うっせ。いいだろ別に。ラミアにいいところをとられたからって俺に当たるな」

「そ、そんなわけ無いから！！べ、別に私は楓の事なんか・・・」

「おお〜〜。ツンデレだね〜〜」

「うっさい！和人！！」

「まあまあ。和人も佳奈美も落ち着け」

「ふんっ！！」

「俺は悪くねぇだろ。アルド」

「知らん。それよりラミアの周りがピンク色なんだが・・・」

「フフッ♪／／／／／／／／」

「気にしなくていいんじゃね？」

「・・・・・ラミア・・・覚えておきなさい・・・」

「気にするな。それよりもアレだ」

銀髪の男が指をさす方向には、青と白の機体が二機ある。

「アイツも欲張りだよな。『ゼロ』と『エピオン』があるのにさらに作るなんて」

「何が起こるかわからんからな。備えあれば憂い無しと言うことだろう」

「そうかもな。ＩＳには出来ないアビリティー・・・リミット・ブレイク・アビリティーとアンリミット・オブ・アビリティーを搭載している事により、爆発的な力を持つ機体・・・・そして」

「この世を揺るがし、人々に恐れられ、存在すらも世界に黙殺された・・・忌むべき機体達・・・その名を『ＩＳＧ』いや――――」

「『Ｉｎｆｉｎｉｔｅ（インフィニット）・Ｓｕｐｅｒｉｏｒ（スペリオル）・ＧＵＮＤＡＭ（ガンダム）』――――

――――――無限の終わりは、新たな始まりだ」

序章はまだ・・・始まったばかり・・・・。

１６話　戦いの後・・・・（後書き）

新オリキャラについては今後明らかにしていきます。

感想待ってます。

17話　素晴らしきこの日常（前書き）

ハーレムって何人ぐらいがいいのでしょうか？

よくわからないので誰か教えてください。

あと長いです。

１７話　素晴らしきこの日常

「もう・・・過ちは繰り返すわけにはいかない・・・」

とある自室で少女が・・・失礼、少年が鏡を見ながら何かしらの決意を抱いていた。

「これ以上あんなことを・・・・・・」

少年かどうか疑いたくなるような容姿をした男は、拳を握り締めて呟く。

「そのためには・・・・・・！」

そして少年は制服の姿で部屋を出る。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxx

久しぶりな織斑一夏だ。

今は箒と共に食堂で朝食を食べている。ちなみに俺のメニューは納豆と焼き魚の定食。

箒は煮魚とほうれん草のおひたし。

うまそうだな。箒は俺の前に座っているからその料理に目が行ってしまう。

「隣は開いているか？」

突然声が掛けられる。この声は色々とゴタゴタがあったが、楓の仲立ちで和解したラウラだ。

「ああ。大丈夫だ」

「では失礼する」

そういって俺の隣に座るラウラ。もってるメニューはパンとコーンスープだ。

箒のも、うまそうだが、ラウラの飯もうまそうだな。

ついつい隣の料理にも目が行く。

「ん？やらんぞ」

俺の視線に気付いたラウラが否定の言葉を口にする。

「わかってるさ」

そう返事してまた飯を食う。やっぱりここの学食はうまいな。

ふと箒に目をやると熱心にこちらを睨んでいる。

不機嫌だな。しかし、触らぬ神に祟り無しというから触らない方がいいな。
そんな時俺は朝食を持っている楓を発見した。
座る場所がなくて困ってそうだ。
と言うわけで俺はあいつを呼んだ。
「お～い、楓～。ここ開いてるぞ」
と普通に呼びかけたつもりだったが・・・。
「ああ、一夏か。ちょうど座る場所がなくて困ってたんだ、助かるよ」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・・は？
「皆おはよう。それとラウラ。すこし場所を空けてくれないか？」
「あ、ああ・・・」

多少戸惑いながらも場所を空けるラウラ。

あいつの持っているメニューは、サラダの盛り合わせに野菜ジュース。アイツはいつも朝はこのメニューなのだ。基本的にあまり食べないからな。

「すまないな。あと、ありがとう」

席を空けたらラウラにお礼を言って座る楓。

俺等はちょっと・・・・惚けていた。

「ん？どうかしたのか？俺の顔に何か付いてるか？」

ポケーっと楓の方を見る俺たちに楓は首をかしげて聞いて来る。

「い、いや別に・・・」

「そうか。ではいただきます」

そう言ってサラダを食べていく楓・・・・。

しかし俺等は一行に動かない。それが気になったのか、楓はもう一度こちらに聞いて来る。

「本当にどうかしたのか？急がないと授業に遅れるぞ。それとご馳走様」

はやっ。サラダと野菜ジュースを平らげた楓は片付けて食堂を後に

した。

楓が立ち去った後俺等は緊急会議を開いた。

「どういうことだ?楓の喋り方がおかしくなったぞ」

「おかしくは無いが・・・何と言うか・・・似合わないよな」

「一体なんだというのだ・・・頭でも打ったか?」

上から箒、俺、ラウラだ。

そう、楓の喋り方が変わっていたのだ。何と言うかクールっぽい喋り方になっていた。

しかし突然な状況だったので俺たちは正常な反応が返せなかった。

だがアイツが男っぽい喋り方になると、ラウラや箒が喋っているように聞こえるから不思議だよな。

「しかし、気にしてもなんだ。今は遅刻しないようにしよう」

俺の提案は最もだったらしく二人とも朝食を片付けて教室へと向った。

ｘ
ｘｘ
ｘｘｘ
ｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘ
ｘｘｘ
ｘｘ
ｘｘｘ

「今日は通常授業の日だ。ＩＳ学園生とはいえお前達も扱いは高校生なのだから、赤点などは取ってくれるなよ」

そうなのだ。俺等はいくらＩＳ操縦者と言っても高校生。

平均的な高校生の知識は持っておかなければならない。と言うわけで回数は少ないが普通の授業をするのだ。

今は織斑先生・・・って言うか千冬姉が教室で連絡事項を伝えてる。

「それと来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間で羽目を外しすぎないように」

そう。七月頭の校外実習――――――すなわち臨海学校なのだ。

三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間。

もちろんそこは海なので、そこに咲き乱れる十代女子。

先週からずっとテンションが上がりっぱなしなのである。

俺はちなみに水着を買うのがめんどくさい。しかしまあ、それを素直に言ったら鈴たちから猛注意を、これでもか！って受けたので仕方なく買わないといけない。

「ではＳＨＲを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励め。それとデュノアと桐谷。ちゃんと放課後は残って置けよ」

「は、はい・・・・」

「分かってます」

上からシャルロット、楓だ。

今日はシャルロット――――――っていうかシャル（命名：俺）は今日遅刻をしていた。

理由は寝坊らしい。真面目なアイツが珍しいなぁと素直に思った。

そのペナルティとして放課後に教室の掃除を言い渡されたのだが、楓が”俺も残りますよ”と言ったのでシャルの手伝いとして放課後残ることとなった。

そうそう楓と言えば――――――。

（なんで口調を変えたんだ？・・・うーん・・・・・・あとで鈴にでも聞いてみよう）

幼なじみだと言うなら適任だろう。

実は楓の喋り方が変わったことにクラスの皆も驚いていた。
まあ、カッコイイとか案外好評らしいけど。
その口調の変わった理由を聞く勇者は現れなかったけどな。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxx

「なるほど。それはまるっきり小学校のころの口調だわ」
休み時間、鈴に楓の事を聞いたらこんな返事が返ってきた。
ちなみに場所は屋上。メンバーは楓以外は何時もの通り。
「楓って小学校のころはあんな口調だったのか？」
「ええ。少なくとも私が知る楓はね」
「じゃあ何で今までの口調は？」
「さあ？小四のころまではあんな口調じゃなかったけど・・・もし

かして」

「もしかして？」

「アイツの両親・・・・・・五年前の事故で亡くなってるのよ。もしかしてそれが・・・」

「あ、すまん・・・そんな事があったのか・・・」

「・・・私も聞いたときはショックだったわ。・・・楓の両親にはよくしてもらったから・・・」

ずーんと場の空気が一気に重くなる。

「で、でも！それが楓の口調の変わった理由かどうかは知らないわよ！？」

多少脱線した話を鈴がなんとか戻してくれたおかげで、場の空気もすこしは和んだ。

「しかしそうなると・・・どういうことなんだろうな・・・」

結局楓の口調が元に戻ったことぐらいしか分からなかった・・・あとは・・・本人に聞くしかいないよな。

「っていうか本人に聞いてみればいいんじゃないの？」

以心伝心。鈴も俺と同じことを考えていたらしい・・・が。

「生憎俺にそんな勇気無い」

「ヘタレ。じゃあ私が聞くわ」

そんなこんなで鈴が楓の口調の変わった理由を聞くことが決定した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxx

「楓、ちょっといい？」

「ん？鈴か、それに皆も。別にかまわないよ」

楓は図書室で本を読んでいた。分厚い本で名前は英語で分からなかった。コイツ本当に頭いいな。

”あいつって本が好きだからよくここに来る”と鈴情報で来てみれば、見事にビンゴだった。

「それで何か用か？」

「ええ。楓ってなんで口調変えたの？」

うおっ！直球！鈴って容赦ないな。・・・・まあ、鈴の性格なら回りくどいのは嫌いだろうケド。

「・・・変えたと言うより戻したの方がいいじゃないか？」

「じゃあ何で今更戻したの？」

・・・・・なんか尋問みたいだ。別に楓が何か悪いことしたわけじゃないのだが・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

楓は本を置き沈黙・・・。眼を瞑り両腕を組む。

空調の風で僅かに揺れる黒と銀の髪が、幻想的な雰囲気を出してる。

しかし・・・こう見るとほんとに女みたいだよなコイツ。

女の格好をすれば誰もコイツが男だとは思わないだろ。

現に男の制服を着ていても、女と疑いたくなるような容姿だしな。

他の皆もいつの間にか見惚れているし。

「・・・・・そんなおかしいか？この口調」

「何時の間にか、アンタの敬語口調が自然になっちゃったのかもね」

「ヒドイな。小学校のころはおかしいとか言ってなかったじゃないか」

「そりゃあアンタは、まだあのころの方が男っぽかった・・・っけ？」

「・・・なんで歳を重ねるごとに女のような容姿になるんだろうか・・・はぁ・・・・・」

すっかり落ち込む楓。しかし楓の言葉がホントなら小学校の方が男っぽかったのか?見てみたいな。

「見てみる?小学校のころの楓」

「え?あるのか?」

「ええ。ちょっと待って」

ガサゴソとポケットから何かの写真を出す。

「これ。こっちが私でその右隣が楓よ」

「ああこれか。鈴が転校する時にクラスのみんなで撮った集合写真」

どうやらそれは鈴の転校する時に撮られた写真らしい。

三十人ぐらいの子供達の中の一番前+真ん中にいるのが鈴だな。

今とは背とかもあまり変わってない。

「おまえほんとに変わって無いな」

「うるさいわね。発育が遅いだけよ!」

写真の鈴を指差しながらからかう楓に怒る鈴。

「で?楓はどれだ?」

ラウラが辛抱できないのか鈴に聞いて来る。

「だからこれだって。私のすぐ隣にいる奴」

指差しながら見る俺等。

指差されているのは鈴のすぐ右隣。鈴の隣で笑顔でピースしている黒い髪の女子。

「これなのか?」

「そうよ」

「・・・笑いたきゃ笑え・・・どうせこのころから俺は女っぽいですよ・・・・・・」

もう殆どヤケクソな感じに言う楓。

写真についてもうすこし詳しい描写をすると、ジーパン履いてピンクの長袖を着ていて、長い髪をポニーテールにしている。

「ね?ビックリするでしょ?これが楓なの。このころから楓は女っぽいのよ」

「はぁ!?これ楓!?どう見ても女子だろ!」

「って言われても楓なんだからしょうがないじゃない」

「・・・・同じ名前ってだけじゃあ・・・・」

「日本人は楓だけよ」

確かに。見る限り楓と思われる人物以外は、皆中国人のような特徴的な容姿をしていた。

「・・・・・・そのころはまだ物心ついてなくて・・・・両親の言われるがままにいろんな服を着ていて・・・それで・・・あんな感じな服も着ていたりしたんだ・・・・・・・・」

見事な解説ありがとう。

そんなこんなで沈む楓を慰めていると唐突にシャルが”あれ?”と声を上げる。

「どうした?」

「いや・・・楓以外にもう一人日本人っぽい人が・・・これなんだけど・・・」

「どれどれ・・・」

シャルが指差すのは楓の隣に並んでる一人の女子。楓の手を握りながらピースしている。

「楓。この人って誰だ?」

何気なく俺は聞いたと思ったんだが・・・。

「！！ッ」

唐突に驚きの顔をしたがすぐにいつもの顔に戻った。

「・・・・それは俺の妹だ。一歳年下だけど、記念ってことで一緒に撮ったんだ」

「なるほど」

「ああ。それだけだ」

でもちょっと引っかかるな・・・あの驚き。

まるであえて触れてなかったけど、触れられたので驚いたって感じだ。

「まあ、昔の話はいいだろ。それで結局何のようだ」

「だから。何で喋り方を元に戻したのかって聞いてるのよ」

「そ、それは・・・・・・」

突然黙り込む楓。

しかし次の言葉に俺等はポカンとするしかなかった。

「そのほうが・・・男っぽいだろうから・・・・」

「・・・・へ？それだけ？」

思わず聞き返してしまったがそれがいけなかった。

「だって！！男っぽければ前みたいにイキナリ・・・・キ、キスされることも無いと思ったから・・・」

口調もまた変わってしまっている。

しかしすべての疑問は解けた。

どうやら楓は前の事件について気にしていたらしい。俺は主犯のラウラを見る。

しかしラウラは首をかしげてよく分かっていない。お～い、お前が原因だぞ～～。

そしたら鈴が口を開く。

「でも本当にその喋り方キモイよ」

「グサッ！・・・そ、そんなに・・・・？」

「キモイ」

「グサグサッ！！・・・・・・・・そ、そんな・・・バカな・・・・・

」

倒れる楓。幻覚かどうか知らんが楓に三本ぐらい槍が刺さった。

「・・・わかった。喋り方は戻すよ。それとシャルさん」

「へ！？な、なにかな！？」

「掃除の事ですけど忘れないで下さいよ」

「わ、わかってるよ」

「そうですか。安心しました。それじゃあ僕は先に教室に戻ってますね」

喋り方を戻した楓は、本を本棚に返して図書室を出る。

「これで解決ね」

「ああ。しかしまさかあんな理由だったとは・・・・」

「楓にも楓の考えがあったんじゃないの？」

「ま、直ったからいいっこ無しだな」

「そうね」

そして俺等も教室に戻っていった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「そう・・・その時計塔で・・・・・時間は明日の九時かな。うん・・・うん・・・それじゃあね」

「?どうかした楓」

放課後。楓とシャルロットが教室に残り、掃除をしている。

その最中に楓が誰かと連絡を取っているので、シャルロットが聞く。

「ああ。明日の待ち合わせですね」

「え?一夏と出かけるの?」

「いえ。スファナ・フィオーネっていう女の子ですよ」

「え!?女の子!?」

「ええ。そうですよ」

「えっと・・・それってもしかして・・・・・その・・・デート?」

「そうだと思いますね」

ビシッ！！とシャルロットが固まる。目は涙目。

それにうろたえる楓。

「え！？な、何で涙目なんですか！？」

「い、いや、何でもないよ！？ゴミが目に入っただけだから」

「そうなんですか。安心しました」

「うん・・・そうだね・・・」

それからシャルロットはずっと浮かない表情をしていた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxx

翌日。時刻は８：３０。

僕、桐谷楓は街の時計塔前でスファナと待ち合わせしている。

さすがに早すぎたかスファナはいなかった。

服装は青と白のチェック柄の半袖で、ジーパンを履いている。

出来るだけ男っぽくしてきたつもり。

しかし・・・・・

「ねぇねぇ。君カワイイよね～～。どっか出かけない？」

「そうそう。暇でしょ～～」

五人組の男達にナンパされてしまった。

おかしいな・・・髪もポニーテールにしたし、こんなに男っぽい格好をしたのに・・・。

ていうか女尊男卑の風潮が強いのに、よくナンパできるよね。

「僕は男なので、他の人に当たってください」

そういうとピシッと動きが固まり、すぐに解散していった。

「なんでこうなるんだろ」

「それは・・・・・楓がそういう顔だから・・・・・」

「？今軽く傷つけられたけど・・・」

声が聞こえたから振り返ったら、ワンピース姿のスファナがいた。

「来ましたか。それじゃあ街を案内しますよ」

「・・・・期待してる・・・・」

「はいはい・・・」

そうして僕たちは街に繰り出した。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

楓とスファナが街を歩いて行く。

そんな様子を遠くから見つめている二つの影があった。

二人が青になった横断歩道を渡って人ごみに消えると、頃合いとばかりに茂みから姿を現す二つの影。

一人は優雅なブロンズヘアー。もう一人はショートなブロンドヘアー。

用はシャルロットとセシリアですね。

「・・・・・やっぱやめない？」

「・・・・・しかしこれを逃すと・・・」

「で、でもさぁ・・・」

何を怪しい会話をしてるのか・・・通行人の視線にも気付かず喋る二人。

「ほう、楽しそうだな。では私も混ぜるがいい」

「「！？」」

散々通行人から不振な目線で見られたにもかかわらず、喋る二人もさすがに背後から声を掛けられれば反応せざる終えない。

そこにいたのは・・・何だかんだで、そんなこんなになったラウラだった。

「え！？ら、ラウラ！？い、いつからそこに！？」

「今しがただ。それとあまり大声を出すな。通行人の注目を浴びるぞ」

シャルロットたちは、今まで自分の世界に入っていたことを自覚して、顔を赤くして黙った。

「それよりも私は楓の追跡をするのでこれで」

スタスタと歩くラウラ。それをを慌てて止める二人。

「ちょ、ちょっと！！」

「ま、待ってください！！追ってどうしようといいますの！？」

「決まってるだろう。私も交ざる。それだけだ」

あっさりと言われて、逆に怯んでしまう二人。

こうまでストレートに言われると、なんかもう悔しいのか羨ましいのか分からない。

「ま、待って待って。もしかしたら誤解があるかもしれないから、まずは様子を見よ？」

「そうだな」

「そうですわね。焦ったところで何もいいことはありませんわ」

こうして美少女ストーキングトリオが誕生した。

通行人はもはや触れることもしなかった。一応、親切で。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxx

「ここが駅前のショッピングモール。大体のものはここで揃いますよ」

「うん・・・・あれは・・・・？」

「あれは地下鉄の入口ですね。交通網の中心なのですべての市と繋がってます」

「うん・・・・・」

僕とスファナは順調に街を歩いている。途中ナンパされたけど・・・五回。

しかもすべて僕は女性と間違えられた。ショックです・・・・・・。

あ、そういえば。

「スファナって校外実習に来ますよね？」

「うん・・・それまでには転入する・・・・・・」

「水着とかは？」

「・・・学校指定の・・・・えっと・・・・・・あれ・・・・・？」

「学校指定と言うと・・・スクール水着でしたね。それでいいんですか？」

「・・・別のがいいの・・・・・・・？」

「いやその・・・僕は水着を買わないといけないので、ついでにどうかな～っと・・・」

「・・・・・そう・・・・・」

「でもスファナがいらないなら別にいいですね」

「・・・・・水着買う？・・・・・・」

「え？いいんですか？スファナが暇になりますよ？」

「・・・・・今日のお礼・・・・・」

「それではお言葉に甘えましょう」

そして僕らはショッピングモールに入っていった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxx

「時間はかかりませんから。三十分ぐらいしたらここに集合と言うことで」

「うん・・・・わかった・・・・」

スファナは女性用の水着売り場へ向う。

「水着か・・・なんでもいいかな・・・・・」

水着なんて小学校から使って無いし。

テキトーに歩いてると変な色の水着がスゴイ目立つ。

そんな中僕はシンプルなネイビー色の水着を取る。

「別に目立たつために穿くわけじゃないし。シンプル・イズ・ベストってことで」

誰に対しての意見なのかわからないまま僕は集合場所へ向った。

するとスファナがすでにいた。

「あれ?早かったですね」

「・・・・アドバイスして貰いたくて・・・・・」

相変わらず髪で顔が見えないのでコミニケーションが取りにくい。

「あ、そうですか。じゃあ向いましょう」

そうして僕は女性用の水着場所へ向った。

「意外と種類がありますね」

「・・・うん・・・だからどれがいいか・・・・分からなくて・・・・」

様々な形や色の水着が鎮座していて、確かに選択に迷うね。

「何でも似合いそうですけどね。スファナなら」

これは正直な気持ち。

前に見たスファナの顔は、人形のように整った容姿をしていて、どんなモノでも着こなしてしまいそうと思う。

「・・・・・ありがとう・・・・・・」

お礼を言うスファナ。やっぱいい子だな。

「それはそうと。男の僕がここにいても誰も不審に思わないのでしょうか？」

最初は勇気を出して入ったけど、案外簡単に受け入れられた僕。

なんだろう・・・この注意されたくないのに物足りない感じ・・・。

「・・・・楓。諦めよう・・・・」

「・・・・・スファナって意外と毒舌ですね・・・・・・」

そんなこんなで水着を選んで、最終的に花柄の水着に決まった。
形状はよくわからないので省く。
そして会計を済ませようとレジに向うと・・・・・・。
「あっ。織斑先生」
黒の水着を持っている織斑先生とばったり会った。
「ん？桐谷か。なぜお前が女性用水着売り場から出てくるんだ？そっちに目覚めたか？」
「男が女性用水着売り場に入っていけない法律があるなら、先に言って置いてほしいモノですね」
「そうだな。っとフィオーネがいるな。街案内か？」
「ええ。世話係ですから」
「ご苦労なことだ。それとフィオーネ」
「は、はい・・・」
心なしかすこし声がうろたえたような・・・・。
「髪を切れ。それでは転入早々、校則に引っかかるぞ」
「・・・わかりました・・・」

髪を切ったスファナも見てみたいな。

しかし突然――――――。

プルルルルルル。

誰かの携帯が鳴る。音源は意外や意外、スファナだった。

携帯を開き誰かと連絡を取る。それが一段落して僕らの方へ戻って来た。

「・・・ゴメン楓・・・。アルドから呼び出しされた・・・」

「ああ。そういえばスファナも入ったのでしたね。内容は？」

「・・・・試験運転・・・・・」

「なるほど。期待してますよ？『豪光の騎士』」

「・・・わかったよ。『創翼の騎士』・・・・・・」

そしてスファナは去って行く。そして真剣な顔の織斑先生。

「・・・・何をするつもりだ？」

「・・・貴方がそれを言いますか？・・・・・ここでは話せませんね。場所を変えましょう。

つけてる人も居るらしいですし」

ギクッ。なんて音がした。

「そ、そろそろ出てこようと思ってたよ?・・・」

「そ、そうですわ。タ、タイミングを見失ってしまったので」

出てきたのはシャルさんとセシリアさんだった。どうやらさっきの話は聞かれた無いらしい。

「ではこれからはついてくるなよ」

「ええ。今から織斑先生と大事な話があるので」

「ええ!?そ、その大事な話と言うのは・・・・・」

セシリアさんが聞いてくる。まあそうだろうね、気になるよね。

「さっきの子。スファナって言うんですけど、その子の転入手続きとか色々と」

「?楓が何でそんな事を?」

「彼女を引き取ったのが僕なので。僕がしなきゃいけないんですよ。そういうことで」

「あ。ちょ。ちょっと!!」

声を荒げるシャルさんだったが、今はそれより大事な用があった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「さて。ここなら大丈夫だろう」

「未成年が来るとこじゃないですよね」

「酒を飲まなければいいさ」

来たのは先生行きつけのバー。人もマスターと少しだけ。

「マスター。奥の部屋を借りるぞ」

「どうぞ。貴方なら無料ですよ」

「感謝する」

そして奥に入っていき、そこのドアを開けるとすごい部屋だった。

それ以外に特に描写することは無し。

「さて話の続きだ。お前は何をしようとしている？」

「いちいちアンタに言わなきゃならないのか？」

これが僕の本気モード。通称マジモード。

普段は自主的に規制しているが、こういうときには役に立つ。

「アンタに生徒のプライベートまで知る権利でもあるのか？」

「”ただの”生徒ならないだろうな」

「なら僕もただの生徒だ。それでいいだろ」

「本気で言っているのか？それは」

おお～～怖い殺気。今の僕には通用しないけど。

「それだけか？なら帰らせてもらうわ」

そして席を立つと、僕は顔を殴られた。ちょっとバランスを崩してしまう。

「なぜお前は普通に生きようとしない。彼がお前を助けたのは、そんな事のためでは無いはずだ」

「ふっ・・・・」

僕は立ち上がり、織斑千冬を見る。そして腹を思いっきり蹴り飛ば

した。

織斑千冬はカーペットに転げる。

「彼への恩なんて感じたことねぇよ。殺そうとした相手にどうやって恩返せっていうんだ？」

「クッ・・・動きが鈍ったな。もろに入った」

そんな事を言いながら立ち上がる。おいおい・・・僕は殺す気で蹴ったんだけど。

「それはお前があんなことを・・・・」

「家族を殺した相手がいたんだ。平常心なんか保ってられっか」

「お前が人を殺せばお前も”アイツ”と同じだぞ」

「残念。僕はもう人殺しだ。それにもし僕が一夏を殺せば・・・同じ台詞が言えるか？」

「・・・・・・言えないだろうな。だが私はお前を止めなければならない」

「そういうのをエゴって言うんだ。目障りだし、今ここでアンタを消し飛ばしてやろうか？」

そういって《ツインバスターライフル》を構えた。リミッター解除して。

「それなら私も本気でお前を消そう」

そう言って《雪片零式・夢幻連夜》を構える。僕の知る限り、最強にして最凶の刀だ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

無言でにらみ合う、僕と織斑千冬。

「・・・・やめるか。ここでやっても意味無いしな」

「なんだ。それぐらいは分かっていたのか」

「舐めるなよ。アンタが相手でも遅れは取らない」

「簡単に負けると”ブリュンヒルデ”の名が泣くのでな。まだまだ負ける気は無い」

「いつか越してやるよ。僕の翼がアンタを引き裂く」

「ふんっ。そのくだらん羽ごと叩き落してやろう」

僕は一度織斑千冬を見た後、この部屋を出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxx

「ラウラさん。出てきた方が身のためですよ」

店を出てすぐに僕はラウラさんを呼んだ。

言うとラウラさんは電柱の間から出てきた。

「いつから気付いていていた？」

「僕らがシャルさんたちと別れたときに、水着コーナーで聞き耳を立てていたときからですかね」

「最初からか・・・」

「貴方は、裏の事情にある程度詳しいから何も言いませんでしたけどね」

「お前は・・・何者だ？」

「――――――無限の始まり。そして『創翼の騎士』で、最後に桐谷楓ですね」

「・・・・・・・・・・話す気は無いんだな？」

「聞いたら死ぬことになるかもしれませんよ？」

「・・・・・好奇心は猫を殺す・・・・と言うことか？」

「その通りです。まあ、守ると約束しましたけどね」

「！？っ」

顔を真っ赤にするラウラさん。どうしたのかな？

「そ、そうか・・・そうだったな／／／／」

「？」

何故かテンションが上がるラウラさん。なんだか知らないけど。

それを尻目に僕は学園に戻っていった。

過去はいつまで経ってもついてくるよね。ウザイぐらいに。だったら背負うしかないかな・・・・・。

17話　素晴らしきこの日常（後書き）

遅れてスイマセン。

他の小説と平行して進めようと思うので大目に見てください。

《雪片零式・夢幻連夜》の設定とかは後々明らかにしていきます。

一つだけ言うと、千冬は機体を持ってます。オリジナルですけど。

感想があったらお願いします。

18話　夏だっ！海だっ！イレギュラーだ！！前半（前書き）

本当は一話に纏める気だったんですけど、やっぱ無理があったので、前半と後半に分けます。

それと長いです。

18話　夏だっ！海だっ！イレギュラーだ！！前半

「ぎ～んの龍の～背に～乗～～って♪」

「・・・・それ・・・・・なんて曲・・・？」

「銀の龍の背に乗って。有名ですよ」

「どうして・・・・・それ歌ってるの・・・・・・？」

「海を見たら何か歌いたくなったので」

臨海学校初日。天候にも恵まれて無事快晴。

太陽の光がこちらに反射して、いかにも夏だっ！って思わせる。

「楓。俺もわかるぞ。海見たらテンション上がるよな」

「Ｄｒなコトーさんもこんな気分だったのだろうか」

「・・・一夏も楓も・・・頭大丈夫？・・・・」

「スファナって毒舌だな」

スファナは合宿の三日前に転入してきた。

クラスの皆は無口なスファナと、ちゃんとコミニケーションを取ってくれてよかった。

一夏とも普通に仲良くなった。ちなみにスファナは髪の毛を切ったよ。キレイだよ。

「随分仲がよろしいのですね。楓さん」

セシリアさんが少々棘のある口調で言ってくる。

「そうですかね？普通ですけど・・・・」

「まあ、いいですけど」

そう言って引き下がる。いいと言ってる割には不機嫌だ。なんなんだ一体・・・？

「向こうに着いたら泳ごうぜ。箒、泳ぐの得意だったよな」

「そ、そう、だな。ああ。昔はよく遠泳したものだな」

一夏と話す箒さんも様子がおかしい。何かに感染したのかな？

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生の声でクラスの皆がピシッとなる。

普通に言ってるだけなのに、何か脅しているように聞こえるのが不思議。

そして言葉通りに旅館に到着した。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「「よろしくお願いしまーす」」」」

織斑先生の言葉の後に、全員でお辞儀をする。

この旅館は毎年、ＩＳ学園の生徒がお世話になるらしい。着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があって宜しいですね」

お歳は若く見える。二十代後半から三十代前半だと思う。

「あら、こちらが噂の・・・・・？」

女将さんが一夏と僕の方を見る。それに織斑先生が答える。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子達じゃありませんか。しっかりしてそうな」

「感じがするだけですよ。一人は男かどうかも怪しいですから。挨拶しろ、馬鹿者ども」

あれ？それって僕の事？生物学上でいうなら男だよ？

そんな括りじゃないと男って証明できない僕って一体・・・・。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「・・・・桐谷楓です。男！です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲恵子です」

そして丁寧なお辞儀を返してくる。

あれ？清洲恵子？だ、誰かから聞いたような・・・・・？

あ！！ヤ、ヤバイ！！

「・・・・・か、楓・・・・？」

呼ばれて反応した僕。そこにいたのは着物を着た黒髪の美少女だった。

僕はそのこの手を引っ張って物陰に移動した。

「なんで佳奈美がここにいるの!?」

「そ、それはこっちの台詞だって!!今日は臨海学校に行くって・・・!」

「それがここなんだよ」

「ええ!?そ、そうなの!?」

「うん・・・。はぁ・・・・佳奈美の仕事先ってここだったんだ・・・」

「そうなの。前に言ったと思うけど」

「佳奈美の機体は?」

「持ってるよ。肌に離さず」

といって腕の青と白のブレスレットを見せる。

「それならいいけど。スファナ以外には正体ばれちゃダメだよ。僕と知り合いだってことも」

「仕方ないね。それと私が部屋の方へ案内するよ。他の皆は清洲さ

んが案内しちゃったし」

「あれ！？行っちゃったの！？」

物陰から顔を出すと誰もいなかった。

「それじゃあお願いするよ」

そして僕と佳奈美は旅館に入っていった。

「ところで僕ってどこの部屋なの？」

「確かこっち」

「でもさ、ここって明らかに生徒が泊る用じゃないよね。ところどころに”教員用”って書いてあるよ」

「ＩＳ学園に入学したことを恨んで」

「だって君らは行きたくないって言うから、仕方なく僕が行ったんじゃないか」

「だって学校なんて面倒くさいし」

「小卒の子が何言ってんの」

「楓なんて卒業して無いじゃない！」

「・・・・・気にしてなんか無いやいっ！！」

「はいはい・・・・確かここ」

「・・・・・間違いだよ」

「その心は？」

「扉が開いていて、その中にスファナがいる」

「残念。それは正解です」

「普通は同じ男子の一夏がいるべきじゃない？」

「今年の一年生は奇数なので分けれなかったの。それでもし楓がその一夏って人と一緒になると？」

「誰か一人余る・・・ってそれ僕がスファナの場所に行っても同じじゃない？」

「一夏って人は織斑千冬と同室よ」

「なるほど。それなら解決だ。スファナと織斑先生を一緒の部屋にしたら一体どうなるか・・・」

「ってな訳で。さっさと入る」

「はいはい・・・」

どうやら僕はスファナと同室らしい。

「・・・・？どうして佳奈美が・・・？」

荷物を整理していたらしいスファナがこちらを見る。やっぱ疑問だよね。

「あ、それは――――――」

「ここで仕事をしているから」

「言葉を遮るでない」

「はいはい、少し黙ろうね」

「佳奈美殿？仕事は宜しいので？」

「いいんじゃない？」

「いいんだ！！」

「それよりもスファナに変なことしないでよね」

「当然。まだ死にたくないし」

「よろしい。それじゃあ私は仕事に戻るわ」

「はいはい・・・またね」

そして佳奈美は部屋を出て行く。

「海かぁ・・・・一応着替えるかな」

「・・・・私は・・・・もう着替えたよ・・・・・」

「更衣室あるよ？」

「人が・・・・いっぱいいるから・・・・・・・」

「あ、そうですか」

「楓・・・・いいの・・・・？」

「え！？な、何がですか！？」

「・・・・・・・・・・・・」

こうして僕は更衣室へと向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxx

「あ、織斑君だ！」

「う、うそっ！わ、、私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」

「わ、わ～。体かっこいい～。鍛えてるね～」

「織斑くーん。後でビーチバレーしようよ～～」

「おー、時間があればな」

海に来るまでに無駄に体力を使った織斑一夏だ。

その理由は三巻を買ってくれれば分かる。俺の口から言いたくない。

「あちちちっ」

考え事してたら砂に足の裏を焼かれた。

でもこの感触は何年ぶりだろうか・・・。懐かしい限りだ。

周りを見ると、ビーチバレーをしていたり、泳いでいる子がいたり

と様々だな。

「そういや楓はどうしたんだ？」

さっき旅館の人を引っ張って行ってから姿を見ていない。

「呼んだかい？一夏」

声のした方を見ると、パラソルを立ててシーツを敷き、その上で寝そべってる楓がいた。

「いたのか」

「まあね。さっき女子達と遊んだから少し休憩かな」

「そうか。お前は泳がないのか？」

「休憩中」

「そうかよ」

そして俺は一応準備体操をしていると――――――――――――。

「い、ち、か～～～～～～っ！」

いきなり鈴が飛び乗ってきた。昔から水着になると俺に飛びついてくる。何したいんだかコイツは・・・。

「あれ？楓ってまだ・・・・・・？」

「へ!?な、何の話ですかね!?鈴さん!?」

「ふ～～～ん」

鈴の言葉に以上に反応する楓。何かあったのか?

「楓。海に来たらまずは泳がないとね」

「そ、そうですね・・・。そ、それが何か?」

「泳ぎましょう?」

「い、いえ・・・遠慮しますよ。今は休憩中ですし」

「やっぱり。アンタまだアレなのね」

アレって何だ?

しかし楓には分かったらしくすぐに反論する。

「ち、違いますよ!?三メートルぐらいなら泳げるようになりました!!」

ああ～～・・・。分かった・・・。

「楓。お前泳げないのか?」

「そ、そんなわけ無いから!!ちゃ、ちゃんと泳げるから!!」

「それじゃあ泳いでみろよ」

「え！？・・・・い、いいよ！？証明してあげるよ！！」

そして楓は海のほうへ行った。

しかしその足取りはおぼつかないものだった。

（しかし楓が泳げないね～。意外な一面だな）

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxx

「楓～！ちゃんとやりなさいよ～～！」

「・・・・・・・・ええ・・・・・・」

ヤバイ。つい反論して墓穴を掘ってしまった桐谷楓です。

僕はちょっとした崖の上で生と死の境目をさまよっていた。
実は僕は全く泳げません。三メートルどころか、一メートルも泳げません。

（どうしよう・・・・・なんかもう引き下がれない・・・・・）

崖の下のギャラリーもスゴイ増えている。そして皆、好奇の目で見ている。

やめてっ!!そんな目で僕を見ないで!!

「頑張れよ～～～」

人事だな一夏。これは僕にとって一大事なんだよ!!

「覚悟は・・・できてないけど・・・・やらなきゃいけない空気だ・・・・・」

人生は勢いが大事!!もうどうにでもなれ!!

「とうっ!!」

飛び降りた。

バシャーン!!

水に着水した。それはいい。しかし・・・・・。

「ガボガボッ!!ゴバガッ!?ボガガバゴ!?」

一瞬で溺れた。そして沈んで行く。ブクブク・・・・・・・・・。

ついでに僕の意識はそこで途切れた。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X

「ゴホッ!!ゲホッ!!」

「やっと起きた。ああちょっと、咽ないでよ」

「佳奈美?・・・・・・・あれ?ここは・・・・・?」

「休憩室。いい歳して溺れたバカを一夏君が運んできたよ」

「・・・・今何時？」

「夜の八時」

「嘘っ！！そんなに寝てたの！？」

「ホント。もう皆夕ご飯も食べて、温泉に入ってるんじゃない？」

「う、嘘だぁぁぁぁぁぁぁあ！！！！」

せっかくの自由時間の思い出が溺れただけ！？嘘だぁぁぁぁ――――――ッ！？

「痛っ。な、なんか頭痛が・・・・・」

「体力落ちてるのに興奮するからよ」

「ゴ、ゴメン・・・」

「べ、別に謝らなくてもいいわよ・・・。それよりご飯食べて無いでしょ」

「食べれなかったの間違いね」

「花月荘自慢の海鮮料理。鮮度が命だからさっさと食べてよね」

「おお～～！おいしそう！！」

「当たり前よ」

刺身や海鮮味噌汁など一人分の料理があった。

とりあえず味噌汁を一口。

「うまいっ！！」

「そ、そお？よ、よかったぁ～～～・・・・」

何故か安心してため息をつく佳奈美。もしかして・・・・・・・・・・・・。

「これ佳奈美が作ったの？」

「え！？そ、そうだけど？」

「本当に美味しいよ。料理教えて良かった」

「そ、そう・・・・・／／／」

顔を赤くする佳奈美。しかし今は触れないでおこう。

今はこの料理を楽しまないと。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「ただいま〜〜」

「・・・・・おかえり・・・・」

部屋に戻るとスファナが一人で本を読んでいた。

「・・・・・大丈夫だった・・・・・？」

「ええ。まあちょっとクラクラしますから、早目に寝ようかと思うんですけど」

「・・・・・楓って海好きなのに・・・・泳げないよね・・・・・・」

「・・・・・僕だって気にしてるんですから・・・・・・」

そして僕はもう風呂は入ったので寝る準備をするだけ。

「・・・・・そういえば・・・和人から・・・連絡が来た」

「何のですか？」

「『溺れたらしいなｗ。定期連絡だが・・・・アハハハッ！！すまんが、今笑っててそれどころじゃないわ！！』だって・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ヒド」

泣くよ！？本格的に泣いちゃうよ！？僕。

「・・・もういいや。寝るよ」

「・・・・・おやすみ・・・・・」

そして僕の校外合宿の一日は終わった。

今日って何のためにあったのだろうか・・・・。前半溺れただけだし。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

合宿二日目。今日は午前中から丸一日を使い、ＩＳの各種装備の試験運転とそのデータ取りらしい。

僕は関係ないけどね。ハハハッ！！

「おい、昨日溺れた男」

ギクッ。

「溺れたわけじゃありません。足が攣っただけです」

「それを溺れたというんだ。お前は他の人のサポートをしろよ。暇だろうからな」

「・・・・・・はい」

クラスどころか全体から笑い声が漏れる。

何だこれ。イジメ？イジメなの？僕このまま首吊る勢いだよ？

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

「お前には今日から専用――――――――」

「ちーちゃ～～～～～ん！！」

何かが砂煙を上げながらこっちに向ってくる。

ちーちゃんって誰？

「・・・・・・束」

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグしよう！愛を確かめ――――――ぶへっ」

「うるさいぞ束。それと桐谷。コイツは私の知り合いだから剣をしまえ」

皆がこちらを向く。僕は《ビーム・ソード》だけを展開して戦闘態勢。

ありゃりゃ。ばれてましたか。だが・・・・・。

「関係者以外立ち入り禁止の場所に、知り合いを呼ぶとは・・・」

「こいつが勝手に来ただけだ」

「その話。信じる証拠は？」

「ないな。しいて言えば私の言葉だな」

「ここには第三世代型のＩＳも数多くいる。そんなんじゃ信用できませんね」

「悪いけどさ、君ちょっと口出さないでくれる？ＩＳ関係者なんて私を置いて他にいないよ」

「それはこちらの台詞です。何者かわからない人に、そんな事言われる筋合いなんてありません」

自分でも分かってるが敵意ムキだし。自重する気は無いけど。

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。そうでもしないとコイツは納得しない」

「えー。めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

「はぁ・・・・・。もう少しまともに出来んのか、お前は。それと桐谷、剣をしまえ」

「・・・・・・・・」

僕は一応剣をしまった。いつでも戦えるように準備はしてるけど。

「まったく。君は生意気だよね。何様？ってか誰？」

「桐谷楓です。国際指名手配犯さん」

そして僕はもう黙った。元々この人が篠ノ之束って知ってたけど。

「あ、あの・・・・頼んでおいたものは・・・・・？」

そんな空気の中、箒さんが躊躇いながら聞く。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

空を指差されるので皆その方向を見る。

すると・・・・。

ズズーンッ！！

いきなり激しい衝撃を伴って、金属の塊が砂浜に落下した。

「織斑先生。アレ一刀両断してもいいですか？」

「悪いがそれはやめろ。爆発物とかではない」

あ、そうですか。

それの正体は真紅の装甲に身を包んだ機体。ＩＳだった。

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

ふ～～ん。どうでもいい。

そして『紅椿』とやらは箒さんにフルディングとパーソナライズをはじめた。

無駄話をしながらどんどん進めていく。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの・・・・？身内ってだけで」

「だよねぇ。何かずるいよねぇ」

そんな女子達の愚痴に、篠ノ之束はすばやく反応した。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度も無いよ」

しかし僕は口を挟む。

「貴方こそ、公民の勉強してませんか？いつの時代でも、人々は平等であることを望んでますよ」

そのとき一夏が僕の手を引いた。

「どうしたんだ。あの人は千冬姉が言うように、篠ノ之束さんだ。知ってるだろ？」

「別にそれはどうでもいいよ」

「それじゃあ何でケンカ腰なんだ」

「それよりも、希代の天才さんが呼んでるよ」

「え？あ、今行きます」

そして一夏は自称天才の方に歩いて行く。

「・・・・・楓・・・・・・」

「スファナ。別に事を起そうってわけじゃないよ」

「なら・・・いいけど・・・・」

一夏たちが何か喋ってるが何かどうでもいい。昨日の溺れたときのダメージが残ってるのかな？

ズバアアンッ！！

箒さんがＩＳの装備を振り回している。おそらく試験運転だろう。

「楓・・・・顔が厳しくなってる・・・・・・」

「え？ああ、ゴメン」

「たっ、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

慌てた様子で山田先生が来る。

おそらくあれだろう。少し前から僕のレーダーに引っかかっている機影がある。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

小型端末を渡されて、その内容を見ており斑先生の顔が曇る。

「特務任務レベルＡ　、現時刻を持って対策をはじめられたし・・・・」

「そ、それが、その、ハワイ沖で――――――――」

「試験稼動していたアメリカの第三世代型ＩＳ、『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』でも暴走しましたか？」

「え！？な、なんで！？知って――――――」

「しっ。機密事項を口にするな」

「す、すみませんっ・・・・」

「専用機持ちは？」

「一人欠席してますが、それ以外は」

そして二人は手話で何か話した。

「そ、そそ、それでは私は他の先生にも連絡してきますのでっ」

「了解した。――――――――全員注目！」

パンパンと織斑先生が手を叩く。

「現時刻を持って、今日のテスト稼動は中止。ＩＳを片付けて旅館にもどれ。連絡が入るまで各人部屋で待機すること。以上だ！」

「え・・・・？」

「ちゅ、中止？なんで？」

不測の事態に女子達がざわめく。

「とっとと戻れ！以後許可なく外に出たものは我々が拘束する！いいな！？」

「「「「「は、はいっ！」」」」」

全員が慌てて動く。

「専用機持ちは全員集合しろ！だが桐谷とフィオーネは部屋に戻れ」

「了解。行きましょう。スファナ」

「・・・・そうだね・・・・・」

そして僕は部屋に戻った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxx

「部屋に戻ったはいいけど、やること無いよね」

「・・・・・・そうだね・・・・・・」

「そして何やってんの？佳奈美」

「え？何か部屋を出るなって言われたから」

「ああ、そう」

「それより暇ならゲームしよ」

「例えば？」

「トランプとか」

「ええ〜〜〜・・・・・」

「楓、弱いからね。トランプ」

「ち、違うよ！？運が無いだけだよ！？」

「じゃあ違うって証明して貰いましょうかね」

「望むところ！！」

そしてスファナも合わせた三人で色々とトランプをした。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxx

「成功だな」

「お前完全に悪役だぜ？」

「少なくとも正義の味方ではないな」

「違ねぇな」

「福音にあれだけでは役不足だろうから、あいつが出てくるだろうな」

「もし出てこなかったら？」

「織斑千冬だろう。今の福音ではあの二人ぐらいしか倒せるものはいない」

「だが何事にもイレギュラーは付き物だぜ？」

「私達がイレギュラーだからな」

「そりゃそうだ」

「今度こそ殺して亡き者にするのだ。奴らを」

「おお～～」

「やる気を見せろ」

「うおっ、殴るな」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

中略

俺は今、上空五百メートルの場所から、福音を狙っている。

暴走した福音は、超音速飛行をしているらしく箒の『紅椿』と俺の『白式』でしか対抗できないらしい。

「暫時衛星リンク確立・・・・・・情報照合完了。目標の現在位置確認。行くぞ一夏！」

「お、おう！」

箒はそういうと紅椿を加速させる。

（これが《雪片弐型》と同じ展開装甲。その完成形か）

束さんの話によれば、紅椿の展開装甲は攻撃・防御・機動の全てに即時対応できるらしい。

しかもＩＳアーマーがほぼ全てが展開装甲タイプなのだとか。

「見えたぞ、一夏！」

「！！」

ハイパーセンサーの視覚情報が自分の感覚のように目標を映し出す。

「加速するぞ！目標に接するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

「ああ！」

箒がどんどん出力を上げていく。

俺は零落白夜を発動し、瞬時加速で一気に間合いをつめる。

「なっ！？」

福音は最高速度のままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》稼動開始」

オープン・チャンネルから聞こえた、抑揚の無い機械音声に、確かな『敵意』を感じた。

そして福音はぐりん、と。身体を一回転させて、零落白夜の刃をほんの数ミリでかわす。

「くっ・・・！あの翼が急加速しているのか！？」

高出力の他方向推進装置は他にも多く存在する。だがここまで精密な急加速は見たこと無い。

「《銀の光》発動」

その声と共に福音の指先からビームの刃が出てくる。

そしてこちらに切りかかる。

俺は何とかかわしたが――――――

ズバァァァァァバン！！

「う、うそだろ・・・・・・？」

海が割れた。まるでそこを引っかかれたかのように五つの爪の痕が出来た。

（どんな装備なんだ・・・・・！！）

しかし呆然としていた隙を福音は見逃さなかった。

「！？」

銀色の翼。スラスターでもあるそれの、装甲の一部がまるで翼を広げるように開いた。

（しまった！こいつは――――――――）

砲口だ。

一斉に開いた砲口から一気に光の弾丸が、俺を目掛けて撃ち出され

た。

「ぐぅっ！！」

その弾丸は、高密度に圧縮されたエネルギーで、ちょうど羽根のような形をしていて、それがＩＳアーマーに刺さったと思うと、次の瞬間一行は爆発した。

（ダメージがハンパない・・・・！しかも・・・・・・・！！）

連射速度が無茶苦茶速い。

それから右を俺が、左を箒が攻め入るが全く掠りもしない。

それどころかあちらは手の爪で反撃してくる。

あれはヤバイ。

どうやらあれはエネルギー刃を飛ばせるらしく、それは海を割ることが出来る。

ＩＳアーマーでも食らえばひとたまりも無い。

そんな時、箒が突撃を仕掛ける。紅椿の展開装甲で自由な方向転換や急加速で間合いをつめる。

「はあああっ！」

――――――――いける！！

そう思って刀を握り締めたが、そこに福音の全面反撃が待っていた。

「La・・・・・・・・・♪」

甲高いマシンボイス。その刹那、ウイングスラスターはその砲門全てを開いた。

その数三十六。しかも全方位からの一斉射撃。

「やるなっ・・・・・・・・・!だが、押し切る!!」

箒が光弾の雨を紙一重で交わして反撃する。――――――――隙が出来た。

「!」

けれど俺は福音とは真逆の、直下海面へと全速力で向っていた。

「一夏!?」

「うおおおおっ!!」

瞬時加速と零落白夜。その両方を最大出力で使い、一発の光弾を打ち消した。

「何をしている!?せっかくのチャンスに――――――――」

「船がいるんだ!会場は先生達が封鎖したのに、ああくそっ、密漁船か!」

俺の手の中で《雪片弐型》の刃は消えて、展開装甲が閉じる。

エネルギー切れか。最大にして唯一のチャンスを失い、作戦の要も失った。

「馬鹿者！犯罪者などをかばって・・・・。そんなやつらは――――――――！」

「箒！！」

「ッ――――――――！？」

「箒、そんな・・・・そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら弱いヤツの事が見えなくなるなんて・・・・・箒。らしくない。全然らしく無いぜ」

「わ、私、は・・・・・」

明らかな動揺が顔に浮かび、それを隠すように手で覆った。

そのとき落とした箒の刀が光の粒子に戻ったときに俺はぎくりとした。

（今のは、具現維持限界だ・・・・・！まずい――――――――！）

具現維持限界とはエネルギー切れと言うことだ。そして今は演習でも訓練でもない。実戦だ。

「箒いいいいっ！」

俺は刀を捨てて最後のエネルギーで瞬時加速をした。

（頼む！間に合ってくれ！！）

視線の先には福音が再び一斉射撃をしようとしている。今度は照準を絞って。

（頼む！頼む、白式！頼むっ！）

スローモーションの世界で、俺は確かに、放たれる光弾と箒の間に入った。

「ぐあああああっ！！」

箒を庇うように抱きしめた瞬間、あの爆弾光弾が背中に降り注ぐ。

エネルギーシールドで相殺しきれないほどの衝撃が、いくつも続き骨が軋みを上げる。

アーマーが破壊されて、熱波が身体を焼く。

気が狂いそうな激痛が続く中、俺は一度箒を見る。

（ああ・・・無事か・・・。よかった・・・・・。はは、何泣きそうな顔をしてるんだ・・・・らしくねぇな。あ、リボン焼き切られちまってるな・・・・。ふーん、髪下ろしたのも悪くねぇじゃん・・・・）

「一夏っ、一夏っ、一夏ぁっ！！」

「う・・・・・・・ぁ・・・・・・・」

ぐらりと視界が傾く。当然か。俺今落ちてるからな。

真っ逆さまで海へとダイブか。

俺は最後の力で箒の頭を守るようにして抱える。

大きな水音と全身を伝播する衝撃。

俺は水面越しに福音を見つめながら、気を失った。

18話　夏だっ！海だっ！イレギュラーだ！！前半（後書き）

変な感じで終わりました。前半。

福音は原作より強くなってます。オリジナルを入れて。

誤字脱字、感想があったらお願いします。

１９話　夏だっ！海だっ！イレギュラーだ！！後半（前書き）

伏線いっぱいあります。

19話　夏だっ！海だっ！イレギュラーだ！！後半

一夏と箒が撃墜されてから三十分。

一夏は昏睡状態。箒はその付き添いをしている。他の皆もショックを隠しきれない様子。

そんなときに、一人の人物がある男を訪ねに旅館の中を歩いていた。

（ここ・・・・・・・・）

一つの部屋の前に来た。そこをノックしようとすると――――――。

「誰！？誰がハートの6止めてるの！？大人しく出せい！！」

「楓うるさい！！」

怒鳴り声が聞こえてきた。

（え？なに？）

「頼むよぉ～～。ハートの6出してくださいよぉ～～」

「私じゃないし」

「・・・・・・私じゃない・・・・・・」

「嘘はいけないよ！！二人のうちのどちらかに決まってるじゃん！！」

「勝負に口を出さない」

「黙らっしゃい！！イーブンじゃないもん！！何で僕の手札は絵札ばっかりなんだ！！」

「ある意味才能よね。その不運」

「こんな才能、セメントで固めてマリアナ海溝に沈めてやる！！」

「無理ね。半ば呪いだし」

「呪い！？」

「そう。スファナだってそう思うでしょ？」

「・・・・・うん・・・・・」

「ヒドイ！！少しぐらい否定してくれてもいいじゃないかぁぁぁ！！」

「ってか楓。あんた喋り方変わってるわよ」

「そんなん気にしてられるかぁぁぁぁぁぁああ！！」

そんな絶叫が聞こえてきた。どうやら七並べをやっているらしい。

（ってこんなことしてる場合じゃなかった）

コンコンとノックをする人物。

「？もう外に出ていいのかな？」

「さあ？」

「・・・・取り合えず出よう・・・・・」

「ですね」

そう言ってドアを開ける楓。そこにいたのは・・・・・・。

「シャルさん・・・・・どうしたんですか？」

「えっと・・・・織斑先生が話があるらしいよ」

すると楓の表情が変わった。

「わかりました。すぐに向います。場所は？」

「織斑先生の部屋」

「了解。それじゃあ」

「気をつけて。死なないように」

「・・・・・・がんばって・・・・・・」

「死ぬの前提なの！？」

そして楓は去っていった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxx

「来たか」

「どうも。こんばんわです」

千冬はベットで腰を掛けていた。

「それでわざわざ僕に何の用ですか？」

「・・・・お前に福音を倒してもらいたい」

その言葉に楓は、心底嫌な顔をした。

「はぁ？貴方がやればいいでしょう。そのほうが確実です」

「・・・・・・言い方を変えよう。操縦者をなるべく傷つけずに倒してくれ」

「あ、そう。それじゃあ貴方は向かないですね。しかし緊急のときは？」

「・・・生死は問わない」

「それなら僕はやりましょう」

「簡単に了承するんだな」

「一夏がやられたのでしょう？友達がやられて、黙ってるわけには行かないですよ」

「・・・・・・そうか・・・・・準備しておけ」

その言葉に、楓は無表情――――――しかし物凄い低い声で言った。

「貴様が俺に命令できる立場か？　――――――――――――にした貴様が」

「っ・・・・・・・・・・・」

千冬は目を瞑り黙り込む。

楓は”ふぅ”っと息を吐き、背を向ける。

「何もいえないか。図星を突かれて」

「・・・・・・・・・・・・・・」

なおも千冬は黙る。

「っ!!　このっ!!」

楓は突然振り向き、千冬の胸ぐらを掴み立たせる。

「何とか言ったらどうなんだ!!　アンタは・・・・!!アンタ達は・・・・・!!」

「・・・何を言えばいいんだ?」

千冬は特に抵抗もせず、片目だけ開いて言った。

「お前はただ、福音を倒せばいい。私はそれしか言えん」

「っ!・・・・・・くそっ」

そして楓は掴んだ手を離した。

「やればいいんでしょ」

それだけ言って、楓は部屋に戻った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxx

「ただいま」

「・・・・・お帰り・・・・・」

「あ、生きてた」

「その言葉には触れないでおくよ。・・・・佳奈美、シャルさんは？」

「適当にごまかしておいたわよ」

「・・・・・・大丈夫だった？」

「ええ。単に楓の姉ですって答えただけだし」

「はぁ！？バカなの！？」

「案外すんなり受け入れてくれたわよ？」

「・・・じゃ、いいや。僕はこれから福音の迎撃に向う」

その言葉を聴いて、二人はわずかな微笑をした。まるでその言葉を待っていたかのように。

「やっぱそうなるのね」

「うん。ゼロシステムを使わないで、どこまでやれるかは分からないけど」

「そう言うだろうと思って。スファナ」

「・・・・・うん・・・。これ・・・・・」

スファナから渡されたのは青と白のガントレットだった。

「これって・・・・・」

「そう。貴方のお望みのものよ」

「・・・・私が・・・・・最後の仕上げをした・・・・・・」

「そっか・・・ありがとう。これなら大丈夫だ。でも・・・万が一僕に何かあったら――――――」

「私達が後始末をするわ」

「・・・分かってるならいいよ。じゃあいってくるよ」

「・・・・・・・・・帰って来て・・・・・・・」

「心配しなくていいよ。僕は――――――――――」

「守れないやくそくはしないのだからね」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxx

部屋を出た後、思わぬ人と鉢合わせした。

「・・・・篠ノ之・・・・束・・・・・」

「そう！希代の天才ちゃんの束だよ～～！」

うざって思ったのは心の中だけ。

「君さ。福音を倒しに行くんだよね」

「ええ」

「・・・・自殺行為。やめたほうがいいよ」

「舐めないで下さい。僕はそこらの人なら負けませんよ」

「君のＩＳじゃあ勝てないよ」

真面目な顔をしていってくるので、僕は思わず噴出しそうになった。

「・・・僕のはＩＳじゃないので問題ないですね」

「え！？ＩＳじゃない！？」

ヤバッ。つい口走ってしまった。

「さあ、何のことでしょう?僕はこれで」

奪取してこの場を去る。後ろで色々と雑音が聞こえてくるが。

X
X X
X X X
X X X X
X X X X X
X X X X X X
X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X

「澄んだ夜空だな・・・・・・」

海岸で僕は静かに空を見ていた。

「これからこの空は・・・・どうなるんだろうか・・・・・・・・」

急いでもいないのでしばらくここで時間を潰していた。すると・・・・・。

「相変わらず・・・夜空が好きですね。楓」

「!?」

聞き覚えのあるその声。僕はその声のするほうへと向く。

そこにいたのは・・・・・いてはならない人だった・・・・・。

「・・・・いたんだね”ラクス”・・・・これは君の仕業かい?」

輝く桃色の髪をした、ピンク色のワンピースを着ている彼女。

誰もが美しいというであろう美貌を持つ人。

「そうだとしたら・・・どうしますか？」

「・・・こっちに来てはくれないよね・・・・・・・」

「私達には・・・やらなければならないことがあるので。それと今回の事と私達は無関係です」

「そうなんだ。しかし・・・僕らにもやらなきゃならないことはある」

「ええ。分かってます。異なる考えを持つ者同士がぶつかるのは、仕方の無いことですから」

「・・・そっか。”キラ”や”アスラン”もそっちにいるのかな？」

「ええ。出来れば彼らも私も、あなた方とは戦いたくないのですが・・・・」

「・・・・・ぶつかるのは仕方ないんでしょう？」

「・・・そうですわね。戦いとは何なのか・・・世界は難しいですわね」

「簡単に出来ていたら、僕やキラのような人は出来なかったさ」

「そうですわね」

「・・・・・”カガリ”や”シン”もそっちにいるんだね」

「ええ。皆あなた方とは戦いたくないと言っていました」

「それは僕らもだよ。けど、いいさ。たまにはぶつかり合うのもいいかもしれないし」

「喧嘩するほど仲がいいとも言いますしね」

「そうだよね。しばらくは喧嘩状態ってことで」

「はい。それではご健闘を祈ってます」

「ありがとう」

そしてラクスは何処かへ行ってしまった。

「親友との戦い・・・たまにはいいかなっと、そろそろ行こうかな」

僕は福音が居るであろう場所に向うために、借りている機体を呼んだ。

「ダブルーオーライザー。『革命の騎士』とは洒落た名前だと今更ながら思うよ」

この姿・・・・。『ダブルオー』は僕の三つ目の機体。そして・・・・・。

「この機体は・・・世界を変える力がある。まあ、それは・・・・・いいか」

僕は誰に話してるんだろう？まあ、それもいいとして。

「『ダブルオーライザー』・・・・飛翔する！！」

緑色の粒子を振りまきながら僕は飛んだ。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxx

場所は海の見えるコテージ。

そこにはラクスと男が二人。それとラクスのほかに女性が一人いる。

「ラクス。どうだった？」

「キラ。楓は楓の道を行くと」

「そっか・・・。まあ、分かってたけどね」

「ああ。楓はそうでなくてはいけないな」

「アスラン。楓やスファナたちとの戦いですよ？」

「わかってるさ。だが俺たちにも俺たちの道がある」

「そうだな。私も同感だ」

「カガリ・・・・・。ふふっ。楓も皆も特に思いつめても無いのですね」

「そうだね」

「そうだな」

「喧嘩するほど仲がいいって言うしな」

「そうですね。今は楓の戦いでも見せて貰いましょうか」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxx

「やあやあ、福音君。君のおかげで今僕はベリーにキレてるよ？」

「・・・・・・・・・・・」

何時の間にかついていた僕。福音はポーっとこちらを向いている。

まあ戦闘態勢だけどね。僕もアチラも。

『やっときたか。桐谷楓君』

「！？」

いきなり喋った。しかし、どうやら福音を通して誰かが喋ってるらしい。

「誰だ？今回の黒幕か？」

『そうだな。・・・・”偽者の騎士”とでも言えばいいか』

「洒落た名前だな。騎士を名乗るなら姿を現せ」

『だから言ってるだろう。偽者の騎士だと』

「あ、そう。で、僕に用でもあったのか？」

『ああ。君のＩＳＧを渡して貰いたい』

「・・・・ＹＥＳとでも言うと思ってるのか？」

『思っては無い。だから福音を改造して君に嗾けているんだ』

「そうかい。だがそれじゃあ僕には役不足だ」

『そうとも限らないさ。何事にもイレギュラーは付き物だろうからな』

「黙っとけ。僕に用があるなら自分から赴け。僕は逃げも隠れもするが、売られた喧嘩は買うぞ」

『悪いが証拠を残したくないんでね』

「やはりお前らは”コーディネーター”なのか？」

『ご想像にお任せしよう。ではせいぜい頑張ることだな』

福音は攻撃を開始した。

「時間掛けるのも面倒だ。《トランザム》起動」

僕の機体が真っ赤な光に包まれる。

「Ｌａ・・・・・《トランザム》・・・・・」

福音もトランザムを使う。その色は銀色だが。

「トランザム・・・ライザー！！」

「Ｌａ・・・・・・・・・・♪」

赤い光と銀色の光が弧を描くようにぶつかった。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「始まったね・・・・」

「・・・うん・・・・・」

部屋の窓から夜空を見ているスファナと佳奈美。

そこには赤と銀の光のがぶつかり合っていた。機体のセンサーで見ないと分からない距離だけど。

「タイムリミットは三時間・・・それまでに楓が帰ってこなかったら・・・・」

「・・・・・私達が・・・始末する・・・・・」

「大丈夫だろうけどね」

「・・・・そうだね・・・信じよう・・・・・・・・・」

心配してる二人。けれど祈りはしない。楓は約束を必ず守るから。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxx

「くらえっ！！」

僕は手の《GNソード？》のライフルを福音に放つ。

しかしすぐに福音はかわす。そして翼のレーザーを打ってくる。

「まだまだぁ！！」

機体を粒子化して背後に回りきりつける。だが相手も手のツメで受け止める。

「La・・・・・♪」

「チッ！」

もう片方の手で切りかかるのを、《GNビーム・サーベル》で受け止める。

そして福音を蹴り飛ばす。一度止まり、互いに様子を見る。

（どういうことだ？・・・なんで福音がＧＮドライブを・・・？いやちがう・・・これは・・・）

このときに僕は答えを見つけた。

「これはＧＮドライブじゃなくて・・・・・・！」

「Ｌａ・・・・・・・・・・・・・・・♪」

福音がレーザーを撃ってくる。しかしそのビームにはＧＮ粒子はなかった。

「疑似ドライブか！！それで・・・・！！」

答えが見えた。これはアイツらの仕業だ。

「そんなに世界を混乱させたいのか！！アイツらは！！」

僕は《トランザム》を最大出力まで上げる。

「《トランザム・バースト》・・・起動！！」

その瞬間、この夜空を七色の光が覆った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxx

「あっ・・・・佳奈美・・・雪・・・・・」

「雪？今夏だよ」

「・・・・・・七色の雪が降ってる・・・・・・・・・」

「・・・本当だ。キレイだね・・・・・・」

「・・・・楓の力なんだね・・・・・」

「だけど・・・これを使うってことは・・・・・」

「・・・・・・ピンチ・・・・・・」

「大丈夫大丈夫。ちゃんと帰ってくるよ」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「はああああっ！！」

僕の剣は赤い光を放ちながら福音を襲う。

しかし福音の銀色のツメがそれを受け止める。

「くそっ！」

こちらの攻撃は通じない。トランザム限界時間まで後、一時間。

かれこれ二時間ずっと戦っている。

「一か八か・・・。あれで止めを刺すか・・・？」

「Ｌａ・・・・♪」

福音は休ませてはくれず、翼の砲口からビームを放つ。

「くそっ！ＧＮミサイル！！」

僕の後ろのミサイルが福音のビームを相殺する。

「いくぞっ！」

僕は特攻を仕掛ける。しかし福音も馬鹿ではない。周りからの集中砲火で僕を落とそうとする。

「だがっ！！」

周りの砲門をすべて僕は切り裂く。

「Ｌａ・・・♪」

「！？」

だがそれは誘いだった。福音は手の銀の爪を発射態勢にしていた。

（回避？防御？いや間に合わない！！）

僕はその衝撃をモロに受けてしまった。

「グッ！！」

その攻撃で腹部に深い傷。

しかもオーライザーが損傷してしまい、《トランザム》が解けてしまった。

（これはピンチだ・・・・）

福音はバリバリ《トランザム》だし。なんかムカツク。疑似のクセに。

「気を引き締めないっと！」

そして僕は《ＧＮソード？》で切りかかる。しかし福音は驚異的なスピードでかわす。

（《トランザム》は使えないわけじゃない・・・けどチャンスは一度だけ）

長期戦は無理だと判断して、早期決着をしようとする。

「はあああああっ！！」

再び突撃する。しかし今度は砲門をすべて斬ったから集中砲火は無い。

攻撃できるのはあの爪くらいだ。

そして予想通り爪での攻撃をしてきた。

（チャンスはここ！！）

「《トランザム》！」

一瞬だけ《トランザム》を発動して福音の背後に回り、銃を撃つ。

ドドドドッ！！

四連射して一気に福音の装甲を破壊した。そこに《ＧＮソード？》を剣にして斬る。

絶対防御が発動して福音のエネルギーを奪う。《トランザム》の輝きも無い。

だがまだ戦闘不能にはなっていない。

（せめて後一撃当てれれば・・・）

そんな事を考えていると、レーダーに引っかかる機影がある。

（これは・・・まさか！？）

「俺の仲間に・・・手を出すんじゃねぇ！！」

乱入者の攻撃を福音はかわす。

乱入者は《雪片弐型》を手に持った一夏がだった。けれど白式の形が違う。

「一夏!?何で来たのさ!!怪我してるんでしょう!?」

「治った!!それより何一人で戦ってんだよ!!」

「そ、それは・・・・」

「みんな心配で来ちまったぞ」

「え!?」

よく見るとシャルさんやラウラさん、それに箒さんや鈴さんにセシリアさんが来ていた。

「ど、どうして・・・」

「何が”ど、どうして・・・”よ!!」

「そうだぞ!お前が一人で戦っていると聞いて来たんだ!」

「僕ら仲間でしょ!?もっと頼ってよ!」

「楓さん一人が背負わなくてもいいです!!」

「現に今までやられていたではないかっ!」

好き勝手な言葉を言ってくるが・・・何か泣きそうだ。

「ゴ、ゴメン・・・・ありがとう・・・」

「感激は後だな。今はこいつを倒すぞ」

一夏の言葉で皆シャキッとする。

「おそらく一発いいのを当てれば大丈夫だと思う」

「そうか。じゃあシャルとラウラとセシリアで足止めをしてくれ。俺と箒と鈴でしとめる」

「「「「「わかった」」」」」

そしてシャルさんのショットガンの連射と、ラウラさんのワイヤーブレードの波状攻撃と、セシリアさんのビットが福音を足止めする。

「いくぞっ！ミスるなよ」

「アンタこそね！」

「はあああああっ！」

鈴さんが《双天牙月》を投げて、箒さんが二本の刀の衝撃波で、一夏の道を作る。

「おおおおっ！！」

そこを一夏が突っ込んで行き《雪片弐式》で斬る。

福音はこの攻撃を処理しきれず一夏の攻撃を食らった。

そして操縦者はスーツだけの姿となって、海に落ちて行く。

しかし・・・。

「何とか間に合った」

僕がしっかりとお姫様だっこしてキャッチした。

そのとき――――――――――

パァァァァア・・・・・。

「・・・あれ？もしかして・・・エネルギー切れ？」

ダブルオーが光の粒子になって行く。

このままじゃあ抱えてる人と一緒に海に落ちてしまう。

仕方ない・・・。

僕は機体から脱出した。こうすれば機体は立ったまま固定される。

しかし僕は何もつけて無いので・・・・・。

「スカイダイビングの次は・・・・・・海で潜水かな・・・・・」

海へダイブ。泳げない僕が。

「お、おいっ！！楓！？」

焦る一夏たちに僕は僕は親指を立てた。

バシャーン！！

水に着水する僕。全身に激痛が走り、腹の傷から血が溢れ出す。

水面越しに見える皆を見て僕は気を失った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxx

「やられちまったか〜〜」

「想像通りだ。今回のデータは貴重だぞ」

「どうでもいいけどな」

「時代は移り変わろうとしている。それを統べるのは我々だ」

「マジ興味ねぇ」

「じゃあお前なんでここにいるんだ」

「俺は強ぇヤツと戦えればそれでいい。桐谷楓のようなヤツと」

「お前では勝てん。勝てるのは同じ存在だけだ」

「それが気に食わねぇから俺はあいつを倒すぜ」

「好きにしろ。だが私の関係の無いところでやれ」

「へいへい・・・帰るか」

「福音のデータは削除済み。居る意味無いな。戻ろう我々の聖地へ」

「聖地ねぇ～・・・この世の縮図の方がいいんじゃないか？」

「そんなものと一緒にするな」

そして二人の人物は消えた。不可解な光を残して・・・・・。

１９話　夏だっ！海だっ！イレギュラーだ！！後半（後書き）

戦闘って無理ですね。難しすぎます。日常を書いた方が気が楽ですね。

ガンダムキャラは出さないつもりだったんですが、ネタが切れてしまったので出してしまいました。

出る人は、００とＳＥＥＤシリーズの人が中心です。

でも平成のガンダムキャラは、ほとんど出そうと思ってます。

ちなみに次でＩＳ三巻は終わりです。なんか収まりませんでした。

感想があったら下さい。

オリキャラ紹介1（前書き）

大変遅くなりましたが、本編が完成しないので、キャラ紹介です。

本編更新できなくてすいません。

ちなみにスファナと由美を紹介します。若干ネタバレですが・・・。

オリキャラ紹介1

名前：戸山由美（とやまゆみ）。（正式には違う）

性別：女

身長：１６５ｃｍ

体重：諸事情で語れません。

容姿：アメリカ人と日本人のハーフ。しかし日本人似。瞳はキレイな翡翠色で、腰まで届くピンクの髪をポニーテールにしてる。顔には幼さの残るが美少女。

体格：全てにおいてバランスが取れてる。

出身：日本

性格：あまり気は強くなく、誰に対しても敬語。怒ることもあまり無い。
引っ込み思案で口数も少ない。

家族構成：父、母、祖母、祖父、全員元気。

『日輪華（にちりんか）』：由美の第三世代型専用機。

『打鉄』を元に改良したもので、多少重装備になり緑色の装甲を中心に使って、戦国武将のような外見をしている。

日本の第三世代型の試作品にして『第二形態』に達している。

特徴的なのは、背中の太陽をモチーフにした円型のスラスターと、背丈ほどあるキャノン砲。

色々な状況での戦闘を想定し、オールラウンダーで戦える機体。

武装も『打鉄』を改良したものが多い。

『日輪刀』

これは『打鉄』の標準装備である大刀を改造したもの。

そのままでも強いが、高出力エネルギーを纏わせることで、さらに圧倒的な威力を発揮できる。

また変形させて、ロングライフルモードへと変更可能。

『日輪乱』

これは『ブルーティアーズ』を元にしたＢＴ兵器。

腰に四つ、背中のスラスター割れて四つ、計八つのビットが射出される。

基本的なコンセプトは『ブルーティアーズ』と大して変わらないが、ビーム刃を展開して攻撃することが出来る。

『日輪光』

これは両腕に装着されている円盤型のシールド。

エネルギーシールドを展開することができ、スゴイ防御力がある。
また、三連ビームバルカンも付いていて、攻撃に使用することも出来る。
だが、エネルギーの消費が激しいので多様は出来ない。

『日輪豪砲』
この機体最強の武装で、背中にある巨大なキャノン砲をさす。
スラスターから直接エネルギーを供給して、超高出力のレーザーを放てる。
しかしエネルギーチャージに時間がかかり、また消費も激しいので、殆ど一撃限り。
しかし威力は絶大で、一撃でＩＳを落とすことが出来るので、第三世代最強との呼び声も高い。

まだ明かしていないシステムもある。ちなみにワンオフアビリティーもある。

由美は、世界的に有名な戸山財閥の孫娘で、次期当主でもある。
また日本の代表候補生でもある。実力は世界レベルで実戦経験も豊富。

それとある場所では、ラミアとも呼ばれている。

名前：スファナ・フィオーネ

性別：女

身長：１５９ｃｍ

体重：以下同文

容姿：瞳は青で、顔を隠すほどの長い銀髪が特徴。顔は人形のように整っている。

体格：すこし痩せ型。胸は・・・・察してください。

出身：???

性格：無口＆無表情。感情をあまり表に出さないが、人との接し方がわからないだけ。
ちなみにスゴイ毒舌。ただし本人に自覚はない。

家族構成：???

『セラヴィード』スファナのＩＳＧ。

外見はセラヴィーガンダムと同じ。すこし楓の機体と似ている所が見られる。
全身装甲も出来るが、普段は楓と同じく、背中と両手両足に兜を展開する。

白い強固な重厚なフォルムが特徴。そのため機動性は劣るものの、それを補う防御力がある。
最大出力時には、バックパックから顔が現れ「フェイスバーストモード」と呼ばれる状態になる。

そしてＧＮドライブと言う未知の原動力を使っている。

これの特徴は、常時緑色の粒子が放たれている。

武装は大出力ＢＴ兵器を主体とし、殲滅戦を想定した重砲撃型。

『ＧＮバスーカ？』
これはこの機体の標準装備で、両手に持つ二つのライフルをさす。
これは2基を合体させた「ダブルバズーカ」形態と、両肩のＧＮキャノンと接続した「ツインバスターキャノン」形態など、多様な攻撃方法が可能となっている。
ダブルバズーカと４門のＧＮキャノンを連動させることで、セラヴィード最大の攻撃「ハイパーバースト」を使用することが可能である。

『ＧＮキャノン』
これは両肩、両膝に２門ずつ、計４門を装備されている砲台をさす。
一つ一つの威力は強く、４門の同時斉射は「クアッドキャノン」と呼ばれる。
また、マルチロックも可能。
そして砲口を腕に変形させることが可能で、色々な奇襲を行うことも出来る。

『ＧＮビームサーベル』
これは『ビームサーベル』とあまり性能は変わらない。
この機体の場合『ＧＮキャノン』内にも４本収納されていて、計６本を装備して『ＧＮキャノン』から出した手を使い、全てを同時に使用することが出来る。

『ＧＮフィールド』
これはバックパックからもう一つの顔が現れ、周りを高密度のＧＮ粒子が包み、強力なバリアを発生させる。
これは防御としても使えるが、ＧＮバズーカ?やＧＮキャノンの粒子圧縮をサポートし、より強力な攻撃を可能にする機能もある。
だがエネルギーの消費が激しいので、多様は出来ない。

このほかにもまだ明かされていないシステムもある。

スファナには多くの謎がある。

なぜ彼女が織斑千冬と面識があるか?出身国はどこか?など色々と。

今はＩＳ学園で生徒として通っている。

そして『豪光の騎士』という呼び名を持っている。由来と意味は不明。

今後明かされていくだろう・・・。

オリキャラ紹介1（後書き）

機体の設定難しい・・・・。

それと次の更新も、おそらく早くは無いと思います。すみません。

気長に待ってください。

しかし質問等は受け付けますんで、ある人はください。

２０話　行方不明な僕（前書き）

長らくお待たせしました！！

書き直しに書き直しでやっと完成した・・・。

しかし原作キャラの登場が少ないです。

20話　行方不明な僕

「おにーちゃ～～ん！」

「にーさ～～～ん～～」

・・・・・・あれ・・・・桜？華？・・・・・・・ここって・・・・・僕の家？

「どうしたの？おにーちゃん」

「大丈夫？」

あ・・・・・これ夢だ。僕の深層意識は、まだこんな記憶を見せれたんだ。

「楓。いくら女顔だからって心まで女になるなよ」

「あらあら。私は問題ないわよ？」

「こちらに問題があるんだ。男が俺だけになる」

「ふふっ。そうね」

あ・・・・・・・・・父さん・・・・・・母さん・・・・・・・。

「おにーちゃん！遊ぼうよ！！」

「そうそう！私も遊びたい！！」

・・・・・・・・・・・何だろうね、この気持ち。

断ち切ったと思っても、断ち切れ無かったって事なのかな。

この夢に縋りたいと思ってる自分がいる。

許されるわけ無いけど・・・・・・でも僕はただ・・・・・・こんな

――――――――

「早く行こうよ～～～！」

「行きましょう！！にーさん！！」

「行っとけ、楓。遅くならないうちに帰ってこいよ」

「今日もいっぱい料理を作るからね♪」

こんな・・・・・こんな家族と一緒に生活できれば・・・・それでよかったんだ。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

ザザ～～・・・・ン・・・・。バシャーン。

「ん？・・・・・・・ペッ・・・しょっぱ・・・」

僕が目覚めたところは、何処かの浜辺。どうやら砂浜に打ち上げられてたらしい。

カー、カーと空で鳥が鳴く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は深呼吸をして・・・・・・叫ぶ。

「ここは・・・・・・何処だぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！！！！」

僕は何処の島に遭難した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「状況を整理だ。僕は福音との戦いで海に落ちて、何時の間にかここにいた」

何の役にも立たない状況整理だった。

「とにかく。僕は何処かの島に流れ着いているってことか」

となるとここが無人島かどうか確かめないと。

「痛い・・・・傷が海水に沁みる・・・・」

腹の傷が痛い。というわけで服を破って縛っておく。

「・・・・なんか・・・・僕ってこの状況に動じないね・・・・・・
」

本能が無人島生活に慣れているのか？

ハハハ、人間元はホモサピエンスだからだよね。そうだよね。

「海岸から回るか、森を突っ切るか・・・・」

さあさあ。冒険を味わうなら森だよね。

「無人島に来て、テンションが若干上がってるぜ〜〜〜」

そんなこんなで僕は森へは行っていった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「うわぁあああああああああ！！」

ブーンブーン！！

「来るなぁあああああ！！」

今僕はハチの大群に追われてます。

なぜかと言うと、森を歩いてる途中、蜂の巣を見つけたので、スルーしようとしたら、何故か落ちてきて僕の頭に直撃、そして追われて今に至るのです。

「僕が何したって言うんだ！！」

僕の言葉が通じるわけでもなく、ただ追われている僕。

「か、川！？川があるの？」

走ってると、何時の間にか川があった。

「水の確保は大丈夫そう――――――――――ってそうじゃなくて！！」

ブーン！ブーン！

「まだ追ってくるのか！！」

そして僕はまだ走る。調子乗った僕をお許しください。神様。

「ハアハア！！何で坂道なんだ・・・・・！！」

自然の摂理に愚痴っている僕。

「はぁあああああああ！！」

気合一発！！ファイト！！一発！！

そして蜂の大群の音が小さくなっていくのを感じる。

「もう少し！！」

そしてついに――――――――ってか何時の間にか山の頂上が見えた。

「はぁあああああああ！！」

ついに・・・！ついに・・・！目指してたわけじゃないけど頂上に着く！

これで苦労も報わ――――――――――あ。

「機体で飛べばよかったんじゃない？」

こんな結論にたどり着きながらも、僕は山のてっぺんへと立った。

「やったぁあああ――――――――――ああ！？」

いきなりバキッ！！って音が鳴ると思うと、僕の立っている場所が

崩れる。

「ｗｈｙ!?」

そのまま落ちる。

あ～～～れ～～～～。

あ、そういえばここの川って滝になってるらしいよ?

つまり僕は今は、滝のそこに落ちて行ってるのですね。

あ、あと僕って泳げないんですよ。知ってる方も多いでしょうが。

ついでに落ちてる高さは、軽く二十メートルくらいですね。

こんなにゆっくりと考え事してていいの?いいとおもいます。

バッシャーン!!

「ゴバハァ!?」

死ぬなー。溺れて死ぬなー。主人公補正とか働かないかな～～～。

こんなことばっかで困る・・・。トラウマになるよ。

変な声を出ながら気を失う僕であった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・ん？・・・・ハッ！！」

僕は飛び起きた。ん？飛び起きた？

「あれ？・・・ベット？」

僕は羽毛らしき布団で寝ていた。上半身裸で。傷には包帯が巻かれている。

「・・・・・・・なぜ？」

辺りを見回して、広さから察するに僕がいるところはリビングっぽい。

木造の立派な家のだと思う。

「？？？？？」

状況整理。

まず僕は、福音との戦いでここに流れ着いた。そして僕は森を突っ切ろうとした。

そこでハチに襲われて滝から落ちた。そこで意識を失う。

「・・・・・・・・・ヒドイ状況・・・・・・・」

思い返してみたら、一つもいいことが無い。不運なことばかりおきている。

「でも・・・助けられたってこと？」

窓の外は真っ暗で、何も見えない。人の気配も特に無い。

「・・・・・・えぇ～～・・・・・・」

助けられたはいいけど、人がいないって・・・・・・。

一応機体は盗られて無いので安心。

「・・・・・・・・静か～～・・・・・・・」

僕を助けてくれた人は何処に居るんだろう？

「主人公補正ってあるもんだね」

な～～んて愚痴っていたら・・・・・。

ドカァアアアアン！！

「ッ！？。な、なななな！？」

外から爆音が聞こえた。理由は知らない。できれば知りたくない。

「失敗だね」

「まあそういうこともあるさ」

「また一からやり直しだよ」

「楽に出来ると思うな」

外からこんな声が聞こえる。声から察するに二人の男性。若い感じだ。

（助けてくれた人かな・・・・）

しかし何故か聞いた事のある声。気のせいかな？

「しかしもう夜だな。夕飯でも食べよう」

「そうだね。楓も心配だし」

（僕の事を知っている!?だ、誰なんだ!?）

そんな僕の心境とは裏腹に、扉は開く。

「――――――――――へっ？」

「なんだ、起きたのか」

「そんな言い方は無いんじゃない？アスラン」

「構わないさ、キラ」

僕を助けた二人が話す。そいつらは僕の知っている人達だった。

「・・・・・なんで君らが、こんなトコにいるんだぁあああああ!!!!!!!」

とりあえず僕は叫ぶことにした。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「ホント驚いたよ。いきなり崖が崩れたと思ったら、楓が浮かんでるんだもん」

「・・・・・・出来れば、モグッ、そこは思い出したくない」

「仮にも組織のリーダーがカナヅチどうする？」

「・・・・・僕だって、モグモグッ、治したいと思ってるさ・・・・・・」

「喋りながら食うな」

アスランとキラと僕で、今は木のテーブルを囲み、夕飯を食べている。

ちなみにメニューはカレーライス。意外と美味しい。

ちなみに、彼らがここにいるのは旅行らしい。全くの偶然だった。

まあ日本は珍しいものがいっぱいだし。それはいいんだけどね。

「二人だけ？」

「いや。ラクスとカガリもいる」

「二人とも、今は山にある天然温泉に浸かってると思うよ」

「あ、なるほど」

そして僕は再びカレーを食べる。

「お前はどうしてここにいるんだ？」

「海で遭難して、気付いたらここに」

「あ、相変わらず・・・ハチャメチャな人生歩んでるね・・・・・」

「それ禁句」

そして僕らはまたカレーを食べる。

そのときにアスランが口を開いた。

「一応手当てとかはしておいた」

「え？今、一応敵同士なんだよね？」

「まあ・・・そうだろうな」

「いいの？僕を助けても」

「なんだ、助けて貰わない方がよかったのか？」

「まあそうとは言って無いけどさ。敵対しないならこっちに来て欲しいと」

僕が言うとキラが答えを返す。

「僕らも別に好きで戦いたいわけじゃないけど、そうしなきゃいけない状況なんだ」

「そういうことだ。詳しいことは言わない・・・ってもう分かってるだろうが」

「まあ形ぐらいならね。モグモグ・・・ご馳走様」

カレーを食い終わり、台所へと食器を持っていく。

「お前はこれからどうするんだ？」

「う～～ん～～・・・とりあえず飛んで帰ろうかと」

「大丈夫か？」

「まだエネルギーが足りないけど、明日の朝ぐらいには出ると思うよ」

「ここに泊まる気か？」

「え、ダメ？」

「キラはいいか？」

「僕は別にいいよ」

「じゃあ俺にも異論は無い。カガリたちも異論は無いだろう」

「ありがとう」

「それじゃ、あいつらが出てくるまで待つか」

「ちなみに僕ってどうすればいい？」

「え？ソファにでも寝てくれればいいよ」

「というかそうしろ」

「ふ～～ん・・・やっぱ二人っきりでやりたいから？」

そう言った途端、二人が顔も赤くして講義した。

「そそそそ、そんなことはないぞ！？」

「そ、そうだよ！！そういうこと言っちゃダメだよ！！」

「隠さなくてもいいよ。すこし早い気がするけどね～～～」

「だから違うって！！」

顔を赤くして講義する二人をテキトーに聞き流す。

そのとき、玄関の扉が開いた。

「さっぱりしました～～」

「アスラン～～、キラ～～、上がったぞ～～」

この声は・・・あの人らだろうな。

そしてリビングに入ってくるのは、着物を着た金髪美少女と桃髪美少女。

「ラクスはこんばんわ。カガリは久しぶり」

「あら。起きたんですのね」

「怪我はどうだ？」

「おかげさまで」

その後、中々楽しい談笑をした。

そういえば、アスランたちが最初にやってたのは洗濯機の修理だった。

どこをどうすれば爆発音が鳴るのかは触れないで頂きたい。

そして、温泉に入るためキラたちの案内で山の中を進んでいた。

男のサービスシーンは省きます。

「意外と気持ちよかったよ～」

「そうだな」

「天然っていうのがいいね～～」

着物を着て、桶やらタオルやらを持って下山する僕ら。

「そろそろ九時ぐらいかな」

「何かするの？」

「まあね」

「そうだな」

何か二人が笑う。な、なんだよぅ・・・・。

そんなこんなで、建物の方へ戻っていく僕ら。

「おかえりなさい」

「ただいま」

「早かったな」

「まあ男ってのはそういうもんだ」

ラブラブな雰囲気作ってるよ。ちょっと人の目を気にして欲しい。

「そろそろ寝る？」

空気になっているので話に割り込む。

「まだ早いだろう」

「そうだぞ。一大イベントが残ってるんだからな」

「イベント？」

「そうだよ。ね？ラクス」

「ええ。そうですわね」

「？？？？？」

僕の頭の中は疑問符で埋め尽くされていた。

「外に出よう」

キラの一言で、皆外に出る。そして海のほうまで行く。

だけど、キラたちは自分の機体で飛んでいった。あっ、キラたちは皆、機体を持ってるよ。

でも僕は機体が使えないので結果、僕だけ走らされた。

「くそう・・・・ヒドイな・・・・・」

大した距離じゃないけど、そういう問題でもないのだよ！！

ちゃんとした道が無いから、草を掻き分けて進むしかない。

結構な重労働。

「なんだよ・・・・イベントって」

愚痴りながらも道なき道を進んでいく僕。

「おおっ。潮の香り。やっとついー――――――――」

パンッパンッ。

「遅いぞ」

「待ちくたびれたよ」

「何やってるんだ」

「まあ歩きにしては早いですけどね」

クラッカー的なのを鳴らして、好き勝手言ってくるキラたち。

「へ？」

全く状況が分からない。

そんな僕に気付いてか、ラクスが喋る。

「明日には楓は行ってしまうんでしょう？」

「うん」

「そして、しばらく私達は敵同士になります」

「・・・・・・ま、そうだね」

「だから最後の夜ぐらい、一緒に楽しもうかと思いまして」

「花火大会を開くことにしたんだ」

キラたちの手には、色々な花火がある。

「さ、一応お前が主役なんだからな」

「さっさとこっちに来いよ」

カガリとアスランに引かれる。

「・・・・・・・・・・ありがとね。みんな」

出来るだけ小声で言ったが、聞こえてたらしくみんな微笑を浮かべた。

「ようし!!盛り上がろう!!」

『オー!!』

そして僕らはハイテンションで夜をすごした。

「わわっ!いきなり火が出た!!」

「そりゃ花火だし――――――ってキラ!!こっちにそれを向けるな!!」

「うるさいぞ二人とも――――――――――ってあぁっ!!閃光花火が!!」

「妙なところでピュアですね。アスラン」

僕はこのの花火大会を、決して忘れはしないだろう。

x
x x
x x x
x x x x
x x x x x
x x x x x x
x x x x x x x
x x x x x x x x
x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x

ち去ろうと僕は決めていた。

「ささいなお礼でも」

すぐに出ても良かったけど、家の材料を使ってささやかな朝食を作った。

ベーコンエッグに卵のかき玉汁に海草サラダ。別におかしくは無いと思う。

「じゃ・・・行こうかな」

そして玄関の取っ手に手をかける。

「楓」

「・・・起こしちゃったかな？カガリ」

「行くのか？」

「うん」

「・・・・・・次に会うときは敵同士か」

「・・・・・・その通り。でも僕は止まる気は無いから」

「そうか・・・。だが私達とお前達は仲間だ」

「わかってるよ。全てが終わったらまた花火でもしよう」

「ああ。楽しみにしてる」

そうして僕は扉を開けて、この家から出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

僕は海岸のところで一人たっている。

「エピオン」

僕が呼ぶと、体が赤い装甲で包まれる。

「飛ぼう。みんなの下へ」

最後に、戦わなければならない親友達の方を向く。

「死なないでよ。みんな」
出始めた朝日を背に僕は飛び立った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

ここはあるビルの地下室。
「和人！！さっさと仕事して！！」
「え～～～。あいつがくたばるわけ無いだろ～～～」
「わからないじゃない！」

「二人とも落ち着け」

「興奮してんのは佳奈美だけだぞ」

「うっさい！！」

五人の内三人が、派手な口論を繰り広げてる。

「しっかし・・・ちょっと居場所が分からんだけでここまでするか？」

「万が一っていう可能性もある」

「んなわけねえって」

「・・・・・・・・・・・・仕事して・・・・・・・・・・・・」

「スファナからお叱りを頂いてるぞ」

「そうだな。よし！ラミア！！俺の分よろしく」

「ええ！？何で私！？」

「いいのよラミア。あそこの万年自堕落野郎の言う事なんて聞かなくて」

「悪かったな。自堕落野郎で」

「ん？レーダーに機影だ。これは・・・・・エピオンだな」

「ホント！？」

「ほらな？アイツがくたばるわけねえって」

「・・・・・・・・結果論・・・・・・・・・」

「いいんだよ正しければ」

「どこ向ってるか分かる？」

「進路で言うと・・・アメリカだな。今、太平洋を飛んでる」

「「「は？」」」

「ん？もう一つ機影がある。ＩＳみたいだが」

「米軍に敵と勘違いされたんじゃねぇの？」

「いや、登録されて無いＩＳだ」

「はぁ？」

「アンノウンが楓に接近してるっていうの？」

「いや・・・この動きどこかで見たことが・・・・・・」

「動きって？」

「ああ、機影がレーダーから一度消えて、違う場所に出てくる。そ

れを繰り返してるんだ」

「？」

「それって・・・・・まさか！？」

「心当たりがあるのか？佳奈美」

「《虚空》・・・・・！！」

その言葉で、ここにいる人が全員気付く。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「そういえば日本ってどっちだろう？」

飛んで１５分経ってから、ふとそんな事が頭をよぎる。

「まあテキトーに進んでれば」

そしてスピードを上げて進む僕。

しかし・・・・・・・・。

「ん？レーダーに機影」

それは見たところＩＳの反応。しかし一度消えてまた出てくるって変な反応。

レーダー壊れた？でも着実にこっちに近づいてくる。

あれ・・・？確かこんなの前にもあったような・・・・。

確かアレは僕が初めて、あの人と会ったとき――――――――ああああっ！！

「《虚空》！！・・・・ってことは・・・・・まさか・・・！」

やっとカメラで見える範囲にきた時に見えた。

白い装甲と黒い装甲を混ぜた感じの装甲。

光と影を思わせる異質な翼のスラスター。

そして超でかい黒刀を両手に持っている。
そして黒い髪をなびかせる、初代ブリュンヒルデ、世界最強のＩＳ操縦者。
「織斑千冬！！」
アチラは僕を確認すると一度止まり、刀を肩に乗せる。
そして通信が入る。
『ずいぶん遅い帰還だな』
「気にしないで頂きたいです」
『こちらとお前をＭＤＡにしようと思ってたのだが・・・・』
「シャ、洒落になってませんよ・・・それ」
ＭＤＡ・・・・・戦闘中、何らかの事態で行方不明、及び死亡した人の事を指す。
これは本来、学生につけるようなものでも無いけどね。
『まあ生きていたのならそれでもいい』
「それで・・・・何故刀を振り上げているのでしょうか？」
アチラは喋りながら黒い刀を空に向って掲げる。

『なに、ストレスの発散さ』

そして、織斑千冬がいきなり消える。

まあ大体の人は驚くだろうが・・・・・僕には効かない。

「未来は見えている」

僕は、ビームソードで後ろを斬りつける。

ガキィィン!!

織斑千冬の刀と、僕の剣がぶつかる。

「やはりこれでは有効打は当てられないか」

「自覚がある用で何より」

そして僕らは一度間合いを取る。

「いつかの決着。ここでつけますか?」

「おもしろい。近頃、色々と鈍ってるので準備運動にはちょうどいい」

「ハッ。最近ご冗談がうまくなりましたね、ブラコンさん?」

「・・・・・死んで反省しろ、カナズチ男」

「上等！！」

そして僕らは武器を振り上げる。まあ殺す気で。

しかし・・・・・・。

バギュン！！

「「！！っ」」

いきなり僕らの間を、極太のカラフルなレーザーが通り過ぎる。わぁキレイ～～。

まあ威力は海に大穴を空けてしまうけど。

「そこまでです、お二人とも」

「もう米軍にもバレてるし」

「その通りだ」

そのレーザーを放ったのは、上からラミア、佳奈美、アルドね。

三人とも機体を使っている。

「あと２分３３秒後には、米軍のＩＳ部隊が来ます」

「ここは一度引いて貰えない？」

「まあ引く気が無いなら、こちらにも考えはある」

織斑千冬に対し警告を言う三人。怖い怖い。みんな殺す気じゃないですか。

「仕方ない。ここは引いてやろう」

まあ四対一、しかも僕らが相手なら仕方ない判断かな。

「桐谷。学園の方は自分で解決しろ。いいな」

そして《虚空》を使い、この場から離脱する。

「何か問題になるような事したっけ？」

「楓様。今は」

「わかってるって、ラミア。一度もどろう」

僕らは帰るべき場所に帰った。

２０話　行方不明な僕（後書き）

すいません。次回でＩＳ三巻は終わりです。

あと一段落したら、他のオリキャラの設定を明かしたいと思います。

感想お願いします。

21話　帰ってきたよ（前書き）

物凄い遅れた・・・スイマセン。あと普段より短いです。

あと、面白さはあまり期待しないで頂きたいです・・・・。

21話　帰ってきたよ

色々と疲れた遭難。

その逆境を乗り越えて、僕は自分の家に帰宅した。

「ただいま～」

「お帰りなさい」（ラミア）

「・・・・・消えて」（佳奈美）

「キモ（笑）」（和人）

「・・・・・・・・・・・・・」（アルド）

へぇ・・・・・そう。

「じゃあ今、僕を馬鹿にした人達の給料は９８％削減・・・・と」

『お帰りなさい』

「結局金なんだ！！」

悲しい・・・僕の仲間たちは何でこうも現金なんだ・・・・・。

「それに比べて・・・・ラミアは素直でいい子だ」

ナデナデとラミアの頭を撫でる。

「／／／／／」

顔を赤くしているが・・・そんなに照れることかな。

「楓ぇ・・・イチャイチャしてねぇで、さっさと給料よこせ」

「和人・・・まあ仕方ないか。後で送っとくよ」

「それならいい」

コイツは上司の僕に対して、リスペクトと言う物をしてないな。

「お前がいなかった間、一応ＩＳ学園の情報操作はしておいた」

「ありがとうアルド」

「フッ。お礼ならヒイロに言っておけ」

「そのヒイロは？」

「あの海まで・・・・・」

「飽きないね」

「あいつの戦う理由だからな」

まあ、それは置いておこう。

「とりあえず。明日には学園に戻ろうかな」

「おう。そうしておけ。それとホラ」

和人から白と青のブレスレット・・・・ダブルオーを渡される。

「ありがとう」

そして僕は家のリビングの扉を開ける。

「あ、そうだ」

僕は手首のブレスレットを両方外す。

「エピオンとゼロは返しておくよ」

「私はトールギスがあるからいいが・・・ヒイロはウィングだったからな」

そして僕のブレスレットを受け取るアルド。

「ちゃんと渡しておく」

そうえいば・・・・・。

「刹那とかロックオンとかは？」

「バカンスらしい」

「・・・・・・刹那が？」

「とても嫌そうな顔をしていた」

「だろうね。帰ってきたらダブルオーも返すから、そう言っておいて」

「ああ。・・・・・それじゃあお前は、何の機体を使う気だ？」

僕は扉を開けながら、答える。

「決まってるじゃん。一角獣（ユニコーン）だよ」

「あれは・・・・・」

「完成してるんでしょ？」

「まあ・・・・・」

「なら問題はない」

「・・・・・わかった。受け取れ」

アルドはポケットから純白のブレスレットを取り出す。

「ありがと。ミリアルド」

「礼は要らないさ．それと私もトールギスを返しておく」

アルドが青と白のペンダントを投げる。

「どうも。んじゃ、おやすみ」

僕はそのままリビングを出て、自分の部屋に向った。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「どうしよっかな～～・・・・・」

僕は自分の部屋で、一夏たちにどんな言い訳をするか考えている。

「・・・・・・別に”生きてました～～”って言えばいいかな・・・

・・」

どうも、殴られるとかのバイオレンスなビジョンしか思い浮かばない。

「当たって砕けるか・・・・・」

砕けること前提で考えるのがこんなにも辛いとは・・・・・・。

「・・・・・・一角獣・・・ユニコーン・・・・可能性の獣・・・・・か」

僕は手首についてるブレスレット見て呟く。

「望むところさ。怖いからこそ、それから逃げてはいけない」

僕は明かりを消して、ベットに寝転がる。

「おやすみなさい・・・・・・」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・・一夏」

「・・・・あ、箒か。どうした？」

時はＩＳ学園、食堂。

一夏は箒と一緒に、朝食をとっている。

その表情は楽しげなものではない。

「一夏、箸が逆だぞ」

「え？・・・ああ、本当だ」

慌てて箸を持ち替える一夏。

「・・・・・・楓の事か？」

「・・・・・・そうなるな」

楓はあの海での戦闘のあと、学園の先生達が最善を尽くして探したが、結局見つからなかった。

楓のＩＳは、政府の人達が回収しようとして、千冬に止められそのまま千冬が持っていった。

束は”興味深いね・・・・・桐谷楓君かぁ～～”と言いながらどこかへ消えた。

「ボーデヴィッヒとデュノアは泣いていたな・・・・・」

「お前だって泣いてただろ？」

「そ、それは・・・・・・」

実は政府の人及び先生たちの捜査から、楓の生存している確率は限りなく低いとらしい。

それを容赦なく、一夏たちに言ったのは千冬だった。

「帰って来る事を信じようぜ」

「そう・・・だな。あの楓が簡単にくたばる筈はない・・・・か」

と口で入ってるが、二人とも表情は暗い。

「楓・・・・・」

「呼んだ？」

「「・・・・・・・・え？」」

声のしたほうを見ると、楓が色々と荷物を持っている。

「久しぶり。お二人さん」

「え・・・・・？」

「か、楓・・・・か？」

二人は、楓の突然の登場で頭が付いていっていない。

「そうだよ。自分で言うのもなんだけど、こんな容姿をしてるのは

僕だけだと思うよ」

「そういやそうだな」

「うっ！・・・・そこはちょっと否定してくれても・・・・・・」

「お前が言ったんだろ――――――――じゃなかった！！」

いきなり一夏が大声を上げた。楓は耳を押さえる。

「うるさいよ一夏。今は朝なんだから」

「す、すまん・・・・・じゃなくて！お前なんでここにいるんだよ！！」

「え？ここの生徒だから」

楓は当然の理由を言う。

「そ、そうじゃなくてだな・・・・・」

「お、お前・・・・生きていたのか？」

箒の質問に、楓はわざとらしくショックを受ける。

「うわ～～ん。箒さんたちは僕を死んだことにしてたんだ～～」

「なんだそのわざとらしい演技は！！」

そういうと、楓は真剣な表情になる。

「ま・・・ちゃんと戻って来ましたよ」

「か、楓・・・・・」

箒が楓に、急に背を向ける。

「箒さん？」

楓は箒の肩に手を掛け、箒の顔をのぞく。

「あっ・・・・・・」

「ほ、箒さんが・・・・・・」

「み、見るなぁ！！」

「グホォ！！」

箒の肘打ちが楓の鳩尾に直撃、楓はその場から吹っ飛んだ。

「ハハッ。箒泣いてんのかよ」

「う、グスッ。うるさい」

涙を拭きながら、箒は一夏を睨む。

「ま、とりあえず。いう事があるかな・・・・・」

「ああ。その通りだ」

そして二人は楓に近づいて行く。

「グッ・・・・身体に響いたよ。一応病み上りなんだけど・・・・・」

「そうか・・・・楓」

「？」

「「おかえり」」

その言葉に、一度楓は驚いた表情をして、再び笑顔になって言う。

「ただいま。二人とも」

21話　帰ってきたよ（後書き）

できればこれからは、早めに更新できればいいなぁ・・・と思ってます。

22話　その後と久しぶりの起動（前書き）

誤字脱字、感想があったらお願いします。

22話　その後と久しぶりの起動

「・・・・・え～～っと・・・・・・？」

僕が帰って来て、持ってきた荷物を部屋に置きに向ったら、背後からいきなり殴られて、気がついたら
食堂の椅子に座っていて、さらにワイヤーで縛られているのだ。

そして周りにはセシリアさんとシャルさんと、ラウラさんと鈴さん。

目の錯覚でなければ・・・・・・全員怒りマークが出ている。

「さて。どういう調理法がいいか？個人的には輪切りがオススメだ」

「ちょっと！！いくらこの格好がハムに似てるからって――――――むがっ！」

ラウラさんの言葉に反論すると、いきなり口をガムテープで塞がれた。

「喋るな。貴様に喋る権利などない」

「じぶじんべぇむ！！（理不尽です！！）」

「黙れこのハムもどきが。それよりシャルロット、どういう調理がいいとおもうか？」

「とりあえず・・・スライスすればいいんじゃないかな？」

「うあいう！？（スライス！？）」

「なるほど。確かにいい案だ」

「ごおうぎ！？（殺す気！？）」

「うるさいわね。このハムもどき」

「鈴さんの言う通りですわ。食材は食材らしくして欲しいです」

「そくあいさないあら！！（食材じゃないから！！）」

僕の必死の弁明は彼女達に届かない。

というか、なぜ僕がこんな目にあってるんだろう・・・・・。

・・・・・まあ思い当たることは一つしかないけどね。アッハッハッハ！。

ドガッ！ゲシッ！バゴッ！

「むぐぅう！（ぐふぅ！！）」

「やはり殴る蹴るでは気が晴れないな」

「同感です」

「蜂の巣にでもしちゃおうかな」

「もしくは三枚卸し？」

「あるいは両方か？」

「おえごぎあつあでぶ！！（どれも却下です！！）」

「悪いが喋るなら、せめて伝わる言語で話せ」

「がぃやあぶでーぶうぉあつじで！！（じゃあガムテープを外して！！）」

「同じことを言わなければならないか？」

「・・・・・・・・・・・・」

怖いので反論をやめました。

「・・・・・生きてたんですのね」

セシリアさんの言葉。それを僕はガムテープで塞がれた口で返す。

「ふぁげ（まあね）」

「・・・・・何していたんだ」

ラウラさんの言葉。

「ふびれぞうだんじえた（海で遭難してた）」

「・・・・・ガムテープ邪魔じゃない？」

という鈴さんの言葉で、僕の口からガムテープが外された。

「ぷはっ。呼吸が辛かった・・・・」

「楓」

「ん？なんですか？シャルさん」

「・・・・・おかえり」

「人を椅子に縛りつけた後に――――――いえ、何でもありませんから、銃をしまってください」

「よろしい」

そして、ショットガンとアサルトライフルをしまうシャルさん。

「じゃ、改めて。ただいま」

と言った瞬間、シャルさんとラウラさんに抱きつかれた。

「え！？ちょっと！？」

「よ、よかったよぉ～～～・・・・ホントに心配したんだから～～・・・・グスッ・・・」

「・・・・しばらく・・・・・こうさせてくれ・・・・・・」

う～ん・・・そう言われると、反論しにくいよな・・・。

「わかりました・・・・気の済むまでそうしてください」

そして僕は抵抗を諦めた。まあワイヤーで縛られてるし、仕方ないか。

「セシリア・・・いいの？」

「何がですか？鈴さん」

「あの二人に・・・・・」

「いいんです。私にとって楓さんは、目標ですから」

「・・・ま、アンタがそれでいいなら、私は何も言わないけど」

「私の真のお相手は・・・・やっぱり一夏さんですわ」

「ちょ！？な、何てこと言ってるのよアンタは！！」

「あら？そんなの私の勝手ですわ」

なにやら意味深な会話を繰り広げる、鈴さんとセシリアさん。

「・・・・そうだ。鈴さんセシリアさん」

「な、なんですの！？」

「な、なに！？」

「ただいま」

一応言って置こうと思った言葉を言うと、なぜか面を食らった顔をする。

「お帰りなさい」

「お帰りなさいですわ」

しかし言葉は言ってくれた。

「ありがとう」

そして僕はここから１時間以上拘束されてしまった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「いてて・・・まだ痕が残ってるよ」

ワイヤーから開放された後、僕は自分の部屋に戻ろうと廊下を歩いていた。

「重い荷物だ・・・・・」

旅館の荷物は、全部佳奈美が僕の家に送ってくれたから、その荷物を僕が運ばなくてはならない。

「・・・・・・・・・・宅配とかは規制がひどいからなぁ～～。ここは」

なんて愚痴ってたら・・・・・・。

「やあ」

「・・・・・・・どうも楯無先輩。それじゃあ」

「ちょっと。久しぶりあってその反応はないんじゃない？」

「そうですか？いつも僕は、こういう反応をしてたと思うんですけど・・・・・・」

「まあ・・・確かに間違ってもないけど・・・・」

しゅんと沈んだ表情になる生徒会長。さすがに良心に呵責を感じる。

「わかりましたよ。次からなるべく、明るい挨拶を心がけます」

「ならよろしい」

すると一転、沈んだ表情から普通の不敵な表情へ。

「・・・・はめられた」

「あまりにリアクションが薄いから、私もどう反応していいか分からないわ」

「スイマセン」

「いや、謝られても困るんだけど」

「そうですね。じゃあ迷惑なんでやめて貰えません?」

「真面目な言葉はもっと困るわよっ!!」

でもなぁ・・・・謝るのがダメなら、正直に言うしか僕には思いつかないし・・・・・。

「せっかく人が心配してたっていうのに・・・・・」

「あ〜〜それで。ご心配をお掛けしました」

丁寧に頭を下げる。

「そ、そうね。・・・・・・ねえ楓」

「はい？」

「そ、その・・・なんで私のときは、そんなに他人行儀なの？」

「え？そんなつもりはないですけど」

「佳奈美みたいに、敬語無しでいいのよ？」

「え？先輩なのに？」

「いいの！！」

な、なんか鬼気迫るものがある。仕方ない敬語は外すかな。

「わかった。佳奈美と同じ態度で接すればいいんだね」

「その通り」

「それじゃ、僕は荷物を部屋に置かなきゃいけないんで、これで・・・」

「そ、そういえば、わたしも仕事があったっけ」

そして僕達は廊下の突き当りで別れた。

「じゃ、おやすみなさいね」

「おやすみ」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

僕は部屋に戻って、自分の荷物をそこらに投げ捨て、ベットへダイブした。

「疲れた～～～～・・・・・・」

しかしその疲れも一気に吹き飛ぶ！！

「明日から夏休みか・・・・・・学校に行かなくて済む」

僕はこれでも学校はあんまり好きじゃない。

なんか大人に勉強を強要されるって・・・癇にさわる。

しかも僕より頭の悪い先生に。はっきり言って面倒くさい。

「小卒の子に、大の大人が負けちゃいけないでしょ」

まあ僕は普通じゃないから、この結果は仕方ないんだけど。

「寝よう・・・・・」

と僕が布団に丸まったとき、通信が入る。

どうやら機体のプライベート・チャンネルっぽい。

（もしもし）

（楓・・・・・）

（あ、スファナ。学園にいなかったので、どうしたんだろうと思いました）

（・・・・・・今、秘密基地の方にいる）

（？　どうしてですか？）

（・・・・・・機体の・・・最終調整・・・・・）

（あ、なるほど。他に誰かいます？）

（・・・・・デュオと・・・・・カトルと・・・・・ミスター・ブシドーが・・・・・）

（なぜその三人が・・・・・・）

（・・・・暇だから・・・・・だって・・・・・）

（はぁ・・・・・ま、いいや。で、何か用があったんでしょう？）

（・・・・・私と・・・戦って欲しいの・・・・・）

（え？）

（私の機体の調整は・・・・実践戦闘のデータだけ・・・・・だから・・・・・）

（・・・・・じゃあデュオたちとやれば・・・・）

（・・・・・一度でいい・・・・・楓と戦ってみたいから）

（・・・・・・・・・）

（私はまだ、楓の実力を知らない・・・・・）

（・・・・・つまり、強さも分からない奴を信用は出来ない・・・・・ってことですか？）

（・・・違う・・・・・ただ私は・・・・・楓の強さを知りたい）

（・・・・・わかりました。まあ、断る理由もないですし）

（・・・・・ありがとう。ワガママを聞いてくれて・・・・）

（いえ。最新のＩＳＧの強さ・・・・・見せて貰いますよ）

（・・・うん・・・・・。それと楓・・・・・）

（はい？）

（・・・・・・・おかえり）

（・・・・・・・ただいま、スファナ）

（・・・・・おやすみなさい）

（おやすみ）

そして通信が切れる。

「・・・・・久々の戦闘だ・・・・・。アルドと交換した、僕の愛機『トールギス？』と――――――」

腕にある純白――――――それでいて、赤い線が入っているブレスレットを見る。

「――――――――ユニコーン。二度と・・・二度と君を暴走させない。この場で誓うよ」

そして明かりを消す。

「・・・・・おやすみ」

X
XX
XXX
XXXX
XXXXX
XXXXXX
XXXXXXX
XXXXXXXX
XXXXXXXXX
XXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

「ふぅ。久しぶりだ」

僕は朝早くに専用のバスに乗り、人気のない田舎に入る。

そこからさらに足を進めると、こんな田舎に不似合いな、近未来的研究所がある。

「出迎えなし・・・・まあいいけどさ・・・」

そして扉の前に着く。この扉を開くためには・・・・・・。

『問題です。デデン♪』

突然扉が喋りだ――――すいません、ジョークっす。ちゃんとスピーカーから、合成音声が流れます。

『一問目。三権分立の三権を答えよ』

「司法権、立法権、行政権」

『二問目。その権利を担わせるのは?』

「裁判所、立法府、行政府」

『3問目。総理大臣、正式には?』

「内閣総理大臣」

『4問目。国務大臣の役職を全て答えよ』

「内閣総理大臣、総務大臣、法務大臣、外務大臣、財務大臣、文部

科学大臣、厚生労働大臣、農林水産大臣、経済産業大臣、国土交通大臣、環境大臣、防衛大臣、内閣官房長官、国家公安委員会委員長、一応言っとくけど内閣府特命担当大臣、無任所大臣」

『5問目。権力分立は何を基にしたといわれてる?』

「イギリスのジョン・ロック著書『市民政府二論』と、フランスのモンテスキュー著書『法の精神』」

『全問正解です。どうぞお入りください』

バシュと扉が横に開く。

「簡単な問題・・・現役中学生が考えそうなことだ」

と言いながら建物の中に入る。

「よお楓!元気か?」

するといきなり僕の方に腕を回す三つ編みの男。

「いきなり現れないで欲しい」

「ハハハッ!これが俺の機体の力だぜ」

「こんな無駄なことにハイパー・ジャマーを使うな」

「そんな事はいいだろ?スファナとカトルが待ってるからよ」

「・・・・わかったよデュオ」

そして暗く広い通路を進んで行く。

すると巨大で黒い、近未来な模様をした扉が出てくる。

傍には『面白いプロポーズ演技（楓ご指名）』とディスプレイが浮かんでる。

「デュオがやって」

「お前がやれ。ご指名受けてんぞ」

「・・・・・貸し一だから」

「オーライ」

この扉を開けるためにとる行動は一つ。

「『私は・・・・あなたが・・・・・好きなの。貴方は・・・・どう？私の事・・・・嫌い？』」

「『・・・・・ハッ・・・・まさかお前から・・・・・そんな言葉を聞くなんてな』」

「『・・・・・なによ。少しぐらい・・・動揺してくれたっていいじゃない・・・・・』」

「『・・・・悪いがこれでも・・・・・・驚いてるんだがな』」

「『・・・・貴方のポーカーフェイスは、こういう所でも私を惑わせるのね・・・・・』」

「『なんだ?誘惑しちまったか?悪いな』」

「『自意識過剰』」

「『それが俺さ。これまでも・・・・そして、これからもな』」

「『知ってるわよそれぐらい。・・・・・それで?』」

「『何がだ?』」

「『返事よ。プロポーズの』」

「『最初は俯いてたくせに、もういつもの強気か』」

「『う、うるさいわよ。・・・・それで・・・どうなのよ』」

「『おいおい・・・わざわざ口で言わなきゃダメか?』」

「『貴方の口から・・・・聞きたいわ』」

「『そうかい。じゃあ・・・・言ってやるよ――――』」

「『・・・・・・・』」

「『――――もちろん・・・・OKだ』」

「『・・・・バカ。さっさと言いなさいよ』」

「『ハッ。悪かったなバカで』」

「『反省するならよし。じゃあ後悔させないでよね』」

「『へいへい・・・・幸せにしてやるよ』」

「おぇ・・・・・・・吐きそう・・・・・・」

「察するぜ楓・・・・傍で聞いてた俺も辛かった」

今の猿一人芝居は、扉を開くためにしなくてはいけなかった。

「しかしお前の女声は凶悪だな。その見た目でその声を出されたら、誰もが女って答えるぜ」

「悪いけど僕はノーマル」

『ピー。ロックを解除します』

僕らの会話を遮るように、合成音声のアナウンスが流れる。

何重にもなっていた扉が、一つずつ解除されていく。

そして扉の奥に入っていく。

奥に入ると、そこは様々なコンピューターのある壁に、中心にガラスで覆われたバトル場がある、広いドーム型をしている。
例えて言うなら室内の東京ドーム。

『楓～～？さっきの演技面白かったわ～～』

「うるさいよヴェーダ」

いきなり床から現れたのは、白いワンピース姿の少女。

彼女の名前はヴェーダ。簡単に言うと人工知能体。この基地の統括プログラムもかねている。

一番最初のクイズも、二番目の猿一人芝居も全部彼女のせい。

なんせ彼女は――――――。

「いい加減あんな条件やめてよ」

『いやよ。面白くないわ』

そう。

つまりはヴェーダが面白ければいいのだ。

一番目はクイズと決まってるから、僕があまりに普通に言ったから、二番目は嫌がらせをしてきたのだろう。二番目はヴェーダの独断で、面白い演技と決まっていたから。

「プロポーズ芝居ってなにさ・・・・・」

『謙遜しないで。迫真の演技（笑）だったよ』

「オリザノール・・・・・」

謙遜なんか誰がするか。僕が思ってるのは深い絶望だ。深さで言うとマリアナ海溝。

「久しぶり、楓」

ショックを受ける僕に、優しそうな声で話しかけてくれる少年。

「やあカトル」

「大変だったね」

「・・・・本当に」

「俺も辛かったぜ。本当に鳥肌が立った」

「しょうがないじゃないか。で、スファナは？」

「もうバトル場にいるよ」

「はやっ！！ヤル気満々だね」

「確かに。殺る気はスゴイあったと思いますよ」

「・・・・字が違うと願うか」

そして服を脱いでＩＳスーツ（仮）となり、真ん中のバトル場に入って行く。

『楓。なんか途中から、マイスター達が来るらしいよ』

ヴェーダからのアナウンス。

「何で？」

『今日帰ってきたんだけど、暇だから楓たちの戦いを見るって』

「家で寝てればいいのに・・・・・」

まあ別にいいか。気にしても仕方ない。

「真面目にやろう」

何メートルか先に待機する、純白の装甲を纏った少女を見て、僕も気を引き締める。

「・・・・・楓」

「直接会うのは久しぶりですね。スファナ」

「・・・・・一週間もたってない・・・・・」

「ま、確かに」

「・・・・・楓。手加減しないで」

「・・・・・・・・・・」

「手加減されて勝っても・・・・・・・・・何の意味もない」

「・・・・・。勝つの前提ですか?舐められたものですね。そんな事言われると――――――――」

僕は手首のブレスレットを掲げる。

「圧倒的な力で、捻じ伏せたくなるじゃないですか」

言葉と同時に、僕はあの・・・・・・純白の機体、ユニコーンを纏う。全身装甲で。

名の通り額の一本角と、フェイスガードに覆われたゴーグル状のカメラアイ。

手には黒い銃とシールド。

「トールギスは、後のお楽しみ」

そして僕は手にあるビームマグナムを撃つ。

「ＧＮフィールド」

しかしそれは機体から発生した、緑色の壁に阻まれた。

「ＧＮバスーカ?・バーストモード」

絶対防御壁をはりながら、持ってる二丁銃を上下に連結させ、エネルギーをチャージする。

「シュート」

そして放たれた巨大な球体のビームが僕に迫る。

「そんなに本気が見たいなら、出し惜しみはしない」

僕の機体の線が赤く光る。

「ＮＴ－Ｄ・・・・・作動」

そして僕は、スファナの砲撃を真っ二つに切り裂く。

「！？」

スファナが驚愕の表情となる。ハハッ。ま、そりゃそうかな。

「このＮＴ－Ｄ・・・・・『ニュータイプ・デストロイヤー』の力・・・・見せてあげよう」

純白だった僕の機体は、全身の装甲が展開し体格も一回り拡張、一本角がＶ字型に割れて顔が現れる。
そして露出した装甲が赤く発光して、常時赤い粒子を散らしている。

「推して参る！！」

「・・・・倒す！！」

互いに四本のビームサーベルを展開して、僕とスファナはぶつかった。

22話　その後と久しぶりの起動（後書き）

セシリアは親友エンドがいいと、ある方から熱心なアドバイスをもらったので。

23話　久々にしては・・・良かったと思う（前書き）

バトルは早めに更新した方がいいと思ったので、ちょっと短いですが更新しました。

23話　久々にしては・・・良かったと思う

僕のビーム・トンファーとビーム・サーベルがスファナを襲う。

「GNフィールド」

しかしそれは彼女の緑色の障壁で阻まれる。だがそれは・・・・。

「単なる時間稼ぎ」

僕はスファナが攻撃できないように、次々に攻撃を仕掛けて行く。

「くっ・・・・」

「どうしました？もう終わりですか？」

僕の四本のビームサーベルが、スファナに叩き込まれる。

スファナは、GNフィールドの出力を上げて耐えているが、僕の斬撃は止まることなく続く。

あちらは受け続けるだけなので、徐々に押され始めた。

「一方的ですね。最初の威勢は何処へ行きました？」

「くっ・・・・・なら・・・」

ガシッガシッ！

スファナの機体の両腕が、僕の腕を掴む。

「何の真似ですか？」

「・・・・・こういうこと」

いきなりアチラの四門キャノンが後ろに下がる。

そしてバックパックが取れて、それから手と足がでてくる。

「・・・・・セラフィム」

「マジすか・・・・・」

僕の身体はスファナが脱いだ機体のせいで動けない。

・・・・・一撃は覚悟するか。

「GNキャノン」

スファナの機体の両腕がキャノンに戻り、上から僕を狙う。

「シュート」

「ぐっ！」

まあ抵抗はせずに食らった。おかげで拘束から外れる。

「イテテ・・・・・」

何メートルか吹き飛ばされたが、すぐに立ち上がる。
機体損傷は・・・・・１３％でＮＴ－Ｄは良好・・・なら問題は特にない。

「もう、そんな不意打ちは食らわないよ」

一応そう言っておくと、スファナは再び機体と合体して、元に戻った。

「・・・本気で殲滅する。《トランザム》」

そして全身装甲の彼女の機体が赤く発光する。

「ＧＮバズーカ？・ハイパーバーストモード」

一番最初にした、ダブルバズーカと４門のＧＮキャノンを連動させる砲撃。

それのトランザム状態・・・・受けるのは得策じゃないかな。

「ビームガトリングガン・デストロイヤー」

なら、真っ向から打ち破ってやるか。

僕の両手から光が出て、六つの巨大なガトリングガンが出てくる。

そして２挺を連結して両腕に装備し、残りの二つを両肩に一づつ装備する。

「ＮＴ－ＤバイパスとＭＳリンク、スタート」

ガトリングガンが赤く光り、銃身が高速回転する。

ちなみに、スファナの機体もチャージを開始している。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

僕らは無言で機体のチャージ完了を待つ。

機体のチャージ完了まであと・・・・・3・・・・。

「ＧＮ粒子最大圧縮完了」

・・・・2・・・・・・どうやら先にスファナのほうが出来たらしい。

「シュート」

・・・・・1・・・・・スファナの放った球体が、僕を襲う。

ゴオォォォォォォォ！！

スファナの球体が、爆音を撒き散らしてこちらに来るが・・・・・・。

「カウント０。リンク完了。デストロイ・フルバースト！ファイア！！」

ドガガガガガガガガガガガッ！！

僕の六つのビーム・ガトリングガンが、一斉にビームを発射する。

それがスファナの砲撃と衝突、そして――――――――――。

ドガァァァァァァァァァンッ！！

「ぐあっ！」

「きゃ！！」

スファナの砲撃が爆散、その衝撃で僕らは吹き飛ばされる。

・・・・・・ラッキー。

僕はこの機体の性能をフルに使い、機体の制御を一瞬で終わらせる。

そして吹き飛ばされて、体の制御を整えていないスファナに、肩のビームサーベルを投げる。

「！？」

スファナはまともにかわす事が出来ず、直撃を食らう。

「さらに！！」

僕は腕についてるビームサーベルも飛ばす。それも直撃。

「うおぉぉぉぉぉお！！」

そして僕はスファナの機体に接近し、すれ違いにビームサーベルを引き抜く。

「ぐっ！」

そして一度離れ再度接近し、二本目のビームサーベルを、またすれ違いに引き抜く。

「ぐうっ！！」

最後にその二本を腕にしまい、接近して刺さっているもう二本を持ち、機体ごと持ち上げる。

「切り裂け！！」

そして機体の胴体を左右に引き裂く。

「っ！！　セラフィム！！」

しかしスファナはその寸前で、バックパックの機体に移ってかわした。

スファナの捨てた機体は、打ち上げ花火みたいに上に飛んで行き、爆散した。

僕はビームサーベルを四本展開し、元の色に戻ったスファナのほうを向く。

「まだやりますか？」

「・・・・・・《トランザム》は・・・・・・限界時間。私の・・・・・・負け」

そう呟くと機体の武装を解除する。それに習い、僕も機体の武装を解く。

「あぁぁ～～・・・・・・疲れた・・・・・・」

それと同時に僕は倒れ込む。何故かと言うと、ＮＴ－Ｄは凄い精神力を使うので。

「・・・・・・私も」

スファナは、仰向けで寝る僕の隣に来て座る。

「・・・・・・私は・・・・・・まだまだ・・・・・・弱い」

「充分強いと思いますが」

僕の機体が異常なんだ。

あっ、そういえばトールギス?使ってなかった。ま、いいか。

「大丈夫か?楓」

「スポーツドリンクを持ってきました」

デュオとカトルが飲み物を持ってくる。

「ありがと」

「・・・・・もらう」

僕らはそれを貰って飲む。ちなみに、中身は生温かいアクエリ○ス。

「見事な戦いだった」

で、仮面をつけた金髪の男がデュオ達の後ろから現れる。

「・・・・・ブシドー。見てたんだ」

「暇だったのでな。しかもお前の戦いなら、見ない訳にはいかん」

「・・・・そこまでの事かなぁ」

「お前の戦いを見て、私の血が滾った。我がスサノオも戦いを欲している」

そういってポケットに入っている、黒と白のペンダントを取り出す。

はぁ・・・このバトルマニアは・・・・。

「悪いけど無理。僕は一度寝る」

「む。それならば仕方あるまい。また今度としよう」

はいはい、１０００年後ぐらいにね。

「狙い打つぜぇ！！」

「！？」

ドゥゥンッ！！

いきなり僕の横をビームが通り過ぎた。何で！？って元凶は分かってる。

バトル場の入口にいる、茶髪のチャラ男を僕は睨む。

「ロックオン！！」

「いやすまねぇ。ついつい撃っちまった」

「反省してないよねぇ！？」

「ああ。わざと外したからな」

「そういう問題でもないと思うんだけど！！」

喋りながら僕の方に歩いていてくるロックオン。

「刹那たちは？」

「さあな」

「さあなって・・・・・」

「まあアイツらならすぐ来るんじゃねぇか？」

「僕が知る訳ないじゃん」

「そりゃそうだ」

そして僕は立ち上がる。

「じゃ、僕は部屋に行くよ」

「・・・私も」

僕とスファナは一応そう言っておく。

「おう。それじゃあデュオ、俺とバトるか？」

「お、いいなそれ。楓たちの戦いを見てたら、俺も切り裂きたくなった」

「フッ、そう言う事なら私も加わろう」

「あ、じゃあ僕も」

・・・・・・・・・なんかカオスなバトルが始まりそうだ。

「サバーニャ！！ロックオン・ストラトス！狙い打つぜ！！」

「どけどけどけぇ！！死神様のお通りだぁ！！」

「参るぞ！スサノオ！！」

「行くよ！！サンドロック！！」

あ〜〜あ・・・・４人とも始めちゃった・・・・・・。

「あまりやり過ぎないように」

「・・・・・・・」

まあ・・・・・すでにヤバイ事になってるけど・・・・・損害賠償はアチラに請求すればいいか。

一応そう言って僕はバトル場を出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxx

「じゃ。こっちなんで」

「・・・・・うん」

バトル場のさらに奥のドアを開けて、通路を進んでいった所で、道が右と左に分かれている。

これは男子と女子を分けるための処置。

男は右で女は左。
ここにいる人達は、美形で尚且つ変わってる人が多いので、こうでもしないと色々とヤバイのだ。

あ、ここにいる人達の紹介はまた今度と言うことで。

スファナと分かれて右に行った僕は、さらに足を進めて、奥にあるエレベーターに入る。

そして、中の階を決めるボタンの横にある差込口に、僕のカードキ

ーを入れる。

すると、エレベーターの入口とは逆の壁がスライドして開く。

「我ながら、何でこんな面倒な仕掛けにしたんだっけ・・・・・」

愚痴りながらも歩いて行くと、扉が一つ現れる。ここが僕の部屋。

またカードキーを差し込んで扉を開ける。

「ふぁあ～～・・・・ただいま」

誰もいないが一応言っておく。

僕の部屋は・・・・・・３ＬＤＫとトイレ風呂場完備。さらにパソコンとベットなど、日常生活できる程度には充実している。

「寝る・・・・・・」

僕はベットにダイブして、そのまま眠った。

それと同時に僕の携帯がなったが、眠ってしまった僕は気付くことができなかった。

23話　久々にしては・・・良かったと思う（後書き）

やっぱりバトルシーンって難しい・・・・うまく書けない・・・・・・。

誤字脱字、感想があったらお願いします。

２４話　今回は・・・なぜか私が主役（前書き）

この頃、一気にキャラを登場させすぎたので、今回はそのキャラたちを、ダイジェストに紹介します。
まあ紹介できてない気もしますが・・・・。

２４話　今回は・・・なぜか私が主役

ジリリリリリ。

「・・・・ん・・・・・朝・・・・・・」

朝の６時、私は目覚まし時計の音で目が覚めた。

「ふぁ～～・・・・・・」

ベットから降りて、一度身体を伸ばす。

「ん～～！！・・・・・・はぁ・・・・」

そして寝巻きを脱ぎ捨てて、クローゼットから私服を取り出して着る。

「ご飯・・・・」

冷蔵庫から、十秒飯ゼリーを出して、文字通り十秒で飲む。

で、洗面所まで行って歯磨きして、顔を洗う。

「今日の髪型は・・・・・いいや普通で」

私はくしで髪を梳かして洗面所を出る。

「あっ忘れてた」

私は部屋を出る前に、机の上においてある青と白のアクセサリーを取る。

「さあて。今日も頑張りますか！」

そして部屋を出る。

これが、今回何故か主役の私・・・・・木ノ本佳奈美の朝である。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxx

と言うわけで、今回主役の木ノ本佳奈美です。

漢字で書くと長くて、一度見た人なら大体の人は覚えてくれる。
まあ自分の名前を書くとき、ちょっと長すぎって思うこともあるけど、そこまで気にしてない。
容姿は普通と言うか、特記すべき事はない。（実際は凄い美少女。しかし自覚はなし。By作者）
黒い髪に黒い瞳とバリバリ日本人です。
私はある組織の一員で、その関係でこの基地に居座っている。

それは置いといて。

私はとある秘密基地の中にある、女子寮の部屋からでて、皆が集まるであろうロビーに向う。

「・・・・・・・あ、スファナ」

「？・・・・佳奈美。・・・・・・おはよう」

通路を進んで行くと、私と同じ目的で歩いているであろう少女に会った。

彼女の名前はスファナ・フィオーネ。

とある事情でここの基地にいる少女だ。

最初来た時は無口だったが、今ではゆっくりながらも会話できている。

「スファナもロビーに？」

「・・・・うん」

「じゃ、一緒に行きましょう」

「・・・・・わかった」

このゆっくり感・・・・どこぞの戦場カメラマンを思いだす。

そんなこんなで、私はスファナと共にロビーを目指した。

「あれ？佳奈美？スファナも」

「！？」

「・・・・・楓。おはよう」

私がロビーを目指して、男子寮と女子寮の別れている通路に来たら、ちょうど反対側から、黒と銀の髪をした女顔の男が来る。

「お、おはよう楓」

「ん。おはよう」

ぎこちないながらも、私はその会った彼に挨拶する。

彼の名前は桐谷楓。

過去に色々あって、今は私たちの面倒を見てくれてたりする彼。

・・・・・正直未だに”女じゃないか?”って疑惑を持ってたりしてる。

で・・・・・まあ、私の現在進行形で続いてる・・・・初恋の相手。

「二人ともロビーかい?」

「まあね。部屋にいても暇だし」

「・・・・・同じく」

「じゃあ一緒に行こうか」

というわけで、私たち三人でロビーを目指す。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxx

「よお楓。昨日はお疲れさん」

「誰のせいかな？ロックオン」

「俺のせいじゃないいな」

「自覚ないなら、今ここで粛清しようか？」

「やれるもんならな。俺は成層圏を狙い打つ男だぜ？」

ロビーにつくなり、茶髪のチャラ男に絡まれる楓。

男の名前はロックオン・ストラトス。本名は知らない・・・もとい興味ない。

みんなも興味がないらしく、ロックオンって呼ぶ。
性格は見た目どおりチャライ。けど狙撃の腕は超一流。通称『やるときはたまにやる男』
彼はある組織のメンバーで、その関係でこの場所にいる。
「おはようございます。二人とも」
「おう！昨日はよく寝れたかぁ？」
礼儀正しい金髪少年と、対照的に生意気な態度の茶髪の三つ編み男がこちらに来る。
「私は昨日、ずっと寝てたね」
私は一度寝ると１０時間ぐらい起きないから、最低でも十時間は寝ている。
「・・・私は、疲れたから・・・・・グッスリ寝てた」
「ほう。そりゃ良かった。俺は昨日の大乱闘が身体に響いてなぁ・・・・」
腰に手を当てながら答える男。
「張り切りすぎです。あと、乱闘にしたのは貴方とロックオンでしょう」

涼しい顔をして突っ込みを入れる男。

金髪の方の名はカトル・ラーババ・ウィナー。有名な財閥の息子さんだ。

三つ編み男の名はデュオ・マックスウェル。年中無休のお調子者だ。

彼らも諸事情でここに居座っている。今は滞在しているらしい。

「騒がしいな」

そんな私たちの様子を、ロビーのテーブルでお茶を飲みながら見てる仮面の男が一人。

「ブシドー・・・・」

「フッ。そうだ、私がミスター・ブシドーだ」

「知ってるって」

この金髪仮面男は、ミスター・ブシドー。

確実に偽名。でもここの人達は大体偽名だから、大した問題ではない。

彼は戦いを求めすぎて、とある場所を追い出されたので、放浪してた所に声をかけて仲間となった。

性格は・・・武士。この一言で説明できる。

「ブシドー・・・てめぇのスサノオは卑怯だ！！」

「何を言うか少年。君のデスサイズヘルも充分強いではないか」

「うるせぇ。ロックオンやスファナもそうだが、《トランザム》つうのは酷すぎるぜ」

「君のハイパー・ジャマーも厄介だがな」

デュオとブシドーが口論する。この二人は表面上よく衝突する。

「《トランザム》ってそんなに卑怯なの？」

「私は知らん。彼らに聞けばわかるんじゃないか？」

そういって楓とロックオンが喋っているところをさす。

アチラも私達の方に気づき、こちらに歩いてくる。

「どうかした？」

「いやさ？デュオが言うには《トランザム》って卑怯らしくて」

「卑怯って・・・・《ゼロ・ドライブ》使いこなしてる君が言うなよ」

楓は呆れた感じの目でデュオを見る。

「《ゼロ・システム》使いこなしてるお前が言うなぁ！！」

がぁー!!って感じにデュオが怒鳴る。

まあ・・・・・・・私もそれは思ったけどね。

「ヒイロやアルドだって・・・・・・・」

「ゼクスやヒイロはまだ分かる。お前は理解不能だ」

「ヒドイなぁ・・・・・ロックオンはどう思う?」

「俺か?そうだな・・・・・別に普通だと思うが」

「いやいや!!全然普通じゃないぞ!?カトルだってそう思うよなぁ!?」

デュオは一人で叫びカトルに助けを求める。

「と言いながら、《トランザム》限界時間まで粘ったのは誰でしたっけ?」

カトルから鋭い一言。

・・・・・・・粘ったんだ。やっぱデュオは強い・・・・私はまだまだか・・・・・。

「そ、それはそうだが・・・お前だって粘ったじゃねーか」

「ま、僕も《ゼロ・ドライブ》積んでますし」

遠慮気味に笑うカトル。

さらっと言ってるけど、《ゼロ・ドライブ》って使いこなすのは普通無理。

私も一度してみたけど、入ってくる情報を一々捌きながら戦うなんてできなかった。

頭が割れるぐらいに痛い。正気なんて保っていられない。

でも、楓やヒイロは《ゼロ・システム》を使いこなしてるんだから・・・・正直尊敬する。

そして私は談笑している楓を見つめる。

普段は優しそうな顔をして・・・正直頼りないけど・・・・戦いのときの真剣な顔が・・・ね。

ギャップって言うのかな・・・・そういうの。

私にとって楓は、目標であり憧れ。戦う理由であり強さ。

不本意ながら私はよく”ツンデレ”なんて呼ばれるけど、プライドが高いのは認める。

楓と初めて戦って負けたときは・・・・泣きじゃくったなぁ・・・・今じゃいい思い出。

生まれて初めての敗北って、あそこまで堪えるんだって初めて知っ

た。

そもそも――――――――――。

「どうかした?佳奈美」

「ッ!?　な、ななな、なんでもない!!」

「そ、そう・・・・なんかジッと見られてたからさ。何でもないならいいや」

そう言って私から離れる楓。

・・・・・ビ、ビックリした～～～・・・・いきなり自分の前に楓の顔が出て来るんだもん。

こういう無駄に鋭いくせに・・・・なんで人の好意には鈍いんだろう。

これは私がなんども疑問に思ってること。

まあ・・・・そういうところも好きなんだけどね・・・・。

「そうだ。今日僕は町に行くから。ついでに学園に帰る」

「ん?夜には刹那たちが来るぞ?」

「そうなんだけどねぇ・・・・・僕の携帯がダースベ○ダーのテーマ曲を流したもので・・・・」

『あ～～ご愁傷様』

この場にいた人達が、全員同じ台詞を言った。

楓が近頃、着信音をダースベー〇ーにした人物はただ一人――――――。

「織斑千冬ね？」

「そうなんだよ佳奈美。メールで呼び出されちゃったからさ」

「ま、頑張ってね」

名残惜しいが・・・・・しょうがないと割り切ろう。

「了解。じゃまた次の機会に来るよ」

そう言って楓はロビーを出て行く。

「いいのか？佳奈美」

「な、なにがよ」

楓が出て行った後、すぐにデュオがニヤニヤ顔で話しかけてきた。

「せっかく楓と二人きりになれるチャンスを、みすみす逃す気か？」

「な、何の話よ！」

「隠さなくたっていいぜ。もはやお前が楓に惚れてんのは、周知の事実だ」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!?!?!?」

何それ!!今初めて知った!!それと凄い恥ずかしい!!嘘でしょ!?

「気付いてないのは、楓ぐらいじゃないか?」

「ロックオンの言うとおりだぜ?アイツに惚れてんのはお前だけじゃないし」

「気を抜くと、ＩＳ学園の生徒に取られてしまうぞ?」

「そうじゃなくても、佳奈美さんは皆より一歩遅いですからね」

「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」

何よコレ!?本気で恥ずかしい!!え、本当にみんな気付いてるの!?

『その通り』

「ウソォォォォォォォォ!?」

心読まれた!え、みんな読心術でも持ってったの!?

「いやいや、お前の態度見れば誰でもわかる」

「楓と言う例外はあるけどな」

「そ・・・そんなに出てた・・・・・？」

「ああ。バッチリ」

「そ、そんなぁ～～・・・・・」

思わず私はその場に崩れる。本気で穴があったら入りたい・・・・・。

「さってと。俺等はどうすっかな～～」

「僕は今日、ここで大人しくしてますよ」

「ノリ悪いぜ？カトル。そこは3人で町に繰り出すだろ」

「おいおい。その三人ってのは俺も入ってるのか？」

「その通りだロックオン」

「はぁ・・・・・ま、いいか。どうせ暇だしな」

「よし！そんじゃあ街の女をナンパしまくるぜぇ！」

・・・・・・何を言ってるんだか、この三つ編み男は・・・・・・。

しかし美形も三人寄れば、いやでも注目を集めちゃうだろうな・・・

・・・。

と、私はどうでもいいという感じ。

「私は部屋で暇を潰すよ」

「？　いいのか？」

「いいってデュオ。楓には楓の都合があるし」

「・・・はぁ・・・・・これだからお前は・・・・・・」

「むっ。何よそのため息は」

そういうと、デュオは真剣な顔になり、私を見据える。

「いいか？お前がいつもそんな態度をとってるから、いつも周りより一歩遅れんだ」

「べ、別にいいじゃない。私は楓の事なんか・・・・・」

「だから。そのツンデレをやめろ」

「ツンデレ言うなっ！！」

何よこの失礼な男は・・・・まあ、いつも失礼な男なんだけど。

和人と同じ感じの性格だから、自然と殺意がふつふつと沸く。

「ま、俺のお節介はここまでだ。行こうぜ二人とも」

「おう」

「わかりました」

そして3人はロビーを出る。

「では、私も自室に戻らせて頂こう」

「・・・・・私も」

そしてスファナとブシドーもロビーを出る。

そして私一人となったロビー・・・・・・・。

「・・・・・私も、部屋に戻ろうかな」

『ええ～～!!私の話し相手になってよ!』

うわっ!いきなり床からヴェーダが出てきた。

「心臓に悪いから、そんな登場しないでよ」

『気にしない気にしない♪それで、私はここから出られないから暇なんだよ～～』

「そう。じゃあいつも通りインターネットで泳いでくれば?」

『飽きたの』

「飽きたって・・・・・」

駄々をこねるヴェーダ。

一見可愛い外見をした立体映像だが、彼女は世界をひっくり返す力を持ってる。

彼女はえっと・・・・・何かのプログラムとＯＳがバグって出来たって、前に楓から聞いた。

「・・・・・私疲れたのよ。寝かせてくれない？」

『嫌よ。もう私の独断でロビーの扉は全てロックしたし』

「なんでよ・・・・・」

『だから、話し相手になってよ』

正直気は乗らないが・・・・・選択肢はない・・・・・しょうがない。

「わかったわよ。で、何を話せばいいの？」

『まあ話っていうかお願いなんだけど・・・・・ちょっと模擬戦闘してくれない？』

「え？」

『実は、新しい機体の設計を楓から頼まれたんだけど・・・・・』

「はぁ！？まだ作るの！？」

あの女男め・・・・・あれって、どんだけ時間かかるかわかってるの！？

『でもどんな感じの機体にすればいいか、イマイチアイディアが浮かばないのよ』

「それぐらいなら」

私は弱いから・・・・・・自主練と言うことでいいかもしれない。

『ホント！？ありがと～。戦ってくれるだけでいいから』

「その代わり、ちゃんとアイディア考えといてよね」

『モーマンターイ』

そして、私は一度着替えて、バトル場に入っていく。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「どんな感じの戦闘なの？」

私はスーツを着たまま、機体を出さないでバトル場を歩く。

『リクエストはある？』

「う～～ん・・・・・じゃ、ビルゴ？とザクウォーリアを１０機ずつ」

『了～解～』

するとバトル場の地面が開き、そこからキチッと整列してロボットが出てくる。

見た目はご想像にお任せします。

「・・・・・行こう。『エクシア』」

私が言うとブレスレットが光り、装甲と成していく。

装甲は白と青を中心に使い、両手足と背中、そして兜を装着する。

手には刀身を折り畳みられたライフルと突起した青い盾。腰には長

さの違う実体剣が二本と、腰後方に二本ビームダガー。両肩後方には二本ビームサーベル。
そして常時、機体の周りには緑色の粒子が散っている。

「《トランザム》は・・・・使わないでやろう」

私の場合、あのシステムにちょっと頼りすぎてる部分があるから。

「これぐらい出来なきゃ――――――――」

――――――――私は一生、皆に追いつけやしない。

『準備は?』

ヴェーダからのアナウンス。上空のディスプレイにヴェーダの顔が映る。

「できてるよ」

私は腕にあるライフルの、折り畳まれた刀身を展開する。

『それじゃあ・・・スタート~~!』

バンッ!という音と共に、敵機がスタートダッシュをかける。

「GNソード!」

私も剣を正面に構え、向ってくる敵機に切りかかる。

「はぁ！！」

しかし敵機のザクは肩のシールドで防ぐ。だけど・・・・・・。

「それぐらい！！」

私は盾ごとザクを切り裂く。ザクは片腕を失い下がろうとするが・・・。

「まだっ！！」

私は両手首についてるＧＮバルカンを腹に撃とうとするが・・・。

バギュン！バギュン！

他の敵機が私にビームライフルを撃つ。

私はその場で飛び、その銃弾をかわす。

しかし上空では、約１５機のビルゴ？及びザクがこちらに狙いを定めてる。

「ライフルモード！」

私はＧＮソードをライフルモードにして、敵機に向かって撃つ。

敵は散開して私の攻撃をかわす。ま、分かっていたけど・・・。

私は、すばやく左腕にＧＮビームサーベルを持ち、散開した敵機のひとつに接近する。

そして――――――――。

「はぁ！！」

すれ違い様にサーベルで胴体を一閃。斬られたザクは真っ二つになって爆散した。一機目撃破。

「次！！」

私はその近くに居たビルゴ？にライフルを撃つ。

ビルゴ？は両肩に８基装備される盾、プラネイトディフェンサーで防ぐが・・・・。

「懐がガラ空き！！」

すばやく接近。アチラがサーベルを出す前に、こちらのサーベルが貫く。２機目撃破。

けれど・・・・・。

バギュン！バギュン！バギュン！バギュン！バギュン！

「ッ！！」

５機で集団となって、私にメガビーム砲を放ってくるビルゴ？。
私は急降下と急上昇とステップを駆使して、そのビームの雨を掻い潜る。
「まだまだぁ！！」
そして、私はなんとかビルゴ？の集団に近づく。そしてＧＮシールドを投郷する。
それは、ビルゴ？のプラネイトディフェンサーを貫き、集団の一機を地面と対面させた。３機目撃破。
そして隊列の乱れたビルゴ？の集団に飛び込み――――――――。
「やぁぁぁぁああ！！」
ＧＮソードとＧＮビームサーベルの二刀流で、四機とも切り刻む。
４機撃破。
「はぁはぁ・・・次！」
若干息が切れてきたが、敵はまだまだ１３機もいる。休んでいられない。
『なんか楽そうだから、ザクはウェザードパックをつけるね』
ヴェーダからほぼ死刑判決。

「このサディストおおおおおお！！」

私の叫びと同時に、ザクたちがいろんな種類のウェザードパックをつける。

「ああもうっ！やってやるわよ！！やりゃあいいんでしょ！！」

半ばヤケクソで私は、一番最初に片腕を切ったザクに向う。

「これでぇ！！」

ＧＮソードで胴体を突き刺す。そして引き抜き、ザクは爆散する。

８機目撃破。

だが・・・・・。

ボバババババババババッ！！

「っ！？」

ミサイルのウェーザードパック、ブレイズウェザードをつけたザク達が、一斉にミサイルを発射する。

数は目算で・・・・１００以上。

咄嗟にライフルやバルカンを撃つが・・・・・・付け焼刃にしかならない。

「あああああああっ！！」

３分の２以上の数のミサイルが私に直撃する。

装甲がボロボロになり、ＧＮソードと左手のＧＮビームサーベルを、両方とも落とした。

そして機体制御できず、真っ逆さまで地面に墜落。

「ぐうっ！！」

機体損傷は――――――４５％で武装は――――――ＧＮソードと左のＧＮバルカン使用不可。

「まだ・・・・・・大丈夫なはずっ！」

そして別の三機のザクウォーリアが、ガナーザクウォーリアとなって、その背中にある大型ビーム砲を私に構える。

「やられないっ！！」

私はすぐさま起き上がり、腰のＧＮロングブレードとＧＮショートブレードを構える。

ドウゥゥゥン！ドウゥゥゥン！ドウゥゥゥン！

そして３連続でザクのビーム砲が発射される。

「それぐらいで！！」

私は飛び上がり、ビーム砲をやり過ごす。そしてガナーザクの集団に接近する。

あちらはビームトマホークをシールドから出す。だけど・・・・。

「私の剣には勝てない！！」

粒子を纏ったＧＮロング＆ショートブレードで、アチラのビームトマホークを切り裂く。

「はぁあああ！！」

そしてＧＮバルカンでザクの腹を撃つ。
そして動かなくなったザクを蹴り飛ばし、もう一機のザクとハグさせて二機は爆散した。二機撃破。

そしてもう一機のザクが接近してきて、ビームトマホークで攻撃してきたので、ＧＮショートブレードで受け止め、足で相手の腹を蹴り、ＧＮロングブレードで胴体を刺す。１１機目撃破。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・・・つ、次・・・・」

さっきのミサイルのダメージと戦闘の疲労で、最初ほどの動きが出来なくなってきた。

アチラはビルゴ？四機、ザクウォーリア五機の計９機・・・結構ヤバイかもしれない。

「だけどっ！！」

こんなところで諦める訳にはいかないっ！

私はＧＮロングブレードを正面に、ＧＮショートブレードを逆手に持って、ビルゴ？の集団に近づく。

あちらはメガビーム砲をこちらに乱射する。

「そんな攻撃っ！！」

私は身体を捻りながら、時には剣で攻撃を弾きながら接近する。

そしてビルゴ？たちは、プラネイトディフェンサーを展開するが・・・・。

「私には効かない！！」

ＧＮブレードはフィールド系の防御兵器に、絶大な威力を持っている。

私の剣はプラネイトディフェンサーを貫き、そのままビルゴ？を二機、すれ違い様に切り裂く。

そして残りの二機は、ＧＮビームダガーを両手に持って、アチラに投げる。

二本ともビルゴ？の腹に刺さり爆発する。これでビルゴ？は全部撃破。

残りは――――――――――。

ボバババババババッ！！

再びミサイルを放たれる。だけどね・・・・・！！

「二度も同じ手は食らわない！」

私は急降下して、地面に追ってくるミサイルをぶつけて行く。

そして全てぶつけた後、急上昇してザクの方まで接近する。

あちらはビームトマホークを構えるが、私はＧＮブレードを両方投げる。

二本ともザクの腹に刺さり爆発する。２機撃破。

そして私は、肩にあるＧＮビームサーベルを展開する。

そして残りの三機――――――――全機肩にガトリングガンを付けて、両手で持つビームアックスを装備するウェザードパック――――――スラッシュウェーザードをつけたザクを見据える。

三機とも――――――――私の『エクシア』と同じ接近型。

「・・・・・・・」

正直言って――――――――《トランザム》を使えば勝てる自信はあ

る。

でも最初に《トランザム》を使わないって決めたし・・・・・ＧＮビームサーベルで頑張るしか・・・・。

「やるっきゃない！！ＧＮドライブ『オーバーブースト・モード』！」

私の背中にある、コクーン型のＧＮドライブの安全装置が解除され、内部のフライホイールを展開する。

そして、さっきミサイルをかわした時に拾った、落としたもう一本のＧＮビームサーベルも展開する。

「はぁあああああっ！！」

私は一気にザクに接近する。

「――――――ぐうっ！」

身体に痛みを感じながらも、『オーバーブースト・モード』のスピードで突っ込む。

私の尋常じゃないスピードにザクは反応できず、集団の一機は私のサーベルを食らった。１８機目撃破。

残りの二機は私と距離をとり、様子を見ている。

（よ、予想以上に・・・キツイ・・・）

私は胸を押さえながら、『オーバーブースト・モード』のリスクを考えていた。

『オーバーブースト・モード』は、GNドライブの安全装置を解除し、爆発的なスピードを出すことが出来る。
しかし安全装置をつけている理由は、『Gを感じない程度まで出力を抑えるため』

つまり、安全装置を解除した今・・・私には、機体が相殺しきれないGが襲い掛かっている。

しかも、左右への急な方向転換は、凄まじいGが掛かるため、正面突撃しかできない。

「それでも・・・・・！」

私は再び、ザクへと突撃する。

あちらは肩のビームガトリングを乱射する。

「この程度っ！！」

私はかわさず正面突撃。あちらはビームアックスを構えて振りぬく。

それは私の脇腹に直撃。バギバギと装甲が砕け、ミシミシと私の肋骨が軋む音がする。

「ぐっ！――――――――それぐらい！！」

私は構わずビームサーベルをザクへと突き立てる。

そしてザクを蹴り飛ばしてサーベルを引き抜く。１９機目撃破。

そして、すぐにもう一機のザクに意識を向けるが――――――――遅かった。

私がさっきのザクにかまけてる間に、もう一機の方はすでに私の背後に迫ってた。

（こ・・・こんな・・・・こんな所で・・・・負けられない！）

「・・・・・・《トランザム》」

私の口は――――――――無意識のうちに動いていた。

私の機体の装甲は全身が赤く発光し、すぐ傍まで迫ってたビームアックスを切り裂く。

そして凄まじいスピードで、ザクの背後に回り――――――――。

「はぁぁぁぁぁあ！！」

ビームサーベルで十字に切り裂いた。・・・・・・２０機目・・・・・・撃破。

私は地面に降りて機体を解除する。

「ぐっ・・・・はぁはぁ・・・・・・」

私は堪らず両手を地面につけてしまう。

「も、もう・・・・・・無理・・・・・」

そして私は大の字となって寝転がってしまう。

「身体中が痛い・・・・・・明日は絶対筋肉痛だよ・・・・・・」

《トランザム》によって、さらにスピードが上がったので、かかるGもハンパない。

骨やら内臓やらが、悲鳴のオーケストラを開催してる。

『大丈夫？佳奈美』

ヴェーダからのアナウンス。文句を言いたいが、私は喋る気力を根こそぎ刈られていた。

「・・・・・・つ、疲れた・・・・・・・」

『頑張ったわね。えらいえらい』

「だ、誰のせいで・・・・・」

『じゃ、私は思いついたアイディアを設計するから。じゃあね～～♪』

そういって、ディスプレイが消える。

私があたりを見渡すと、さっき破壊した機体が散乱している。

そして上は、青い快晴の空をイメージした液晶画面が映し出されて

いる。

「う、動けない・・・・・・」

戦闘のダメージが残って動けないため、今回の戦闘について回想。

「武器を捨てすぎたかな・・・・・」

実は、私ってすぐに剣を投げたりする癖があり、できれば治したいと思っているのだ。

「最後は・・・・・《トランザム》使っちゃったなぁ・・・・・・」

まあ、使ってなければ負けていたけど。

「私は・・・・・まだまだ弱い・・・・・・かぁ・・・・・」

エクシアのスペックを、私が使いこなしていない・・・・・・。

「刹那みたいにはできない・・・・・・・はぁ・・・・・・」

反省点しかないじゃない・・・・・・・今回の模擬戦闘。

「・・・・落ち込んでも、仕方ないか」

『失敗とは、反省から何も学ばないで、同じ過ちを繰り返すことだ』

これは楓の持論。

前に、とある事情で挫折した時に、この言葉を楓から言われた。

あの言葉で、私は前を向くことが出来た。・・・・・ついでに、そこで惚れた。

「・・・・・・よしっ！」

体力も回復してきたし、そろそろバトル場を出よう。

私は起き上がりバトル場を後にした。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xx

私はもとの私服に着替え、自分の部屋に向っていた。

ヴェーダから『新しいの楽しみにしててね～～♪』と言われた。

何かコメントすべきだったと思うが、疲労やらなにやらで、する気になれなかった。

私は女子寮と男子寮の境目の廊下で、私は左に向う。

そして奥に進むと、エレベーターがある。

私は中に入り扉を閉め、階を示す番号の『2』を押す。

するとエレベーターが動き、ちょっとした浮遊感が私を襲う。

ちょっと経つと、”チンッ”と言う音と共に、エレベーターの扉が開く。

扉を出ると・・・まあ高級ホテルのような所に着いたと思ってください。

そして廊下に沿って歩いて、私の部屋まで向う。

「ついた・・・・」

そして私の部屋に着く。

私の部屋は・・・・まあ５ＬＤＫの尋常じゃなくデカイ部屋だと思って欲しい。

「・・・・・寝る・・・・・」

すぐに扉をカードキーで開け、そのままベットに直行。そしてダ～～イブ♪

「おやすみ～～・・・・・・」

誰もいないけど、私はそう呟き眠った。

一応、これが私の日常。

・・・・・・色々と疲れるけど・・・・・・私にとっては充実した日常です。

２４話　今回は・・・なぜか私が主役（後書き）

今回学んだこと。
バトル描写をやると、嫌でも文が長くなる。どうでもいいですがね。

誤字脱字、感想待ってます。

25話　夏休み　買い物編（前書き）

ちょっと遅くなりました。スイマセン。
久しぶりに、原作キャラが出ます。
そして敵サイドの伏線も出します・・・これは無理矢理な気もしますが・・・。

25話　夏休み　買い物編

「・・・・・・・暇」

時間は夜。僕は今、ＩＳ学園の自分の部屋で暇を持て余していた。

「やることがない・・・・・・・」

一夏はいない。何故かは知らない。彼がいればいい暇つぶしになるけど・・・・・。

「大体・・・何で僕が教員の仕事を手伝わなければならないんだ・・・・」

ここの人達は、生徒の僕が職員室で何かしていても、まるで気にしない。

なんかそれが当たり前っぽくなってる。

「織斑千冬め・・・・・・僕は雑用係じゃないのに・・・・・・」

僕はベットの上で寝返りをうつ。

「明日どうしようかな・・・・・・」

また秘密基地に帰ろうかな？面倒だけど。

「いや、それよりも――――――――」

ダ～ダ～ダ～ダ～ダダ～ダ～ダダ～～～♪

「ん？メール・・・・ダダンからだ」

もう寝ようと思ってたら、ダダンからメールがきた。

あ、ちなみにダダンは五反田弾の事。

何となくあだ名を付けてみた。本人はあまりいい表情じゃなかったけど。何故だろう？

「なになに・・・・・・・・げっ！なんだよそれはっ！！」

メールの内容に僕は怒る。そりゃあ怒るでしょ、こんなメールじゃあ。

「自分でやろうよ・・・・・」

哀れみしか感じられないメールを送られたのって、僕初めて。

「ううぅ・・・・・・仕方ない。一食の恩もあるし」

そして僕は返事のメールを書いて、送信した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xx

「置いてくぞ」

「ま、待ってよ。ラウラ準備早すぎだって」

「お前が遅いのだ」

シャルロットとラウラは、夏休みを利用して買い物に行こうとしている。

「楓は何してるんだろうね」

「知らん。あの嫁・・・・私を置いて何処へ行ったのだ」

買い物に二人は楓も誘おうとしたが、電話が？がらなかったので諦

めた。

「まあ楓には楓の事情があるんだよ」

「・・・・・仕方ないな」

そして二人はＩＳ学園を出る。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

そして順調にバス停へとやってきた二人。

「・・・・・乗り方知ってる？」

「馬鹿にするな。それぐらい知っている」

「ならよかった」

そしてバスが来たので二人は乗り込む。

「空いてるね」

「そのほうがいいだろう」

二人はがら空きの車内の二人席に座った。

シャルロットが窓を開けて、髪が風でなびき金色の髪が反射するように光をちりばめる。

そして鋭い視線で景色を見るラウラは、その銀髪に日光をに当たり眩しく輝く。

その二人が並ぶことによって、互いが互いの魅力を引き立てている。

そんな制服姿のラウラと、私服姿のシャルロットの二人の魅力に、そのほかの乗客は吸い寄せられるように見入っていた。

「ね、ね、あそこ見て。あの二人」

「うわっ、す、すっごいキレ～～」

「隣の子も無茶苦茶可愛いわよね。さっきの子と負けず劣らずだわ」

「さっきの子は、スレンダーでカッコイイ感じの子だったよね」

「やっぱモデルなのかしら」

「そうなのかな?銀髪の着てる服って・・・・制服?見たこと無いけど」

「バカッ。あれはＩＳ学園の制服よ。カスタム自由の」

「え!?ＩＳ学園って、確か倍率が一万超えてるんでしょ!?」

「そ。入れるのは国家を代表するエリートだけ」

「うわ～～。それであのキレイさって、なんかズルイ・・・・・」

「まあ神様は理不尽なのよ。それで言うと、さっきの子って凄かったわね」

「だよね。本当に同じ人間?って思っちゃったし!」

その二人に注目している女子高生グループが、声のボリュームを気にしないで話してる。

バスの中で大きい声を出せば、嫌でもその注目してる二人にも届く訳で・・・・・。

「・・・・・・・・・」

シャルロットは自分の容姿を褒められたからか、注目されているからか、顔を赤くして俯く。

「・・・・・フンッ」

ラウラはどうでも良さげに、鼻を一つ鳴らし窓の外を眺め続ける。

それからしばらくして、二人は目的地の場所に降りた。

着いた場所は駅前のデパート。

シャルロットは持参した雑誌を見ながら、この後のプランを立てる。

「この順番で回ればいいかな」

「ふむ」

「最初は服を見に行って、途中でランチ。それから生活雑貨とか見に行こうと思うってるけど・・・ラウラはどう？」

「・・・・よくわからん。任せる」

「・・・はぁ。じゃあそう言う事にしとくよ」

ラウラの十代女子の感性のなさに、ため息をつくシャルロット。

まあ軍一筋で生きてきたラウラに、いきなりこんな事を言っても仕方ない。

「とりあえず7階フロアに向うよ。その下、6階と5階もレディースだから、順番に見ていこ」

「うん？なぜ上から見ていくんだ？下からの方が早いじゃないか」

「上から下に降りた方がいいの。お店の系統から見てもそうでしょ？」

そう言ってシャルロットは雑誌をラウラに見せるが・・・・。

「全く分からん」

「～～～。あのね、下の方はもう秋物になってるの。上の方もなってると思うけど、今セールで夏服がまだ残ってるから、先にそっちを――――――」

「待て、秋の服はいらないぞ」

「え？いらないって・・・・・なんで？」

「今は夏だからな」

このときシャルロットは、”ここにいる人は全員、それを承知で来てるんだけど・・・・”と思ったが、その言葉は言わないで置いた。

「あのね？女の子は普通、季節を先取りして用意するんだよ」

「そうなのか。・・・確かに、戦争になってから武装や兵をそろえても遅すぎる。つまりそういうことだな」

「えっと・・・・ま、まあそれであってるよ」

「楓が言ってた”備えれば事故なんて起きないと思う！！”というやつか」

「いや若干変わってるけど・・・・・まあいいや」

楓が違った諺を教えてるのは、まあ気にしても仕方ない、とシャルロットは自分で納得した。

「とにかく順番に見に行こうよ。分からなかったら私に聞いて？」

「わかった。シャルロットが一緒なら心強い」

そして二人はエレベーターで一気に7階まで上がる。

そして扉が開くと・・・・・。

「てめぇ邪魔だ！！どけ！！」

「お前こそ邪魔だ！見えねぇじゃねぇか！」

「きゃー！誰か足踏んでる！！イタタタタ～～！！」

「押すな！押すなよぉ！つ、押しつぶされるぅ～～～！！」

「おいお前！どさくさに紛れて、どこ触ってんだよ！！」

「この人痴漢！変態！」

「いや事故――――――――――あっ！こっち向いて！！」

「もうっ！暑苦しいから皆いなくなれぇ！！」

「お前が消えろ！！」

「アハハハッ！人がゴミのようだぁ！！アーハッハッハッハッ！」

「すいません！ここに変な電波を受信した可哀想な人がいます！！」

冷房が聞いてるはずの店内で、ここだけサウナかと、突っ込みたくなるくらいの暑さと人がいた。

「な、なに・・・・・？」

「なんだ・・・これは・・・・」

しかもその集団はまだまだ増えて行く。

「こ、これって何の集団？」

「私に分かる訳ないだろう」

人々は携帯やらカメラを構えて、なにかを撮り争っているらしい。

「い、行ってみる？」

「これを抜けるというのか・・・・・・？」

二人が再び目線を戻すと、そこには殴りあいながらも、目的のものを撮ろうと必死になってる人らがいた。

「でも・・・気にならない？」

「確かにな」

そして二人はＩＳ訓練で鍛えられた運動神経で、人々で出来た壁を無理矢理押し通る。

「くっ！ある意味訓練よりキツイぞ！」

「ほ、ホント・・・！」

欲望に忠実な人ほど、行動力がとんでもないという・・・・・これはそれを見事に表してると思う。

そして転げながらも、ついに先頭までたどり着くと・・・・・・。

「お客様困ります！」

「撮影会ではありません！！」

「営業妨害になります！！」

店員の人達が、必死に群がる野次馬を解散させようと頑張っているが、あまり効果はない。

一体何が・・・・と思い、二人とも顔を上げて見て・・・・・・思わず固まった。

とんでもない美少女が、目の前に立っていたから・・・・。

黒のミリタリージャケットと、シフォンブラウンのシャツに、スキニーデニムという、いたってシンプルなコーディネートだが、そのモデル顔負けのスレンダーな体型、ポニーテールにした髪型、そして顔の容姿が凛々しく、大和撫子みたいな女性がそこに立っていた。立っていたが・・・・・・。

「赤と青のオッドアイ・・・・・・？」

「黒と銀の髪・・・・・・？」

そう。

赤と青のオッドアイに、黒と銀の髪をした女性（？）だった。

・・・そんな容姿をしているのは、世界中探しても一人だけだろう。

「な、なんですか。この集団は・・・・・・」

その女性（？）は前で倒れてる二人に気付かないで、大勢集まっている集団を見ていた。

「・・・・・・・・・おい。何してる」

ラウラのドスの効いた声。その声に女性（？）は反応する。

「え？どこから・・・・・下？・・・・・・・・・」

そして下で倒れてる二人に目が行く。そして呆然と立ち尽くす。

眼を1回擦って再度二人を見つめる。そして呆然と――――――――。

「なあああああああああああああああああああああああああっ！？！？！？！？」

立ち尽くさないで、腰を抜かし、奇声を発して超高速で後退りする。

「な、な、なあ、ななななな、なななななな、あああああっ！？」

二人を指差しながら、解読不能の言葉を発する女性（？）

「とりあえず。こっちに来い」

「みぎゃ！あああああああっ！！」

ラウラに首を引っ張られながら、連れて行かれる女性・・・・・・？

野次馬達は、その光景を呆然と見ていた。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxx

「言い訳はきかん。殺す」

「いや実は―――――――って聞かないんですか！？あと結論が早すぎます！」

三人はオープンテラスの、テーブルの一角で座っていた。

「楓。何か深い理由でもあるの？」

そう。分かってる人も居たと思いますが、女性（？）の正体は楓だった。

「ありますよ！！僕が好き好んでこんな格好する訳ないでしょう！！」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

「何で黙るんですかっ！！」

「いや・・・・・だが・・・・・」

「ビックリするほど・・・・似合っちゃってるし・・・・・ねぇ？」

二人とも苦笑い。それに楓はショックを受ける。

「そんな・・・・・男なのに・・・・女装して街に出るのに、５時間悩んだのに・・・・・・・」

椅子の上で体育座りしていじける楓。

「そ、それはそうと！！楓は女装までして何してたの？」

「え！？・・・・・じ、実はですね・・・・・・メールで・・・・・」

「？」

「と、友達から頼まれたんですよ。『妹に何かプレゼント（ご機嫌とり）をしたいけど、妹が欲しがってるのは下着だから、男の俺は買いにいけない。お前の容姿なら大丈夫だろうから頼む』と」

「で・・・・お前はそれを引き受けた・・・・・・と」

ラウラからの冷たい視線。楓は怯みながら言葉を紡ぐ。

「し、仕方ないじゃないですか・・・・。彼には一食の恩があった

ので・・・・」

「律儀だね」

「そして変態だな」

シャルロットとラウラの言葉・・・・特にラウラの言葉にショックを受けて、楓は顔を伏せた。

「ヒドイですよ!!僕はまだ買ってません!!」

「これから買うのだろう？」

「・・・・・・・・・・はぃ・・・・」

「なら訂正は必要ないだろう」

「うぅ・・・・・・死にたい・・・・・・・」

なおも椅子の上で体育座りする楓に、さすがに良心が痛んだらしいシャルロットが、話しかける。

「げ、元気だしなよ。似合ってるからさ!!」

「グハッ!!」

楓はついに椅子から転げ落ちた。そしてラウラが呆れた感じで言う。

「シャルロット。それはトドメだ」

「あ・・・・・ゴメン」

そして楓は、これから自殺しそうな顔をして立ち上がる。

「もういいや・・・・・さっさと目的を済ませて・・・・・学園の屋上に行こう・・・・・・」

そしてフラフラと、おぼつかない足取りで歩く楓。

「や、ヤバイよラウラ！楓が自暴自棄になってる！！」

「う、うむ。流石にマズイ。色々と」

そしてシャルロットとラウラも、楓の後を付いて行く。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「じゃあさっさと買って帰る」

楓たちはさっきの店に戻って来た。

「さっきの集団は帰ったのだな」

店の中はカメラを持った客などいなく、普通に買い物に来てる人だけだった。

「それじゃあ僕はあっちなんで」

そして下着コーナーを指差す。

「あ、それと。今回の事は出来れば内密に・・・・・・」

「わかってるよ」

「じゃ、これで」

と言う楓の肩を二人は掴む。

「ちょっと待って」

「え・・・・・・？」

「ど、どうせならさ。僕らと買い物しない？」

若干顔を赤くして、照れた感じで言うシャルロット。

まあそんな事に気付かないのが、この小説のオリ主、桐谷楓なのだ。

「いいですよ」

「ホント!?」

「ええ。それじゃあどうします？」

「え、えっと・・・・・じゃあ先に楓の買い物から・・・・」

「え!?本当ですか!?手伝ってくれるんですね!!」

「あ・・・まあ・・・うん」

「ありがとうございます!」

楓が腰を九十度曲げてお辞儀する。楓にとってはそれほど大事なことなんだろう。

「じゃあ早速!」

楓は二人の手を引き、下着コーナへ向う。

下着コーナーについたので、シャルロットが楓に聞く。

「で。何の下着なの?」

「・・・・・・よ、よくわからないので、そちらにお、お任せします」

顔を赤くして目のやり場に困ってる楓が、弾のメールを二人に見せる。

「私には分からん」

「僕は分かるよ。これはあっちかな」

そしてシャルロットは、コーナーの中を進む。

「ここにある・・・・・あったあった。これだよ」

そしてそこの商品棚から黒い下着を取り出す。

「じゃ、じゃあさっさと買って帰りましょう」

「待ってよ。僕らはまだ何も買ってないんだけど」

「え!?・・・・本当ですか?」

「うん。だからもう少し付き合ってもらうよ」

「・・・・仕方ない・・・・ってことですか・・・・・・」

「ギブ&テイクってことだ」

と言うわけで、シャルロットが下着を持って行き、楓が金を支払い買った。

「はぁ～～～・・・・・・メンタルが持ってよかった～～・・・・・・」

楓が物凄い深いため息をつく。

「次は僕たちの買い物だよ」

「まあいいですけど・・・・僕がいても大して変わらない気が」

「そ、そんなことないよ」

「シャ、シャルロットの言う通りだ」

相変わらす、恋愛感情だけには疎い楓であった。

「ま、いいですね。行きましょうか」

そして服コーナーへ歩き出す。

「服って言っても、ラウラの服なんだけどね」

「そうなんですか？」

「まあな」

「ラウラって寝間着と私服がないんだよ。だからさ」

「ハハハ、らしいっちゃあらしいですけどね」

「楓、それはバカにしてるのか？」

「とんでもない。ただ、ラウラさんはそういう人だなぁと思っていただけです」

「・・・・・・・・まあいい。それでここか？」

「そうでしょうね」

服コーナーに入ると、さっき楓の一緒にいた店長が、急いで楓たちの前に来る。

「先ほどはスミマセンでした。暴走した集団をどうしても抑えられなくて・・・・・・」

そしてペコリと頭を下げて謝罪する店長。

「いえいえ。気にしてませんから。顔を上げてください」

楓はスゴイ女声＆ａｍｐ；女口調を二人の前で披露した。

「こちらは謝罪の意もこめて、貴女方にのみ５０％オフでやらせて頂きます」

「え？いいんですか？」

「はい。お客様を不快な思いにさせてしまったのですから」

「ですが・・・・私は」

「私たちが気にするんです。ささ、こちらへどうぞ。お友達さんも」

手で道を案内する店長。

「・・・・・・わかりました。ここは素直にご厚意を頂きます」

そして楓たちは店長の後をついて行く。

その間に、シャルロットたちが楓に話す。

「楓ってあんな女声出せたの？」

「え？　ええ。やるからにはバレないようにしないと」

「ふ～～ん。あっ、そういえば、楓って服を買いにきたわけじゃないよね？」

ピシッ。・・・・・・・・楓が固まった。

「そ、そうだった・・・・・ぼｋ――――私は二人に付いて来ただけだった・・・・・・」

嘆くときまで役作りは忘れない。几帳面な楓であった。

「安くしてくれるんだから、買ったほうがいいよ？」

「買っても着る機会がないですよ」

「また今日みたいに着るかもよ？」

「そのときはまたこの服を着ますよ」

楓がそういうと、シャルロットはため息をつく。

「いい？楓。さっき楓はご厚意を頂くって言ってたよね？」

「・・・・・・はい」

「なのに一着も買わないで帰るの？」

「・・・・・・わかりましたよ。おそらく着る機会は無いでしょうけど・・・買いますよ」

楓が折れて、楓も服を一着買うことになった。

「こちらです」

「あの・・・」

「なんでしょうか？」

「すいません。彼女に似合う服を仕立てて欲しいんですが・・・・・・」

そう言い、楓がラウラを前に押し出す。

「お、おい」

「シャルロットも」

「あ、そうだね。僕は元々このために来たんだし」

「じゃあ私は、終わるまでそこらを歩いてますよ」

ちゃんと役作りを忘れず、楓はここから離れる。

そしてシャルロットと店員さんに、ラウラは仕立ててもらう。

「今のうちに、僕の買う服でも選んでおくか・・・・・・」

そして楓はいろんな服を手にとってみる。

「やっぱ男の服とは全然違う・・・・・・」

当たり前だが、まあ楓はそう言葉を漏らした。

「――――――はっ！いけない！！こんな事じゃあ僕は変態だ！！」

慌てて服を元の棚に戻す楓。実際女装してる時点で、充分ヤバイ状況なのだが・・・・気付く人はいなかった。

「さっさと選ばないと――――――」

（って何を選べばいいんだろう？まあ、着ないし何でもいいか）

「・・・あ、そうだ。誰かのプレゼントってことにすればいいん

だ」

唐突に声を上げる楓。

（何と言う盲点。僕が着なければ、誰かにあげればいいんじゃないか）

「となるとその相手は・・・・・僕も蘭さんのプレゼントってことでいいか」

ちょうど家に寄るし。と、楓は自分でまとめて服選びを続けた。

「楓～～。終わったよ～～」

「あ、今行きます」

シャルロットの声で、楓は服選びを中断した。

「終わりましたか」

「バッチリ」

「で・・・・ラウラさんは？」

楓が辺りを見渡すが、シャルロットと店長以外人はいない。

「ここだよ」

と、シャルロットは着替え室を指差す。

「ねぇラウラ、恥ずかしがってないで出てきてよ」

「む、無理だ」

中からラウラの声が聞こえる。ラウラはこの中にいるらしい。

「きっと、楓がラウラの姿を見たら驚くと思うなぁ」

「そ、そうか・・・・・？」

「うん。絶対」

小声でなにやら話をする二人。もちろん楓には聞こえてない。

シャー。

着替え室のカーテンが開く音。

「く・・・・・」

「・・・・・・・・・」

顔を真っ赤に染めて出てくるラウラと、呆然とその姿を眺める楓。

着てるのは肩の露出した黒のワンピース。所々にフリルの加工がしてあり、可愛らしさを演出している。

「ねぇ？驚いちゃったでしょ？楓」

「・・・ええ。一瞬妖精と見間違えましたね」

決してふざけてはいない。現にラウラはそのような雰囲気を纏っている。

「せ、世事はよせ」

「違いますよ。心からの言葉です」

「そ、そうか／／／・・・・・」

顔を赤くし、内心で喜ぶラウラ。

「あ、それじゃあ僕はこの服代を・・・・」

そして楓が財布を取り出す。

「え？いいの？」

「ええ。私の買い物を手伝ってくれましたし」

そして小声で、

「こういうときは、男が奢るものでしょうしね」

と付け加えた。

「ふふっ。そっか。やっぱり楓は楓だね」

シャルロットは優しく微笑み、ラウラの下へいった。
そしてレジへ向う楓。手には選んだであろう服が数点。
「これを」
「かしこまりました。料金は●●●●円です」
（安ッ！！）
内心で、楓はそう叫んだ。
「じゃあこれで」
楓は財布からピッタリだした。
「ちょうどお預かりします。ありがとうございました」
お辞儀をしてお礼を言う店長。楓は笑顔で手を振りながら、先に行ってた二人の下へ行く。
「お待たせしました」
「ん。じゃあ何処へ行く？」
「もう昼だ。そろそろ昼食としよう」
「そうだね。じゃあさっきのオープンテラスへ行こう？」
「わかりました」

と言うわけで、さっきのカフェへと戻った。

x
x x
x x x
x x x x
x x x x x
x x x x x x
x x x x x x x
x x x x x x x x
x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x

ラウラは日替わりのパスタ、シャルロットはラザニア、楓はリゾットを食べている。

「ですがラウラさん」

「なんだ？」

「何で買った服脱いじゃったんですか？似合っていたのに」

「い、いや・・・その・・・恥ずかしくて・・・」

顔を赤くしたラウラの言葉は、残念ながら楓には届かなかった。

「？」

「～～～！！汚れたら困ると思って着替えたんだ！！」

「そ、そんなムキにならなくても・・・・・」

「ハハハッ。二人の会話は面白いね」

シャルロットは全てを分かっているかのような、そんな微笑みをしていた。

「ちなみに。お二人は午後も買い物を？」

「うん。生活雑貨を見て回ろうと思ってるんだ」

「生活雑貨？」

「うん。僕は日本の腕時計に、ちょっと憧れを持っててさぁ・・・・」

「なるほど。ラウラさんは?」

「? 何故私に振る?」

「いえ。ラウラさんも何か、日本製で欲しいものがあるのかなぁと思ったので」

「そうだな・・・・・・」

腕を組み眼を瞑って長考するラウラ。そしてはっきりと伝える。

「日本刀だな」

「「・・・・・・・・・・」」

楓とシャルロットは無言で固まる。しかし楓はすぐに再起して聞く。

「ま、まあ確かに『メイド・イン・ジャパン』ですね。・・・それだけですか?」

「ああ」

「・・・女性らしい物は?」

「ないな」

きっぱり即答。速さはもはや、聞かれるのを待ったいたかのようだ。
その答えに楓とシャルロットは、深いため息をついて首を落とす。
そして、ふとシャルロットは隣の女性に目が行った。
「・・・・どうすればいいのよ・・・・。これじゃあ・・・・・」
歳は２０代後半。キッチリカッチリなスーツを着込んでいる。
何か悩みを抱えてるらしく、注文したであろうペペロンチーノは冷めてしまってる。
「はぁ・・・・・」
またもため息。悩み事があるのは確定。それも深刻らしい。
「ねぇ、二人とも」
「優しいですね、シャルさんは」
「だが、お節介は程々にな」
二人は、シャルロットの言葉が分かっていたらしく、言葉を先回りする。
その反応にビックリしたシャルロットだったが、すぐに嬉しそうな表情をする。
「そんなに分かりやすかったかな？」

「ええ。演技なら、私ぐらいやりませんとね」

女口調&女声をまたも披露する楓。

「そこまで言ったらプロの領域だよ」

「ま、それもそうですか。・・・・・・で、どうするんですか？」

「うーん・・・・とりあえず話だけでも」

「ラウラさんは？」

「異存はない」

それを聞くと、シャルロットは席を立って隣の女性に話しかけた。

「あの、どうかされましたか？」

「え？　――――――――！？」

その女性が3人を見るなり、ガタンッ！と電気ショックを撃たれたかのように、椅子を倒して立ち上がる。

そしてシャルロットの手を握る。

「あ、あなたたち！！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「「え？」」」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxx

場所は変わって、とある喫茶店。

「――――――というわけでね、いきなり二人やめちゃったのよ。やめたっていうか、駆け落ちしたんだけどね。アハハ・・・・・」

「はぁ」

「ふむ」

「でもね。今日は超重要な日なのよ！本社から視察の人間が来るし、だからお願い！貴方達に今日だけアルバイトをして欲しいの！」

女性に案内された喫茶店は、これまた変わっていた。

女性は使用人の格好、男性は執事の格好で接客を行うという――――いわゆるメイド（&執事）喫茶だ。

「それはいいんですが・・・・・」

着替え終わったシャルロットは、少し控えめに訊く。

「なら僕は何故執事服なんでしょうか・・・・・？」

「だってほら！そこいら男どもより断然似合ってるもの！！」

「そうですか・・・・・」

褒められたというのに、あまり嬉しそうじゃないシャルロット。

「大丈夫！すっごく似合ってるから！！」

「そ、そうですか。アハハ・・・・」

（それが問題なんだけどなぁ・・・・）

複雑な乙女心を持て余すシャルロット。

そして目線は隣のメイド服のラウラへ向う。

細身でありながら強靭さを秘めた体躯に、装飾の少ないシンプルなメイド服。

それらを纏め上げるサラリと伸びた銀髪。そして不思議な雰囲気を醸し出す眼帯。

（う～・・・羨ましいなぁ。ラウラって何でこんなに可愛いんだろう・・・）

改めてその魅力を再認識し、シャルロットはまたため息をつく。

「ところで、楓はどこへ？」

ラウラが訊く。

楓は、ここに来るときは一緒だったが、着替えのときに別れて、そのまま姿を見ていない。

店長は首をかしげて答える。

「ん～、着替えに手間取ってるのかしら？」

そして店長は着替え室の方へ向かう。

「終わったかしら？」

「わっ！？い、いきなり入ってこないで下さいよ！！」

楓はまだ着替え室にいたらしい。

「あれ？着替え終わってるじゃないの」

「え！？・・・・ええ、まあ」

「じゃあさっさと出なさい」

「い、いえ！！やっぱりやめます！！」

「どうして？」

「い、いや・・・・私にこんなの、似合うわけないじゃないですか！」

「貴方が似合わないなら、この世の殆どの女性は似合わないわね」

「せ、せめて執事服なら・・・・！！」

「ダメ。貴方は執事服よりメイド服の方が似合うから」

「そ、そんなぁ～～・・・・・」

「ほらっ。恥ずかしがらないで」

「グェ！な、なにこれデジャヴ――――――ああああ！」

そして奥から店長が、メイド服を着た人物の首を掴んで引きずる。

「「・・・・・・・・・・・」」

「あ、あの・・・・・やっぱり私には似合いませんよ・・・・・」
引きずられた人物は顔を伏せながら起き上がる。
「大丈夫！立派なメイドさんよ。ほら、貴方達もそう見えるでしょ？」
「え・・・・・うん。驚いちゃったよ」
「・・・・・た、確かにな」
二人はその人物に見惚れて、曖昧な答えしか返せなかった。
それだけ・・・その人物、楓のメイド姿は美しいものだったから・・・。
服装自体はラウラと大差ないが、さらにリボンなどの装飾が少なくなったり、通常の服よりやや黒い部分が強調され、本当に『シンプル・イズ・ベスト』を貫いたメイド服だった。
楓は髪を下ろし、ポニーテールのときは凛々しかったが、下ろしたときはまた違った魅力を出している。
さらに楓が着る事によって、メイド服の魅力がより引き出されて、楓は可愛いというより美しいという雰囲気を纏っていた。
「それ新作の服なんだけど、似合う人がいなくて困ってたの。でも似合う人が見つかってよかったわ」
「そ、そうなんですか・・・・・はぁ・・・」

曖昧な返事を返す楓。理由はシャルロットと似ている。

「店長〜〜、早くお店手伝って〜〜」

フロアリーダーから、ヘルプを求めて声をかける。

店長はすぐに最後の身だしなみをして、バックヤードの出口に向う。

「あ、最後に、もう一つだけ」

楓はどこぞの特命係がするように、人差し指を立てて聞く。

「ん？」

「このお店って、どういう名前なんですか？」

そう楓が聞くと、店長は笑みを浮かべてスカートをつまみ上げ、映画の一シーンのようなお辞儀をした。

「お客様。@クルーズへようこそ」

x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x

x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x
x

「デュノア君。四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

カウンターから飲み物を受け取って、@マークの刻まれたトレーに乗せる。

そんな普通の行動にさえ、シャルロットの気品がにじみ出ていて、ここにいる女性客やスタッフの殆どは見入っていた。

（接客業ってやってみると結構大変だね。ラウラと楓は大丈夫なのかな？）

シャルロットは二人の姿を探す。

そして3人の男性客のテーブルで注文をとっている、ラウラの姿を見つけた。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

「・・・・・・・・・・・・・」

「あ、あのさ、お店何時に終わるの？　一緒に遊びに――――――」

ダンッ！と、テーブルに叩きつけられたコップが、大きな音と共に雫を散らす。

「水だ。飲め」

「こ、個性的だね。もっと君の事をよく知りたくなっ――――――」

台詞の途中でラウラは何故かテーブルを離れる。
そしてカウンターからコーヒーを持ってきて、またもテーブルに叩き付けた。

「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは・・・・・」

「なんだ。客でないのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけで・・・・」

ラウラの態度にビビッて、男は小声で言葉を紡ぐ。気のせいか、身体も小さく見える。

「飲んだら出て行け。邪魔だ」

「はい・・・・・」

結局、男はラウラの気迫に負け、男はコーヒーを悲しく飲んだ後出て行った。

そんな人を寄せ付けない態度が、美少女の外見を伴えば魅力となってるらしく、店内の男性客はラウラに接客して欲しいと、熱い視線を送っていた。

「あ、あの子、超いい・・・・・」

「罵られたいっ、見下ろされたいっ、差別されたいっ!!」

特別危ないテンションの男性客から、他の客は目を逸らしてやり過ごしている。

（・・・な、なんか大丈夫そうだね。楓は・・・・）

シャルロットは楓の姿を探した。すると、複数の女性客と接客している楓を見つけた。

「お嬢様。メニューはお決まりでしょうか？」

「は、はぃ・・・。え、えとコーヒーを」

「そちらの方もよろしいですか？」

「「「は、はい・・・・・」」」

そして楓は、背筋をピンッとした凛々しい歩き方でカウンターまで歩いて行く。

その態度はとても１５歳の物とは思えなかった。

「コーヒー四つです」

「あ、そこにおいてあるよ」

そして置いてあるコーヒーを四つトレーに乗せて、楓は再びテーブルに戻ってくる。

「お待たせいたしました。コーヒーです」

「「「「あ、はい・・・・・」」」」

たった一声。たった一声で十歳は年上であろう女性客は、楓を直視できなくなった。
そして楓はこの店の『とあるサービス』の要不要を尋ねた。

「お砂糖かミルクをお入れになりますか？よろしければ私が入れさせて貰いますが」

「お、お願いします。え、ええと、砂糖もミルクも、たっぷりで」

「わ、私たちもお願いしますっ」

あわあわと慌てる女性客に、楓は上品なスマイルを浮かべて微笑む。

「かしこまりました。では、失礼いたします」

楓の男とは思えないキレイな指が、スプーンを優しく握り、砂糖とミルクを合わせて、カップの中身を静かにかき混ぜる。
たったそれだけの、何気ない動作にも女性客は目を奪われていた。

「どうぞ。熱いのでお気をつけてください」

「あ、ありがとう・・・ございます・・・・」

そっと楓から差し出されたカップを受け取り、女性は緊張した感じに一口飲む。

楓が他の女性客のコーヒーも同様の作業をしている時に、ふと客と目が合うと上品に微笑み返したりして、余裕と気品に優雅、三拍子が揃ったような美しさを振りまいてく。

「どうぞ。お待たせしました」

「い、いえ・・・・どうも・・・・・」

最後のお客にコーヒーを出し終えて、楓は一歩下がりスカートを摘み上げて、美しいお辞儀をする。

「また何かありましたら、何なりとお呼び出しください。お嬢様」

そのお辞儀は『メイド』と言うより、『お嬢様』と言った方がいいかもしれない。

今の楓には、メイド服を着ているにも限らず、使用人のような雰囲気を微塵も感じさせなかった。

そのギャップと美しさに、男性客も女性客も羨望の眼差しをしている。

しかし楓の内心は、その優雅なものとは全くの逆だった。

（ま、また見られてる！・・・一応返しておこう・・・・あぁ・・・男として大事なものを捨てた気がする・・・）

全くのネガティブ思考に直結していた。

よくこんな思考であの優雅な雰囲気を出せるか、ミステリーで不思議である。

「あ、あのっ、追加の注文いいですか！？できればさっきの金髪執事さんで！」

「コーヒー下さい！金髪のメイドさんで！」

「メニューのオーダーを！できれば黒髪メイドさんで！！」

そんなこんなで、客たちのテンションは上がりにあがり、それに戸惑いを見せる3人だったが、店長の指示でテーブルを調節していった。

店長の指示は的確で、通常より5倍以上もい多い客を全て捌いて行く。

しかしそれが2時間も続けば体力ももたないため、3人とも疲れを感じてきたとき、事件は起きた。

「全員動くんじゃねぇ！！」

ドアを蹴破り（ホントに）迷彩服を着た男三人が怒鳴り声を上げる。

店内は、最初無言だったが、時間差で客たちの悲鳴が上がった。

「きゃあああああっ！」

「騒ぐんじゃねぇ！！静かにしろ！」

男達は手にもっているショットガンを構える。背中には大量の紙幣。
銀行か何かから、お金を強盗した後みたいな男達だった。
おそらく襲撃したはいいが、警察に追われてしまって捕まりそうになり、仕方なしとメイド喫茶に篭城・・・と言ったところだろう。

「あー、犯人一味に告ぐ。貴美達は完全に包囲されているので、大人しく投降しなさい」

すでに外は、犯人達を追っていた警察によって囲まれていた。
妙にやる気のない警告は、・・・まあ気にしないで置こう。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃあ――――――」

「待て待て。焦ることはねぇ。こっちには人質ってのがあるんだ。
強行なんて出来ねぇさ」

「へ、へへ、そっすよね。俺たちには大金をつぎ込んだこれがあるし」

ジャキッ！と高い金属音を鳴らして、もっているショットガンのポンプアクションを行う。
その後、男は天井に向けてショットガンを撃った。

「きゃあああああっ！！」

蛍光灯が割れて、その近くにいた女性客が悲鳴を上げるが、リーダーっぽい男が銃を床に撃って黙らせた。

「騒ぐな！俺たちの言うことを訊いてればいいんだ。まだ死にたく

ねぇだろ？」

女性客は男の言葉を聞き、頷くと共に手を口に当てて黙る。

「聞こえるか税金泥棒！！人質を解放して欲しいなら車を用意しろ！何か細工でもしたら、人質を一人ずつ吹っ飛ばすからな！！」

そしてリーダーの男は警官に向ってショットガンを撃つ。
その銃弾はパトカーに当たり、警察官の方には当たらなかった。
しかし威嚇射撃の効果は抜群だった。
その近くにいた野次馬はパニックになり、警察官はそれを鎮圧しようとして手を焼いていた。

「利用するものは最大限に活用しねぇとな」

「さっすがリーダー。野次馬が大騒ぎしてまっせ」

「平和な国ほど犯罪には弱いって事っすね」

「そういうことだな」

そんな歪な笑みを浮かべる男達を、観察している者がいた。

（一人はショットガン、一人はサブマシンガン、リーダーはハンドガン。まだ持ってる可能性が高いけど、とりあえずは――――――――）

目立たないようにしゃがみながら店内を観察するシャルロット。
そこでぎょっとしたものを見つける。

「・・・・・・・・・・」

店内で強盗以外にただ一人たっていたのはラウラだった。
銀髪眼帯美少女となれば、嫌でも注目を集めるので――――――――。

「何だお前は。大人しく座っていろ」

やはりリーダーの男がラウラの下へとやってきた。
ラウラは一瞬だけハンドガンを見て視線を逸らした。

「おい聞こえないのか!?それとも日本語が通じないか!?」

リーダーが怒りラウラにハンドガンを向ける。そのとき――――――――。

「す、すいません。彼女はまだ日本にあまり慣れていないので・・・・」

メイド服姿の楓がフォローと同時に、ラウラとリーダーの間に割って入る。

「まあまあ。いいじゃないっすか兄貴!時間はたっぷりとあるんスから、この子等に接客させて貰いましょうか!」

「あぁ?何言ってるんだお前は」

「だってホラ!めちゃくちゃ可愛いじゃないっすか!!」

「お、俺も賛成。メイド喫茶って入ったことなくて・・・・」

二人して恥ずかしそうな表情を浮かべると、リーダーはため息をつきながらソファに座った。

「まあいい。ちょうど喉が渇いてきた。おい、そこの黒髪メイド。メニューをもってこい」

黒髪メイドこと楓は驚いた表情をする。・・・・完全に演技だが。

「え！？　わ、私がですか？」

「そうだ。そこの銀髪は日本語が通じないようだからな」

「か、かしこまりました」

楓は急いでカウンターの場所まで行き、犯人の人数分の水をトレーに乗せて、シャルロットとラウラだけが気付いたが何かを呟いてから、メニューと一緒に持ってきた。

「お、お水とメニューです・・・・」

「ふん」

リーダーはメニューを、楓から半ば強引に奪い取る。

「とりあえずこれ――――――――――――ぐはっ！？」

メニューを一通り見た後、リーダーが何かを言う途中で、楓は持ってるトレーで頭を叩く。

「て、てめぇ！！」

他の二人が楓に銃を撃つ。しかし楓は軽いステップで全てかわす。

・・・・・・サブマシンガンとショットガンの雨を。

「な、なんだてめぇ――――――――――――――――――がっ！！」

「ぐへっ！！」

男達は突如、後ろから攻撃されて気絶した。

「いきなり戦闘しないでよね」

「シャルロットの言う通りだ」

「ラウラさんだって、勝手に始めそうだったでしょう？」

ご存知の通り、シャルロットとラウラだった。

ＩＳの専用機持ちともなれば、高度な戦闘もしくは『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を受けるため、この程度の戦闘など問題がある訳ない。

「楓。さっき何を呟いてたの？」

「あれ？バレてましたか。気付かれないと思ったんですけどね」

「で？何をしたの？」

「ふふっ。未来をちょっと見てた――――――――――――――――っ！？」

楓の言葉の途中で、顔を驚愕に染めた。
ラウラとシャルロットは気付かなかったが、楓は驚愕の顔をしたあと疑念の表情になる。

（まさか・・・・・いや、考えすぎかな・・・・）

で、三人は強盗犯を速攻で気絶させたせいで、店内はしばらくしーん・・・・と無音の空間が広がっていった。

「え・・・・・？な、何が・・・・・」

「た・・・・・助かった・・・・・・？」

「一体どういう・・・・・」

客たちはまだ現状をうまく把握してないらしく、ポツリポツリと呟きをもらす。
ちなみに店長が『銀髪メイドと金髪執事と黒髪メイドが強盗犯を撃退した』・・・・って本社に報告したら信じるかしら・・・・？なんて呟きをもらしている。

「お、俺たち助かったんだ！！」

「や、やったぁ！！メイドさんに執事さん、ありがとう！！」

ようやく助かった実感が持てたらしく、店内の客たちは喜びを分かち合っている。
そしてこの状況を察したのか、警官隊がこちらに向ってくる。

「さて。そろそろ私たちは退散しよう」

「そうだね。僕らは代表候補生で専用機持ちだし、公になるのは避けないと・・・ってあれ？楓は？」

「む。確かにいないな」

何時の間にか楓の姿が消えていた。

そして――――――さらに事態は一変する。

「捕まってムショ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらぁ！！」

早々に気絶したリーダーが上着を脱ぎすてる。

そこにあったのは、この店内を一瞬で焼け野原にできる量のＣ４だった。

起爆装置は手の中にある。

「諦めが悪いな」

ラウラがスカートがなびかせながら、男にかかと落としを食らわせる。

そしてテーブルを傾けて、拳銃が宙を舞い、二人はそれをキャッチして――――――――。

ダダダダダッ！

「「チェックメイト」」

高速五連射×2の弾丸は、起爆装置と爆薬の信管、そして導線『だけ』を的確に打ち抜いた。

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばすぞ」

ジャキッ！と二丁の拳銃を突きつけられ、さっきまでの威厳など微塵もなくなり、男は震えた声で謝った。

「す、すいっ、すいませんっ！も、もうしませんからっ。い、命だけは・・・・！」

そんな敗北宣言を最後まで聞くことなく、二人は颯爽と立ち去った。

だが・・・・・そこに楓の姿はなかった・・・・・。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

場所は変わり店の裏口。

楓は急いで着替えて、野次馬のいる正面玄関に向った。

「まさか・・・・そんなハズは・・・・・」

表情には焦りと疑念が入り混じっていた。

そして正面玄関にたどり着く。

「うわっ」

楓はその人数の多さに驚いた。目の前は人、人、人で埋め尽くされていた。

「でも・・・・・」

楓はその野次馬の塊に突っ込んで行く。その行動はやはり焦りが見えた。

「くっ・・・まさかここまでの騒ぎになるなんて」

しかし野次馬の人数はハンパじゃなく、楓は一向に進めていないでいた。

「やっぱり見間違え――――――――」

「見間違えではないよ桐谷楓。いや『創翼の騎士』」

「っ！！」

楓は驚いた様子で、声のしたほうを向く。

「やあ、随分愉快なことに巻き込まれたようだね」

「・・・・・・・やはり貴方か」

楓が向いた方向には、一言でいうと異質な女性がいた。

緑色の髪に一部赤い髪が混ざっていて、瞳は黒と金のオッドアイに、旨をあまり強調しないスレンダーな体躯に、この夏に膝まで届く白いコートを羽織り、ほんの少し楓と似ている女性だった。

野次馬達は、その女性を無意識のうちに避けるように群がっていた。

「女装姿は様になってたよ。・・・・って、今も女装姿だったね」

「・・・・通りすがりじゃないよね」

「私が何を言っても、君は信じないだろう？」

「まあね」

「で、用件を言おう。いきなりで悪いが、私たちは君達に宣戦を布告する」

「・・・・・・それだけかい？」

「それだけだよ。近いうちに色々な派閥や、あの組織が君達を狙うだろう」

「・・・・そうかい、ご忠告どうも。じゃあ守ってみせるよ」

「・・・・・・その甘さが君の弱さだ。だから君は弱者なんだ」

「この世に強者なんて何処にもいない、人類全てが弱者さ。僕や君も含めてね」

「なるほど。だが、だからこそ弱者は強者に憧れるんだよ」

そして女性は楓に背を向ける。

「強者になったその先に、君達の望む未来があるのか？」

「楓。そんなのやってみなければわからない。箱を開けたパンドラだって、きっとそんな気持ちだっただろうさ」

「そのパンドラの果てが滅びだとしても？」

「何があるか分からないから人生は楽しいんじゃないか。中身の分かる箱ほど退屈なものはない」

―――――――いつか、君にも分かる時が来るさ。

そう言い残して、その女性は楓の前から姿を消した。

「・・・わからないからこそ、知ろうとするのが・・・人じゃないのかよ・・・『―――――』」

楓はそう言って、野次馬の集団から抜け出した。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・・・」

楓は無表情である場所に向っていた。

「・・・・・ここだったっけ」

来た場所はある定食屋。楓はその引き戸を開ける。

「いらっしゃい」

入ると帽子を被ったロン毛の男が楓にあいさつしてくる。

「弾」

そう、きたのは五反田食堂だった。

「？・・・・・え、えっと・・・・・お知り合いでしたっけ？」

「へ？　あっ・・・・・これじゃあわからないか・・・・・」

楓は、今の格好を見てわからないのも無理ないと思い、ある演技をした。

「初めましてですね。桐谷楓の妹の桐谷・・・桜です。兄からこれを預かってるのですが・・・・」

女声＋女口調をまたも披露する楓。今日は女装姿に大活躍である。

（僕だとバレるのも気まずいし、兄妹ってことで通しちゃおうかな。おもしろそうだし）

余計な誤解を招かないため。あと、ちょっとした好奇心で楓は演技

をした。

しかしそれを知らない弾は・・・・・・。

「あっ！そうかそうかっ！ありがとう桜さん！」

といって楓から、頼まれたものの入った紙袋を受け取る弾。

（・・・桜『さん』？僕の妹ってことなら、弾の方が年上だろうに）

疑問に思った楓はちょっと訊いてみた。

「あの・・・私のほうが年下ですから、さん付けは・・・・」

「あ、それもそうか。君の容姿が大人びいてるから、なんか年上に見えてな」

「へ、へぇ・・・そうなんですか（実際同い年だけど）」

そして、弾が何故か少し引き締まった表情をすると・・・・・・・・・・。

「しかし・・・きみ可愛いよね。お兄さんに似て・・・」

ぞわっ！・・・・っと、楓はいきなり悪寒に襲われた。

（き、キモイ！何で僕はいきなり、弾に口説かれなきゃいけないんだ！！）

「あ、え、えと・・・。用が済んだので、私はこれで・・・・・」

「待った！」

ガシッ！と楓の肩を弾がつかむ。

楓は弾に対して、引いた感じの冷たい目線を向ける。その絶対零度の視線は容赦なく弾を貫く。

「何か？」

「あ・・・・よ、よければメアド教えてくれない？」

しかし、それにめげないのが五反田弾なのだ。

「え・・・はぁ・・・別にいいですよ」

そして弾と楓はメアドを交換した。

「いやぁ、ありがとね。楓によろしく言っておいてくれ」

「わかりました。では、今度こそ失礼します」

楓は出来るだけ早足で、五反田食堂を後にした。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

時は変わり夜。場所は楓と一夏の部屋。

楓はダルそうな表情をしながら、自分の部屋へと向っていた。

「はぁ〜〜〜・・・・・・疲れた・・・・」

そして自分の部屋の前に着き、躊躇いもなくあける。

「た・・・ただいま・・・・」

すると部屋にいたらしい一夏が、部屋の奥から出てくる。

「楓か？おか―――――――――えええええええええええっ！？」

「っ！？」

いきなり一夏は絶叫して、後ずさりして服に足を滑らせ、頭を強打

した。

「ぐはっ！！」

「何してんの？」

楓は呆れた感じで言う。それに一夏は猛反発する。

「お前こそ何してんだっ！！」

「？」

「その格好だよ！！」

「あ～～・・・すっかり忘れてた」

どうやら、一夏は楓が女装していることに予想以上に驚いたらしい。楓はもはや、大切なものを軽く失っているので、全然動じていなかった。

「弾に頼まれてね。仕方なく」

「！？お、お前ら何してきたんだよ！！」

激しく誤解をしている一夏は、顔を赤くして怒鳴った。

しかし楓はスルーして、さっさとベットにダイブする。

「今日は色々と身体を動かしたから、もう寝る」

「か、カラダを動かした!?お、お前らホントに何してきたんだよ!!」

一夏の怒鳴り声は、悲しいことに楓の耳には届かなかった・・・。

25話　夏休み　買い物編（後書き）

なんか違和感があります。しかし正体が分からないので放置。

今回は久しぶりに長く書きました・・・・。一万8千文字越えちゃった・・・・。

しかし、こんだけ書いたのに夏が終わらない・・・。エンドレスサマーって怖い・・・いろんな意味で。

で、夏休みは・・・あと2話ぐらいじゃないかと思われます・・・な、長い・・・長いぞ！！

あと新キャラの容姿は、コードギ〇スの不老不死の魔女さんと思ってください。

誤字脱字、感想があったらお願いします。

26話　主人公機紹介（仮）（前書き）

一度、楓の機体設定を載せました。

本編じゃないです。

26話　主人公機紹介（仮）

報告対象『桐谷楓』

突如としてＩＳ学園にやってきた少年。
中性的な容姿から美少年として、周りからチヤホヤされムカツ――
――失礼、感情的になったようだ。
世界で織斑一夏につぐ、二人目としてＩＳを操縦できる男という彼は、実際謎が多い。
まず彼の機体操縦技術は、代表候補生を軽く越える。
しかしそのような実力者が、今まで世界に名を連ねないというのはおかしい。

そういった点から今回は、彼の使う機体達の現状報告を文章として紹介しよう。
不明な点が多いので、この報告には期待しないで欲しい。

正式名称『Ｉｎｆｉｎｉｔｅ（インフィニット）・ＳＵＰＥＲＩＯＲ（スペリオル）・ＧＵＮＤＡＭ（ガンダム）』

設計者不明、製造過程不明、製造目的不明と、謎が多い楓の機体達。
これらすべては『ＩＳ』とは似て非なる機体、通称『ＩＳＧ』と呼ばれる。これは頭文字をとった略称だ。

次から紹介する最初の二つは、楓自身の機体『ユニコーン』が使用不可だったため、知り合いから借りた機体。
気になるのは、システムはハイスペックだが、その分自分の体を酷使するシステムと言うこと。
そう言った点は、明かされてない不明な点と関係があるのかもしれない。

楓はさらにもう一機『トールギス?』と呼ばれる機体を保持している。
これはトーナメントを襲った無人機、楓の叫んだ名前『トールギス』と、なんらかの関係があると思われるが、使用されるのはまだ先と思われる。

次は機体紹介。
こちらは武装について大体分かるが、機体のシステムは不明な点が多い。

『エピオン』：楓が初めて使った機体。だが楓のものではない。
見た目はガンダムエピオンと同じ。
全身装甲もできるが、大体は手足と背中だけ装甲を展開する。
全身装甲時は顔も覆い隠すが、通常は大体、兜のようなものが展開される。

――――――武装一覧――――――

《ビーム・ソード》
巨大なビームの刀身を出す。長さや太さはエネルギーが続く限り大きくなる。
あと実体剣にすることも可能。その場合ビーム刃が展開される。

もう一つシールド内蔵の《ヒート・ロッド》がある。
これは使うとき表面が熱を帯びていて、打ち付けたり、相手を捕縛することも出来る。
威力は充分にある驚異的な武装の一つ。

ちなみに両腕に《エピオンクロー》がある。しかしこれは使うことは少ない。

射撃武器は一切ない。しかし一夏の『白式』とは違い、自ら射撃武器をつけていないだけである。

そしてもう一つ『変形機構』がある。
これは両脚が腰部ごと背部に折り畳まれる変形で、足の位置の関係で双頭のワイバーンを思わせる形。
飛行能力やスピードは従来のＩＳを圧倒する能力がある。
ちなみにどうやって変形しているかは気にしないで下さい。

《ゼロ・システム（Ｚ．Ｅ．Ｒ．Ｏ．Ｓｙｓｔｅｍ）》
エピオン最大のシステム。正式名称『Ｚｏｎｉｎｇ　ａｎｄ　Ｅｍｏｔｉｏｎａｌ　Ｒａｎｇｅ　Ｏｍｉｔｔｅｄ　Ｓｙｓｔｅｍ』（直訳すると「領域化及び情動域欠落化装置」）※ＷＩＫＩ参照

これは簡単にいうと自らの”最良の勝利戦術”を直接脳に送り込むシステム。
つまり自分の勝利する未来が最初からわかるシステム。
しかも一時的に脳を機体のコアとリンクさせることにより、反射神経や演算能力など様々な能力を飛躍的に向上させる。
しかしあくまで”最良の勝利”なので、そのためなら身体の負担や味方の犠牲など、無駄なことはすべて切り捨てる。
しかも膨大な情報が直接送られてくるので、大体の人は脳が耐えれなくなってしまう。（最悪の場合脳死）

しかし楓は、諸事情でこのシステムに堪えれる身体になっているので使える。
それでも長時間の運用は出来ない。時間とすると約１０分。それ以上は楓でも生命に危機が生じる。
しかも一度使用するごとに脳を休ませるため、連続多様は出来ない。
それにシステムの効果は変わりないので、諸刃の剣と化している。

発動すると、機体の目に赤い字で《Ｚ．Ｅ．Ｒ．Ｏ．Ｓｙｓｔｅｍ》と浮かぶ。

このほかにもまだ明かしていないシステムもある。

『ウィングゼロカスタム』：楓が使ったもう一つの機体。通称『ゼロ』。これも正式には違う。

見た目はウィングガンダムゼロカスタムと同じ。
装甲の基本は『エピオン』と変わらない。
いつもは『エピオン』と同じように手足、そして背中と兜を展開する。全身装甲も可能。

――――――武装一覧――――――

《ツインバスターライフル》
『ゼロ』の主力武器である、2丁の黒いバスターライフルの事。
威力はセシリアの《スターライトMK?》と同レベルかそれ以上。
そしてこれは平行連結した大型ビームライフルに合体させる事が出来る。
このライフルの威力は相手のIS操縦者に過大なダメージを与えてしまうため、リミッターをつけている。任意のタイミングで解除可能。

《ビームサーベル》
これは『エピオン』の《ビーム・ソード》の劣化バージョン。
『エピオン』の《ビーム・ソード》の十分の一にも満たない性能。
形状もある一定までの大きさにしかならないし、実体剣になれない。
だがこれは『エピオン』の《ビーム・ソード》の性能が高すぎるだけであり、接近戦闘については問題なく相手と戦える。通常は二本装備。

《マシンキャノン》
これは機体の両肩に内蔵された4銃身式ビームガトリング。実弾にも変更可能。
発砲時は肩口の装甲が展開し銃身が出てくる。
基本的に牽制や近接防御が主用途だが威力は申し分ない。

《ゼロウィング》
これは背中の4つの羽根の事を指している。
これは機体の機動制御と共に、防御のためのシールドとしても扱える。
さらに翼には実体刃を展開できるようになっているため、攻撃に使用することも出来る。

そしてこの機体も《ゼロシステム》を搭載している。詳しい説明は上にあるので省くとする。

このほかにもまだ明かされていないシステムがある。

『ユニコーン』：正真正銘、楓の専用機。諸事情で楓は最近これを持った。

見た目はユニコーンガンダムと同じ。
装甲の基本は『エピオン』や『ゼロ』と変わらない。
いつもは他の機体同様、手足と背中、そして兜を展開する。全身装甲も可能。
通常は『ユニコーンモード』と呼ばれる姿でいる。
後付装備をつけるため、自身はスレンダーな装備となっている。

多数の機体のシステムを取り込むことが出来て、事実上最強をコンセプトにした機体。

――――――武装一覧――――――

《ビームマグナム》
『ユニコーン』の主武装。
専用のエネルギーパックを最大5基連結し、凄まじい威力を生み出す武装。
掠めただけでも致命打となりうるため、凄まじい威力と言うことが分かる。
しかし残弾に限りがあるので使い勝手の悪さが少しある。
非使用時はバックパックや腕部ラッチに固定して携行する。
楓はこれを、最後の切り札として使用することが多い。

《ビームサーベル》
バックパックに2基と左右の前腕部に1基ずつの計4基を装備。
いずれも通常時は、基部で折りたたまれ収納されているが、必要に応じてグリップが１８０度展開して使用できる。
両腕のサーベルはマニピュレーター（手）で保持せずとも、そのまま展開してビームトンファーとして使用することも可能。
楓は銃よりサーベルを多用するので、四本という数の多さに、四本

同時に運用できる構造になってる。

《ハイパーバズーカ》
主武装の《ビームマグナム》の使い勝手の悪さから作られた実体弾＋ＢＴ火器。
実体弾が切れたら、機体からエネルギーを貰って《ビームバズーカ》として使える。
不使用時は砲身を短縮した状態でバックパックに固定される。
発射後に時間差で炸裂し、周囲に鉄球を撒き散らす特殊弾も使用可能。
楓はこれを一対多戦で多用する。通常では出番なし。

《ビームガトリングガン》
４銃身式の大型ビーム機関砲。
両腕に１挺ずつ装備可能だが、２挺を連結して片腕に装備することも可能。
さらに機体と直接バイパスを連結して、マルチロックオンの一斉射撃をすることが出来る。
過剰な威力を持つ《ビームマグナム》の代わりに、弾幕や牽制として使用されることが多い。
楓は銃よりこちらを好んで使うらしい。本人曰く『ガトリングは男のロマン』だと。

《ＮＴ－Ｄシステム》
『ユニコーン』最大のシステム。正式名称は不明。
この状態では、瞬間移動と見紛うほどの圧倒的な機動性を発揮し、ＩＳなどの能力をもってしても目で追うどころか、気配を察知することすらできない。
発動すると脳を機体とリンクさせて、機体を自分の身体であるかの

ような操縦を可能とする。

しかし発生するGで、パイロットの肉体的負荷は極めて危険なレベルとなるので、約5分以上の使用は出来ない。同じ理由で連続多様もできない。もしそれ以上使用すると、操縦者の生命はほぼ確実に消える。

操縦者にとってハイリスク・ハイリターンなシステムだ。

さらにある理由で暴走する可能性がある。（正確には機体に制御を持っていかれる）

なので普段はリミッターが設定され、ユニコーンモードで通常のマニュアル操作を行う。

さらに、他の機体のシステムを使うには、この状態にならなければならない。

発動すると、全身の装甲が展開し体格も一回り拡張し、一本角のブレードアンテナがV字型に割れ、ゴーグルアイから顔が現れる『Ｄｅｓｔｒｏｙ（デストロイ）・Ｍｏｄｅ（モード）』に”変身”する。

この際、露出した装甲が眩く発光するのが特徴である。

このほかにも、まだ明かされていないシステムがある。

以上が、桐谷楓に対する現状報告。

今後進展があった場合、優先して報告したいと思う。

26話　主人公機紹介（仮）（後書き）

誤字脱字、意見があったらお願いします。

27話　夏休み　祭り編（前書き）

超遅れました。すいません。すいません。
その代わりと言ってはなんですが、一万文字オーバーです。
で、今回は一夏の出番が多い・・・？

前半はオリジナル。後半は原作とクロスです。

27話　夏休み　祭り編

夏休みも後半に差し掛かった今日。

僕は自室のベットから半身だけ起き上がり、光の差し込む窓を開ける。

ぶわっ！と、外からの爽やかな風が、寝起きの僕の身体を吹き抜ける。

そんでもって・・・・僕はこの世界に疑問を投げかけた。

「太陽って・・・なんで昇るんだろう・・・」

これは僕の頭ではさっぱり分からない。

なぜ太陽は律儀に時間を守って、毎日毎日輝きながら昇ってくるのだろう。

たまには休んでくれてもいいじゃないか。太陽だって休暇は必要なはず。

せめて夏の間だけでも休んで欲しい。

僕らは太陽がいなくてもやっていける。なんせブラックホールを作れるんだから。

それに僕らは核融合で太陽（キミ）を作れるんだよ？コントロールできないけど。

太陽に依存しなければ生きていけなかった、平安時代の人とはワケが違うのだよ！！

人は、時代と共に進歩して居ると言うことを、太陽に思い知らせなければいけない。

ただ熱いだけの恒星に、なぜ人類は屈服されなければならない！？

なぜ人々は太陽に何の疑問も持たない！？なぜそれが普通のように振舞う！？

人類は諦めているのか！？霊長類と呼ばれる人類がか！？

諦めたら、出来るものも出来ないのだぞ！？

「そう！！やろうと思えば太陽など、どうとでもなるのだぁ！！」

ガンッ！！

「痛い！！」

「朝っぱらから何を騒いでるのよ」

僕を叩いたのは、何故か僕の部屋に無断で入ってきた佳奈美。

「何を？　僕はこの世の真理に語りかけていただけだ」

「はぁ？」

「ふっ・・・。やはり小卒のおバカさんに何を言っても無駄か・・・」

ドゴッ！

「ぐへっ！！」

「何か言った？」

「・・・ぼ、僕を倒しても、第二第三の僕が・・・きっと・・・！」

ドガッ！バギッ！ドシッ！

「・・・・・っ！（悲鳴も上げれない）」

「いい加減にしなさい」

と言うわけで、僕は自分のベットから起き上がった。

X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X

そんなわけで、僕は今日自宅にいます。

夏休みに帰ると言ったので、今日から学校が始まるまで、僕は自宅でのんびりさせて貰ってる。

さっき僕がいたのは自室。

僕を起こしにきた（暴力で）のは佳奈美。

彼女は元はロシアの代表候補生だったのだけど、いろんな事情によって僕らの仲間となっている。
生徒会長が知ってるのもそのせいです。

よし、紹介も終わったし彼女の事は置いておこうかな。

僕らは一階のリビングに下りる。
降りると、朝食の用意とテーブルを囲うように3人の人間がいた。

「おはよう」

「ああ」

反応を返してくれた一人、心優しい騎士ことアルド。略さず言うとミリアルド・ピースクラフト。
とある国の貴族さんだったのだが、現在、妹一人を国に残して僕らと共にいる。
まあ・・・仕方の無い理由があるので。

「お前待ちだぞ」

「スイマセンね。世界が僕を拒絶するので」

「ハハハッ。それは仕方ないな」

「笑わなくてもいいと思うよ。んで、残りの二人もおはよう」

「俺たちゃ残りの二人かよ!!」

抗議の声を上げた男は、ライル・ディランディ。ロックオンの弟さ

んだ。
見た目が同じで時々間違えるので大体『ロックオン』と呼ぶ。兄弟そろってとある組織の所属している。説明終了。

「・・・・・・・・・・」

そして仏頂面で腕組している、黒髪の青年は刹那・F・セイエイ。本名かどうかはさておき。
ライルと同じ組織に所属していて、彼は・・・世界を変える力を持ってる・・・かも?

「さあて。ちゃちゃっと食べましょうか」

「無視すんな!!」

「あ~~ハイハイ。食べながら聞くよ」

「聞こうとしてねぇよな!?」

うるさいライルはほっといて、僕は用意されている朝食を食べる。

「いただきます」

僕が食べ始まると、それに習い他の皆も食べ始める。

「今日って何かある?」

「俺等は祭りに行くぜ」

「祭り?」

「ああ。ホニャララ神社で夏祭りがあるらしくてな。日本の祭りは楽しいからな」

「刹那も？」

「・・・・・・ぁぁ」

元気の無い返事を返す刹那。やっぱり乗り気ではないらしい。

「ってホニャララ神社って何処？」

「難しい漢字で読めないんだよ」

「あっそ。・・・じゃあ僕も行ってみようかな」

「お前今日も引きこもるんだろ？」

「んなワケないでしょうが。僕は完璧なアウトドアです」

「・・・・ハッ」

「鼻で笑われた？！」

「悪い悪い。でも俺等は出かけた帰りに寄るからな」

「誰も一緒に行くとは言ってないけど」

「そりゃそうだ」

そんな感じの朝食風景だった。

そして朝食を食べ終わり、二人は早々に家から出て行った。

アルドは・・・・よくわからないうちに消えてた。いつもそうなんだよね。

ちなみに、佳奈美は夕飯の買出しに行って、そのあとアジトに戻るとか何とか。

つまり、今僕は家で一人ぼっちと言うことなのですね。

今は、部屋のベットでのんびりしてます。

・・・・ぐすんっ。物凄い寂しいです。僕は意外と寂しがり屋なのです。

「・・・・・誰でもいいから来ないかな～～」

などと淡い希望も、１０分経てば塵と化す。元々塵だったけど。

「・・・・・・くそぅ。こうなったら僕の権限で、メンバー全員集合させようか」

そうしたら最後、メンバー全員から報復攻撃を食らうが。

「・・・・・どこの神社で祭りをやるか、調べてくるかな」

と言うわけで、僕は私服に着替えて家を出た。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

祭りをやる神社は、案外すんなり見つかった。

だってそこら中に、『篠ノ之神社夏祭り』って書いてある旗があるし。

てかライルって”篠ノ之”が読めなかったのか。バカじゃない？外国人だから仕方ないか。

しかしこれからどうしよう。まだ昼前だし。時間がかかると思ってたからな〜〜。

「・・・・・・町でも歩こう」

そんなわけで、僕は街を歩くことにした。

町を歩いて数十分。

本当に何も無い。・・・・何かイベントが起こると思ったら、大間違いだから!!

・・・・まあ、起こってほしいのだけど。

「仕方ない。こうなれば最終手段だ」

そして僕は携帯を取り出し、ある人へメールを出した。

五分後。

「・・・・で?俺を呼び出した理由は?」

「そんな怖い顔しなくていいじゃないか。一夏」

私服の一夏が息を切らしながら来た。

「簡潔に言うと、僕が暇だから」

「そうか。じゃあ俺帰るわ」

そしてホントに帰ろうとする一夏を引き止める。

「いいじゃないか！！どうせそっちだって暇でしょ？！」

「何で俺がこの炎天下、お前の暇を潰さなきゃならない！？」

「ともだ・・・・いや僕たち、親友だろ？（キリッ）」

「今すぐ絶交してぇ！！」

とまあ一通り絶叫し終えた一夏がため息をする。

「はぁ・・・まあ来ちまったもんは仕方ないか・・・・」

「ふむふむ。おぬしの切り替えの早さに、わらわは感服したぞ」

「ありがとうございますねぇ！！」

そして一通り騒いだ僕達は歩く。

「んでどこ行く？」

「ん～。じゃあ・・・『ゲーセン』って知ってる？」

「誰に言ってんだ。今時小学生でも知ってるぞ」

「あ、そうなの？僕いった事なくてさぁ・・・ちょっと憧れてるのだよ」

「なぜ上から目線」

「気にしない。それで『ゲーセン』ってどんな所？」

「そうだなぁ・・・お金を入れてゲームをやるって感じだな」

「え？それって面白いの？」

「さあな。人それぞれだろうし」

「お金ってどれくらい？」

「大体１００円だ」

「え？！・・・小銭！？」

「そりゃな。２１世紀に百円札は使わねぇよ」

「・・・・・まいったな・・・・・」

「『まいった？』小銭無いのか？」

「うん。カードしか」

「・・・テレフォンカードとかってオチか？」

「ちがうよ。ゴールドカードってオチ」

「・・・・・はぁ!?ゴールドカード!?」

「うん。コレ」

と言って僕はポケットから、金色に輝くカードを取り出す。

「お、おまっ、金持ちだったのか?!」

「え?・・・・はぁ・・・何を言ってるんだか」

「?」

「よく聞いてよ。ＩＳ学園の費用は国が全て賄っている。つまりそれだけの利点がある。その利点とは?」

「え?う~ん・・・・・ＩＳパイロットの育成か?」

「まあ、それもあるけど・・・ＩＳ学園には様々な国の代表生徒及びその機体が集中する。だからこその国営なのさ。しかし国が運営してるとなれば、並の人では入れない。
では入れる人は?お答えください、一夏くん」

「なぜ口調が変わったかはさておき、そりゃあ・・・軍関係者や金持ちとか――――――あっ!」

「その通り。自然とそれなりの家系の人が集まるのさ。つまり?」

「ＩＳ学園には金持ちが集まりやすい・・・・ってことか」

「正～解。まあ例外も多数いるんだけど」

「例外？」

「例えば一夏」

「ああ～確かに。俺別に金持ちじゃないけど、ＩＳ学園に行ってるからな」

「あと、鈴さんみたいに才能のある人、それと箒さんみたいな、重要人物の関係者とかね」

「そうなのか。気にしたこと無かったな」

「つまり、僕の財政が潤っているのも当然の事と言うのだよ、一夏君」

「へいへい、羨ましい限りですよ・・・ゲーセンについたぜ」

そういわれて僕は目線を建物に向ける。

建物には色鮮やかな蛍光が光って、真昼間だというのにライト全開だ。

「電気代とかいいのかな」

「それは言っちゃだめだろ」

そして僕らは自動ドアの向こう側――店内へ足を運んだ。

「・・・・これ全部ゲーム？」

「ああ。愉快なオブジェではないからな」

見渡す限り人＋巨大な機械。これが全部ゲーム機とは・・・・・。

「な、なんか怖い」

「ゲーム機見て怖いと思ったヤツ、はじめて見た」

「だれでも、初めては怖いでしょうが」

「そうか？俺が初めてＩＳ動かしたとき、大して怖くも無かったが」

「そういう類いではないと思うよ」

そういいながら、僕は一番近くにあったハンドルが付いたゲーム機を指差す。

「これなに？」

「なにって・・・ゲームだよ。車の」

「へぇ・・・リアルだね」

そういいながら、僕はそこに座ってハンドルを握る。そして始まるのを待つ。

「って始まらないよ」

「そりゃ金入れてないからな」

「先言ってよ」

「来る前に言っただろうが」

「そうでしたね。そんじゃ小銭小銭・・・・・」

「ないか？」

「ないね。貸して？」

「しょうがねぇな・・・」

「あ、間違えた。ちょうだい？」

「しょうがねぇな・・・ってちょっと待て。何でお前は貰おうとしてる？」

「ふっ・・・キミは僕に対するご恩を忘れてるようだね」

「・・・・・・・？」

「ホントに忘れた！？　ほら！！４月らへんでＩＳの事を教えたじゃないか！！」

「・・・あ～～・・・・。すっかり忘れてた」

「まったく。一夏はそんなに薄情な男だと思わなかった」

「い、いや・・・すまん。１００円ぐらいならやるから」

「わかればよろしい」

そして僕は一夏から小銭を取り、それをゲーム機に入れる。

「おお～～。機体を起動させたときの画面みたいだ」

「そうか？」

そして車を選ぶ画面に切り替わる。

「特にいいのがないね」

「なんでもいいだろ」

と言うわけで黒い車にした。名前は知らない。

そして他のＣＰＵの車と共に、スタート地点の画面となる。

「始まるぞ～～！」

「テンション高いな、無駄に」

そして信号が変わる。・・・・・・いきなり青に。

「っていきなり！？」

「省略だな。小説の都合だ」

「なんでここで巻くのさ！」

と誰かに愚痴って、僕は車をスタートさせた。

「む・・・難しい」

コーナーとかの切り替えしがイマイチうまくいかない。現在1位。

「トップじゃねぇか」

「CPUなど、文字通りコンピューターなのだよ」

「悪いが意味分からん」

「つまり僕はもっといい走りがしたい――――――っと、今ゴ～～ル」

話してたら三周しちゃった。なんか・・・・・。

「虚しい・・・」

「って言われてもなぁ・・・・あっ、じゃあれやろうぜ」

といって一夏がさすのは、男の人が画面に向って銃を向けているゲーム。

名前はバイオハ〇ード。あの長編大作洋画の、ゲームバージョンらしい。

「何あれ？」

「シューティングゲーム。お前でも出来るだろ？」

「失礼な！！一夏より銃の腕前はいいよ！？」

「ほぉ。ここらのゲームセンターを制覇した俺よりうまいと」

なんか一夏がむかつく。これはボコボコに叩きのめしてあげないと♪

「数ヶ月前まで一般人だった君に、実戦経験の差を教えてあげるよ」

そして僕は立ち上がって、ゲームをやってる男の人の後ろに付く。

するとその男の人は、何故か僕らを見て、急に慌ててその場を去った。

「何あれ？」

「俺等が後ろに来たから気まずくなったんじゃないか？それより、空いたからやろうぜ」

「了解」

そして僕らはシューティングゲームの画面前に立つ。

「小銭」

「はいよ」

一言いったら、一夏が１００円玉をくれた。僕はそれを機械に入れる。

そして画面が切り替わる。画面にはゲームスタートと、マニュアルと、２Ｐプレイと言う文字が書かれている。

「銃を持って、やりたいところを撃てば切り替わるぞ」

「なるほど」

言われた通り、銃を持って画面の２Ｐプレイというのを撃つ。

「負けたらジュース奢りな」

「構わないよ」

「忘れんなよ。それでお前、やり方はいいのか？」

「うん。上の張り紙に書いてあるし」

「そうか。じゃあ・・・負けても号泣するなよ？」

「そっちこそ。初心者に大差付けられないように頑張るんだね」

そして僕らはちょっと無言・・・・そして同時に叫ぶ。

「「上等っ！！」」

その声と同時に、僕らは手前のゾンビを撃った。はたしてその結果はいかにっ！！

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxx

「くっ・・・・くやしいぃいいいいい！！」

「いやいや、悪いなジュース奢って貰って」

「あそこで・・・あそこでリロードを忘れてなければっ！！」

僕らは日が傾き始めた頃、本気で僕はくやしがっていた。

「初心者にしては頑張ったんじゃないか？・・・・ま、初心者は所詮、初心者だけどな」

「うぐぐぐぐ・・・・・・」

結局あのゲームは、最初は一夏が勝って、その後のので僕が勝って、その後のので一夏が勝って・・・・と、それの無限ループに入っちゃった。
そして、7時間以上の長時間の闘いの、最後の戦いの最後のボスで僕が痛恨のミス・・・熱くなりすぎてリロードを忘れて、球切れになったところをボスに殺された・・・。

「やっぱりゲームはゲーム・・・実戦とは違うんだ・・・そうにちがいない・・・じゃなきゃ僕が一夏に銃で負けるはずがない・・・」

「負けは負けだ。見苦しいぞ?」

「・・・い、いいもん!ゲームのハイスコア出したもん!!周りの人に絶賛されたもん!!」

「な、なにもそこまでムキにならなくても・・・・」

「一夏なんか、夏休み終わったら全身打撲になるまでボッコボコにしてやる!!それじゃ!!」

「あ、ああ。じゃあな。・・・子供みたいだな。アイツ・・・」

苦笑して何かを言う一夏に背を向けて、僕はダッシュして家へと帰っていった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxx

「さて・・・と。ただいま」

家に入っても、返事を返してくれる人がいない。

「・・・・・・一人・・・か」

まあそんな事を呟いて、僕は自室に向う。

部屋に入り、夏祭りと言う訳でクローゼットの奥から、男物の着物を取り出す。

「・・・何とか着れるな」

それを着た後、髪が邪魔なのに気付いて後ろに束ね、バッグを持っ

て再び出てった。

x
x x
x x x
x x x x
x x x x x
x x x x x x
x x x x x x x
x x x x x x x x
x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x
x

「へい姉ちゃん！金魚すくいどうだい？」

歩いていると、とても失礼な挨拶が聞こえた。

・・・うん、僕じゃないな。僕は女じゃないし。そう思ってそのままスルーして歩こうとするが・・・。

「まあまあ、やってみようや！」

何時の間にか僕の隣に来て、腕をガッチリ掴まれた。

「なんなんですか・・・・」

「いやあ！客が来なくて困ってんだよ。デモンストレーションとしてやってくんねぇか？」

「金魚すくいを？」

「おう！金はいらねぇからよ」

「・・・まあいいですけど」

タオルを頭に巻いてるオジサンの熱意に押され、渋々僕は金魚すくいをやることになった。

「ほいモナカ」

「どうも」

桶とモナカを渡され、僕は金魚がたくさん入った水槽のところに座る。

「いや～姉ちゃん別嬪だね！」

「着物と絵になってるよ～～！」

「でも男物っぽいね」

「最近は女がズボン履くことぐらい珍しくないだろ？そういうもんだ」

「なるほど～～男装ってわけ」

・・・・・何時の間にか屋台の周りに人が集まってきて、いろいろなことを言っている。

ここで、誰でもいいので問いたい。

（・・・・僕、キレていい？）

なんだよこれは！！僕はただ普通に、男物の着物を着て祭りに来ただけなのに！！

何がおかしいの？！男が男物の着物着たら女性に見えるの？！男がどうやって男装するんだよ！！

っと大声で叫びたいが、周りの人の迷惑となるので叫べない僕でした。

「さっさとやって終わらせよう・・・・・」

と言うわけでモナカを水槽に入れる。そしてそこらにいた金魚に狙いを定める。

「・・・・今っ！」

金魚が動き出した瞬間、素早く下から持ち上げて桶に入れる。

「「「「おお～～！」」」」

何故かギャラリーから歓声が上がる。

「姉ちゃん上手いな～」

「・・・・・いえ、別に」

勘違いしてる人に歪な笑顔を返して、僕はもう一度水槽にモナカを入れる。

そしてちょうど近くにいた金魚を取った。

「っ！」

「「「「おお～～～！・・・あっ！」」」」

歓声が上がるが、すぐに驚きの声が上がる。

金魚が、僕のモナカの上で暴れて水槽の方へ戻ってしまった。

「・・・・・『ゼロ・システム』」

なんか納得がいかなかったので、未来を先読みして金魚を瞬殺。（殺してないけど）

「「「「おおぉ～～～～！！」」」」

今度は長い歓声が上がる。

その後も未来を先読みして、合計で１５匹の金魚を取ったところでモナカが破れた。

「ハハハッ！まさかこんなに取られちまうとは・・・大損だぜ！」

笑いながら僕の取った金魚を袋に入れるオジサン。

「ほいよっ！長生きさせてくれよ！」

「・・・はい」

妙に重いことを言われたが、渡された袋を持って僕は屋台を後にした。

「初っ端でテンションが落ちたけど、ここから上げていこう！！」

なんか女性と間違えられたけど！やっぱテンション下がるけど！男として涙が出るけど！

と言うわけで人ごみの中、興味のある屋台を探す。

「そういえば刹那たちが来るんだったよね・・・」

キョロキョロと辺りを探す。しかし人が多くてよく分からない。

「仕方ない・・・それじゃあ・・・あっ・・・射的・・・」

ちょうど目に入ったのは、コルクを飛ばして景品を落とすという射的屋台。

「ふっふっふ・・・。憂さを晴らしましょうかな」

とある少年にゲームで負けた八つ当たりに、ここいらの射的屋台でも制覇してやろう。

ちゃんと今回はお金を両替したし。

と思って、意外と賑わっている射的の屋台に入る。

「オジさん。1回」

そういうと、さっきの金魚すくいの屋台の人みたいに、頭にタオルを巻いた人が来る。

「おっ！嬢ちゃん別嬪だね～！別嬪さんにはサービス！タダでいいぜ。ガッハッハ！」

「・・・・ありがとうございます」

また勘違いされた。まあ無料になったけど。

鉄砲を受け取り、それにコルクを詰める。そして一通り景品を見渡

す。

（何にしようかな・・・。どれも落とせる自信がある）

考えるのも面倒なので、チョコボ○ルの箱を狙う。

ちなみにいつの間にか、さっきの金魚すくいのときのように、人がいっぱい集まって、僕の方を見ている。

（ってか写真撮ってる人までいるし・・・）

男を撮って何がそんなにいいのだろうか。僕には分からない。

気にしても仕方ないので、僕は片手で銃を持ち、片目で狙いを定めてコルクを放つ。

ぱこーんっ！と音を立てて倒れるチョコボー○。

「おお～～！嬢ちゃんうまいな～～。ホレ、チョコ○ール」

「どうも」

景品をもらい、残り４発あるのでそれぞれで景品を撃ち落す。

「ガッハッハ！こりゃ大損だ！」

大損だというのに笑う大将。まあ本人がそれでいいならいいけど。

そして最後の一発で、なんかよく分からない鉄の札に狙いを定める。

「・・・・・・・・・・」

僕の真剣な雰囲気を悟ってか、辺りの人も静かになる。

（何に期待してるんだか・・・・）

まあ気にも留めず僕は最後のコルクを放つ。しかし・・・・。

「なっ！」

僕の放ったコルクは、突如乱入してきた別のコルクに弾かれた。
そしてその別のコルクはぬいぐるみを落とす。弾かれた僕のコルクは地面に落ちた。

「クックック。悪いな姉ちゃん。ついつい狙い打っちまった」

そう言ってくるのは、何時の間にか僕の隣にいる茶髪のチャラ男。
あれ？前にもこんなことあった気がする。

「ロックオン！」

「そんな大声出さなくても聞こえるってーの」

「なんで打ち落とすんだよ」

「撃ち落してねぇ。狙い撃っただけだ」

「余計に悪質！」

そして僕とロックオンは射的屋を後にして、歩きながら話す。

「刹那たちは？」

「別行動だ。刹那とアレルヤは人ごみが好きじゃないらしい」

「あれ？三人だけ？」

「おう。みんな都合が合わなかった」

「それは残念。アニューさんは誘わなかったの？」

「事務だとよ・・・。そのうちアイツパソコンと結婚するな」

「パソコンに劣るロックオン・・・アハハハッ！」

「笑うな！」

「ゴメンゴメン」

「たくよぉ・・・。そういえば、見事に勘違いされてたな」

「え？！な、何が？」

「性別」

「・・・・何か僕間違えたかな。男が男物の着物着ただけなのに・・・」

「私服で来ればいいものを」

「記念すべき夏祭りに、私服で行くのはもったいないじゃないか」

「髪を切ればいいものを」

「うっ・・・。だ、だって長いほうが落ち着くし」

「整形すればいいものを」

「お金かかる――――――ってそれは根本的過ぎる！僕は今の僕に絶望しちゃいない！」

「なんか妙にいい台詞だなっと、そろそろ俺は行くぞ」

「そう。じゃ、刹那とアレルヤによろしくって」

「おう。ちゃんと『また戦おうな』って伝えとく」

「うんやめて」

「心配すんな！じゃあな！」

「ちょ！待ってよぉぉおおおおお！」

僕は言葉を、走り去るロックオンの背中に投げかけるしかなかった。

「・・・・絶対誤解されるぞ、これは」

刹那は問題ないけど、戦闘狂のアイツは心配だ。絶対誤解する。

「・・・・まあいいさ。僕は祭りを楽しもう」

現実逃避～～♪

僕は当初の目的に戻ることにした。え？当初の目的？ここらの射的を制覇すること。

と言うわけで、しばらく歩いた後で違う射的屋に入る。

「へいらっしゃ――――――――こりゃまた別嬪さんが来たな～」

また誤解された・・・。まあ反論するのも面倒だ。

「オジサン。1回」

「ガッハッハ！別嬪さんにはサービスだ！タダでいいぜ」

また無料だ。なんか喜ぶべきか悲しむべきか分からない。

「どうも」

一応お礼を言って、僕はオジサンから銃とコルクを貰う。

その時、違う客が屋台に入ってくる。

「へい、らっしゃーい」

「おじさん、三人分下さい」

「お、両手に花とは羨ましいねぇ。よし、おまけは無しだ！」

「ええっ？いやまけてくださいよ。せめて女子の分だけでも」

「がっはっは。無論断る」

大将と会話する聞き覚えのある声。視線をそっちに向けると・・・。

「あれ？一夏じゃん」

「え？・・・・・・え、え～～っと・・・お知り合いでしたっけ？」

僕が話しかけたら、一夏は頬を赤らめて、凄く礼儀正しい感じに返事を返す。

・・・・キモイからやめてくれ。

「僕だって」

「え？・・・赤と青のオッドアイ・・・・・・もしや・・・楓・・・か？」

「そうだけど？悪い？」

「わ、悪くはないが・・・」

怒気を含ませた僕の言葉に一夏は怯む。

「まったく。何ヶ月も一緒の友達の顔を忘れるとは、酷すぎるよ」

「す、すまん。お前が着物とか着てると、妙になれなくてな・・・」

「一夏？何をもめている」

「一夏さん?」

一夏の後ろから、二人の女性が入ってくる。二人とも見慣れた人だ。

「あれ?箒さんに蘭さん。こんばんわ」

そういうと、二人は僕の顔を見て少し驚いた表情をする。なぜ?

「・・・・・・楓か?」

「その通り。さすが箒さん。何処かの薄情男とは大違いだ」

「悪かったな。薄情男で」

「蘭さんは久しぶりですね。元気にしてました?」

「え?!え、ええ。はい・・・元気にしてますよ・・・」

「で、二人ともなんで、僕から目を逸らすんですか」

二人とも、僕と目をあわせようとしない。ショックを受けたような表情をして伏せてる。

「いや・・・その・・・な」

「女として・・・負けたような気がして・・・」

? イマイチよく分からないことを言ってくる。誰が誰に負けた?

「お話中悪いが、銃とコルクだ」

その時、大将に金を払ったらしい一夏が、銃とコルクを二人に渡す。

「お、甲斐性なしかと思っていたけど、どうやら誤解してたらしいね」

「・・・判別できなかったのは謝るから、機嫌を治してくれよ」

「はいはい・・・夏休みが終わったら検討するよ」

「根に持つなぁ！」

そんな事を話しながら、僕達は銃を持って的の前に来る。

「そういえば、何で三人が？」

「ああ、ここ箒の生家なんだ。で、夏祭りに来た俺と箒で歩いてたら、蘭とその友達と会って、何だかんだあって一緒に回ってるトコだ」

「ふ～～ん。さすが朴念仁」

「？」

「何でもないよ」

「ならいいけどさ。それでお前は？」

「僕は知り合いにこの夏祭りについて教えて貰ったから、ちょうど

暇だったし来てみたんだよ」

「にしては気合は言ってるな。着物まで着て」

「ホコリを被ってたヤツを取り出したんだ。たまには着てあげないと」

「そうなのか。・・・・しかしお前の着物姿は新鮮だな」

「普通だよ。・・・・それにしても、ここ最近僕って女性に間違えられることが多いんだよね」

「へぇ」

「うん。何でだろう?一夏は何か心当たりある?」

「・・・そりゃそうだろ・・・んな容姿じゃあ・・・(黙ってれば完全な美少女だからな)」

ん?小声で何か失礼なことを言われた気がする。

「なにかあるの?」

「いえ何も」

「そう・・・。一体何が原因なんだか・・・男物の着物なのに・・・」

「気にすんな。しょうがない問題さ」

「しょうがない・・・・・のかなぁ・・・」

「そういえばな、蘭が射的得意なんだってよ」

と一夏が話を変えると、蘭さんがビクンッ！と反応する。

「へぇ・・・蘭さんが。少し意外ですね」

「ふぇ!?そ、そうですか?」

顔を真っ赤にして返事を返す蘭さん。ちょっと顔が紅すぎる気がするけど・・・。

「大丈夫ですか?顔が赤いですけど」

僕がスッと蘭さんの顔を覗き込む。

「だ、だいじょうぶですから！　か、顔が近いです！（自分の容姿を気にしてください！）」

顔を赤くしながら鬼気迫る感じで言われて、僕はすぐに離れた。

「す、すいません・・・」

「あっ・・・その・・・とにかく、だいじょうぶですからっ！」

「わかりました」

しつこい男は嫌われるらしいので、僕は潔く下がる。

一通り話したら、蘭さんが銃にコルクを詰めて、的に向って構える。
その眼差しが真剣で、話しかけづらい、それでいて何かやってくれそうな雰囲気が出ている。
（・・・どこ狙ってるんだろ）
でも僕が見る限り、蘭さんの銃は賞品と賞品の間を向いている。
跳弾でもして二つ同時に落とす気なのだろうか。
そんな考え事をしていたら、ぱーんっとコルクが放たれた。
「あ」
「お」
「おお？」
「おおおっ？！」
ぺしっ――――ぽたん。
「そ、その鉄の札を倒すとは・・・・！え、液晶テレビ当たり～～～～～～っ！」
「え？えっ？え・・・・・？」
どうやらこの屋台一番の賞品だったらしく、射的屋のオジサンと周囲のギャラリーが盛り上がる。

「すげぇな嬢ちゃん！絶対に倒せないようにして――――――――
ああ、なんでもない」

「は、はぁ・・・・」

「液晶テレビを狙うなんてすげぇな。しかもゲットしてるし。いや、驚いた」

「僕も驚いたよ。あの照準でまさか鉄の札を落とすなんて」

僕と一夏はパチパチと拍手する。そして周りにギャラリーの人も釣られて拍手する。

「がっはっはっはっ。赤字だ赤字！ちくしょう、持ってけ～～！」

「ど、どうも・・・」

やや大きめの包み、とても女子中学生が持てないそれを、蘭さんは受け取った。

「よかったな」

「そうでしょうか・・・・」

しかし、蘭さんは”ずーん”と言う感じに沈んでいる。僕と一夏は『？』を浮かべる。

そういえば箒さんはと言うと・・・。

「ぐっ・・・」

たった今五発目を外し、残弾がゼロになった所だった。

「箒さんは・・・銃は苦手・・・と」

「お、おい！な、何のメモを取っている！」

「箒は相変わらず銃下手だなぁ」

「う、うるさい！弓なら必中だ！」

「いや、それは商品が壊れちまうだろ、絶対。・・・・・・ったく、しょうがねぇなあ」

と言って、一夏先生による箒さんの銃講座が始まった。

何と言うラブラブ空間を作ってるんだ一夏。

そしてそれが無意識だとしたら、君は完全な女たらしだよ。

「僕はそろそろ帰ろうか（お邪魔みたいだし）」

「ん？　そうか。花火見ていかないのか」

「花火の音が苦手で」

「変わってるな。って、そういえばお前の家ってこの近くなのか？」

「え？　まあバスで１０分くらいだけど。よかったら来る？」

「マジか？　じゃあちょっと行くわ」

「そうだ。皆呼ぼうよ。シャルさんラウラさんとか」

「いいなそれ。箒も行くか？」

「私か？・・・そうだな、一夏が行くなら・・・行くとしよう」

「決まりだね。それじゃあまた連絡するよ」

「おう。じゃあな、楽しみにしてるぞ～～」

「ご期待に沿えるように頑張るよ」

そして僕は一夏達と別れ、久しぶりの夏祭りは花火と共に終わりを告げた。

27話　夏休み　祭り編（後書き）

バトルは・・・4巻の内容が終わってからです。

２９話　２学期始動！（前書き）

楓家編は、ネタが定まらないので、いつか番外編で書きたいと思います。すいません。ｏｒｚ。

受験忙しいです。更新がすごい遅れてしまいます。すいません。

と言うわけで５巻突入です。

あと主人公機紹介を見てない方は見てください。

29話　2学期始動！

9月3日。2学期最初の実戦訓練は、一組と二組の合同で始まった。

「・・・・・・・・・・（ポケー）」

そのアリーナで、黒髪に銀の混ざった独特な髪をした少年?が、ポケーッと空を眺めていた。

言うまでもない、桐谷楓の事だ。

その姿はまるで、魂でも抜けたのかと言うぐらい、ポケーッとしてるもので、周りのクラスメイトがヒソヒソと話している。

「桐谷君、どうかしたのかな」

「なんか・・・魂抜けちゃってるよね・・・」

「大丈夫かなぁ・・・」

ちなみに、すぐ横で『白式』を使う一夏と『甲龍』を使う鈴が、派手な戦闘を行っているが、楓は興味が無いかのようにポケーッしている。

「・・・・・・・・・（ポケー）」

人の無表情と言うのは怖いもので、コチラから話しかけづらい雰囲気が出ている。

そこに一発の飛来するミサイル。それは楓のすぐ足元で爆発した。

「ぎゃあああああっ！！――――――――――ぶへっ！」

楓は叫び声を上げて吹っ飛んだ。ギャグマンガでありそうな飛距離だ。

「ぷはっ！　し、死ぬかと思った・・・・・！」

地面に打ち付けた体を上げ、楓は死神に魂を奪われる直前のように、焦った表情をした。

「なにをしてるんだ」

そこにドイツの第三世代型ＩＳ――――――『シュバルツェア・レーゲン』を展開したラウラが上から降りてくる。

「たった今死にかけたんですよ！」

「お前ならアレぐらい大丈夫だろう」

「そういう問題でもないでしょう！・・・・・・はぁ・・・」

楓はまた表情が無くなった。それにラウラが目を細める。

「一体どうした。いつもの迷惑なほどのテンションはどこへいった」

「え・・・僕のテンションって・・・迷惑だったのか・・・・」

楓は両手を地面につけて、本気でショックを受けたような反応をする。

「おい」

「って言うのは冗談ですけど・・・考え事・・・・・・ですかね」

「？」

「まあ気にしなくていいですよ。さてっ！　僕も訓練しなきゃな」

素早く立ち上がり、腕を組んだりと準備運動をする。

「そうか。なら、私と戦ってみないか？」

「ラウラさんとですか？」

「そうだ。お前には一度負けているからな。私もリベンジしたい」

「あれは2対1だからですよ」

「だから、1対1をしたいんだ」

「・・・・・まあいいですけど」

と楓が渋々了承したところで、向こうの方から爆発音が聞こえた。

「一夏の所ですかね」

「だろうな。おそらく負けただろうが」
「確かに。今の一夏じゃ、鈴さんに勝つのは難しいでしょう」
その時、ちょうど終了のチャイムが鳴る。
「鳴っちゃいましたね」
「そうだな。仕方ない・・・お前との対決はまた今度だ」
「ふふっ、了解いたしました。麗しきボーデヴィッヒ少佐殿」
「か、からかうな」
そして楓たちは事後の処理――――もとい片付けをした。

ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ
ｘｘ

「マズイ・・・」

楓は一人、自室で洗面所の鏡と睨めっこしていた。

「どうやら今日がアレの時期らしい・・・なんで2学期開始日に限って・・・」

片目を隠して何かを呟く楓。その表情は焦り。額には冷や汗まで垂れている。

「・・・・・今日はあまり人と・・・関わらないようにしなければ」

そして楓は、サングラスを持ってその場を立ち去る。

「どうか、今日と言う日が早く終わりますように・・・」

その時の楓の瞳は、両目とも赤かった。

X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X

二時限目と三時限目を潰して、全校集会が行われた。
内容は、今月中旬にある学園祭についてだ。
（しかし、これだけの女子が集まると・・・）
騒がしい。それを通り越して姦しい。
（そういやぁ・・・・・楓の姿を見てないな）
朝からそうだが、楓の姿が見当たらない。
シャルやラウラも探していたらしいが、会ってもすぐ行ってしまったそうだ。

（ちゃんと出席してるのにな・・・）

ＳＲＨのときはちゃんといたし、最初の実戦訓練のときもいたんだけどなぁ。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会役員の一人がそう言うと、ざわつきがすスゥーっと消えて行く。

「やあみんな。おはよう」

「！？」

壇上で挨拶した先輩は、今朝俺が授業に遅れる発端を作った人だった。

大声を上げそうになったが何とか踏み留めて、俺はその人に視線を送る。

「ふふっ」

一瞬だけ目が合って、なにやら意味深な笑みを浮かべられた。

「さてさて。今年は色々と忙しくて、ちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識盾楯無。君達生徒の長よ。以後よろしく」

にっこりと微笑を浮かべて言う生徒会長は、異性同性を問わず魅了させた。

「では今月の一大イベント、もとい学園祭だけど、今回は特別ルールを導入するわ。その内容は・・・」

手に持った扇子で合図を送ると、それに応じるようにディスプレイが浮かび上がる。

「題して、『各部対抗！　織斑一夏&桐谷楓争奪戦』！」

ばんっ！　と小気味のいい音がして扇子が開く。
それに合わせてディスプレイに、俺と楓の写真が超デカサイズで映し出された。

「え・・・・・・」

「「「「えぇえええええええ～～～～～～～～っ!?!?」」」」

俺の声は、他の女子の絶叫にかき消された。

ちなみに俺の写真は、どこで撮ったのか知らないがラフな部屋着のアップ。
楓のは風呂上りにいつもやる、髪をポニーテールにしている所。あんなのどこから撮ったんだ？

「織斑君、部屋じゃあんな格好なんだ！」

「制服と違って・・・いい！！」

「桐谷様・・・カッコよすぎる・・・そして、キレイすぎる！」

「男に見えない！　美しすぎる！！　嫉妬する！！」

「だがそこに痺れる！」

「「「「「憧れるぅうううううっ！！」」」」」

・・・・・息ピッタリだ。果たして俺はどんな言葉を思いつけばいいかな。

「静かに。本来学園祭は各部が催し物を出して、どれが良かったか投票を行い、その上位の部活には特別に部費が下りる仕組みでしたが・・・まあ、はっきり言ってつまらないので――――」

びしっ！と俺を扇子で指差す生徒会長。

「一位の部に、織斑一夏及び桐谷楓を進呈しましょう！！」

再度、雄叫びが上がる。

「うおぉおおおお！」

「素晴らしい・・・素晴らしすぎるわ・・・会長！！」

「今日からすぐに準備始めるわよ！　秋季大会？ほっとけあんなん！！」

「こっちも負けてられないわ！　大会予選？なにそれ美味しいの？」

部活動やってる奴らが、大会忘れて学園祭に夢中ってどうよ・・・。

しかし楓は基本天才だから需要はあるだろうが、俺はそこまでお得なのだろうか？

「つうか、楓は知らんが俺は初耳なんだが・・・」

とりあえず生徒会長を睨む。

「あはっ♪」

ウィンクで返された。えっと・・・・・だからどうしろと？

「よしよしよしっ！　盛り上がってきたぁあああっ！！」

「今日の放課後から集会よ！　意見の出し合いで多数決取るから！」

「早速作戦会議よ！　採用された人には私のポケットマネーを払うわ！」

「最高で一位、最低でも一位よ！！」

一度火がついた女子は止まらない。

かくして初耳＆ａｍｐ；未承諾のまま、俺等の争奪戦が始まった。

X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X
X　X

同日、教室にて放課後特別ＨＲ。
今はクラスごとの出し物を決めるため、クラス代表として俺が前に出て色んな意見を集めていた。

というか・・・。

「楓。なんだそのサングラス？」

「べ、別に？　イメチェンだよ。ニ学期に入ったし心機一転」

「でも朝付けて無かったよな」

「うっ・・・ま、まあいいじゃん。それよりクラスの意見をまとめようよ」

何時の間にかいたクラス副代表の楓は、やや挙動不審でしかもサン

グラスをつけている。

（やっぱ今日の楓はおかしいな・・・）

まあ『それも似合ってる』とクラスの女子には好評だが。

いや、今はそれよりも言いたいことがあった。

（内容が『織斑一夏とホストクラブ』『織斑一夏とツイスター』『織斑一夏とポッキー遊び』『織斑一夏と王様ゲーム』・・・・・・って、あのなぁ・・・）

「却下」

えぇえええー！！　と大音声の女子によるブーイング・・・って楓まで何ブーイングしてる！

「楓！　お前はコッチの味方だろう！？」

「フッ。何を言ってるんだ一夏？　僕は面白い方の味方さ。そして今は女子に味方した方が面白そうだから！」

そう言って胸を張る楓。

う、ウゼェ！！　さっき勝手に『桐谷楓とマリ〇パーティ』を却下してたくせに！！

「お前な！　さっき自分の名前が含まれるのを勝手に消してただろ！」

「え？　そんなことしてないよね？みんな」

『桐谷君の言うとおりでーす』

女子ほぼ全員が楓の味方か！　ヒデェ！ってコレもはやイジメじゃね！？

ここはクラス唯一の良心、山田先生の出番だな。

「山田先生、ダメですよね！？　こんなふざけた企画」

「えっ！？　わ、私に言われても・・・！」

こら、副担任。

「わ、私は・・・・・ポッキーなんかがいいと思います・・・」

この世界に神はいないのか・・・。見たこと無いのは信じない質だけどさ、俺は。

「とにかく！　俺がクラス代表である限り、こんな意見は認めない！！」

『横暴だぁあああああっ！！　絶対王政反対！』

ほぼ女子一同のブーイングが来る。ってブーイングしたいのはコッチだ！！

「横暴はどっちだっ！！　そして何が絶対王政だ！！　とにかくもっと普通の意見をだな！」

「ならメイド喫茶はどうだ？」

そう言ったのはなんと・・・ラウラだった。

「客受けはいいだろう。それに飲食店は経費の回収が行える。確か招待制で外部からも人が来るのだろう？　だったら休憩所としての需要もあるはずだ」

言ってる事は理に適ってる。だが言ってるのがラウラなのが問題だ。

「え、えーと・・・・・・みんなはどう思う？」

とりあえず意見が出たので多数決。

「いいんじゃないかな？　一夏と楓には執事か厨房を担当して貰えばいいし」

そう言ったのはシャル。ラウラのバックアップの口撃は見事クラスメイトにヒットする。

「織斑君、執事！　いい！」

「桐谷君、執事・・・？　桐谷君はメイド服だね！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうする！？　私演劇部衣装係だから縫えるけど！」

メイド喫茶ねぇ・・・まあ変わった喫茶店と思えばそれでいいか。

「メイド服ならツテがある。執事服も借りれるか聞いてみよう」

え？　ラウラが？

「――――――ゴホンッ。シャルロットか楓がな」

「え、えっと、ラウラ？　それって先月の・・・？」

「ま、マジですか・・・？　諸事情でトラウマ的な場所なんですが・・・」

「うむ。別にいいだろう」

「聞いてみるだけ聞いてみるけど、無理でも怒らないでね？」

「よし。執事服は二着ですね。すぐに掛け合わなければ」

『執事服は織斑君だけ！！』

「そ、そんな～～！！　僕だって男なのにぃいいいいいいいいいっ！！」

涙声の楓の叫び虚しく、一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』と言う事になった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「・・・・・・で？　聞きたいことって？」

「楓の事だ」

放課後。俺といつものメンバー（楓以外）は、鈴を取り囲んでいた。

「今日の奴は様子が変だ」

「そうだよね・・・。いきなりサングラス掛けるし」

「で、幼なじみである鈴なら、何か知ってるかと思ってな。聞きに来た」

「って言われてもね・・・。今日は楓にとって何か・・・・・・・・・・・・・・・あ」

顎に手を当てて考える鈴が顔を上げる。

「なにかあるのか？」

「あったけど・・・・・・。　私の口から言えることじゃないわね。楓から直接聞いて」

「お、おい。なんだよそれ」

「アイツにとって今日は、喜ばしい日であり・・・最悪の日って事よ」

深刻な顔でそういう鈴。俺はそれ以上聞くことが出来なかった。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「終わった・・・僕の人生は終わった・・・もうお婿にいけない・・・」

『・・・・・いきなり・・・何？』

僕、桐谷楓は自室で通信中。

相手はスファナ。ちなみにスファナは一時的な留学だったため、期間を過ぎたのでＩＳ学園を離れている。

「いや何でもないです。それでアッチが通信してきたって？」

『・・・うん。『コチラに干渉するな』っていうのメールが・・・』

「うっわ一方的。いい度胸ですね」

『・・・私からはそれだけ。・・・・・・それじゃあ』

「ありがとうございます。では」

通信が切れる。僕はベットに寝転がる。

「最悪・・・。やっぱり今日と言う日は厄日だ・・・」

もうおきるのも面倒なので、睡魔に身を任せることにした。

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

「というわけで、部屋変わってもらえない？」

「いいですよ」

「返答はやっ！！」

生徒会長が、一夏と一緒に暮らしたいと言い出した。

まあ一夏を特訓するためらしいので、僕としては断る理由が無い。
というか僕の荷物と会長の荷物が入れ替わってるし。

「・・・・・何よ。ちょっとぐらい、嫉妬してくれてもいいじゃない・・・」

「？　なにか言いました？」

「何でもないわよ。朴念仁」

なんか生徒会長がご立腹だ。

し、失礼な。いきなり言いがかり・・・・・・・・・うん、まあいいや。

「じゃ、一夏。がんばって」

「見捨てんなぁあああああああああああああっ！！」

一夏の叫びを無視して、僕は部屋を出た。

「面白いことになりそうだなぁ。学園祭」

心躍る感じで僕はその場を動いた。

「ってあれ？　じゃあ僕どこに寝泊りすればいいんだ？」

29話　2学期始動！（後書き）

今回は伏線の回というわけで、ちょっと無理矢理感がありますが、多めに見てください。次回かその次ぐらいに学園祭です。

感想あったら下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2307m/

IS　託された思い

2011年3月8日20時17分発行